

平成 30 年度
山口大学の FD 活動

山口大学大学教育機構
山口大学教学委員会

はじめに

今年度の教育改善 FD 研修会は教学 IR をテーマに実施され、アドミッションセンターと協力して入試制度と成績の関係を一つの事例として取り上げ、各学部・研究科の先生方と教学 IR の推進方法や課題について意見交換を行いました。一方、FD 講演会では大学教育とアクセシビリティをテーマに、多様な人たちが大学教育へアクセスしやすいようにするために、大学はどこをどのように改善すべきかについて、講演とディスカッションが行われました。また、昨年度に引き続きアクティブラーニング・ベストティーチャー賞受賞者による模擬授業を柱とする FD・SD ワークショップが開催され、学内外から多くの教職員が参加者されました。

アラカルト研修では、ニーズの高い、障害学生の支援や就職活動についての FD や、修学支援システムについての FD、また、ラーニングアドバイザー養成講座も引き続き実施されています。一方、学内外教員のご協力のもと、今年度新たに教職課程についての FD や 2018 著作権法改正についての FD、学修ポートフォリオについての FD も実施され、内容の充実が図られています。

各学部での FD/教育改善の取り組みでは、学部の個性がよく現れているものがあります。例えば、人文学部では新カリキュラムの成果と課題を抽出・共有する FD 研修会、教育学部では教職概論や附属学校関連、経済学部では科研獲得戦略、理学部では学科主催のピアレビューと低年次教育の取り組み、医学部では新 eYUME 操作説明会、臨床実習入門実施担当者講習会等々、工学部では優秀授業の表彰、農学部では授業公開、共同獣医学部では鹿児島大学共同獣医学部との合同 FD 研修会、国際総合科学部では就職指導や PBL、留学に関する FD などです（これ以外にも沢山ありますが）。これらは各学部のニーズに合わせて実施されているものと思いますが、他学部でも参考になるかもしれません。

山口大学 大学教育機構
大学教育センター長
菊政 勲

第1部 全学FD活動

第1章 大学教育機構主催等のFD活動	1
第1節 大学教育機構主催等の講演会及び研修会一覧	1
第2節 大学教育機構主催等の講演会及び研修会の概要・報告	9
第2章 共通教育授業科目別部会のFD活動	85
第3章 学生授業評価及び教員授業自己評価	87
第1節 実施方法・実施状況	87
第2節 授業評価の結果について（全学）	94
第3節 学生授業評価の結果について（共通教育）	109

第2部 学部・研究科のFD活動

第4章 人文学部のFD活動	119
第1節 授業公開	119
第2節 学部・研究科主催FD研修会	121
第3節 教育改善に関する活動	124
第4節 学生授業評価・教員授業自己評価	125
第5節 FD実施経費報告書	129
第6節 来年度の課題	129
第5章 教育学部のFD活動	131
第1節 授業公開	131
第2節 学部・研究科主催FD研修会	131
第3節 教育改善に関する活動	134
第4節 学生授業評価・教員授業自己評価	134
第5節 FD実施経費報告書	135
第6節 来年度の課題	135
第6章 経済学部のFD活動	136
第1節 授業公開	136
第2節 学部・研究科主催FD研修会	136
第3節 教育改善に関する活動	138
第4節 学生授業評価・教員授業自己評価	138
第5節 FD実施経費報告書	140
第6節 来年度の課題	140
第7章 理学部のFD活動	141
第1節 授業公開	141
第2節 学部・研究科主催FD研修会	149
第3節 教育改善に関する活動	154

第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	156
第5節	F D実施経費報告	157
第6節	来年度の課題	157
第8章	医学部のF D活動	158
第1節	授業公開	158
第2節	学部・研究科主催F D研修会	159
第3節	教育改善に関する活動	168
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	174
第5節	F D実施経費報告書	174
第6節	来年度の課題	175
第9章	工学部のF D活動	177
第1節	授業公開	177
第2節	学部・研究科主催F D研修会	177
第3節	教育改善に関する活動	181
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	182
第5節	F D実施経費報告書	186
第6節	来年度の課題	186
第10章	農学部のF D活動	187
第1節	授業公開	187
第2節	学部・研究科主催F D研修会	188
第3節	教育改善に関する活動	193
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	193
第5節	F D実施経費報告書	197
第6節	来年度の課題	197
第11章	共同獣医学部のF D活動	199
第1節	授業公開	199
第2節	学部・研究科主催F D研修会	200
第3節	教育改善に関する活動	203
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	206
第5節	F D実施経費報告書	207
第6節	来年度の課題	207
第12章	国際総合科学部のF D活動	208
第1節	授業公開	208
第2節	学部・研究科主催F D研修会	209
第3節	教育改善に関する活動	214
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	214

第5節	F D実施経費報告書	215
第6節	来年度の課題	215
第13章	人文科学研究科のF D活動	216
第1節	授業公開	216
第2節	学部・研究科主催F D研修会	216
第3節	教育改善に関する活動	216
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	216
第5節	F D実施経費報告書	217
第6節	来年度の課題	217
第14章	教育学研究科のF D活動	218
第1節	授業公開	218
第2節	学部・研究科主催F D研修会	218
第3節	教育改善に関する活動	218
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	218
第5節	F D実施経費報告書	219
第6節	来年度の課題	220
第15章	経済学研究科のF D活動	221
第1節	授業公開	221
第2節	学部・研究科主催F D研修会	221
第3節	教育改善に関する活動	222
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	222
第5節	F D実施経費報告書	224
第6節	来年度の課題	224
第16章	医学系研究科のF D活動	225
第17章	創成科学研究科のF D活動	226
理学系		
第1節	授業公開	226
第2節	学部・研究科主催F D研修会	228
第3節	教育改善に関する活動	228
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	228
第5節	F D実施経費報告書	230
第6節	来年度の課題	230
農学系		
第1節	授業公開	231
第2節	学部・研究科主催F D研修会	231
第3節	教育改善に関する活動	232

第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	232
第5節	F D実施経費報告書	236
第6節	来年度の課題	236
第18章	東アジア研究科のF D活動	237
第1節	授業公開	237
第2節	学部・研究科主催F D研修会	237
第3節	教育改善に関する活動	239
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	239
第5節	F D実施経費報告書	239
第6節	来年度の課題	240
第19章	大学院技術経営研究科のF D活動	241
第1節	授業公開	241
第2節	学部・研究科主催F D研修会	242
第3節	教育改善に関する活動	250
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	250
第5節	F D実施経費報告書	254
第6節	来年度の課題	254
第20章	連合獣医学研究科のF D活動	255

平成30年度 山口大学 教学委員会 名簿

平成30年度 山口大学 学部・研究科F Dコーディネータ 名簿

平成30年度 山口大学 大学教育センター 名簿

第 1 部 全学 F D 活動

第1章 大学教育機構主催等のFD活動

山口大学のFD活動は全学レベルと学部・研究科レベルで実施されている。本章では、全学レベルのFD活動として大学教育機構および事務局が主催するFD活動の報告を行う（一部にSD・TAD活動を含む^{*}）。
^{*}FD(Faculty Development、大学教員の職能開発)、SD(Staff Development、大学職員の職能開発)、TAD(Teaching Assistant Development、大学院生が行うTAの職能開発)。

第1節 大学教育機構主催等の講演会及び研修会一覧

以下の表は平成30年度の大学教育機構主催FD講演会・研修会の一覧である。講演会は夏に1回行われ、参加者は109名であった。また研修会は14種類・計17回開催され、参加者は計899名であった。また、各学部・研究科と大学教育機構が共同で実施する「教育改善研修会」への参加者は合計378名であった。延べ1386名が本年度はFD活動を行った計算となる。多くの教職員は自主的に、また職務上の必要性から参加し、積極的にFD活動を実施した。

I 講演会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	大学教育とアクセシビリティ—多様な人々の大学教育へのアクセシビリティを考える—	平成30年8月8日(水)	13:30～16:10	吉田地区・常盤地区・小串地区	メディア棟情報メディア講義室 工学部E31番教室 医学部総合研究棟多目的室	山本幹雄(広島大学アクセシビリティセンター 准教授)、鍋山祥子(ダイバーシティ推進室 室長 教授) 他	本学教育職員ほか及び県内他大学関係者	留学生、社会人、地域住民、障害のある(疑われる)学生といった多様な人たちが大学教育へアクセスしやすいようにするために、大学はどこをどのように改善すべきかについて学内外の有識者を招聘し協議する。	教職員109名
									参加者計109名

II 研修会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	新任教員研修会(第1回)	平成30年4月3日(火)	14:30～17:10	吉田地区・常盤地区・小串地区	メディア講義室 工学部E31講義室 医学部総合研究棟多目的室	岡正朗(学長)、堀憲次(副学長)、田中和広(副学長)、福田隆真(副学長)、根ヶ山徹(副学長)、小川勤(大学教育センター副センター長)、岡田菜穂子(学生特別支援室専任講師)	(1)前回の研修会(平成29年9月27日)以降に本学の教育職員(附属学校を除く。)となった者。 (2)上記の日以前に本学の教育職員となった者で本研修未受講者のうち受講を希望する者。	新任教員を対象として、本学において教育活動や研究活動を実施していく上で必要な知識・情報等について説明し、本学の教育職員として相応しい認識を高めると共に、大学運営に関する理解を深める。	教員37名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
2	共通教育TA・SA研修会	平成30年4月6日(金)	13:00～14:30	吉田地区・常盤地区・小串地区	共通教育1番教室 工学部E31番教室 医学部総合研究棟多目的室	菊政 勲(大学教育センター長)、小川勤(大学教育センター副センター長)、岡田耕一(大学教育センター講師)、森本宏志(保健管理センター准教授)	共通教育においてTAに採用された大学院生、SAに採用された学部生、およびTA・SAを採用する教員	TA・SAの役割や責任、また、各分科会に分かれて、それぞれの授業におけるTA・SAの仕事の確認と留意点などについて理解を深める。	教職員18名 学生155名
3	各学部・研究科FDコーディネータ研修会	平成30年5月9日(水)	17:40～19:10	吉田地区・常盤地区・小串地区	各地区第1テレビ会議室	菊政 勲(大学教育センター長)、小川勤(大学教育センター副センター長)、林透(大学教育センター准教授)	各学部・研究科のFDコーディネータ	各学部・研究科のFDコーディネータを対象に、本年度の機構主催のFD計画について説明するとともに、各学部でFD計画を立てる際に注意すべき点やFD予算要求の際の注意点などについて研修を行う。	教職員15名
4	「教職課程」をお持ちではないですか？～これからの国立教員養成学部・教員の在り方について～	平成30年7月18日(水)	15:00～15:40	吉田地区	教育学部21番教室	和泉研二(知的財産センター副センター長・国際総合科学部教授)	希望者	「教員の養成・採用・研修の一体化」の流れの中では、学生だけでなく、現職教員に対しても、学びの場を提供することが求められる。学校教育と大学との接続を考えるためのチャンネルにもなり得る。近年の教員養成改革について概観しながら、各学部・研究科の「教職課程」について考える。	教職員72名
5	本学学習支援システムの特徴と活用～修学支援システム及びMoodleの学習支援機能概要～	平成30年8月22日(水)	17:00～17:35	吉田地区	総合研究棟S1	岡田 耕一(大学教育センター講師)	希望者	現在本学では自己主導型学修総合電子システム(eYUSDL)とMoodleとで2種類の学習管理システム(LMS; Learning Management System)が利用可能。本研修会では、これらの学習支援システムの機能や使い方を対比しながら、それぞれの特徴等を紹介する。	教職員44名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
6	新任教員研修会(第2回)	平成30年9月27日(木)	13:25～ 16:50	吉田地区	共通教育棟16番教室	小川勤(大学教育センター副センター長)、林透(大学教育センター准教授)、藤原 勇(大学教育センター准教授)、岡田耕一(大学教育センター講師)	(1)前回の研修会(平成29年9月27日)以降に本学の教育職員(附属学校を除く。)となった者。 (2)上記の日以前に本学の教育職員となった者で本研修未受講者のうち受講を希望する者。	新任教員を対象として、本学において教育活動や研究活動を実施していく上で必要な知識・情報等について説明し、本学の教育職員として相応しい認識を高めると共に、大学運営に関する理解を深める。	教職員19名
7	FD・SDワークショップ 第2回ALベストティーチャーによる模擬授業	平成30年10月22日(月)	16:10～ 18:00	吉田地区	共通教育16番教室(アクティブ・ラーニング教室)	辻 多聞(学生支援センター講師、仁平千香子(国際総合科学部助教)	希望者	第2回ALベストティーチャー受賞者による模擬授業を体感し、改めて、「アクティブ・ラーニングとは何か」、「アクティブ・ラーニングを通じた学生の学び・成長」について考える。	教職員41名 学生3名
8	2018著作権法改正と教育機関対応の方向性	平成30年10月24日(水)	13:30～ 14:15	吉田地区	農学部・共同獣医学部大会議室	木村友久(知的財産センター教授)	希望者	著作権法35条3項を新設して、教育用途で異時公衆送信に権利制限をかける動きが最終段階に入った(平成30年2月23日に閣議決定済み)。これについては、部局毎に専門領域や教育手法の違いにより異なる対応があり得るので、本研修会では開講部局の皆様と意見交換をしながら具体策を練ることを目的とする。	教職員32名
9	FD・SDワークショップ 学生の学びを促す学修ポートフォリオとは～今、改めて学修成果の可視化について考える～	平成30年11月22日(木)	16:20～ 18:00	吉田地区	共通教育15番教室(アクティブ・ラーニング教室)	江本理恵(岩手大学教育推進機構准教授)、鷹岡亮(教育学部附属教育実践センター教授)	希望者	学生の学びを促す学修ポートフォリオの活用方策に焦点を当て、実際の実践事例を紹介しながら、学修ポートフォリオの意義と価値を改めて考える。	教職員35名 学生2名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
10	大学マネジメントセミナー 2018inやまぐち 「地方大学の魅力発信と大学間連携 Part2～新しい時代における大学マネジメント～」	平成30年12月17日(月)	14:30～ 16:30	吉田地区	大学会館2階会議室	高梨桂治(沖縄科学技術大学院大学副学長)、各務正(梅光学院大学副学長)	希望者	大学マネジメントに豊富な経験を有する講師2名から話題提供いただき、教職協働やステークホルダー協働を通して大学マネジメントのあり方について、新たな方策や気づきを得る場を提供。山口地域が抱える高等教育機関共通のテーマについて理解を深めるとともに、大学教職員の人的ネットワークの充実を図る。	教職員91名
11	本学学習支援システムの特徴と活用 ～修学支援システム及びMoodleの学習支援機能概要～	平成30年12月19日(水)	15:00～ 15:30	吉田地区	教育学部21番教室	岡田耕一(大学教育センター講師)	希望者	現在本学では自己主導型学修総合電子システム(eYUSDL)とMoodleとで2種類の学習管理システム(LMS; Learning Management System)が利用可能。本研修会では、これらの学習支援システムの機能や使い方を対比しながら、それぞれの特徴等を紹介する。	教職員72名
12	2018ラーニングアドバイザー養成講座	①平成31年1月25日(金) ②平成31年2月15日(金)	13:30～ 17:00	吉田地区	共通教育棟2階会議室	浜島幸司(同志社大学学習支援・教育開発センター准教授)、我妻鉄也(千葉大学アカデミックリンクセンター特任助教)、林透(大学教育センター准教授)	希望者	事務職員一人ひとりがこれまでのキャリアを振り返りつつ、大学人として身に付けておくべき学内の各種情報や制度、学生のニーズなどをしっかり把握・理解したうえで、学生の学びに関する疑問・悩みに応える事務職員になることを目指す。	教職員30名 学生1名
13	学生の主体的な学びを引き出す授業デザイン～シラバス点検からはじめてみよう！～	平成31年2月13日(水)	15:00～ 15:40	吉田地区	人文・理学部大会議室	林透(大学教育センター准教授)	希望者	シラバス入力をはじめ、各記載項目の意味を再確認しながら、シラバス記載内容の点検を行い、学生の主体的な学びを引き出す授業デザインのヒントを紐解く。具体的な実践事例や教育効果を紹介し、シラバス点検に立ち返った授業デザインの有用性を共有する。	教職員58名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
14	障害のある学生への授業中支援～支援事例の紹介～	平成31年3月1日(金)	14:30～15:10	吉田地区	人文・理学部大会議室	岡田菜穂子(学生特別支援室准教授)、田中亜矢巳(学生特別支援室カウンセラー)	希望者	本学には、障害のある学生への授業中支援のための「配慮願」配布のしくみがある。「配慮願」作成から支援実施までの流れを確認し、最近の授業中支援の要望の傾向と、実際の対応例について紹介する。 また、学部特性を踏まえた修学支援の難しさなどについて情報・意見交換を行う。	教職員42名
15	大学生の就職活動・企業の採用活動の最新事情	平成31年3月4日(月)	14:20～15:00	常盤地区	工学部D11講義室	平尾元彦(学生支援センター教授)	希望者	ここ数年間の売り手市場と言われるなかで、新卒採用マーケットは大きく変貌をとげている。いま、就職・採用マーケットがどのように変化しているのか。これから何が起きるのか。大学の就職支援のあるべき姿について日頃考えていることを語る。	教職員34名
16	大学生の就職活動・企業の採用活動の最新事情	平成31年3月13日(水)	14:00～14:40	吉田地区	農学部・共同獣医学部大会議室	平尾元彦(学生支援センター教授)	希望者	ここ数年間の売り手市場と言われるなかで、新卒採用マーケットは大きく変貌をとげている。いま、就職・採用マーケットがどのように変化しているのか。これから何が起きるのか。大学の就職支援のあるべき姿について日頃考えていることを語る。	教職員30名
17	山口大学 共育ワークショップ 2019 多様化社会において必要とされるコンピテンシーとは～高大接続・社会接続の観点から～	平成31年3月14日(木)	13:30～17:00	吉田地区	大学会館2階会議室	北尾洋二(株式会社ザメディアジョン・リージョナル代表取締役)、溝上広樹(熊本県立熊本北高等学校教諭)	希望者	共育ワークショップは、大学教育センターが主催し、今年で6年目となるが、昨年度の高等学校関係者(教員・生徒)を交えた取組から更に発展させ、大学関係者、高等学校関係者、企業・行政関係者が一緒になって、教育について考える場づくりを企画する。	教職員59名 学生9名
									参加者 計899名

Ⅲ 教育改善研修会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	大学教育センターと理学部、創生科学研究科(理学系)との教育改善FD研修会	平成30年9月3日(月)	15:00～ 15:30	吉田地区	人文・理学部 大会議室	林寛子(アドミッションセンター准教授)、 藤原勇(大学教育センター准教授)、 岡田耕一(大学教育センター講師)	各学部・研究科の全教員	今年度の教育改善FD研修会は「教学IR」をテーマに実施する。アドミッションセンターと協力して「入試制度と成績の関係」を一つの事例として取り上げ、各学部・研究科の教員と教学IRの推進方法や課題について意見交換を行う。	教員42名
2	大学教育センターと人文学部・人文科学研究科・東アジア研究科(人文系)との教育改善FD研修会	平成30年9月19日(水)	14:30～ 15:10	吉田地区	人文・理学部 大会議室	林寛子(アドミッションセンター准教授)、 小川勤(大学教育センター教授)	各学部・研究科の全教員	今年度の教育改善FD研修会は「教学IR」をテーマに実施する。アドミッションセンターと協力して「入試制度と成績の関係」を一つの事例として取り上げ、各学部・研究科の教員と教学IRの推進方法や課題について意見交換を行う。	教員36名
3	大学教育センターと共同獣医学部、連合獣医学研究科との教育改善FD研修会	平成30年10月10日(水)	13:30～ 14:00	吉田地区	農学部大会議室	林寛子(アドミッションセンター准教授)、 小川勤(大学教育センター教授)	各学部・研究科の全教員	今年度の教育改善FD研修会は「教学IR」をテーマに実施する。アドミッションセンターと協力して「入試制度と成績の関係」を一つの事例として取り上げ、各学部・研究科の教員と教学IRの推進方法や課題について意見交換を行う。	教員25名
4	大学教育センターと教育学部・教育学研究科(教職大学院を含む)・東アジア研究科(教育系)との教育改善FD研修会	平成30年10月17日(水)	15:00～ 15:40	吉田地区	教育学部21番教室	林寛子(アドミッションセンター准教授)、 小川勤(大学教育センター教授)	各学部・研究科の全教員	今年度の教育改善FD研修会は「教学IR」をテーマに実施する。アドミッションセンターと協力して「入試制度と成績の関係」を一つの事例として取り上げ、各学部・研究科の教員と教学IRの推進方法や課題について意見交換を行う。	教員79名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
5	大学教育センターと医学部保健学科、医学系研究科との教育改善FD研修会	平成30年11月7日(水)	13:30～ 13:25	小串地区	総合研究棟S2講義室	林寛子(アドミッションセンター准教授)、岡田耕一(大学教育センター講師)	各学部・研究科の全教員	今年度の教育改善FD研修会は「教学IR」をテーマに実施する。アドミッションセンターと協力して「入試制度と成績の関係」を一つの事例として取り上げ、各学部・研究科の教員と教学IRの推進方法や課題について意見交換を行う。	教員26名
6	大学教育センターと工学部、創成科学研究科(工学系)との教育改善FD研修会	平成30年11月14日(水)	14:20～ 15:00	常盤地区	工学部D11教室	林寛子(アドミッションセンター准教授)、岡田耕一(大学教育センター講師)	各学部・研究科の全教員	今年度の教育改善FD研修会は「教学IR」をテーマに実施する。アドミッションセンターと協力して「入試制度と成績の関係」を一つの事例として取り上げ、各学部・研究科の教員と教学IRの推進方法や課題について意見交換を行う。	教員25名
7	大学教育センターと経済学部・経済学研究科・東アジア研究科(経済系)との教育改善FD研修会	平成30年11月21日(水)	15:00～ 15:30	吉田地区	経済学部第1会議室	林寛子(アドミッションセンター准教授)、木下真(大学教育センター准教授)	各学部・研究科の全教員	今年度の教育改善FD研修会は「教学IR」をテーマに実施する。アドミッションセンターと協力して「入試制度と成績の関係」を一つの事例として取り上げ、各学部・研究科の教員と教学IRの推進方法や課題について意見交換を行う。	教員56名
8	大学教育センターと技術経営研究科(MOT)との教育改善FD研修会	平成30年12月11日(火)	14:30～ 15:10	常盤地区	大学院技術経営研究科棟1階会議室	林寛子(アドミッションセンター准教授)、岡田耕一(大学教育センター講師)	各学部・研究科の全教員	今年度の教育改善FD研修会は「教学IR」をテーマに実施する。アドミッションセンターと協力して「入試制度と成績の関係」を一つの事例として取り上げ、各学部・研究科の教員と教学IRの推進方法や課題について意見交換を行う。	教員12名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
9	大学教育センターと医学部医学科、医学系研究科との教育改善FD研修会	平成30年12月12日(水)	13:00～ 13:40	小串地区	医学部本館6階第1会議室	林寛子(アドミッションセンター准教授)、林透(大学教育センター准教授)	各学部・研究科の全教員	今年度の教育改善FD研修会は「教学IR」をテーマに実施する。アドミッションセンターと協力して「入試制度と成績の関係」を一つの事例として取り上げ、各学部・研究科の教員と教学IRの推進方法や課題について意見交換を行う。	教員32名
10	大学教育センターと農学部、創生科学研究科(農学系)との教育改善FD研修会	平成30年12月19日(水)	15:00～ 15:40	吉田地区	農学部大会議室	林寛子(アドミッションセンター准教授)、木下真(大学教育センター准教授)	各学部・研究科の全教員	今年度の教育改善FD研修会は「教学IR」をテーマに実施する。アドミッションセンターと協力して「入試制度と成績の関係」を一つの事例として取り上げ、各学部・研究科の教員と教学IRの推進方法や課題について意見交換を行う。	教員24名
11	大学教育センターと国際総合科学部との教育改善FD研修会	平成31年1月16日(水)	15:00～ 15:40	吉田地区	国際総合科学部2階大会議室	林寛子(アドミッションセンター准教授)、林透(大学教育センター准教授)	各学部・研究科の全教員	今年度の教育改善FD研修会は「教学IR」をテーマに実施する。アドミッションセンターと協力して「入試制度と成績の関係」を一つの事例として取り上げ、各学部・研究科の教員と教学IRの推進方法や課題について意見交換を行う。	教員21名
									参加者 計378名

第2節 大学教育機構主催等の講演会及び研修会の概要・報告

1. 講演会

大学教育とアクセシビリティ

—多様な人々の大学教育へのアクセシビリティを考える—

○日時：平成30年8月8日（水）13:30～16:10

○会場：吉田地区：共通教育メディア講義室（主会場）、常盤地区：工学部 E31 番教室、小串地区：医学部総合研究棟 8階 多目的室
大学リーグやまぐち（山口学芸大学、東亜大学、至誠館大学、水産大学校、）4大学をネットで繋いで参加

○参加者：参加総数 109名（昨年 71名）

（内訳）内訳：山口大学 70名（吉田地区 44名（昨年度 38名）、小串地区 23名（昨年度 19名）、常盤地区 3名（昨年度 3名））、山口学芸大学 10名（昨年度 6名）、東亜大学 4名（昨年度 2名）、至誠館大学 12名、水産大学校 13名）；アンケート回収数 82枚（昨年 47枚）

○講師：広島大学アクセシビリティセンター 山本 幹雄 准教授

○内容

講演会は2部構成で行われた。第1部では「大学教育とアクセシビリティ」というテーマで山本准教授から「アクセシビリティ」とは、何かがあるにアクセスする際の「アクセスのしやすさ」を表す言葉であることが示された。近年、多様な人々が大学教育を利用する機会が増えているが、その際にアクセスのしやすさという観点から大学教育を考えることの重要性が指摘された。

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	14	17.1%
良かった	56	68.3%
どちらとも言えない	8	9.8%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	1	1.2%
無回答	3	3.7%
合計	82	100.0%

また、大学でアクセシビリティを推進する理由として「法律的」、「モラル的」、「教育的」理由が考えられるが、法律的理由としては、差別解消法への対応、モラル的理由としては学習機会の公平性、教育的理由としては多様な学生の修学や教育資源の開発といった教育の改善等の理由が考えられるという。全国的な障害学生支援の動向、大学における合理的配慮については、広島大学の具体的な事例を交えて説明があった。その中で特に興味深かったのが、障害のある学生への合理的配慮の標準化・一般化、いわゆる「コモディティ化」という考え方である。広島大学において現在推進中で、急速に増加しているさまざまな支援ニーズに対して、制約が大きい（あるいは必要性の高い）配慮や支援に、ある程度支援

リソースを振り分けるために、誰もが可能な配慮や支援に関しては、①ICT・クラウド技術を活用した授業支援・ユビキタス支援を整備・拡充するとともに、②アクセシビリティリーダー育成プログラム（以下、ALP）を拡充し、アクセシビリティ教育の受講率を20%程度に上げて支援・配慮を本人、周りの学生や教職員に広げていくという考え方である。いわゆる「支援の一般化」というものである。一般学生や教職員の障害学生支援に関する理解・啓発の拡充を通して、一般的な修学支援については、障害学生本人や同僚学生、教員等がピアサポートを行っていくという方法である。本学も障害学生に対する配慮や支援に関してはこのような手法の導入を今後考えていかなければならないと感じた。



山本准教授（広島大学）の講演の様子

第2部では、最初にダイバーシティ推進室室長の鍋山祥子副学長から山口大学におけるダイバーシティ推進室の取り組みについて紹介があった。推進室では2025年度を目標にダイバーシティ・キャンパスの実現に向けて、「意識改革」、「制度設計」、「ワークライフバランス支援」、「研究力向上支援」、「ネットワーク構築」に取り組んでいる。また、数値目標を立てて、ジェンダー・ダイバーシティにも取り組んでいるようだ。このようなさまざまな取り組みの中で興味深かったのは、「ダイバーシティ推進会議」というもので、ダイバーシティに関心のある教職員が自由に集まってダイバーシティを巡ってさまざまな議論を展開しているということであった。また、関連部署（学生特別支援室（以下、SSR）、留学生センター）との連携協力のための協議を行うなど活動が行われていることがわかった。

パネルディスカッションでは各パネリストからそれぞれの立場（留学生、地域連携、障害学生支援、ダイバーシティ推進室）から、ダイバーシティ・キャンパスの実現に向けての本学の現状と課題について、意見交換が行われた。

国際総合科学部のレール・マルク教授からは、国際総合科学部の留学の送り出しと受け入れの現状について説明があった。その中で特に興味深かったことは、多様性に触れることは学生が打たれ強くなるという指摘であった。また、ダイバーシティを推進するためには、学生自らが交流する「場」を作らなければならないという指摘であった。国際総合科学部ではすでに学部公認サークルとして「国際交流サークル」が立ち上がり約70名近い学生が活動しているようだ。当該サークルの目的は、一つはこれらから留学する1年生と留学をすでに経験した3年生とが交流する場を提供すること。二つ目は海外からの留学生と日本人学生との交流の場を提供することである。今後は他学部にも広げたいとのことであった。

地域連携係の天本係長からは公開講座や開放講座などを通して大学と地域との交流が行われている様子が報告された。受講者数は年々増加しているが、受講者の高齢化が進んでおり、もっと若年層や社会人が興味関心を示すような講座内容の設定が課題として示された。



福田機構長の冒頭の挨拶



鍋山室長の講演の様子

SSR の岡田菜穂子講師からは、山口大学における障害学生支援の現状と SSR の取り組みについて報告された。支援や配慮を求めて来る学生は増加しているだけでなく、支援の内容が多様化しているようだ。また、多様な支援ニーズに対応するために学内の各部局との連携が欠かせない。例えば、ダイバーシティ推進室とは LGBT への対応などで連携・協力できないかを模索しているようだ。また、留学生への配慮や支援については国際総合科学部や留学生センターと連携して対応している。今後、外国人留学生に対する本格的な支援が始まれば、留学生の文化的価値観による障害の認識や支援の違いが生じてくるのではないかという指摘があった。

全体討論では、学生や教職員の多様性を高めるためには、キャンパス内ですでに多様な人々がいることや自分にも関係していること（「自分事（コト）」）であるという意識付けすることが重要であるという指摘があった。そのためにはいろいろな「場」を設定するだけでなく、そのような状況に大学がすでに置かれていることを広報（周知）する必要があるという意見があった。広島大学では本年度から全ての新生が必修で受講する「大学教育入門」という授業の中で、アクセシビリティやダイバーシティに関する内容を講義しているようだ。本学も「知の広場」等の場でこれらのことを周知させていく必要があるという意見があった。また、大学としてダイバーシティをあえて意識しなくても多様性を普遍的に認め合う状況に持っていくためには、教育プログラムの体系化が必要であるという意見があった。例えば、受け入れ留学生を増やしたい（継続的に留学生を入学させたい）場合、国際総合科学部がいくら頑張っても増えない。全学が一体となって、英語により魅力的なプログラムを体系的に開発し留学生に提供しないと海外からの留学生は増えないという指摘があった。さらに、大学だけでなく、地域を巻き込んで一体となって多文化共生社会を創造していく必要があり、みんなで支え合うと意識を醸成しないとダイバーシティ・キャンパスは実現できないという意見があった。

参加者は昨年度の 71 名から 109 名と大幅に増加し、ここ 3 年間で一番参加者が多かった。増加した原因としては、講演会のテーマ設定が幅広い方々にアピールし、全体の参加人数と学外からの参加人数を押し上げたことと、大学リーグ山口からの参加校 2 校（至誠

館大学（12名）と水産大学校（13名）からの参加者が比較的多かったためであると考えられる。また、大学教育とアクセシビリティという広い概念テーマで、留学生、障害学生、地域住民、社会人を対象とし、さらにそれを支援する支援者等が大きな関心を寄せていただいた結果であると考えている。講演会後のアンケート結果では、「非常に良かった」および「良かった」を合わせて85.4%（昨年度93.6%）であり、昨年度よりは満足度が少し下がった。この理由としては、パネルディスカッションでアクセシビリティという概念が多様な利用者を想定しているため、それに関わる関係者が多く、意見や議論が少し拡散し、深まりが足りなかったためである。ただし、パネルリストはそれぞれの分野の専門家であるため、彼らの説明や意見は、今まで我々が知らなかった事実や考え方を知ることができ、大変興味深い内容が多かった。大学教育のグローバル化やタイバーシティ化については、我々はまだわからない部分が多いことを自覚するとともに、これらの実現のためには、相互理解を深め、全学的な連携協力を図る必要を改めて感じた講演会であった。今回、講演会に参加されなかった先生方もぜひ、後日センターから学内配信されるビデオを一度視聴してもらいたいと考えている。



パネルディスカッションの様子（1）



パネルディスカッションの様子（2）



全学FD・SD講演会の様子

2. 研修会

(1) 平成 30 年度 新任教員研修会 (第 1 回)

○日時：平成 30 年 4 月 3 日 (火) 14:30～17:15

○会場：吉田地区：メディア講義室、常盤地区：工学部 E 3 1 講義室 (遠隔中継)、小串地区：総合研究棟 8 階多目的室 (遠隔中継)

○参加者：参加人数 37 名 (昨年度 42 名)
内訳：吉田地区 12 名 (昨年度 25 名)、小串地区 15 名 (同 9 名)、常盤地区 10 名 (同 8 名)

当該研修会が年 2 回 (第 1 回目 4 月、2 回目 9 月) 開催されることになって 8 年目を迎えた。4 月に第 1 回目を開催する趣旨とし

ては新任教員に対して就任当初の時期から本学の大学改革の方向性と現状、また、教育と研究に関する方針、さらに具体的な授業の指導方法等について理解を深めていただくためである。岡学長からは「明日の山口大学ビジョン」等の資料を使って本学の大学改革の状況と今後の本学の進むべき方向性について講話をしていただいた。堀副学長 (学術研究担当) からは本学の研究支

援の取り組み (URA の活用) と研究不正への取り組み (CITI) について、田中副学長 (人事労務担当) からは、サービス・兼業・利益相反・ハラスメント防止対策について、福田副学長 (教育学生担当) からは大学教員として本学で教育活動を行う際の心構えや本学の教育改革の方向性について、根ヶ山副学長 (学術情報担当) からは、図書館の利用及び情報セキュリティについて、それぞれ話があった。また、個人情報の取り扱いについて、中井総務部総務課法規係長から説明があった。

研修会後半では、小川大学教育センター副センター長・教授から「授業の実施方法について」というテーマで、大学における授業方法や TA の使い方、成績評価方法、試験の公正な実施等について説明があった。特にシラバスをしっかりと記載して授業設計を行う必要性や学生参加型授業の重要性について説明があった。また、本年 9 月に新任教員の内、初めて授業を担当する教員を対象とした「新任教員のための大学教員準備講座」を開講する



図 1 講演中の岡学長

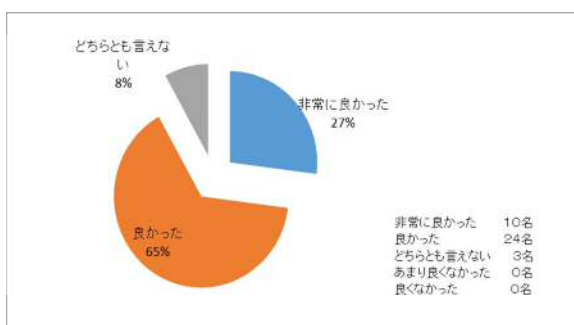


図 2 アンケート集計結果

旨、アナウンスがあった。その後、学生特別支援室の岡田講師から「山口大学の障害学生支援について」説明があった。

研修会に参加した先生方の全体的な感想としては92%（非常に良かった＋良かった）の方が内容的に良かったという意見で概ね好評であった（図2参照）。

先生方からの意見としては、「研修項目が自身にとって必要な内容でした」、「CITTIや情報セキュリティなど、基本的な留意点について理解することができた」、「知らないことも多く、ためになりました。教育・研究業務に役立てていきます」、「山口大学独特のルールを知ることができて良かったです」、「あいまいな認識を確認できた」という肯定的な意見とともに、「質問の時間を作っていただき、双方向型にしていただけるとよりよいFDになると感じました」、「個々の時間が短かった。もっときちんと理解しておく必要がある」、「内容はよいが、半日で詰め込みすぎでは？ 午前中から始めても良いかと」、「配布されたパワポ資料のうちWebへのリンクを記載しているものは電子データをどこからダウンロードできるようにしてほしい」、「情報量が多すぎだと思いました」という改善を求める意見があり大変参考になった。

当該研修会の開催時期については、95%の先生方が「良い」と回答しており好評だった。入学式直後というタイミングが新任教員にとって概ね好評であり、この時期の開催が定着してきたと感じた。今回は年2回実施される当該研修会の第1回目の研修会であり、スタートアップ的性格を持つが、その意義は十分に果たせたと感じている。

(2) 平成 30 年度 共通教育 TA・SA 研修会

1. 主催 山口大学大学教育機構
2. 開催日時 平成 30 年 4 月 6 日 (金) 13:00~14:30
3. 場所：全体研修 吉田地区：共通教育 1 番教室、常盤地区：工学部 E 棟 31 番教室
小串地区：医学部総合研究棟 8 階多目的室
個別研修： 共通教育棟他 (分科会ごと)

4. 参加者共通教育において TA・SA に新規に採用予定の大学院生・学部生、TA・SA を採用する教員

参加者総数 173 名 (昨年度 203 名) (学生 155 名 (同 179 名)、教職員 18 名 (同 24 名))

内訳： 吉田地区 171 名 (昨年度 154 名) (学生 153 名 (同 132 名)、教職員 18 名 (同 22 名))

常盤地区 0 名 (昨年度 46 名)、小串地区 2 名 (昨年度 4 名) (学生 2 名 (同 3 名)、教職員 0 名 (同 1 名))

アンケート回収数：136 枚

5. 内容 TA・SA の制度を十分に活用できるように、TA・SA の職務内容、望まれること、注意点、採用する教員が知っておくべき点など。

6. 報告

本研修会は年 1 回実施し、今年で 12 年目 (12 回目) となる。全体で 173 名で昨年度より 30 名減少した。この理由は常盤地区 (工学部) で新入生関係の行事と日程が重なったためである。

研修会は 2 部構成で、それぞれの内容は次の通りであった (図 1)。

第 1 部 (13:00~14:00)

最初に菊政大学教育センター長より、共通教育の特徴と TA・SA の職務内容と注意点の説明があった。現行の共通教育カリキュラムのカリキュラム編成と特徴について説明があった (図 2)。



図 1 TA・SA 研修会の様子

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	11	8.1%
良かった	78	57.4%
どちらとも言えない	41	30.1%
あまり良くなかった	3	2.2%
良くなかった	2	1.5%
無回答	1	0.7%
合計	136	100.0%

次に、学生支援センター・学生特別支援室(SSR)の小川勤室長から障がいを持つ学生への対応について、合理的配慮とはどういうことか、学生特別支援室の役割・機能、具体的な留意事項、支援スキル研修会の案内などについて説明があった(図3)。本来は、学生特別支援室(SSR)の岡田菜穂子講師が講師を担当する予定であったが、急遽、用事が入ったため、小川室長が講師を担当した。その後、大学教育センターの岡田耕一先生による出席確認システムと修学支援システムの宿題提出機能の使い方について、TA・SAの具体的な関わり方の説明があった。最後に、保健管理センター・全学労働安全衛生管理室主任の森本宏志先生による大学の授業における安全衛生について、特に「科学的探究力」と「想定外」・「リスク感覚」とは関連があることなど興味深い内容であった(図4)。また事務的な手続きについて教育企画係の種田さんから説明があった。

今回の研修会では、SSRにおいて実際に学生支援を行っている小川勤室長から、専門家の立場としてご講演をいただいた。TA・SAは実験・実習などの授業に関わることも多く、これらの授業を安全に実施するためにも、森本先生の安全衛生に関する講演と合わせて、本研修会の重要な研修事項であると考えている。

第2部(14:10～)

個別研修として、情報処理基礎、化学実験、生物学実験、数学I・II、運動健康科学、多人数・講義系授業科目の分科会に分かれて研修を実施した。

研修後のアンケートによれば、研修内容に対する満足度は65.5%(非常に良かった+良かった)であった。開催時期(93.4%)、実施場所(92.6%)ともに「良い」と回答した割合が90%を超えたために、この点については満足度が高かった。



図3 菊政大学教育センター長の講演

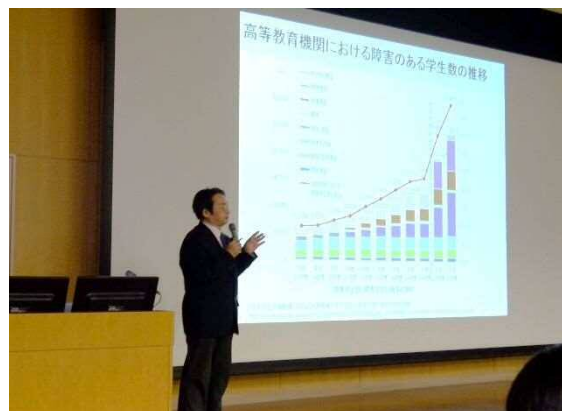


図2 小川学生特別支援室長の講演



図4 森本保健管理センター准教授の講演

(3) 平成 30 年度 FD コーディネータ研修会

1. 主催 山口大学 大学教育機構
2. 日時 平成 30 年 5 月 9 日 (水) 17:40-19:10
3. 場所 各地区第 1 テレビ会議室
4. 対象 各学部・研究科 FD コーディネータ (参加者 : 15 名 アンケート : 13 名)
5. 報告

最初に小川大学教育センター副センター長より、本研修会の開催趣旨について説明があった。その中で、教育機構主催の研修会には 4 つの柱があり、それぞれのポリシーに沿って研修会が設定されてあるとの説明があった。引き続いて小川副センター長より、本年度の教育機構が計画する研修会の概要と FD コーディネータに対する依頼事項について説明があった。本年度は、教学 IR を各学部・研究科の教育改善に活かしていくために、教育改善 FD 研修会において、教学 IR の意味と意義、さらに、アドミッションセンターの林寛子准教授から教学 IR の活用事例の紹介等を行った上で、各学部・研究科の教学 IR に対するニーズ把握のための意見交換を行いたい旨、説明があった。全学 FD・SD 講演会は、ダイバーシティキャンパスの実現を目指して、現状認識と推進する上での課題について考えるために開催されることが明らかにされた。また、講師派遣型アラカルト研修会は「メンタルヘルス」、「精神障害や発達障害が疑われる学生への対応」、「就職活動支援」、「教育活動における知的財産の取り扱い」、「教職課程における対応」等をテーマとする研修会が開催されるとの説明があった。さらに、本年度から「新任教員のための大学教員準備講座」が新たに研修メニューとして追加されることになったため、当該研修会の周知を各学部・研究科で行って欲しいとの説明があった。



設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	2	15.4%
良かった	5	38.5%
どちらとも言えない	5	38.5%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	1	7.7%
無回答	0	0.0%
合計	13	100.0%

依頼事項としては、全学講演会の参加者募集依頼や、講師派遣型アラカルト研修会では開催予定日の 2 か月前までに教育企画係に開催計画を連絡すること、教育改善研修会については、昨年度から開催日時を大学教育センターが学部・研究科ごとの開催予定月日を提案し、それをもとに各学部・研究科が FD 計画に組み込むことになったので、本年度も同様な方法で日程調整を行う旨、説明があった。

次に、各学部が FD 計画を立てる際に、必要となる FD 予算要求について、大学教育センターの林准教授から説明があった。本年度は教育機構の FD 予算が昨年度に引き続いて減額されるため、必ずしもすべての予算要求に応えられない旨、説明があった。

その他の協議事項では、教育改善 FD 研修会の日程調整方法の確認や、「IR」とはそもそもどのような意味なのかといった質問があった。

今回の研修会では、各学部・研究科からの意見はあまり多くなかったが、教員の多忙化のために、負担をかけない形で、必要な FD 活動をどのように調整し実施していくのかをあらためて考えさせられる良い機会となった。

(4)「教職課程」をお持ちではないですか？～これからの国立教員養成学部・教員の在り方について～

日程：平成 30 年 7 月 18 日（水）〔吉田地区〕 15:00～15:40

場所：教育学部 21 番教室

講師：和泉研二 教職センター副センター長（教育学部教授）

参加者：72 名（アンケート回収 32 名）

教職センターの和泉副センター長（教育学部教授）より、本学の教職センターの紹介を兼ねて、設置された背景、組織、活動状況について説明があった。次に、センターのこれまでの活動と本年度の活動予定について説明があった。最初に教職課程のカリキュラムの企画・開発として平成 31 年度から導入される新教職課程への対応のための再課程認定等の活動が行われているとの報告があった。また、教員を目指す学生の支援としては、教職センターアドバイザーによる教育実習校訪問や教員採用試験面接事前対策等の活動が明らかにされた。これらの活動は他学部にも十分周知されていないことが多いが、教員を目指す学生にとっては、大変有効な支援活動であることがわかった。本年度の活動予定としては、①教員採用試験事前ガイダンス、②都道府県・市町村採用試験の説明会の実施、③教員採用試験大学推薦候補者選考の実施、④センター主催の教員採用試験対策セミナー等の活動が行われるようだ。



図 1 講演中の和泉教職センター副センター長

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	6	18.8%
良かった	21	65.6%
どちらとも言えない	3	9.4%
あまり良くなかった	1	3.1%
良くなかった	1	3.1%
無回答	0	0.0%
合計	32	100.0%

次に、教員養成改革と有識者会議の動向について説明があった。最初に文部科学省の基本的な考え方・方向性が説明された。その中でも特に興味深かったのは、教員養成を行っている大学や文科省等のサプライサイドと新任教員を受け入れる教育委員会や学校現場等のデマンドサイドとの間に人材育成を巡って認識の「ずれ」があるという説明であった。大学や文科省は、教員養成に関して新しい教育課題にも対応できる人材を大学等で十分育成できているという認識がある。その一方、校長や教育委員会は、初任者教員に対して、子ども理解や対人関係能力、コミュニケーション能力等の不足を指摘し、教員養成が必ずしも十分でないという厳しい評価であることを明らかにした。このずれを各大学がどのように解消しようとしているのかについて、先行している各大学（北海道教育大学、弘前大学、東京学芸大学、福井大学、熊本大学等）の取組事例の紹介は大変興味深かった。

研修会後のアンケート結果からは、「非常に良かった」と「良かった」を併せて 84.4%となっており、満足度の高い研修会であった。

自由記述には、「非常に内容の濃い研修だった」、「教職課程を設置しているすべての学部でこの研修を行うべきである」、「他大学の動きが良く見えてよかった」、「教員養成に対する国の政策の方向性や各大学のグッド・プラクティスがよく理解できてよかった」、「教員にとっては刺激的な内容であった」といった肯定的な意見がある一方で、「各大学が教員養成を巡って競争しているような感じがしたが、競争から何か生まれるのか」、「大学が教員養成に失敗しているようなイメージを受けた」、

「教職センター以外の話が多かった」という意見もあった。また、今回の研修会に関連して今後開催して欲しい研修内容としては、「学生が教職力を付けることができる具体的な学習内容と支援・指導の在り方」や「教職力を評価するための意味のある評価項目と評価方法」に関する研修を開催して欲しいとの要望があった。

研修会の実施時期や実施場所については、ほとんど満足したという結果となった。



図 2 アラカルト研修会の様子

(5) 本学学修支援システムの特徴と活用～修学支援システム及び Moodle の学習支援機能概要～

日程：平成30年8月22日（水） [小串地区] 17:00～17:35

場所：総合研究棟S1

講師：岡田 耕一（大学教育センター講師）

参加者：44名（アンケート回収35名）

【研修内容】

最初、医学部山本健教授から研修会の主旨の説明があった。岡田耕一大学教育センター講師より、『本学学修支援システムの特徴と活用～修学支援システム及び Moodle の学習支援機能概要～』と題し、新修学支援システム（自己主導型学修総合電子システム（eYUSDL））及び Moodle の機能やメリット・デメリットについて説明があった。本研修会は主に概要の説明となった。細かい所は資料を読んで学習して欲しいとの補足があった。まず、eYUSDL と Moodle の特徴について説明があり、eYUSDL と moodle の相互移動については eYUSDL→moodle は移行が簡単であるが、逆の moodle→eYUSDL には簡単に移動できないが方法はある。eYUSDL にも簡単な学習支援システム（LMS：Learning Management System）機能が付加している。複雑な事をする場合には moodle の機能が充実している。これらの機能を使う事で資料配布や課題等の提出物管理、出席管理、簡単な小テストや成績処理等が可能なので両者の機能を考えて使ってほしい。



【★質疑応答・意見交換】

質問事項

Q1 1) eYUSDL と学部独自のシステムは同じシステムにできないのか？

2) 大学としてはシステムを使えますよという事か？使ってくださいという事か？使ってくださいくらいではなかなか浸透しないと思う。

A1 藤宮先生から出席の先生に対して、使用上のアドバイスおよび補足説明があった。

1) 医学部の eYUME が想定しているシラバスと授業毎の授業評価についての機能は全学システムではない

2) この FD は使用して下さいではなくて電子化することで仕事の効率が良くなる場合は利用し、悪くなる場合は利用しなくて良い。随時先生方で判断して利用して欲しい。このシステ

ムは先生方の利便性を上げる道具として認識して頂きたい主旨で企画している。

3) その他

・医学部では学生評価でルーブリック評価があり、この作業を行うと多量の紙が発生する。この評価作業はシステムを利用すると便利だと思う。実際にルーブリック評価を学生毎に 5 段階評価する作業が、使い始めると便利になったと思った。また授業アンケートでも使っている。Excel ファイル上で 2,000 字までの文章が入力できる学生へのレポートが出題出来て採点できる。等を考えると結構便利である。

・eYUSDL については、授業は自動的に登録される。医学科の場合 eYUSDL を使いたい時は医学科教務係に連絡して集中講義として登録する必要がある。一方、Moodle の場合は、メディア基盤センターにコース作成申請が必要。作成後、登録キーを学生通知し、学生が自分で登録番号を用いて登録することになる。

Q2. 講義中で教材を開示、学生とインタラクティブな授業を行うには Moodle システムは便利であると思われる。授業で PDF 書式の論文を活用する事を考えているがシステムにアップロードする場合、著作権の問題が有るのでは無いか。

A2. 教材配布について、著作権法では紙媒体の配布は大丈夫であるが、電子版の配布は保証金を払う必要が生じるので要注意である。その対策として論文資料のリンク先を示すことで解決する。また学生が自宅学習で PubMed 等を閲覧するにはリモートアクセスの設定が必要である。

Q3. 小テストは学内限定のみか、また自宅からも可能かであるか。

A3. Moodle では IP アドレスによる制限が可能のため小テストも可能である。

Q4. ビデオを利用する場合は、資料の容量が心配である。

A4. 本学の Moodle は「ファイル」と「videofile」と「Kaltura Media Resource」の 3 種類の方法が使える。ビデオの容量が大きい場合は「Kaltura Media Resource」を利用する方が良い。

Q5. 吉田地区の共通教育では LAN 使用可能であるが、使用出来ない教室があった。

A5. 通常の講義室とメディア講義室は使えるが、1 番、2 番教室は LAN が整備されてない。

その他

本研修会は30分の設定であり、実際に演習形式でシステムの使い方の要望もあった。

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合 (%)
非常に良かった	4	11.4%
良かった	8	22.9%
どちらとも言えない	11	31.4%
あまり良くなかった	10	28.6%
良くなかった	1	2.9%
無回答	1	2.9%
合計	35	100.0%

(6) 平成 30 年度 新任教員研修会 (第 2 回)

日程 平成 30 年 9 月 27 日(木) [吉田地区] 13:25~16:50

場所 共通教育棟 16 番教室

講座講師 (大学教育センター) 藤原准教授、林准教授、木下准教授、岡田専任講師
グループワーク・ファシリテータ 小川教授 (大学教育センター)、他上記 4 名の大学教育センター専任教員

参加者 19 名(アンケート回収 19 名)

表 1 アンケート結果

内容

当該研修会は、本年度は「新任教員のための大学教員準備講座 (以下、準備講座)」と「グループワークの」の 2 部構成で実施された。内容的には 9 月開催は、時期としてあまり適切ではなかったが、本年度は 4 月開催の調整がつかず、夏休みのこの時期に開催した。

準備講座では「大学教員という職業を知る」、「授業の設計とシラバス」、「授業評価・学習評価」、「修学支援システムの使い方」という 4 つのテーマを設定して、大学教育センターの専任教員が講師を担当した。準備講座の各研修内容に対して次のような意見や要望があった。

『大学教員という職業を知る』(図 2) については、「大学教員として必要な資質・能力は明確にわかった。」、「どうして教員評価を上げるべきかが述べられていない。この点は不可欠であると思う。」、「社会貢献の具体的な貢献について示して欲しかった。」という意見があった。

『授業の設計とシラバス』(図 3) については、「興味深く拝聴した。講師のような授業できるように頑張りたいと思う。」、「カリキュラム・フローチャートは最も重要であると思う。具体例を使って説明してもよかったのではないか。」、「もう少し、効果的な教授方法を具体的に示して欲しかった。」という意見があった。

『授業評価・学習評価』(図 4) については、「手続きの方法はよく理解できたが、授業評価の活用例などの具体的な事例を示して欲しかった。」、「評価システムをどのように活かすかを説明して欲しかった。」という意見があった。

『修学支援システムの使い方』(図 5) については、「今回の研修で学んだシステムをこれから確認してみたいと思う。」、「システムを具体的に動かして見せても良かった。」、「もう少し、内容を整理して、本当に必要なシステムの利用方法の説明に絞った方が良いと感じた。」、「Moodle の説明はもっと簡潔にした方がよい。」という意見があった。

一方、グループワークは、「本学赴任後の教育・研究活動を振り返って」というテーマで、4 班に分かれて実施した (図 1)。グループはさまざまな学部・学科、研究科の教員が混在する形で編成された。司会進行およびファシリテータは、大学教育センターの専任教員が担当した。赴任後の教育活動や研究活動で困っていること、悩んでいることなどを中心に参加者がそれぞれの立場からは話し合いを行った。教育活動に関しては、山口大学生はまじめな学生が多く授業態度もよいが、もう少し自主的かつ積極的に授業や学修活動に

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	4	21.1%
良かった	10	52.6%
どちらとも言えない	2	10.5%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	1	5.3%
無回答	2	10.5%
合計	19	100.0%

図 1 グループワークの様子

取り組んで欲しいという積極性を求める意見が多かった。研究活動では、科研費の採択が昨今厳しくなっている現状を考えると、今後の自分の研究活動が十分やっていけるかどうか不安視する声や、前の職場に比較して現在の研究環境が悪いため研究レベルが低下することを心配する意見があった。グループワークに対するアンケートでは、「他学部の先生とディスカッションができたのは良かった。」、「山大で数カ月過ごした素直な意見を聞くことができた。」という意見が多かった。

本研修会（第2回）の研修会全体の満足度（「非常に良かった」＋「良かった」）は73.7%という値となっており（表1）、研修内容については一定の評価を得ることができたと考えている。しかし、準備講座の4つの研修内容の内、満足度が80%を超えた研修がなかったため、今後は大学教育センター内でアンケートに記載された改善意見や要望を反映した研修カリキュラムや研修内容の改訂を行っていく必要があると感じた。また、開催時期については前述したような事情もあったが、「もう少し年度の初めに実施して欲しかった。」、「9月採用の人には良かったが、4月採用には遅すぎる。」、「このような研修会は、着任してすぐに行った方が良かった。」という意見が多かった。さらに、「このような資料は公開し、雇用される前に見られるようにしてほしい。異動前に任意で調べるのは大変だった。」という意見もあった。



図2 「大学教員という職業を知る」研修の様子



図3 「授業の設計とシラバス」研修の様子



図4 「授業評価・学習評価」研修の様子



図5 「修学支援システムの使い方」研修の様子

(7)FD・SDワークショップ 第2回ALベストティーチャーによる模擬授業

日 時：平成 30 年 10 月 22 日（月） 16:10～18:00

場 所：山口大学共通教育棟 16 番教室（アクティブ・ラーニング教室）

参加者：44 名（学内 22 名（教職員 19 名、学生 3 名）、学外 22 名（教職員 22 名））

概 要：

16：10～16：15 開会挨拶・趣旨説明

福田 隆真 山口大学 理事・副学長（教育学生担当）

16：15～16：55《模擬授業 Part1》

「学生同士の評価を通して達成度を向上する授業づくり

～アクティブ・ラーニング型授業『山口と世界』の実践を通して～

辻 多聞 山口大学 大学教育機構 学生支援センター講師

16：55～17：35《模擬授業 Par2》

「身近な話題から『深い学び』に誘うアクティブ・ラーニング

～日本語教育やアカデミックライティングの実践を通して～

仁平 千香子 山口大学 国際総合科学部助教

17：35～17：55 質疑応答・対話

17：55～18：00 クロージング・閉会挨拶

[総合進行：山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透]

山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)
**アクティブ・ラーニング(AL)ベストティーチャー表彰記念
 FD・SDワークショップ
 ～第2回ALベストティーチャーによる模擬授業～**

【趣 旨】
 山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)は、事業5年目を迎え、共通教育・専門教育を通じたアクティブ・ラーニング型授業が確実に広がっております。しかし、一方において、大学教育の現場では、「アクティブ・ラーニングを通して、学生の深い学びに結びついているのか」といった疑問や「自分の授業をアクティブ・ラーニング型授業として認識していない」といった実態が依然として見受けられます。
 本学では、アクティブ・ラーニング型授業の優れた取組を讃える「アクティブ・ラーニング(AL)ベストティーチャー表彰制度」を2016年度に創設し、2017年度に第2回の受賞者(5科目・14名)を表彰しました。今回のワークショップでは、第2回ALベストティーチャー受賞者による模擬授業を体感し、改めて、「アクティブ・ラーニングとは何か」、「アクティブ・ラーニングを通じた学生の学び・成長」について考えてみたいと思います。

【申込方法・問合せ先】
 件名「FD・SDワークショップ申込」とし、「①氏名、②所属・職名(学年)、③E-mail」を記入の上、E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp(担当:YU-AP推進室)宛てに、10月19日(金)までご返信願います。なお、定員に達し次第、申込を締め切らせていただきます。

山口大学 大学教育機構 大学教育センター(YU-AP推進室)
 E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp

日時: 2018年10月22日(月)
 16:10～18:00

場所: 山口大学吉田キャンパス
 共通教育棟16番教室
 (アクティブ・ラーニング教室)

対象: 学内外の教職員
 (定員 30名)

Active Learning

【概要】
 16:10～16:15 開会挨拶・趣旨説明
 16:15～16:55《模擬授業 Part1》
 「学生同士の評価を通して達成度を向上する授業づくり
 ～アクティブ・ラーニング型授業『山口と世界』の実践を通して～」
 辻 多聞 山口大学 大学教育機構 学生支援センター講師
 (※振り返りを含む)

16:55～17:35《模擬授業 Par2》
 「身近な話題から『深い学び』に誘うアクティブ・ラーニング
 ～日本語教育やアカデミックライティングの実践を通して～」
 仁平 千香子 山口大学 国際総合科学部助教
 (※振り返りを含む)

17:35～17:55 質疑応答・対話
 17:55～18:00 クロージング・閉会挨拶

アクティブ・ラーニング(AL)ベストティーチャー表彰とは、山口大学の共通教育におけるアクティブ・ラーニング(AL)実践に顕著な成果をあげた教員について、その功績を表彰するとともに広く周知し、併せて本学教員の意欲向上とALの推進に資することを目的としています。さらに、ALによる教育効果の共通理解やAL授業実践のグッド・プラクティスを共有できる機会(FD・SDワークショップ)や事例集(Teaching & Learning Catalog)を提供することで、学内におけるAL実践の向上に資することが期待されています。

内 容：

平成 30 年 10 月 22 日（月）に、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）『アクティブ・ラーニング（AL）ベストティーチャー表彰記念 FD・SD ワークショップ～第 2 回 AL ベストティーチャーによる模擬授業～』は、学内外から大学関係者だけでなく、高等学校・専門学校関係者を多数集め、計 44 名（学内 22 名（教職員 19 名、学生 3 名）、学外 22 名（教職員 22 名））の参加者により、本学吉田キャンパス共通教育棟 16 番教室（アクティブ・ラーニング教室）にて開催された。本ワークショップは山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の一環として実施された。この模擬授業型ワークショップは昨年度初めて開催し好評であったことを受けて、今年度引き続き開催した。

冒頭、福田 隆眞 山口大学 理事・副学長（教育学生担当）より開会挨拶があり、本学では、アクティブ・ラーニング型授業の優れた取組を表彰する「アクティブ・ラーニング（AL）ベストティーチャー表彰制度」を平成 28 年度に創設し、平成 29 年度に第 2 回の受賞者（5 科目・14 名）を表彰し、今回のワークショップでは、第 2 回 AL ベストティーチャー受賞者による模擬授業を体感し、改めて、「アクティブ・ラーニングとは何か」、「アクティブ・ラーニングを通じた学生の学び・成長」について考えてみたいとの趣旨説明があった。



まず、模擬授業 Part1 では、辻 多聞 山口大学 大学教育機構 学生支援センター講師より、「学生同士の評価を通して達成度を向上する授業づくり ～アクティブ・ラーニング型授業『山口と世界』の実践を通して～」と題し、アクティブ・ラーニング型授業『山口と世界』の模擬授業を行っていただいた。具体的には、授業の初回で行っている自己紹介の模擬体験を通してグループ形成の要点を解説した後、大学の授業として必要な知識を教授しながら、学生によるグループ活動の内容が深まるように指導していることが説明された。最後に、配布資料に従い、グループ活動を通じた学生による自己評価、グループメンバーによる他者評価、さらには、担当教員による提言・コメントなどをきめ細かくフィードバックしながら、授業の達成度を向上する仕掛けについて説明があった。



次に、模擬授業 Part2 では、仁平 千香子 山口大学 国際総合科学部 助教より、「身近な話題から『深い学び』に誘うアクティブ・ラーニング ～日本語教育やアカデミックライティングの実践を通して～」と題し、アクティブ・ラーニング型授業『日本語IVB（読解・作文）』での演習内容の模擬授業を行っていただいた。冒頭、全体の授業のねらいや授業構成の意図について説明があった後、映写されたイラストを表現するアイスブレイクを経て、例題の文章を受講生に読ませて、作文課題につなげる授業パターンについて説明があった。

さらに、『日本語Ⅲ（文法）』の授業内容も併せて紹介され、日本語の文章のルール探しを演習形式で行い、単に間違いを探すだけでなく、どうして間違っているのかを問いかけ、学生の主体性を引き出す重要性を説明された。小気味のよい仁平先生の語り口や演習課題を通して参加者同士が楽しみながらワークする中で、教室全体が活気ある雰囲気に包まれていった。各グループを巡回する中で、参加者からの質疑応答に教員が即座に答える自然な雰囲気が生まれていた。



後半の質疑応答・対話のセッションでは、林 透 山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授のファシリテーションにより、参加者に事前配布したダイアログシートに模擬授業を受講して感じた気づきや疑問点を記入していただいた後、グループごとに、短時間の意見交換を行った。その後、全体の質疑応答に展開し、「学生のレベルによっては主体性をうまく引き出すことが難しい場合があるのではないか」、「自己評価・他者評価を行う場合にどうしても評点が甘くなるのではないか」



「評価シートの運用における効率化ができないか」といった質問があり、各参加者が日々のアクティブ・ラーニング型授業での実践や学修評価の参考にすべく、実際に役立つ意見交換が行われた。実践に役立てたい、実践での課題解消に結び付けたいという参加者からの真剣な思いが伝わってくるセッションとなった。

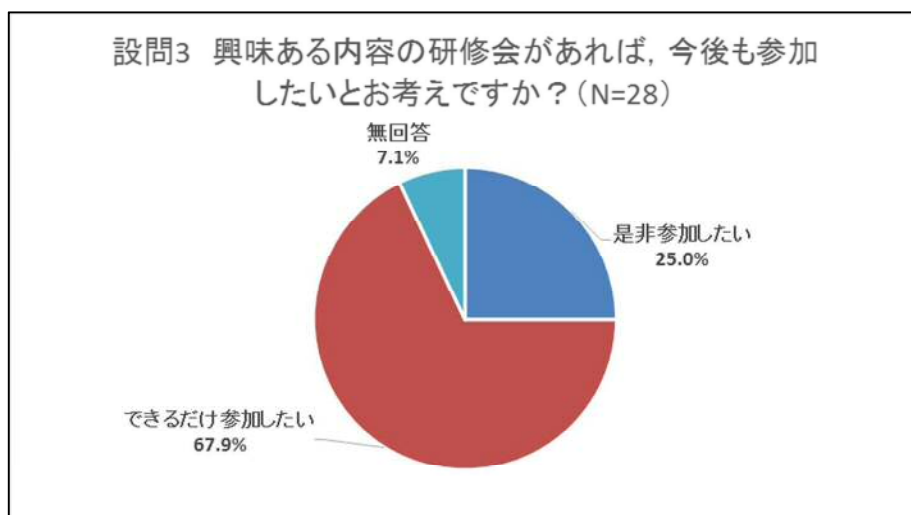
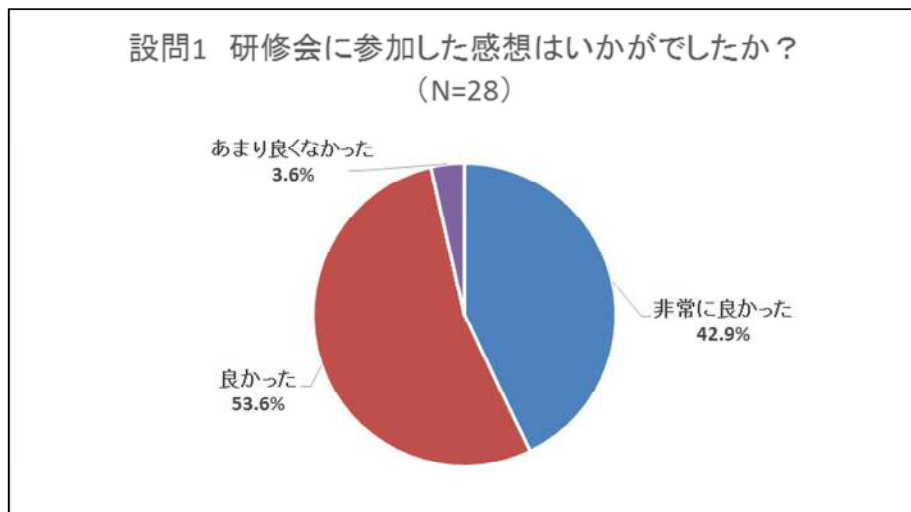
まとめ：

山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）では、従来、アクティブ・ラーニング型授業に関する事例紹介を行ってきたが、事例紹介だけでは伝えられないコツや秘訣を伝える機会を提供したいという思いで、昨年度から模擬授業型 FD・SD ワークショップに取り組んでいる。AL 型授業実践集及びアクティブ・ラーナー記録集である『Teaching & Learning Catalog』作成取材において、AL ベストティーチャーの先生方からお聞きした授業実践の話のインパクトは大きく、その素晴らしく、きめ細かい授業実践を、より多くの教職員の方々に体感していただき、大学全体の共有の財産としたいという思いで、今回の FD・SD ワークショップが行われた。

今回の FD・SD ワークショップでも、昨年度に引き続き、模擬授業を通して、実際の授業設計や学修評価のコツを学びたいという大学教員だけでなく、高校教員や専門学校教員の



参加が見られ、当初の定員を大きく上回る参加者となった。参加者アンケートからも非常に好評であったこと（下表参照）が分かり、来年度以降も、AL ベストティーチャーによる模擬授業型 FD・SD ワークショップを継続的に実施していく予定である。



(8) 2018 著作権法改正と教育機関対応の方向性

日程 平成 30 年 10 月 24 日(水)
 [吉田地区] 13:30~14:15
 場所 農学部・共同獣医学部大会議室
 (吉田キャンパス)
 講師 木村 友久
 (知的財産センター 教授)
 参加者 32 名(アンケート 17 枚回収)



内容

本研修会では、大幅な改正が行われた著作権法 35 条について解説が行われた。また、今回の法改正に伴い、大学入試の 2 次試験問題の公開にどのように対応する必要があるかについて説明が行われた。

昨年度の研修内容を復習すると、著作物が生み出されると、その著作物に対して著作権者人格権と著作財産権が生じる。その著作物の実演、レコードや CD 等への固定については著作隣接権が発生する。また、著作権者が複製権を他者に許諾した場合は、その者（出版社等）には出版権が与えられる。その一方で、著作権には、権利保有者に対する制限（以下、権利制限）も設けられている。その代表例のひとつとして、授業の過程における複製があげられるが、これはかなり強力な権利制限といえる（著作権法 35 条）。

今回の著作権の改正では、全体的に社会の実情に沿った改正が行われたと考えている。権利制限規定については 3 つの層が設けられ、従来法よりも著作物の柔軟な運用ができるようになった¹。例えば、サーバでは障害発生時に備えて、データバックアップとして RAID を用いるが、RAID ではひとつの HDD の内容を他の HDD に自動的にコピーする仕組みがある²。これは、従来法の原則では違法複製となるため、RAID に絞った権利制限の条文を規定していた。今回の改正では、RAID に限らず、人間の感覚として著作物の享受ではない利用を包括的に合法とする条文が設けられた（第 1 層に対応）。また、セキュリティの確保を目的にソフトウェアを解析する場合、改正前は解析が権利侵害になる可能性があったが、このような場合はおしなべて合法であるという法改正が行われた（第 1 層に対応）。学生が論文を盗用していないかを調べるソフトウェアについては、学生が執筆した論文との比較が目的であるが、本著作者の許諾を得ずに論文を収集し、比較結果の提示のために他人の著作物を表示するため権利侵害の懸念を持たれると思う。だが、これについても、本来のサービス提供に付随する軽微な範囲での利用との解釈で合法の範疇にある（第 2 層に対応）。また、障がい者に関する権利制限では、改正前の本法においても、視覚障がい者の読書については、本の内容を聴覚で享受できるように、音声としての録音を認める条文があった。しかしながら、従来法では、肢体不自由のために自ら本を手にとって読めない障がい者は、このような聴覚による著作物の享受は認められなかった。このたびの法改正では、視覚障がい者でなくとも、このような肢

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	5	29.4%
良かった	11	64.7%
どちらとも言えない	1	5.9%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	17	100.0%

¹ 権利制限規定に関する 3 つの層には、「権利者の利益を通常害さないと評価できる行為類型」（第 1 層）、「権利者に及び得る不利益が軽微な行為類型」（第 2 層）、「著作物の市場と衝突する場合があるが、公益的政策実現等のために著作物の利用の促進が期待される行為類型」（第 3 層）が設けられている。

² RAID は Redundant Arrays of Inexpensive Disks の略。

体不自由の障がい者についても合法となった（第3層に対応）。

一方、学校教育に関しては、改正後の35条では異時送信を中心として、権利制限の範囲が限定されることになった。

現行法の35条においても、権利制限の対象は授業を担当する者（教員）とそれを受ける者（学生、生徒）であるため、授業の過程では他人の著作物を用いることができる³。また、スライドなどを授業中に上映する場合は、従来の紙ベースの複製の延長と解釈できるので、これについても合法と判断される。また、キャンパス間を通信回線で結び、ひとつの教室で実施される授業をリアルタイムに中継する場合（以下、同時送信）も権利制限の対象に含まれる。

これに対して、反転授業等のために、授業のビデオ映像や配布資料等（許諾を得てない他人の著作物を含む）をデータ化してサーバ上に蓄積し、授業時間外に学生に利用させる場合（以下、異時送信）は、従来法ではグレーゾーンであったが、改正法では権利制限の対象外となる。この条文の発効は、5月22日の公布より3年以内に施行される。教育機関においても、他者の著作物が含まれるコンテンツについて異時送信を行う場合は、権利処理が求められることになる。権利処理については、コンテンツごとに手続きを行うこともできるが、今後設立される権利者団体を通じて包括的な補償金を支払う方が現実的であると考えられる^{4,5}。

文部科学省は大学に対して2次試験の問題を年度内に行うように求めている。入試問題についても、他者の著作物が含まれる場合には、公開に際して権利処理を行う必要がある。文部科学省によると、著作権処理が追いつかない場合には、一部黒塗りで公開することもやむを得ないとの見解を示しているが、それでは本来の問題公表の目的が満たされない恐れがある。従って、問題の著作権処理を想定した上で入試業務の運営を行う方が無難であると考えられる。入試業務の著作権処理についても、十分な検討が必要であるとの解説があった。

講演後には以下の質疑応答があった（Aは研修実施時点（改正法施行前）での回答となっている）。

Q1 補償金の支払いによって利用できる著作物は、海外の著作も含まれるか。例えばオンラインジャーナルの中にあるような著作物も使用できるか。また、Web上のみで公開されている図などのうち、取り扱いに言及されていないものはどのように取り扱うべきか。

A1 海外の著作物も補償金の範疇に含まれる。ただし、但し書きにもあるように、大学の授業だけで需要があるような教科書を無断でコピーして、学内限定であってもネットワーク上で閲覧させることはできない。また、Web上の取り扱いに言及がないコンテンツについては、基本的にそのコンテンツが掲載された正規のWebサイト上で閲覧する場合に限って利用できると解釈しなければならない。

Q2 パワーポイント資料をプリント（紙に印刷）して学生に配るのはだめか。後からプリントを求める学生がいた場合はどうなるのか。

A2 プリントは公衆送信とは異なり、複製である。複製権は、授業の過程であれば権利制限の範疇である。一方、そのプリントの内容を電子化して、配布する行為は異時送信に該当する。

³ ただし、副教材であるような場合は、複製は認められない（市販の本を丸ごと複製することはできない）。

⁴ 補償金額は、権利団体との初期の交渉では学生一人当たり1,000円であったが、現実的には300~500円程度になる可能性がある。補償金の支払い方法としては、大学全体としての支払い、または各部局ごとの支払いが考えられるが、本学の規模では前者の方が現実的と思われる。

⁵ サーバを用いた教材の配布を行う際には、第三者の閲覧を防止するために、認証を設ける必要がある。

Q3 Web テキストという形で、授業のテキストを Web 上に載せて、受講する学生は認証を経てそれをダウンロードできるようにする場合はどうか。

A3 もし、テキストが大学独自のテキストではない場合、例えば一般の本である場合を考えると、同時ではない状態で教材を配信しているので、違法である。そのため、原則通りの権利処理が必要である。

Q4 保証金の支払いを学部単位で行う場合に、授業の内容の差によって学部ごとに保証金額が変わるか。

A4 まだ権利者団体の座組が決まっていないのではっきりしたことはわからないが、学部別に保証金を支払うような場合には、学部間で保証金額の調整が必要になるであろう。本学の規模を考えると、学部単位での保証金負担を検討するよりも、大学としての包括的な保証金契約の方が現実的だと考える。

Q5 授業の範囲はどのように考えればよいか。オープンキャンパスの模擬授業は授業と解釈されるのか。

A5 オープンキャンパスの模擬授業については、権利者団体は授業ではないと主張すると考えられる。従って模擬授業では、受講者に配布する資料を限定するなど、講義内容が後に残らないようにする方が良い。またその場では、講義内容をネットワーク上に掲載するなど、その講義外で用いることを禁止することを明示しておくべきである。これによって、受講者が講義内容を無断でアップロードするなどの問題が生じた場合も、あくまでも受講者が行ったこととして、講師の責任回避が可能である。

Q6 授業で利用するために、Moodle に本来は有料のデータをアップロードしてある。そのデータを作成した会社には、授業において無料で利用して良いとの許可を得ている。学生に対しては、授業以外の目的でそのデータを持ち出して利用してはならないことを明示しているが、もし学生がその情報を持ち出し、授業外で無断利用した場合、教員の責任が問われるのか。

A6 学生に授業外利用を禁じることを説明したかがポイントとなるので、授業開始前に学生に対して紙文書で目的外利用をしないように注意を与えることが重要である。また、文書には、必ず日付を入れること。特に機微な情報を扱わせる場合には、学生からデータ利用の制限についての同意書（署名付き）を得ておくことも有効である。

Q7 授業で配布可能なプリントを、後で参照させてレポートを作成させるために、ネット上に置いて利用させるのは違法か。

A7 厳密にいうと違法である。

Q8 本が売れなくなることが問題だという話であったが、その本が絶版である場合はどうすべきか。

A8 絶版になっている場合、訴えを起こす者がいるかどうかによる。ただ、これはフェアユースの視点から反論できるかどうかの問題であるから、それが果たしてコンプライアンスの側面から見て適切かどうかについては別の話である。従って、一概に判断することは出来ない。

Q9 不安がある場合は、プリントして紙ベースで配るのが良いか。

A9 そう考える。保証金を払う場合は、授業での利用に限られるが、プリントであればこのような場合にも対応できる。

Q10 時間の経過とともに、著作物の価格が吊り上げられてゆく傾向がある。このような状況で、

学生にとって異時公衆送信をすることに本当に意味があるのかということも考えるべきではないか。

A10 これまでの著作権の権利制限を振り返ると、旧著作権法では大学における複製はすべて認められていなかった。旧法の権利制限は普通教育の国語だけに限定されていた。それが昭和 44 年の改正で、大学を含めて権利制限が大幅に拡大したため、権利者団体が慌てた経緯がある。その後、権利者団体は継続的に権利制限の縮小を訴えてきた。他国の法律では補償金を支払うことを定め、その代わりに著作物利用の許諾を与えている。補償金の支払いを行っている国では、国が補償金としての予算を用意するケースが一般的であるが、今回の法改正では予算の手当なしに大学に補償金を求めているところは、異例かもしれない。著作物の高騰については、補償金について主導権をもっている組織には価格を抑えたいとの意思があるので、それほど極端な高騰を招く可能性は低いと思われる。

研修会後のアンケートには、「状況を知ることができた」、「法的なものはこれからどんどんやるべき」、「問題がよくわかった」、「法律改正にともなう教員の対応方法等」、「大変勉強になりました」との回答があった。また、今後希望する研修会については、「今回のように講義の実施に直接かかわってくるようなもの」、「特にはありませんが、知識が広がるものでしたら良いと思います」、「法を無知であるは済まされない時代だから」、「著作権」、「本日と同等の内容」、「知的財産」との回答があった。

山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP) FD・SD ワークショップ

『学生の学びを促す学修ポートフォリオとは

～今、改めて学修成果の可視化について考える～』

日 時：平成 30 年 11 月 22 日（木）16:20～18:00

場 所：山口大学共通教育棟 15 番教室（アクティブ・ラーニング教室）

参加者：37 名（学内 13 名（教職員 11 名、学生 2 名）、学外 24 名（教職員 24 名））

概 要：

16：20～16：25 開会挨拶・趣旨説明

菊政 勲 山口大学 大学教育機構 大学教育センター長

16：25～17：35《事例紹介 & 話題提供》

「ディプロマ・ポリシー達成度の可視化と学修ポートフォリオの活用」

江本 理恵 岩手大学 教育推進機構 准教授

「学修ポートフォリオを通じた学生の振り返りの意義と効果」

鷹岡 亮 山口大学 教育学部附属教育実践総合センター 教授

17：35～17：55 質疑応答・全体共有


17：55～18：00 クロージング・閉会挨拶

[総合進行：山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透]

山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)
FD・SDワークショップ

学生の学びを促す学修ポートフォリオとは ～今、改めて学修成果の可視化について考える～

【趣 旨】
山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)では、アクティブ・ラーニングの組織的推進とともに、汎用的能力に関する学修成果の可視化に取り組んでいます。また、近年、3つのポリシーの公表義務化や内部質保証の厳格化に伴い、学位プログラムにおけるディプロマ・ポリシーの達成度を測定・可視化する取組が各大学において進められています。
これらの学修成果の可視化を通して、学生は自分自身の学びを振り返り、次なる学びに繋げて行くため、学修ポートフォリオの重要性が一層増えています。しかし、一方において、学修ポートフォリオの組織的な運用において、幾つかの課題を抱えているのが現状ではないでしょうか。
今回のワークショップでは、学生の学びを促す学修ポートフォリオの活用方策に焦点を当て、実際の実践事例を紹介しながら、学修ポートフォリオの意義と価値を改めて考えてみたいと思います。



日時：	2018年11月22日(木) 16:20～18:00
場所：	山口大学吉田キャンパス 共通教育棟1階・15番教室 (アクティブ・ラーニング教室)
対象：	学内外の教職員 (定員 40名)

【申込方法:問合せ先】
件名「FD・SDワークショップ申込」とし、「①氏名、②所属・職名(学年)、③E-mail」を記入の上、
E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp(担当:YU-AP推進室)宛にて、11月20日(火)までご返信願います。なお、定員に達し次第、申込を締め切らせていただきます。

山口大学 大学教育機構 大学教育センター (YU-AP推進室)
E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp

Portfolio



【概 要】

16:20～16:25 開会挨拶・趣旨説明

16:25～17:35《事例紹介 & 話題提供》

「ディプロマ・ポリシー達成度の可視化と学修ポートフォリオの活用」
江本 理恵 岩手大学 教育推進機構 准教授

「学修ポートフォリオを通じた学生の振り返りの意義と効果」
鷹岡 亮 山口大学 教育学部附属教育実践総合センター 教授

17:35～17:55 質疑応答・全体共有

17:55～18:00 クロージング・閉会挨拶

【学修ポートフォリオとは・・・学生が、学修過程ならびに各種の学修成果（例えば、学修目標・学修計画表とチェックシート、課題達成のために収集した資料や進捗状況、レポート、成績単位取得率など）を長期にわたって収集し、記録したもの、それらを必要に応じて系統的に選択し、学修過程を含めて到達度を評価し、次に取り組むべき課題をみつめてステップアップを図るという学生自身の自己省察を可能とすることにより、自立的な学修をより深化させることを目的とします。従来の到達度評価では測定できない個人能力の質的評価を行うことが意図されているとともに、教員や大学が、組織としての教育の成果を評価する場合にも利用されます(文科省2012)。



内 容：

平成30年11月22日（木）に、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）FD・SDワークショップ『学生の学びを促す学修ポートフォリオとは ～今、改めて学修成果の可視化について考える～』が、学内外から大学関係者だけでなく、高等学校関係者を多数集め、計37名（学内13名（教職員11名、学生2名）、学外24名（教職員24名））の参加者により、本学吉田キャンパス共通教育棟15番教室（アクティブ・ラーニング教室）にて開催された。本ワークショップは、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の一環として実施された。

冒頭、菊政 勲 山口大学 大学教育機構 大学教育センター長より開会挨拶があり、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）では、汎用的能力に関する学修成果の可視化に取り組むとともに、3つのポリシーの公表義務化や内部質保証の厳格化に伴い、学位プログラムにおけるディプロマ・ポリシーの達成度を測定・可視化の取組を進めている。これらの学修成果の可視化を通して、学生は自分自身の学びを振り返り、次なる学びに繋げて行くため、学修ポートフォリオの重要性が一層増しているが、学修ポートフォリオの組織的な運用において、幾つかの課題を抱えており、先進事例紹介等を通して、学修ポートフォリオの意義や価値について改めて考えてみたいとの趣旨説明があった。

まず、江本 理恵 岩手大学教育推進機構准教授より、「ディプロマ・ポリシー達成度の可視化と学修ポートフォリオの活用」と題して、岩手大学での先進事例について紹介があった。岩手大学では、教育の内部質保証システムの構築・充実を図る観点から、「アイフォリオ」と称するポートフォリオシステムを開発し、ディプロマ・ポリシー（DP）達成度の可視化、カリキュラムポリシーに基づくDPに関する自己評価チェックリストの運用のほか、学期ごとに学修状況（授業外の学修時間等）に関する自己評価調査を行う環境を全学的に整備し、運用している状況について説明があった。さらに、このような環境整備のもと、教学データの蓄積を通して、DP達成度状況の経年変化や平成28年度以降のカリキュラム改善前後の学修状況の変容などを分析し、学部でのFD活動に活かしているとの説明があった。



次に、鷹岡 亮 山口大学教育学部附属教育実践総合センター教授より、「学修ポートフォリオを通じた学生の振り返りの意義と効果」と題して話題提供があり、教育学部での授業実



践における省察活動の各種紹介を踏まえながら、省察における動画や写真を参照することの有用性について説明があった。さらに、省察を行う際の視点の提示や省察活動の評価のあり方について説明があった。

後半の質疑応答・対話のセッションでは、林 透 山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授のファシリテーションにより、参加者に事前配布したダイアログシートに模擬授業を受講して感じ

た気づきや疑問点を記入していただいた後、ペアワークの形式で短時間の意見交換を行った。その後、全体の質疑応答に展開し、岩手大学人文社会学部での学修ポートフォリオの運用の具体や学修ポートフォリオに基づく修学指導の主担当・副担当におけるシステム上の設定の仕方、さらには、学修ポートフォリオを有効に活用した省察活動のあり方など、具体的な質問が多数あり、各機関において学修ポートフォリオの開発・運用が喫緊な課題となっていることが窺えた。このほか、学修状況調査のデータ分析に関する詳細を確認する質問もあり、教学データ分析の活用やその説明のあり方など、教学 IR に関して参考となる知見を得ることができた。

今回の FD・SD ワークショップでは、岩手大学 江本先生から多くの情報提供をいただいたことに改めて感謝申し上げたい。ディプロマ・ポリシー達成度の可視化の取組を進める山口大学にとって、大変有意義な機会となった。そして、学修成果の可視化の取組について、学生のため以前に、FD のために有効かつ必要であると力説された江本先生の言葉が印象的であった。

まとめ：

山口大学では、学修到達度調査・学修行動調査の 1 年次・3 年次によるパネル調査実施、DP 達成度を可視化する YU CoB CuS (Yamaguchi University Competency-Based Curricular System) の全学展開など、学修成果の可視化に取り組んでいる。今回、事例紹介いただいた岩手大学の事例は、そのような本学の取組に大きく資するものであり、今後の取組に最大限活かしていきたい。また、教学 IR の取組にも目を見張るものがあった。



さらに、学修成果の可視化の先にある学習者自身の省察活動の大事さについても話題提供を通して多くの示唆を得ることができた。今後の FD 活動において重視していきたい観点である。

今回の FD・SD ワークショップでは、学内教員はもとより、大学リーグ加盟機関の高等教育機関や高等学校からの参加が多く、関心の高さを示す結果となった。参加者アンケートからも非常に好評であったこと（下表参照）が分かり、「他大学の良い事例にふれることができた」「本学でも使える具体的な例を得ることができた」というコメントがあった。今後とも、学修成果可視化をテーマとした FD・SD ワークショップを継続的に実施していく予定である。



(9) 大学マネジメントセミナー2018 in やまぐち 「地方大学の魅力発信と大学間連携 Part2 ～新しい時代における 大学マネジメント～」

日 時：平成 30 年 12 月 17 日（月）14:30～16:30

場 所：吉田キャンパス・大学会館 2 階会議室

参加者：91 名（うち、学内 67 名、学外 24 名）

主 催：大学リーグやまぐち、山口大学

共 催：大学マネジメント研究会、大学行政管理学会中国・四国地区研究会

概 要：

14:30～14:40 開会挨拶・趣旨説明

山口大学長 岡 正朗

14:40～15:15 基調講演（1）

「輝け大学、輝け！大学人」

沖縄科学技術大学院大学副学長（財務担当） 高梨 桂治 氏

（元・福井大学理事・副学長）

15:15～15:50 基調講演（2）

「大学人としての『生きがい』『やりがい』とは」

梅光学院大学副学長（教学担当） 各務 正 氏

（元・順天堂大学・部長）

15:50～16:25 シンク・ペア・シェア（意見交換・全体共有）

16:25～16:30 クロージング & 閉会挨拶

山口大学理事・副学長 田中 和広

[総合司会：山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透]

内 容：

2018 年 12 月 17 日（月）に、大学リーグやまぐち・山口大学主催 大学マネジメントセミナー2018 in やまぐち『地方大学の魅力発信と大学間連携 Part2 ～新しい時代における大学マネジメント～』を、学内外から 91 名の参加者を集め、吉田キャンパスにて開催した。本セミナーは、大学リーグやまぐち、山口大学の共同主催、大学マネジメント研究会、大学行政管理学会中国・四国地区研究会の共催で、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）における教学マネジメント強化のための研修の一環として実施された。

冒頭、岡 正朗 山口大学長より開会挨拶があり、2017 年度から SD（スタッフ・ディベロップメント）の義務化に加え、大学経営における教職協働の重要性が謳われる中で、従来の SD セミナーを大学マネジメントセミナーと改称して開催する趣旨が述べられ、例年同様、所属大学を超えた大学関係者の議論や情報交流に期待が寄せられた。

基調講演では、まず、高梨桂治 沖縄科学技術大学院大学副学長（財務担当）より、「輝け大学、輝け！大学人」と題して講演があった。世界大競争時代である 21 世紀における日本の大学の役割について経済学の視点を交えながら説明があり、これからの時代は新たな価値を創造する人材が必要であり、そのために、大学は新たな価値を創造する「成長エンジン」

製造工場にならないといけないと力説された。さらに、データから見る日本の大学の現状として、大学に投じられている国家予算の少なさや海外との研究資金規模の格差などを紹介しながら、今日の大学が国家や社会から信頼を得られない悪循環を引き起こしており、今後の大学にとっては、如何に学生をもっと知的に鍛えるかが信頼性獲得のカギになると指摘された。大学は従来の「コストセンター」から「バリューセンター」に転換する必要があると指摘された。最後に、これからの大学職員の果たすべき役割と大学職員への期待として、大学教員と切磋琢磨しながら、大学経営や大学教育の本質を見極め、質を高めることに貢献できる人材になってほしいとエールを送られた。国内外の情勢を踏まえながら、大学が、大学職員が何をすべきかを明確に指摘され、参加者にとって示唆に富む講演であった。

次に、各務 正 梅光学院大学副学長（教学担当）より、「大学人としての『生きがい』『やりがい』とは」と題して講演があった。冒頭、『生きがい』『やりがい』というと、個々人の自己満足と表裏一体のところがあり、その点を踏まえながら、自分自身のこれまでの大学人としてのポートフォリオを披露するようにお話したいとの前置きがあった。順天堂大学時代に、医学部教員から医学教育改革をせよとの指令があり、当該学部のミッションづくりをした経験が披露された。この経験を経て、入学定員増や国家試験合格率アップ、さらには大学院教育改革の施策に携わるようになった。授業風景が荒んでいる時代に、そこで学んでいる学生のモチベーションは大学マターなのか、学生個人マターなのかを考えるようになったという話があった。大学人として、それぞれの役割があり、その枠を自覚しながら、一人一人のガバナンスをできることが大切だと力説されました。最後に、“Ability to Inspire Others”という言葉で提示し、如何に人を動かすことができるかが大事であり、その中でアウトカムを生み出す人材になってほしいとエールを送られた。長年のキャリアを踏まえながら、大学人としてあるべき生き方や考え方を参加者に訴えかける講演となった。

後半では、林 透 大学教育センター准教授の全体進行のもと、シンク・ペア・シェアという手法で、講師2名の基調講演について、まずは個人での振り返りを踏まえながら、ペアワークで対話した後、講師との質疑応答を通して全体共有を行った。参加者からは、「知的に鍛えるとは、どのような力を身に付けさせたらよいのか」「これからの時代の研究支援や学生支援のあり方、その際の大学職員の対応の仕方はどのようにあるべきか」「大学職員の理想の姿とはどんなものか」といった質問があった。講師2名からは、大学教育では単位制を担保することがすべて、旧来のフンボルト型の大学観を脱却して新しい価値観でもって大学経営や大学教育に当たることが大切とのコメントがあった。

最後に、田中和広 山口大学理事・副学長より閉会挨拶があり、学内外の大学関係者が交流する素晴らしい機会となり、今後もこのような場づくりを行っていくこととした。



基調講演①（沖縄科学技術大学院大学 高梨氏） 基調講演②（梅光学院大学 各務氏）



シンク・ペア・シェア風景



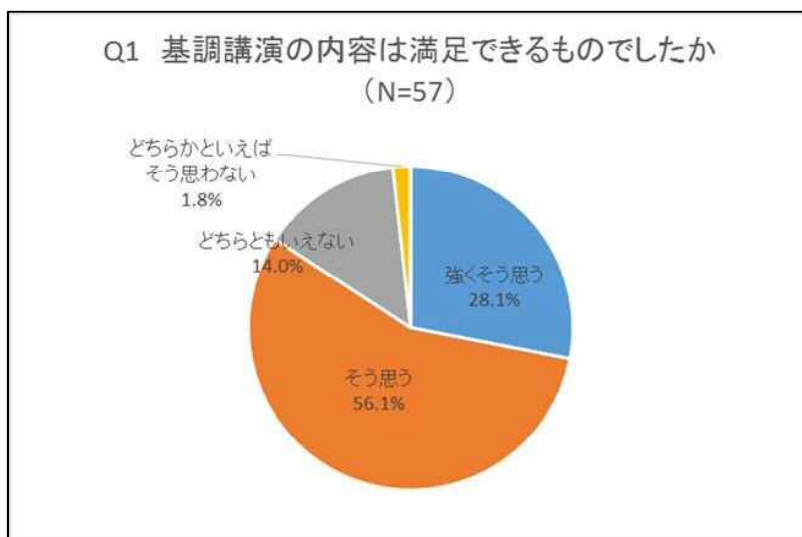
全体集合写真

成果及び今後の方向性：

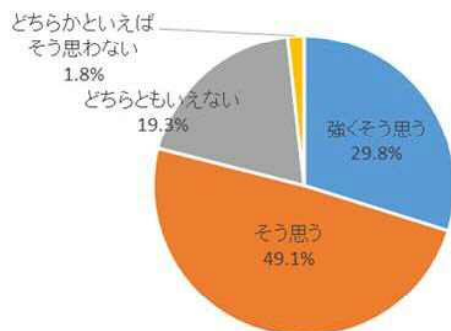
今回の基調講演では、大学マネジメントの経験豊富な講師 2 名を招聘し、大学や大学人の本質、大学における人材育成の意義や価値について、分かりやすく、かつ、説得力あるお話をいただいた。これまでになく、本質論に迫る中味の濃いものとなり、新しい時代の大学マネジメントを考えるにふさわしい内容となった。

参加者アンケートでは、基調講演の満足度が 84.2%（「強くそう思う」「そう思う」）を占め、大学運営に関する新たな思いや気づきを得た参加者が 9 割近く、さらには継続的な開催を望む参加者が同じく 9 割近くを占めた（Q1～Q3 参照）。自由記述において、「若手職員にぜひ参加させたい」という要望が複数あり、若手・中堅職員にもっと参加いただけるように工夫を凝らしていきたい。

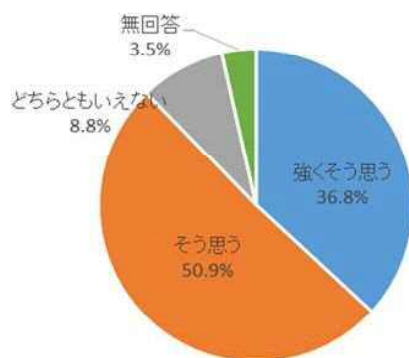
「大学リーグやまぐち」が結成されてから 2 年の月日が経つ中で、山口県内の高等教育機関同士、さらには、県外の高等教育機関の関係者との交流を得ながら、大学マネジメントセミナーの更なる充実を図っていきたい。



Q2 大学運営に関する新たな思いや気づきを得ることができましたか(N=57)



Q3 今後もこのような講演や意見交換の機会を設けるべきだと思いますか(N=57)



(10) 本学学習支援システムの特徴と活用 ～修学支援システム及び Moodle の学習支援機能概要～

日程：平成 30 年 12 月 19 日（水）〔吉田地区〕 15:00～15:30

場所：教育学部 21 番教室

講師：岡田 耕一（大学教育センター講師）

参加者：72 名（アンケート回収 43 名）

【★説明内容】

岡田 大学教育センター講師より、『本学学習支援システムの特徴と活用 ～修学支援システム及び Moodle の学習支援機能概要～』と題し、本学の学習支援システム（LMS：Learning Management System）として運用されている修学支援システム（自己主導型学修総合電子システム（eYUSDL））及び Moodle の機能やメリット・デメリットについて説明があった。



まず、LMS で出来ることの整理があり、「①資料作成・配布等、②課題や演習の出題・回収・講評等、③小テスト・アンケート等、④学習活動の評価・採点等、⑤出欠の管理、⑥メッセージ・メール・掲示板・Wiki・チャット等のコミュニケーション」が挙げられた。その上で、LMS 利用のメリットとして「ペーパーレス化、省力化、双方向性」の 3 点、デメリットとして「LMS 自体の学習コスト、準備負担、周知に時間を要すること、設定ミスやシステムトラブルの可能性」の 4 点が指摘された。その後、修学支援システム（eYUSDL）及び Moodle の動線等について説明があった。

次に、修学支援システム（eYUSDL）の学習支援機能として、講義資料・レポート・小テストなどの機能について作成方法や教員・学生それぞれの画面表示方法などについて説明があった。同様に、Moodle の学習支援機能についても説明があり、Moodle については、コース作成や学生登録などの諸準備の必要性について説明があった。

【★質疑応答・意見交換】

岡田 大学教育センター講師からの説明の後、以下のとおり、幾つかの質疑応答が行われ、学習支援システム活用のニーズと関心の高さが窺われた。

また、アンケートの自由記述からは、システムの個々の機能の説明よりも、実際の活用方法や活用度合を知りたいといったコメントがあった。



Q1 授業に関わらず、学部の学生全体にアンケートをとりたい場合に、修学支援システム (eYUSDL) の機能は活用できるのか。

A1 仮の授業グループ設定をするなどの対応で、可能かと思われる。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	4	9.3%
良かった	18	41.9%
どちらとも言えない	12	27.9%
あまり良くなかった	3	7.0%
良くなかった	4	9.3%
無回答	2	4.7%
合計	43	100.0%

Q2 修学支援システム (eYUSDL) は学外からアクセス可能なのか。

A2 学外からアクセス可能である。出張時の授業準備などにおいて便利である。

(11)2018ラーニング・アドバイザー養成講座

【概要】

大学における学生の「自主的な学び」「積極的な学習行動」の支援について重要性が増しており、授業内外における教員による学習支援に加え、教育支援・学生支援・就職支援・図書館といった部署では、事務職員や学生がその役割の一端を担っている。しかし、近年の学生の多様化に伴い、当該学生への指導助言に苦慮する場面も見受けられる。このため、可能かつ適切な範囲において、柔軟かつ積極的な学習支援ができる人材（「ラーニング・アドバイザー」）が必要となっている。山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）事業の一環として、「学生の学びの好循環」に資することのできるラーニング・アドバイザー養成講座を昨年度（2017年度）より企画実施しており、昨年度の好評を受け、今年度は対象を山口大学及び大学リーグやまぐち加盟機関に広げ、研修内容を改善充実して実施した。

今年度は、2回シリーズとして、山口大学吉田キャンパス共通教育棟 2階会議室を会場に、1月25日（金）に開催された第1回（知識理解編）では17名（職員14名、教員3名）、2月15日（金）に開催された第2回（スキル修得編）では14名（職員10名、教員3名、学生1名）、延べ31名の参加があり、山口県立大学、徳山大学からの参加者があった。また、昨年度を超える13名の受講生が修了要件を満たし、「ラーニング・アドバイザー認定証」を授与された。

第1回（知識理解編）では、千葉大学アカデミックリンクセンター 我妻鉄也 特任助教、同志社大学 学習支援・教育開発センター 浜島幸司 准教授から学習支援の専門職化やラーニングコモンズにおける学習支援の実際や効果について事例紹介をいただき、先進情報を学んだ。後半のグループワークセッション「みんなの学習支援の課題について話し合ってみよう！」では、山口大学 大学教育機構 大学教育センター 林 透 准教授のファシリテーションのもと、4グループに分かれて、学習支援者としての「今」を見つめ、学習支援者としての「未来」を思い描き、学習支援の「今」と「未来」を比較して組織レベル・個人レベルで足りないもの、必要なものをリストアップして模造紙にまとめる（見える化する）ワークを行い、全体共有・発表を行った。学習支援の専門職の必要性や学生の自主性を引き出すようなコミュニケーションの工夫、学習支援に関わる組織間の連携などの共通の課題が浮き彫りとなった。

第2回（スキル修得編）では、同志社大学 学習支援・教育開発センター 浜島幸司 准教授のファシリテーションにより、学習支援のために必要なコミュニケーションスキルとして、「リフレーミング」「オープンクエスチョン」「アサーション」の意義を理解しながら、ペアによるロールプレイングを行って、実践的スキルを体得した。特に、最後の「アサーション」の演習では、受講生全体の前でロールプレイングする機会を設けて、良かった点・改善点を確認し合った。

今回のラーニング・アドバイザー養成講座では、新たにレポート課題を課すことで、受講生個々人が学習支援に対してどのように取り組み、どのような課題を抱えているかを自分自身で振り返るとともに、受講生全員で見直す機会を設けることができたことは大きな収穫であった。また、2回それぞれに行った受講者アンケートにおいても満足度が高く、有意義な機会設定ができたように思われる。今年度の実績を踏まえながら、来年度以降の研修内容を更に充実させていきたい。

記

【対象者】 山口大学及び大学リーグやまぐち加盟機関の事務系職員

(学習支援に関わる教員・学生も参加可) 【各回定員 15 名】

【到達目標】

- (1) 大学における学習支援の重要性について理解し、説明することができる。
- (2) 学習支援者に必要なスキル・態度について修得し、活用することができる。
- (3) 学習支援者としての目標を定め、実践することができる。

【日時・内容】

① 「第 1 回 (知識理解編)」

2019 年 1 月 25 日 (金) 13:30~17:00

13:30~14:00 開会挨拶・趣旨説明・チェックイン

14:00~14:30 「学習支援の専門職化

～千葉大学アカデミックリンクセンターの取組から～

千葉大学アカデミックリンクセンター特任助教 我妻鉄也

14:30~15:00 「学習支援の実際と効果

～同志社大学ラーニングコモنزの取組から～

同志社大学 学習支援・教育開発センター准教授 浜島幸司

(休憩)

15:10~16:40 「みんなの学習支援の課題について話してみよう！」

(※所属機関・部署における学習支援に関する課題抽出)

ファシリテーター：

山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透

コメンテーター：同志社大学 浜島幸司 先生

千葉大学 我妻鉄也 先生

16:40~17:00 クロージングと次回に向けたレポート課題提示

(レポート課題は①自分が携わっている学習支援の取り組み内容、
②学習支援に関する充実方策提案(組織レベルと個人レベル)
で、それぞれ 1,000 字以内でまとめること。)



第 1 回オリエンテーション 山口大学 林



第 1 回事例紹介 千葉大学 我妻先生



第1回事例紹介 同志社大学 浜島先生



第1回グループワーク

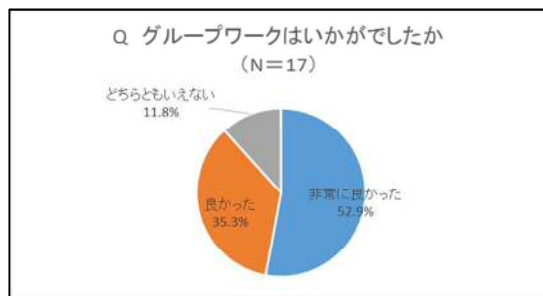
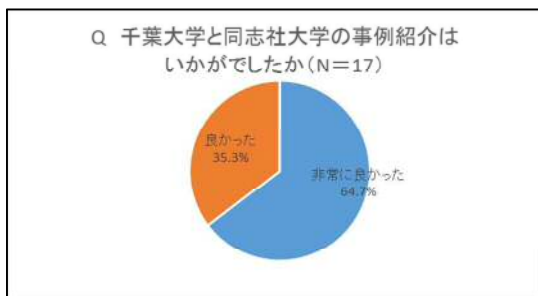


第1回グループ発表



第1回講師を囲んでの集合写真

【第1回受講生アンケート】



グループA

- ◆学生の特性を掴むこと。
- ◆学生の自助努力を促すこと。

★学生と職員のコミュニケーション機会を増やすこと。

★スキルアップの機会

★専門職の必要性

⇒ 人事ローテーションという壁、ノウハウの継承の工夫



グループB

- ◆プロフェッショナルが少ない。
- ◆将来に向けた方針が希薄であること。

★学生には、〇〇だけは頑張ったと言えるようになってほしい。

★専門職が少ない。⇒ 人材育成(予算的制限)

★色々なニーズの有効活用(環境づくり)



グループC

- ◆マナーの徹底
- ◆留学生対応(英語対応等)の充実
- ◆関係部署、学生・教職員の横の連携の必要性

★相談に来れない学生の掘りおこし

★対話からニーズを引き出すこと。

★学生自ら、自分で解決できるように支援

★適切な橋渡しができるようにアンテナを張ること。



グループD

- ◆カリキュラムに沿った学習支援
- ◆ラーニングコモンズを利用する学生が少ないこと。

★初年次ゼミのあり方を見直すこと。

★学生同士の学び合いの機会づくり

★学生から見た職員の信頼性



レポート内容のフィードバック

●学習支援の定義・範囲

「窓口対応・・・ 履修指導・・・ 学習方法の支援・・・ 授業を通した支援」

●学習支援者像

「学生が困っていることを解決することではなく、学生が自分で課題を解決しているように援助すること」
「相談しやすい、信頼して質問ができる存在であること」

●高校生から大学生への環境変化に伴う各種支援

- 場当たり的対応、担当者間でのコミュニケーションや情報共有の不足
- 人事ローテーションによる担当者の経験差による学習支援(学生支援)の「ムラ」
- 学習支援者としての能力の基準がほしい(教育・学習支援の専門性に必要な能力チェック)
- 学生団体主催の勉強会など(学生同士による学び合いほか)

千葉大学 我妻先生からのコメント

皆様ご本務がある中での第1回レポートの作成、大変お疲れ様でございました。所属機関・部署の異なるそれぞれのお立場から執筆されたレポートを興味深く、拝見致しました。

課題①「自分が携わっている学修支援の取り組み内容」につきましては、今回のレポートにて文章化することで、ご自身の学習支援の取り組みの現状を改めて認識する機会になってのではないかと思います。また、学習支援に従事されている方におかれましては、ご自身の業務を振り返る機会になったのではないかと思います。

課題②「学習支援に関する充実方策提案(組織レベルと個人レベル)」につきましては、皆様それぞれの提案をしていただきましたが、全体として、「人事異動や人事制度」「スキルの標準化」「情報共有・連携」が課題であり、今後の改善方策であるとの印象を受けました。「人事異動」については、大学職員の専門職化が確立されていない日本では、避けて通れない問題であるかと思えます。このような人事異動を伴う日本の現状を考慮した場合、大学行政管理学会初代会長の故孫福弘氏(元慶応義塾塾長)が仰っていた、大学職員としてのゼネラリストの視点と他の方よりは抜きん出た専門性(スペシャリティ)を有するプロフェッショナル型アドミニストレーターとして業務に従事し、研鑽に励むのが、最も適したことなのではないかと個人的には思っております。そして、今回の本講義の受講を通じて、皆さんの専門性の部分が学習支援になれば、とても喜ばしいことだと思っております。

皆さんの今後の研鑽と益々のご活躍をお祈り申し上げます。

②「第2回（スキル修得編）」※講師 同志社大学 浜島幸司先生、山口大学 林 透

2019年2月15日（金）13:30～17:00

13:30～14:00 前回の振り返り・アイスブレイキング

14:00～15:30 「学習支援に必要なコミュニケーションスキルを学ぼう！」
 レクチャー及びグループワーク

(休憩)

15:40～16:30 まとめと振り返り・質疑応答

振り返りシート記入、グループ共有、質疑応答

16:30～17:00 チェックアウト・修了式



第2回講師 同志社大学 浜島先生



第2回 アサーショントレーニングの一コマ

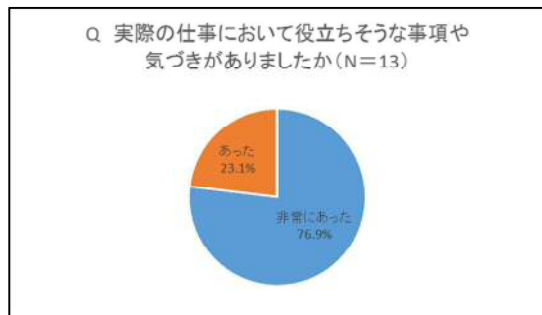
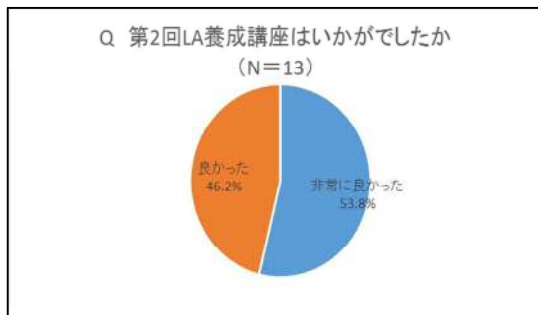


第2回 アサーショントレーニングの一コマ



福田副学長から認定証授与

【第2回受講生アンケート】



(12) 学生の主体的な学びを引き出す授業デザイン～シラバス点検からはじめてみよう！～

日時 平成 31 年 02 月 13 日(水) 15:00～15:40

場所 人文・理学部管理棟 4 階 大会議室

参加者 58 名 (アンケート回収 46 名)

担当者 林 透 (大学教育センター 准教授)

内容

はじめに理学部 FD コーディネーターの宮澤教授より、折しも来年度のシラバス入力時期でもあるので、よりよいシラバスの作成に役立てて欲しいと趣旨説明があり講演に入った。

林教授からは、まず、学生の主体的な学びを引き出す授業デザインに必要なものとしてシラバスが原点にあるだろうということで、シラバスを点検してもらおうワークショップ形式も含めて進めたいとしながら、この話は先生方にとっては当然している、一度は聞いている話だが、来年度のシラバス、授業に向けて準備される時期なので確認の意味で聞いてもらいたいと前置きがあり、米のデータとして、教員の行動のうち学修成果に寄与しているのは、説明の分かり易さも重要だが、トップは先生方の授業の準備と設計が学修成果に結びついており、授業デザインが重要であると説明があった。

全体的な話としては、インストラクションモデルという授業デザインの理論があり、その中で有名なものに ADDIE モデルがあること。その中で授業を設計して行く PDCA サイクルがあり、分析、設計、開発、実施、評価によりインプルーブメントしていくサイクルになっていること。担当される授業を設計する時、そこで学ぶ学習者がどんな学習者か特性、前提知識を入れる必要があること等が挙げられた。その上で教える内容を分析、明確化され設計に入っていくと思う。授業デザインするとき大事な 3 本柱があって、到達目標、授業計画、評価方法決定して、開発、実施して評価していく。これを文章にまとめた物、授業の設計図がシラバスになる。学生と教員の契約書という言い方もされる。授業全体をデザインする文書、写し鏡がシラバスなので、点検しながら毎年シラバスを充実したものにしてほしいと説明があった。

また、シラバスは授業の設計図であり、学生に明示する物でもあるが、もう一つ気を付けないといけないのは、シラバスは学外の目にも晒されている。学部学科のカリキュラム、大学全体としても大学教育のアカウントビリティのエビデンスにもなっている。2011 年に公表することが法令で義務化された。そういう意味でも緊張感をもって作ってもらうことが必要になってくるとも説明があり、まずは入力率が重要という事で、学部別の入力率の紹介等も含めつつ、しっかりと

設問1

研修会に参加した感想はいかがでした？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	4	8.7%
良かった	27	58.7%
どちらとも言えない	6	13.0%
あまり良くなかった	5	10.9%
良くなかった	2	4.3%
無回答	2	4.3%
合計	46	100.0%



したシラバスを作る意義について訴求が行われた。

次に個別的な話として、「初回の授業でシラバスの内容を学生に明示して説明しているか?」「授業計画各回の内容、授業外指示を記入し明示しているか?」という質問と共に、授業計画各回の内容、授業外指示に関して現状の入力率が示された。更に、到達目標の設定の妥当性について、当該授業科目が求められているレベルとの整合性について、専門の科目自体のレベル、学科のカリキュラムの中での位置付けという、専門分野と組織との2段階の観点があること、他学ではDP(Diploma Policy)との関係性をシラバスに記入される例等が紹介され、DPを意識した到達目標の設定についてチェックしてもらいたいと述べられた。また、到達目標の書き方としては、行動目標(Can Do「〇〇できる」)の形式で書くこと、学生を主語として書くこと、目標を記述する際に用いる動詞等の紹介もあり、実際の理学部におけるシラバスについて幾つか例示による紹介もあった。そこではよい例と共に、「…理解する」という記述が多く見られるが、出来る限り認知的表現(観察可能な行動表現)を心掛ける、出席や予習復習は学生がすべき行為なので、授業を通して育成される態度の記載を心掛ける等の注意喚起も行われた。成績評価に関しては、評価ツールとしてルーブリックについての紹介や、修学支援システムにおける観点の示し方等の紹介もあった。その他にも、「シラバスの内容を毎年度、点検・見直しをしていますか?」という質問と共に、セルフチェックのツールとして授業評価や成績分布共有システムの紹介、組織レベルのチェックとしてピアレビューの推奨等も行われた。

最後に、授業角界の項目・内容授業外指示が適切に記入されているか?、到達目標が適切な記述(Can Do)になっているか?、今年度の授業実践を踏まえ、来年度の授業計画の点検・見直しが出来ているか?の3つの観点で、シラバスのセルフチェック、ピアチェックとして5分程度時間を取り、会場からは相談し合う声が聞こえた。

クロージングでは、東京大学FDのページにあるインタラクティブティーチングのMooc教材¹の紹介の後、今後に向けてとして、シラバスが質保証の原点であり、シラバスに基づいて授業をしているか厳格な成績評価がされているかが原点であり大学の教育の質保証はそれに行き着くとしてシラバスの重要性を再度強調すると共に、シラバスの各教員によるチェック、学部・学科単位でのチェックのお願いの他、大教センターとして今回のようなWSの形による継続的なサポート、マニュアル類の充実等についても努力したいとして講演を締めくくられた。

質疑応答

主に以下のようなやり取りがあった。

Q: 態度の観点の書き方はどういう形で書くのが一番良いか?

A: 授業に積極的に参加するというのがまずあり、知識理解と重なるかもしれないが、授業で積極的に発言できるとか、グループ活動では協調しながら授業参加できるという書き方になると思う。次のステップについての学修に取り組むことが出来るとか、始めるという言葉もあるので、そういう形になると思う。くれぐれも出席と予習復習はマストな世界なので、シラバスに書くことではないと思う。もしそう書かれていたらまずそこは訂正されたほうが良いと思う。

¹ <https://www.utokyofd.com/mooc/contents>

Q: 学生からするとシラバスを見たときに重要なのは評価と思うが、我々がシラバスを作成するときはどこを一番重要視すればよいか？

A: 他の学部でこの話をした時に言われたのは、学生はシラバスを見ないんじゃないかという話があったが、それはおかしくて、先生方がこの授業が何を狙いにしているか話しかけることが重要。学生が一番見るのは成績評価で、それも大事だが、その成績評価の前にこれ(授業デザイン)がある。これは説明する必要があるし、この授業はこういう狙いがあると常に語り掛ける。各回も今日は何をしているか。そうしないと、自立した学習者は多分自分で理解するが、今日は何を学んだかな？で終わっては右から左にsなる。逆に先生方には良いシラバス作ってもらって、学生自身にもチェックしてもらって、そこに注意行くように授業の目標を語り掛ける必要がある。その上での成績評価をしっかりしていく必要があるが目標が大切。

アンケート

以下のような内容が見られた。

感想

- シラバスを授業設計に使用しようと思いました。
- 学問の性質に配慮なく、一般化した話だった。一般的なシラバスに、理学をどう納めていくのか聞きたかった。
- 項目以外にも「内容」と「授業外指示」等の入力は重要と感じた。
- 「学生の主体的な学びを引き出す授業」とはシラバスが詳しい授業ですか？聞く価値のある話は全くなかった。
- 単位シラバスの書き方にすぎなかった。
- タイミングが良かった。
- とても参考になりました。ありがとうございました。
- シラバスをどう書くべきか参考になった。
- 授業デザインについて知りたかった。
- オンラインコンテンツの紹介がよかった。
- 今回と同様のもの。
- (試験問題作成等のための)正しい日本語表現。
- どんな内容でも、出来る限り参加します。
- 卒論を書こうとしない学生、セミナーをいい加減にする学生への対応方法について(今年度は3名もいて、とてもしんどかった)
- 上から目線ではなく同業者として工夫や提案などを含む業務工場に直結するもの。
- シラバスの良い例、悪い例を具体的に提示してほしいです。
- 研究室での学生指導方法について。
- 発達障害学生の指導。学習意欲低下学生の指導。
- システム等が新しくなった場合、そのシステムの使用方法等に関する研修。
- 参考になれば参加したい。
- 授業スキル。

希望の研修内容

- ビアレビューや教員相互のシラバスチェック法
- 目からウロコの落ちるように理解させることの可能な教え方。
- 指導に問題ある学生への対応方について。
- 参加したくない理由
- 今日のようにプリント読めばわかるような研修会は意義が小さいように思う。常識的な内容は不要であり、もっと具体的にアドバイスするなどしてほしい。

- もう少し具体的に。ためにならない。

実施時期

- 今回のテーマについてはベストであった。別のテーマであれば、夏季休業期間等。
- 講義が終わっているので参加しやすい。
- 今回、卒論や成績つけなどで最も多忙な時

期だった。このような時期はさけてほしい。

- 2月中は多忙過ぎる。今日はなされたことを反映する時間がとれない。

実施場所

- 学内なので助かります。
- スライドが見にくい。

以上



(13) 障害のある学生への授業中支援～支援事例の紹介～

日程：平成 31 年 3 月 1 日（金）〔吉田地区〕 14:30～15:10

場所：人文学部理学部管理棟 4 階大会議室

講師：学生特別支援室：岡田菜穂子准教授、田中亜矢巳カウンセラー

参加者：42 名（アンケート回収 23 名）

学生特別支援室（以下、SSR）の岡田菜穂子准教授（コーディネータ）から、本研修のメインテーマである障害のある学生への授業中支援について、配慮願の流れと配慮願の中で授業中にどのような配慮をお願いするケースが多いのかを情報提供しながら研修会が進められた。

研修会は 2 部構成になっており、第 1 部では、SSR を中心とした障害学生の修学支援のしくみ（支援体制）およびその中での SSR の役割について岡田准教授から説明があった。この中で強調されていたのは、学部は教育（授業）を学生に提供するので、学部と授業担当の先生方が一体となった支援を実施する必要があり、SSR はそのサポートを行うという役割分担を理解する必要があることであった。また、配慮願送付の流れでは、障害学生本人と SSR が協力して配慮願の原案を作成し、学部の障害学生連絡会の学部の連絡員（教員・職員）にその内容を確認していただいた後に、学部の連絡員（職員）から授業担当者に配慮願が配布されるという配慮願の一連の流れの説明があった。人文学部の先生方は、この流れは概ね理解されているようだった。

設問1	研修会に参加した感想はいかがでしたか？	
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	3	13.0%
良かった	20	87.0%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	23	100.0%

第 2 部では田中カウンセラーから、実際に利用されている配慮願の内容を事例に、どのような支援を先生方に依頼しているのか説明が行われた。最近ではコミュニケーションに関する支援のニーズが多く、プレゼンやグループワーク等での授業中の発言についての配慮をお願いするケースが多いそうだ。

情報保障や注意事項の文書伝達、座席の指定などの効果的な支援方法についても説明があった。さらに、途中退席の可能性のあることや発作の時の対応などについて、項目立てをして、どのような症状がどのような障害に該当する可能性があり、その際に配慮願の中でどのような支援を先生方をお願いしているのか、具体的な説明があった。

講師の説明の後、会場の参加者から以下のような意見や要望があった。

最近、日本語の字が判別できないものや、英語のスペルが不明瞭で判断しにくいケースが増えている。大学に多様な学生が入学しているということを実感している。支援を行っていかねばならないケースが増加しているように感じる。

また、他の教員からは、コミュニケーションが難しい学生・不安の強い学生に対して卒論を書かせることが指導教員としていかに至難なことであるのか、理解を求める意見があった。論文の書き方を丁寧に説明しても、卒業論文が書けない学生に対して「なぜ書けないのか」と問いかけると、学生は精神的なショックから、それ以降、来れなくなってしまうケースもあり、指導教員自身も疲弊してしまう。このような学生が増えてきた時に、大学はどこ

まで面倒をみたらよいのか、どこまで受け入れるのか等について、大学全体としてもう一度、よく考えた方がよいのではないかという意見があった。

SSR に対する要望としては、これまでに支援のノウハウが蓄積されてきていると思うので、ぜひ、共有できるような機会を提供して欲しいという要望があった。同じようなパターンに他の先生方がどのように対応しているのかを知りたい。これに対して、SSR としては、支援ノウハウも確かに蓄積されてきているので、これからは個人情報保護に留意しながら、ノウハウを公開する方向で検討していきたいという回答があった。

これ以外に、周りの先生や学生が困っているのに、本人がその自覚がないケースの場合、どのように教員や周りの学生は対応したらよいのかといった質問があった。これに対して、SSR としては困った方が、まず SSR に相談に来てほしいという回答であった。

研修会後のアンケート結果では、非常に良かった (13.0%)、良かった (87.0%) と大変好評だった。自由記述の意見としては、「ここ数年、該当する学生を指導してきたので、大変実感のある研修内容だった」、「本件に関する蓄積の一端を知ることができ、貴重な機会だった。息の長い取り組みが必要と感じた」、「問題の深刻さが理解できた」、「障害のある学生の支援の在り方について知ることができた」、「グリーゼーンの学生の扱いが難しい」などの意見があったが、今回のような研修会を今後も行って欲しいという好意的な意見が多かった。

今回の研修会を通して、SSR と学部との役割分担を再確認できたことはよかった。また、さまざまな修学上の困難を抱える学生が増えている現実と、その対応に苦慮する先生方の状況を改めて再認識することができた。大学として、いかに組織的にこれらに対応したらよいのか、今後も解決しなければならない障害学生の支援を巡る課題は多いと感じた。

(14) 大学生の就職活動・企業の採用活動の最新事情

日時 平成 31 年 3 月 4 日(月) 14:20~15:00
場所 工学部 D11 講義室
講師 平尾元彦 (山口大学学生支援センター教授)
参加者 34 名 (アンケート回収 23 名)



内容

はじめに工学部 FD コーディネーターの新苗教授より山口大学学生支援センター平尾元彦先生の紹介があった。その後平尾元彦教授の自己紹介があり、その後講演内容に入った。

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	6	26.1%
良かった	14	60.9%
どちらとも言えない	2	8.7%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	1	4.3%
無回答	0	0.0%
合計	23	100.0%

1. 採用活動時期での変更でいま何が起きているか？

2018 年 10 月、経団連が学生の就活ルールとなる「採用選考に関する指針」を廃止したことについての説明があった。この指針は国公立の大学等で構成する就職問題懇談会による申し合わせの基礎となるものであり、大学生に 3 年生までは学業をしっかりともらい、その後最終学年で就活を行うように取り決めを定めたものである。1995 年頃からインターネットが普及し学生が全国からの就活が自由になり、会社も学生も職種等を自由に選ぶことができるようになり、結果として大量の学生を会社に集めて選考し、大量に不採用にする約 20 年間の方法に企業も学生も疲れていることから、学校推薦による就活、学内セミナー、小規模イベントの開催、大学や会社がスポンサーになって就活カフェの設置による就職支援が多くなった。またここ数年労働力不足により企業は良い人材を採用したいことから、卒業生のリクルーター、スカウト、エージェントによる採用が多くなっている。また 2-3 年生を対象にインターンシップを活用して会社を良く知った後で採用する方法をとり 1-2 割を採用しており、事実上の採用ツールとして会社も学生も利用し機能している。学生さんには「しっかり考え、じっくり育み、スパッと決める」と進めて欲しいと思っている。

2. 大学生の就職活動と企業の採用活動

我が国では 4 月に一斉に新卒採用する文化であることから、これに伴い卒業の前年度に就活が一斉に行われることになる。学生の就活起点はエントリーシートの作成からであるが、先ほど述べたように、今後はそれよりも先にインターンシップからになると思われる。就職活動の自由の原則は尊重しなければいけないが、採用したい学生は重複内定をもらっており、内定辞退に会社は困っている。また就職してもすぐに離職する学生も多く、職業への定着が課題となっている。大学としては学業成績を高めたまま、並行して就職活動やインターンシップを行って欲しいし、これらの学修成果を可視化する事が課題となっている。

3. 学生支援センター就職支援室の取り組み～キャリア学習の推進機関として

学生支援センターについて説明があり、本学では、山口大学のキャリア教育の基本方針が制定されていることが他大学にない特徴であり、本学はこれに基づいて活動している。この中で「就業する力・進路を選択する力をつけるためのキャリア学習の場を提供する」が掲げられているのでこれを活用して欲しい。また本学では共通教育授業科目として「キャリア教育科目」があり全学必修として学生は受講している。また「本」から学ぶことの重要性として就職支援室には本も多く揃えてあり、新聞の読み方の講座も開講している。また「人」から学ぶことの重要性においては学内業界・企業研究会等もあり、企業の方と実際に会って就職についての理解を深めてから就活を行ってほしいと考えている。また就職情報のメールを配布するサービスを行っている、等の活動の説明があった。

質疑応答

Q1: 今後、採用の比重はインターンシップへシフトするのか？

A1: インターンシップは採用の一つの手段であり、これだけではない。企業はOB, OG 訪問、懇談会もしている。効率的に採用を進める方法として最近では SNS, AI, WEB 配信等の IT 技術が支えている。地方の学生が不利ではあるが、山口大学を含め地方大学の学生は経験が少なく、素直であるので都会の大学に比べて辞退が少ない事を知っている。ベンチャー企業も地方大学に来てから学生に接触して採用したいと思っている。

Q2: 進路指導について、大学は親の対応について苦勞している。親は自分の子供がどの程度の会社に採用されるかわからないために教員や学生との意見の相違が生じる事がある。進路について学生の希望条件と現状の違いについて余り強く言うと教員との信頼関係が無くなること心配している。さらに学生が大学と親との板挟みになる事がある。

A2: 学生支援センターでは、なるべく早く就活の前から家族で就活について話すように勧めている。最後は自分で就職は決めるように言う。その前に親にデータを持って就活については説明しなさいと指導する。未だに大企業は学閥等があり、思うように就活して採用されない事情もあることを説明する必要がある。また企業では採用したいために親向けの内定を出すところもある。

Q3: インターンシップについて1日インターンシップは本当にインターンシップなのか？ 企業はインターンシップに対してマッチングしているのか？

A3: 1日インターンシップは増えているが、1日から2・3日のものも増えている。1日ではわかりにくいので2・3日の中身のあるものを企業は準備している。先生方にはインターンシップに行った学生には是非インターンシップの内容を聞いて頂き、もし要望を申し入れることが出来るのであれば、もう少し改善して欲しいと申し入れて行かないと、実は企業側は気が付いてない可能性があると思われる。1日のインターンシップが企業説明会と同じだったとの学生の意見もあった。5日のインターンシップであっても正味は3日のものもあるので、内容については検証する必要がある。

Q4: インターンシップについてどのくらいの学生が行っているのか把握しているのか、またインターンシップの説明をどの様にしてしているのか？

A4: インターンシップに対しては個別に対応している。インターンシップの説明については、夏休みにインターンシップを企画している企業が多いことから、それに合わせて4月から夏休みが始まる前には頻繁に説明会をして情報を提供している。山口大学を通じてのインターンシップについては大学を通じてインターンシップに行っている。一方、企業が開催するものをインターネットにて申し込んだものに対しては各自がインターンシップに出かけている。どの方法で申し込んだものでも参加登録についての書類を大学に提出してからインターンシップに行くようには指導している。また事前に研修を受けてからインターンシップに行くように指導している。無届けでは事故が起こったときの保険対象にならないことも指導している。就活、インターンシップは個別対応が必要なので、相談員が吉田地区はほぼ毎日、常盤地区は通常期は1回/週ではあるが、繁忙期の4・6月では2・3日/週、閑散期の9・10月は1回/月になり基本的にはそこに申し込んで入ってもらう。急ぎのときには私(平尾先生)がこちら(常盤)に来て対応することもあることで、その場合は就職支援室に相談してもらえると助かる。

以上

(15) 大学生の就職活動・企業の採用活動の最新事情

日時 平成 31 年 3 月 13 日(水) 14:00~14:40
場所 農学部・共同獣医学部大会議室
講師 平尾元彦 (山口大学学生支援センター教授)
参加者 30 名 (アンケート回収 14 名)



内容

はじめに共同獣医学部 FD コーディネーターの西垣教授より山口大学学生支援センター平尾元彦先生の紹介があり講演に入った。

最初に平尾元彦教授の自己紹介があり、その後講演内容に入った。

1. 採用活動時期での変更でいま何が起きているか？

2018 年 10 月、経団連が学生の就活ルールとなる「採用選考に関する指針」を廃止したことについて

の説明があった。この指針は国公立の大学等で構成する就職問題懇談会による申し合わせの基礎となるものであり、大学生に 3 年生までは学業をしっかりともらい、その後最終学年で就活を行うように取り決めを定めたものである。1995 年頃からインターネットが普及し学生が全国からの就活が自由になり、会社も学生も職種等を自由に選ぶことができるようになり、結果として大量の学生を会社に集めて選考し、大量に不採用にする約 20 年間の方法に企業も学生も疲れていることから、学校推薦による就活、学内セミナー、小規模イベントの開催、大学や会社がスポンサーになって就活カフェの設置による就職支援が多くなった。またここ数年労働力不足により企業は良い人材を採用したいことから、卒業生のリクルーター、スカウト、エージェントによる採用が多くなっている。また 2-3 年生を対象にインターンシップを活用して会社を良く知った後で採用する方法をとり 1-2 割を採用しており、事実上の採用ツールとして会社も学生も利用し機能している。学生さんには「しっかり考え、じっくり育み、スパッと決める」と進めて欲しいと思っている。

2. 大学生の就職活動と企業の採用活動

我が国では 4 月に一斉に新卒採用する文化であることから、これに伴い卒業の前年度に就活が一斉に行われることになる。学生の就活起点はエントリーシートの作成からであるが、先ほど述べたように、今後はそれよりも先にインターンシップからになると思われる。就職活動の自由の原則は尊重しなければいけないが、採用したい学生は重複内定をもらっており、内定辞退に会社は困っている。また就職してもすぐに離職する学生も多く、職業への定着が課題となっている。大学としては学業成績を高めたまま、並行して就職活動やインターンシップを行って欲しいし、これらの学修成果を可視化する事が課題となっている。

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	2	14.3%
良かった	8	57.1%
どちらとも言えない	4	28.6%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	14	100.0%

3. 学生支援センター就職支援室の取り組み～キャリア学習の推進機関として

学生支援センターについて説明があり、本学では、山口大学のキャリア教育の基本方針が制定されていることが他大学にない特徴であり、本学はこれに基づいて活動している。この中で「就業する力・進路を選択する力をつけるためのキャリア学習の場を提供する」が掲げられているのでこれを活用して欲しい。また本学では共通教育授業科目として「キャリア教育科目」があり全学必修として学生は受講している。また「本」から学ぶことの重要性として就職支援室には本も多く揃えてあり、新聞の読み方の講座も開講している。また「人」から学ぶことの重要性においては学内業界・企業研究会等もあり、企業の方と実際に会って就職についての理解を深めてから就活を行ってほしいと考えている。また就職情報のメールを配布するサービスを行っている、等の活動の説明があった。

質疑応答

Q: 大学を卒業後にも学生支援室にきてもよいのか？

A: 相談事があるときにはどうぞ来てください。できることは協力します。できないことについては外部の方と連絡を取ります。例えばハローワークとも連絡を取り合うことができます。

以上

(16) 山口大学 共育ワークショップ2019
「多様化社会において必要とされるコンピテンシーとは
～高大接続・社会接続の観点から～」

日 時：2019年3月14日（木）13：30～17：00

場 所：山口大学 大学会館2階会議室（吉田キャンパス）

参加者：68名（学内31名（教職員26名、大学生5名）、学外37名（教職員等33名、高校生4名））

主 催：山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）

対 象：大学関係者（教職員・学生）、高等学校関係者（教員・生徒）、企業・行政関係者ほか

構 成：

13：30～13：40 開会挨拶・趣旨説明

山口大学理事・副学長（教育学生担当） 福田 隆眞

13：40～14：10 【基調講演（1）】

『『巻き込む力』を育むには ～企業家（起業家）からのメッセージ～』

株式会社ザメディアジョン・リージョナル代表取締役

内閣官房 地域活性化伝道師

北尾 洋二

14：10～14：40 【基調講演（2）】

『『探究する力』を育むには ～高等学校現場からのメッセージ～』

熊本県立熊本北高等学校 教諭

アクティブラーニング型授業研究会くまもと 代表 溝上 広樹

14：40～14：55 【事業成果報告・発信】

「山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）からのメッセージ」

山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授

林 透

（休 憩）

15：05～16：50 【SDGs カードによるワークショップ】

「2030大学の授業と高等学校の授業ってどうなの？」

模擬授業担当教員×大学生×高校生

16：55～17：00 クロージング・閉会挨拶

山口大学 大学教育機構 大学教育センター長

菊政 勲

[総合司会・進行：山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透]

内 容：

2019年3月14日（木）午後、共育ワークショップ2019「多様化社会において必要とされるコンピテンシーとは～高大接続・社会接続の観点から～」を山口大学大学会館2階会議室（吉田キャンパス）にて開催し、学内外から68名（学内31名（教職員26名、大学生5名）、学外37名（教職員等33名、高校生4名））が参加した。共育ワークショップは、大学教育センターが主催し、大学の教育（共育）について、学生、教職員が一緒になり、

様々な観点から語りあい、考えるというコンセプトで、2013年度から始まり、今年で6年目となる。今回は、昨年度の高等学校関係者(教員・生徒)を交えた取組から更に発展させ、大学関係者、高等学校関係者、企業・行政関係者が一緒になって、教育について考える場づくりを企画した。なお、本ワークショップは、山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)事業成果交流会として開催した。

はじめに、福田 隆眞 理事・副学長(教育学生担当)より開会挨拶があり、昨今の多様化社会において、大学関係者同士だけでなく、高等学校関係者や企業・行政関係者を交えながら、次代を担う人材の育成のあり方等について対話する今回のワークショップへの期待が述べられた。

まず、株式会社ザメディアジョン・リージョナル代表取締役 北尾 洋二 氏より「『巻き込む力』を育むには ～企業家(起業家)からのメッセージ～」と題し、基調講演があった。冒頭、他人事を自分事にできることが大事であり、他人に責任を押し付けることなく、自分と他者との関係性を考えながら行動することの必要性を指摘した。さらに、社会の価値観が大きく変容し、流動化・先鋭化の時代の中で、自分自身の目的が明確であるとともに、従来の枠組を超えて戦略的に活動していく柔軟性が必要であると述べた。その中で、発信力・伝える力を身につけるとともに、いかに新しい価値を創造して期待感を醸成するかが、人を巻き込むために重要な事項であると述べた。そういう意味において、自己肯定感以上に、「自己有用感」を育むことが大切であると主張した。



次に、熊本北高等学校教諭 溝上 広樹 氏より「『探究する力』を育むには ～高等学校現場からのメッセージ～」と題し、基調講演があった。高等学校教諭として、授業改善を行う意味や課題研究を通じた生徒の深い学びに接してきた経験を紹介しながら、「探究心が高まる時はどんなときか」という問いをフロアに投げ掛けた。その後、高校生の生物科目での探究活動の事例を紹介しながら、「ミッション」「アイデンティティ」「信念」「コンピテンシー」「行動」「環境」のそれぞれのベクトルが一致すると、生徒の探究が進むことを「玉ねぎモデル」を基に解説した。さらに、テーマ設定の工夫として、ファシリテーショングラフィックを用いたアイデアの見える化や論文の輪読などを紹介した。最後に、校内研修の設計や熊本県内でのアクティブラーニング型授業研究会の活動を紹介した。

前半の最後として、山口大学 大学教育機構 大学教育センター 林 透より「山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)からのメッセージ」と題し、事業成果報告があった。YU-AP 事業として



2018年度に取り組んできた内容を紹介するとともに、事業終了後に向けた今後の課題に言及した。また、採択時から5年の月日が流れ、大学教育を取り巻く環境が大きく変化する中で、2014～2016年度にかけて、学内体制・環境整備や学生参画型意識醸成に重点を置きながら事業のスタートアップや他機関への波及効果を進めてきたが、2017年度以降は高大接続による相互交流やチームAPによる採択校同士の連携に重点がシフトしてきた状況を説明した。その中で、共有ワークショップの意味付けも、従来の教職学協働を主眼としたものからステークホルダー協働を重視するものに変容しつつあると説明した。

後半のSDGsカードによるワークショップ「2030年多様化社会を見つめ、必要とされるコンピテンシーについて考えてみよう！」では、学校法人 広島城北学園 広島城北中・高等学校教頭 中川 耕治 氏、Communication Lab, Beyond words 代表 越 希美江 氏のファシリテーションのもと、SDGsカードゲームを繰り広げ、国連が定



めた持続可能社会のための17の目標の意味を理解し、2030年に向けて自分たちが何をしなければならないのか、どのようなコンピテンシーを身につける必要があるのかについて考えた。高校生・大学生から大人まで幅広い職種と世代の交流を通して、各グループに課せられた目標の達成を目指して、参加者一同、真剣かつ楽しくゲームを体験した。参加者アンケートでは、「高校生、大学生の皆さんと一緒にワークは新鮮でした。また参加させていただきたいです。」「カードゲームは大変示唆に富むものでした。」といった感想が多く、大変好評であった。

最後に、菊政 勲 大学教育機構 大学教育センター長より閉会挨拶があり、基調講演やグループワークの要点を振り返りながら、外部講師の方々への労いの言葉があった。



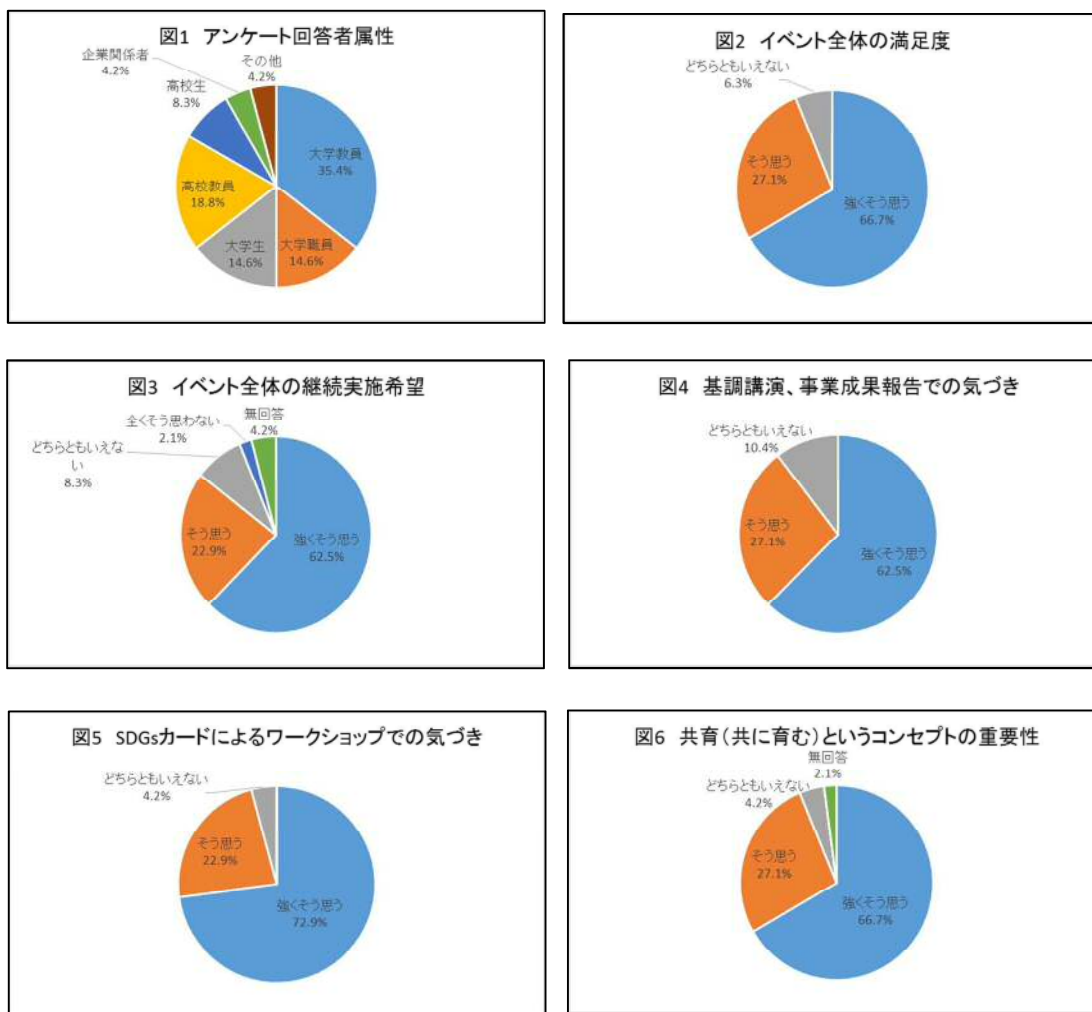
アンケート結果：

ワークショップ参加者によるアンケートについて、48名（回収率70.6%）から回答を得た（図1）。イベント全体の満足度については、「強くそう思う・そう思う」が90%を超え（図2）、今後も継続していくべきであるという意見が85%を超える回答となった（図3）。

前半の基調講演・事業成果報告、後半のSDGsカードによるワークショップを受講した参加者に新しい気づきがあったかという設問において、基調講演・事業成果報告では90%近く（図4）、SDGsカードによるワークショップでは95%以上（図5）の参加者が何らかの気づきがあったと回答しており、特に、SDGsカードによるワークショップを通じた新し

い気づきが非常に多かったことは、多様化社会を見つめ、考えるという趣旨を十分に達成できた成果である。また、共有ワークショップ自体のコンセプトへの理解に関する「共有（共にはぐくむ）というコンセプトは大切か」という設問では90%以上の賛同を得た（図6）。

以上、前半の基調講演・事業成果報告、後半のSDGsカードによるワークショップを通して、参加者が新たな気づきを得、全般的に満足度の高い機会となった。組織開発（OD）プログラムとしての共有ワークショップの有効性が改めて窺える結果となった。



まとめ：

山口大学憲章が掲げる「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」の創造を目指して、山口大学を構成する教員・職員・学生が理解を深め、共有することが求められている。今年度のワークショップでは、高大接続や社会接続をテーマに、各種企画に取り組んだ。山口大学・大学教育再生加速プログラムを中心に広がりつつある、アクティブラーニングや探究学修を通じた大学と高等学校の交流に加え、社会接続を意識しながら、企業関係者との関係性にチャレンジし、今回の共有ワークショップが生まれた。

この共有ワークショップという場は、山口大の組織力の向上、引いては、山口大の教育力の向上を図るための組織開発プログラムであるだけでなく、教員・職員・学生個々に気づき

を与え、新しいチャレンジ精神を培う人材育成の機能を果たすものである。さらに、今回は、高校教員や高校生、さらには企業関係者の参加者を得て、その輪を広げることができた。

今回のワークショップでの新たなアイデアや出会いを大切に、今後の山口大の教育課程・学習支援の充実、教職学協働の強化に一層努めていきたい。



3. 教育改善研修会

(1) 理学部・創成科学研究科（理学系）

日程：平成 30 年 9 月 3 日(月) 15:00～15:30

場所：人文学部・理学部大会議室

講師：岡田 耕一（大学教育センター講師）

藤原 勇（大学教育センター准教授）

参加者： 42名（アンケート回収32名）

【研修内容】

最初、理学部末竹規哲教授から研修会の主旨の説明があった。つづいて大学教育センター藤原勇准教授より教学 IR について説明があり、島根大学理学部の教学 IR 分析から対応策を導き出した事例紹介があった。次に、アドミッション・センターの林寛子准教授の代理として大学教育センターの岡田耕一講師による、「入試データを用いた検証・改善例」について：特別入試により入学した学生の成績等に基づくデータ解析結果について説明があり、解析結果から入学者選抜方法を見直し改善した事例が紹介された。今後、教学 IR が可能なデータ分析を学部と大教センター間で協力・連携して進めて行っていくことになった。

【★質疑応答・意見交換】

「入試データを用いた検証・改善例」の説明に関連して、入試関連の要望が多かった。

要望・意見

1. 全学でのデータはまるめこまれている。部局毎の細かいものがみたい。高校別の推薦合格の人数の関係を知りたい。

入試について入学判定会議で合格者を何名多く取ること適切であるかについての過去の実績から予想がつくと思われるので提供して頂きたい。

2. 成績の平均値として差がないとしても A0 入試の優秀な学生とそうでない学生がいるので平均点で検定しても疑問である。A0 入試は平均点についてのものが多い。サンプル数が少ないのはわかるが平均でなく分散が知りたい。

GPA が入試に有益な情報となるかどうかは疑問である。平均点に対する評価ではなく落ちこぼれている学生に対する分析がしたい。AO 入試調査は平均点についてのものが多い。サンプル数が少ないのはわかるが平均でなく分散が知りたい。



3. 以前ACの林寛子先生に入試分析についての研修を受けたことがある。詳細な入試の分析を学部毎にされているのでその蓄積データがあれば解析結果を提供して頂けると良い。入試の場合、学部・学科間で違うため対応できるデータを比較しないと解析結果が出ない、また次の対応に結びつかない、と思う。以前、学部でなく全学科で解析していたと思う。

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	0	0.0%
良かった	16	50.0%
どちらとも言えない	15	46.9%
あまり良くなかった	1	3.1%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	32	100.0%

(2) 人文学部、人文科学研究科、東アジア研究科（人文系）

日程 平成 30 年 9 月 19 日（水）14:30～15:10
 場所 人文学部・理学部大会議室
 （吉田キャンパス）
 講師 林 寛子准教授（アドミッション・センター）
 小川 勤（大学教育センター）
 参加者 36名（アンケート 21 枚回収）



図 1 人文学部の教育改善研修会の様子

内容

本研修会のテーマは「教学 IR」であった。最初に

教学 IR（Institutional Research）の目的と導入の意義、活用事例について大学教育センターの小川教授から説明があった。教学 IR とは、「組織としての情報戦略のための研究」であり、「大学の理解、戦略、運営の改善に繋げる」活動であることが最初に明らかにされた。また、導入目的としては、様々なデータを分析し、見える化を図ることにより、課題を発見し、その課題を解決するきっかけとなることで、組織的な改善

を促す効果がある。教学 IR の具体的な事例としては、島根大学における単位修得が順調でない学生の躓きの原因を、教学 IR の手法を用いて、発見し、改善方法を提案した事例が紹介された。

次に、アドミッション・センターの林寛子准教授より、本学の教学 IR の導入事例として「入試データを用いた検証・改善」について説明があった。分析・検証の結果、大学における学業成績（GPA）においては、センター試験を課さない特別選抜（AO 入試や推薦 I 入試）の学生と一般入試の学生とは成績の差（有意差）は認められず、パフォーマンスは同じであるという結果が明らかにされた。ただし、AO 入試の学生は、TOEIC の平均得点（スコア）が低く、躓きがみられ、その結果、留年・退学の割合が高くなる傾向がある。また、2013 年 AO 入試合格者の TOEIC のスコアが例年より低いとの人文学部教員からの指摘を受け、この問題を改善するために、アドミッション・センターと人文学部は、平成 28 年度入試から AO 入試において加点点評価項目を新たに新設し、英語能力資格保有者の志願者に対して加点していく入試改革が行われたそうだ。この結果、平成 28 年度の人文学部の AO 入試合格者の TOEIC スコアは有意に上昇したそうだ。また、これをきっかけに、他の学部も募集要項に AO 入試の評価基準を公表するようになったそうだ。これ以外に、特別入試の学生は、入学時および卒業時ともに自己評価が高い、在学中の活動率（ゼミ、部活、サークル活動等）が高い、大学院に進学するより就職する者が多い等の傾向が示された。

説明後の質疑応答では、以下の質問と回答があった。

Q1 分析結果を見ると、一般入試前期、一般入試後期、AO 入試という順で成績トップ層の学生は一般入試から入学して来る傾向がみられ、AO 入試合格者は中程度の学力の者が主に入学している傾向が読み取れるが、その通りでよろしいか？

A1 確かに 2013 年度入試データだけを見るとその傾向があるが、AO センターでは 2012 年度以前のデータも分析して、大学における学業成績（GPA）においては、センター試験を課さない特別選抜（AO 入試や推薦 I 入試）の学生と一般入試の学生とは成績の差（有意差）は認められ

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	4	19.0%
良かった	15	71.4%
どちらとも言えない	1	4.8%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	4.8%
合計	21	100.0%

ないと判断している。

Q2 全学でデータをまとめてしまうと、学生数の多い学部の傾向が全学的に反映されてしまうので、人文学部だけのデータを示してもらえないか？人文学部の AO 入試の場合、学部からの入試データと面接結果のデータとズレが生じているが、アドミッション・センターはその当りの分析はできるのか？

A2 人文学部だけの入試データ等の分析はできる。ただし、入試関係のデータの分析はアドミッション・センターで行うが、教務や就職関係のデータ分析は、教学 IR 部門を今年立ち上げた大教センターで今後、行っていく予定である。今回は、学部の先生方が教学 IR 部門で分析して欲しい内容をお聞きするためにこの FD を開催している。

Q3 人文学部では学部改組にともなって、カリキュラム改革が行われているので、学部としても独自でデータ分析を行う必要があるが、アドミッション・センターが分析したデータ等を利用させてもらいたい。

A3 アドミッション・センターも大学教育センターも、人文学部と連携して教学 IR を推進していきたいので、協力できる場所があれば随時行っていきたい。

研修会後のアンケートには、「非常に良かった」＋「良かった」を合せて 90.4%であり、満足度の高い研修会になった。本研修会の感想については、「客観的なデータに基づく議論は生産的でよいと思う」、「授業アンケート、ポートフォリオ、進路希望等のデータを紐付けて欲しい」という意見があった。

(3) 共同獣医学部・連合獣医学研究科

日程 平成30年10月10日(水) 13:30~14:00

場所 農学部大会議室
(吉田キャンパス)

講師 林 寛子准教授(アドミッション・センター) 小川 勤(大学教育センター)

参加者 25名(アンケート10枚回収)

内容

本研修会のテーマは「教学IR」であった。最初に

教学IR (Institutional Research) の目的と導入の意義、活用事例について大学教育センターの小川教授から説明があった。教学IRの定義については、「組織としての情報戦略のための研究」であり、「大学の理解、戦略、運営の改善に繋げる」活動であることが示された。また、導入目的としては、様々なデータを分析し、見える化を図ることにより、課題を発見し、その課題を解決するきっかけとなることで、組織的な教学改善に繋げる効果があることを明らかにした。教学IRの具体的な事例としては、島根大学における単位修得が順調でない学生の躓きの原因を、教学IRの手法を用いて、発見し、教学改善に結びつけた事例が紹介された。

次に、アドミッション・センターの林寛子准教授より、本学の教学IRの導入事例として「入試データを用いた検証・改善」について説明があった。分析・検証の結果、大学における学業成績

(GPA)においては、センター試験を課さない特別選抜(AO入試や推薦I入試)の学生と一般入試の学生とは成績の差(有意差)は認められず、パフォーマンスは同じであるという結果が明らかにされた。ただし、AO入試の学生は、TOEICの平均得点(スコア)が低く、躓きがみられ、その結果、留年・退学の割合が高くなる傾向がある。また、2013年AO入試合格者のTOEICのスコアが例年より低いとの人文学部教員からの指摘を受け、この問題を改善するために、アドミッション・センターと人文学部は、平成28年度入試からAO入試において加点評価項目を新たに新設し、英語能力資格保有者の志願者に対して加点していく入試改革が行われたそうだ。この結果、平成28年度の人文学部のAO入試合格者のTOEICスコアは有意に上昇したそうだ。また、これをきっかけに、他の学部も募集要項にAO入試の評価基準を公表するようになったそうだ。これ以外に、特別入試の学生は、入学時および卒業時ともに自己評価が高い、在学中の活動率(ゼミ、部活、サークル活動等)が高い、大学院に進学するより就職する者が多い等の傾向が示された。

説明後の質疑応答では、以下の質問と回答があった。また、以下のような要望事項があった。

Q1. 島根大学の教学IRについて分析をしている組織が存在しているのか?

A1. 3、4年前から教学IR室を設置して分析を行っている。



表1 アンケート結果

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか?	人数	割合(%)
選択肢		
非常に良かった	0	0.0%
良かった	6	60.0%
どちらとも言えない	3	30.0%
あまり良くなかった	1	10.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	10	100.0%

Q2. 入試の予想値については、大手予備校のどのデータなのか？

A2. 河合塾の前年度の予測値を用いている。11月以降の公表データである。

また、次のような要望事項があった。

1. 推薦入学の学生の成績を前期日程と後期日程と比較したい。また、過去10年間の成績の比較をしたい。

今年の倍率は6.4倍であり、大手予備校の予測値が他と比べて低いと倍率が上がる。

学生の成績が良くなっているのか確認がしたい（具体的には昨年4倍であり、今年の一年生との比較をしたい）

2. 授業の理解能力に係わるので学生の日本語能力について知りたい。

センター試験のどの科目を比較することで日本語能力を評価できるのか（関係があるのか）調べてもらいたい

研修会後のアンケートには、「非常に良かった」＋「良かった」を合せて60.0%であり、参加人数に比べてアンケート回収枚数が少なかったため、満足度についてはもう少し調査する必要がある。本研修会の感想については特になかった。



図 2 講演中の林寛子准教授



図 3 講演中の小川勤教授

(4) 教育学部・教育学研究科・東アジア研究科（教育系）

日程 平成 30 年 10 月 17 日（水）15:00～15:40

場所 教育学部 21 番教室（吉田キャンパス）

講師 林 寛子准教授（アドミッション・センター）小川 勤教授（大学教育センター）

参加者 79 名（アンケート 14 枚回収）

内容

最初に教学 IR（Institutional Research）の目的と導入の意義、活用事例について大学教育センターの小川教授から説明があった。教学 IR の定義については、「組織としての情報戦略のための研究」であり、「大学の理解、戦略、運営の改善に繋げる」活動であることが示された。また、導入目的としては、様々なデータを分析し、見える化を図ることにより、課題を発見し、その課題を解決するきっかけとなることで、組織的な教学改善に繋げる効果があることを明らかにした。具体的な事例としては、島根大学における単位修得が順調でない学生の躓きの原因を、教学 IR の手法を用いて、発見し、教学改善に結びつけた例が紹介された。

次に、アドミッション・センターの林寛子准教授から、「入試データを用いた検証・改善」について説明があった。分析・検証の結果、大学における学業成績（GPA）においては、センター試験を課さない特別選抜（AO 入試や推薦 I 入試）の学生と一般入試の学生とは成績の差（有意差）は認められず、パフォーマンスは同じであるという結果が明らかにされた。ただし、AO 入試の学生は、TOEIC の平均得点（スコア）が低く、躓きがみられること。その結果、留年・退学の割合が高くなる傾向があることが明らかにされた。また、2013 年 AO 入試合格者の TOEIC のスコアが例年より低いとの人文学部教員からの指摘を受け、この問題を改善するために、アドミッション・センターと人文学部は、平成 28 年度入試から AO 入試において加点評価項目を新たに新設し、英語能力資格保有者の志願者に対して加点していく入試改革が行われたそうだ。この結果、平成 28 年度の人文学部の AO 入試合格者の TOEIC スコアは有意に上昇したそうだ。また、これをきっかけに、他の学部も募集要項に AO 入試の評価基準を公表するようになったそうだ。これ以外に、特別入試の学生は、入学時および卒業時ともに自己評価が高い、在学中の活動率（ゼミ、部活、サークル活動等）が高い、大学院に進学するより就職する者が多い等の傾向が示された。

説明後の質疑応答では、以下の質問と回答があった。また、以下のような要望事項があった。



図 1 教育学部の教育改善研修会の様子

表 1 アンケート結果

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	7.1%
良かった	9	64.3%
どちらとも言えない	3	21.4%
あまり良くなかった	1	7.1%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	14	100.0%

Q1. 教育学部としても今後、センターと共同して教学 IR の取り組みに協力していきたいが、教育学部が欲しいデータ結果をなるべくスピーディに提供できるのか？

A1. 大教センターの教学 IR 部は本年度立ち上がったばかりであるが、体制を整備して学部からの IR ニーズに答えていきたい。

研修会後のアンケートには、「非常に良かった」＋「良かった」を合せて 71.4%であり、参加人数に比べてアンケート回収枚数が少なかったため、満足度についてはもう少し調査する必要があると感じた。本研修会の感想については特になかった。



図 2 講演中の林寛子准教授

(5) 医学部保健学科・医学系研究科

日程 平成 30 年 11 月 7 日(水)
[小串地区] 13:00～13:25
場所 総合研究棟 S2 講義室
(小串キャンパス)
講師 岡田 耕一、林 寛子
(大学教育センター、アドミッ
ションセンター)
参加者 26 名(アンケート 23 枚回収)

内容

本研修会では、教学 IR の目的と手法、他大学の事例、本学のアドミッションセンターの取り組み、教学 IR の活用について説明があった。ここでいう IR とは Institutional Research の略であり、組織としての戦略や運営に関する研究を示している、様々なデータを分析して改善を行うことを目的としている。大学における IR には、教学 IR と全学 IR がある。教学 IR では教育の質保証や教育改善など教育支援を、全学 IR では大学の経営支援を目的とする。

他大学における教学 IR の事例として、島根大学の事例が紹介された。この事例では決定木分析を用いて、3 年次までに 80 単位（卒業要件単位数は 124 単位）を取得できていない学生について、様々な教学データ（教務データ、入試データ、プレースメントテスト結果など）からその要因を分析した。その結果、80 単位を取得できていない学生は、1 年次の専門基礎科目の取得単位数が 4 単位以下であることと関連がみられた。これらの学生には 1 年次に何らかの躓きがあったと考えられるので、教員を通じてこれらの学生に修学サポートプログラムへの参加を促した。また、80 単位を取得できていない学生は、不本意入学意識をもつこととも関連が見られたため、不本意で入学した場合も良い学びを提供できるように、高校から大学の学びへ接続する役割を担う初年次教育の改善を模索しているとの説明があった。

次に本学の事例として、アドミッションセンターの林寛子准教授から、入試データの検証と教育改善について説明があった。大学における総合的な学業成績と入試の違い（AO・推薦入試と一般入試）は認められないが、AO 入試を受験した学生は、TOEIC の平均得点（スコア）が低い傾向がみられる。この事がこれらの学生の留年や退学に影響を与えていると考えられる。この結果を踏まえ、英語能力資格保有者の志願者に加点する入試改革が行われ、その結果として一定の効果が認められたとの説明があった。また、学業成績以外にも、特別入試の学生は入学時および卒業時ともに自己評価が高いこと、在学中はゼミやサークルでの活動率が高いこと、進学よりも就職する学生が多いなどの傾向がみられるなど、入試別に特徴がみられるとの説明があった。

研修会後のアンケートでは、「もう少し話を聞きたかった」、「英語の成績は重要だということに気づいた」、「貴重なデータをありがとうございました」、「学部別に集計し



表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	5	21.7%
良かった	16	69.6%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	2	8.7%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	23	100.0%

てデータを見たい（保健学科では??）」、「良い学生を得るための指標にもなり、勉強になりました」、「はじめて見る data で興味深かった」との感想があった。今後参加したい研修会については、「本日の内容、データ化できる様なもの」、「今後の教育活動に参考になるものが良いと思います。アクティブラーニングの具体的な方法も、授業改善につながる内容だと嬉しいです」、「ビッグデータのとりあつかいなど」、「学科に焦点を当てた IR」とのコメントがあった。

(6) 工学部・創成科学研究科（工学系）

日程：平成 30 年 11 月 14 日（水）〔常盤地区〕 14:20～15:00

場所：工学部 D 棟 D11 講義室

講師：岡田 耕一（大学教育センター講師）

林 寛子（アドミッションセンター准教授）

参加者：25 名（アンケート回収 21 名）

【★説明内容】

岡田 大学教育センター講師より、「教学 IR とは」と題し、教学 IR の目的や手法等について、島根大学の事例を交えながら概要説明があった。平成 28 年度に、大学教育センターの下に「教育開発部」「教学 IR 部」を新たに改編設置したことに伴い、教学 IR の環境整備や実質的運用が喫緊の課題となっている。「教学 IR とは何か」「教学 IR を通して何ができるのか」「教学 IR を活用するとどのような効果があるのか」といった点について、学部・研究科教員に分かりやすく説明し、理解を深める機会提供を行うのが今回の教育改善 FD 研修会の趣旨目的である。



具体的な事例として、林（寛子） アドミッションセンター准教授より「入学者のデータを用いた検証・改善例」が紹介され、特別選抜による入学者が大学教育に適應できたかという問いについて、①学業成績（GPA・TOEIC）、②在籍状況、③大学卒業後の状況、④大学教育における自己意識の分析を行い、平成 28 年度入試からの AO 入試改善に結び付けたことが説明された。さらには、平成 28 年度 AO 入試改善後の A 学部での AO 入試入学者 1 年次の TOEIC 成績の改善事例が紹介された。



その後、教学 IR に関する学部のニーズを把握するため、意見交換を行った。特定の課題を決めて分析することが望ましいが、そのような課題の特定が難しい場合には、ビックデータを利用して探索的な方法でもって、幾つかの集計結果を提示しながら協議・対話することを通して、課題を見出し、特定していくことが有効ではないかとの意見があった。

そのほかの質疑応答は以下のとおりである。

Q1 2013 年度工学部の推薦入試Ⅱの入学者の GPA が低いとの指摘があったが、その原因について分析されているのか。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	4	19.0%
良かった	10	47.6%
どちらとも言えない	5	23.8%
あまり良くなかった	2	9.5%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	21	100.0%

A1 まだ十分に把握できておらず、これからの分析課題である。

Q2 島根大学の事例が紹介されたが、その後の改善結果（効果）を明らかにした論文等はないのか。分析結果については、よくある事例のように思われるが、その後の改善結果（効果）が大事なように思われるが、いかがか。

A2 大事な指摘であるが、その後の改善結果（効果）を明らかにした論文等まで把握が及んでおらず、確認してみたい。

(7) 経済学部・経済学研究科・東アジア研究科（経済系）

日時 平成 30 年 11 月 21 日(水) 15:00～15:30

場所 経済学部 A 棟 2 階 第 1 会議室

参加者 56 名（アンケート回収 15 名）

担当者 林 寛子（アドミッションセンター 准教授）、木下 真（大学教育センター 准教授）

内容

本研修会は「教学 IR」をテーマに、各学部を巡回している。経済学部でも他学部同様、まず、経済学部・経済学研究科の FD コーディネーター有村教授より趣旨説明があった後、木下准教授から「教学 IR について」と題した教学 IR についての概要説明、及び林准教授から「入学者のデータを用いた検証・改善例」と題した本学アドミッションセンターにおける事例紹介が行われ、最後に質疑応答が行われた。

質疑応答

以下のようなやり取りがあった。

Q: 今教授会で議論していたところだが、AO はなぜ GTEC なのか？一般入試は CEFR で換算することになっているのに、AO だけ GTEC が飛び出てきたのはこの分析と関係があるのか？

A: CEFR を用いると TOEIC 295 点をよしとしなければいけない事が見え見えになってしまう。一般入試に関しては、文科省を含めて、大学入試センターが基準を作った加点、段階評価を加えるように指導があるので、全国统一で加点や出願資格として利活用が可能。AO 入試に関しては CEFR の段階を示してしまうと TOEIC の 250 点に加点をするという事が見えてしまう事に対して抵抗感があるという事。英検準 2 と同じ評価になってしまうという事。

Q: 補足説明をすると、私が林先生から聞いた話では結局何が卒業時の成績に影響するかと言うと、入試区分ではなく 1 年次の成績が卒業まで持っていかれるという事。皆さんの基礎セミナーのご指導が大変な力を持っているという事なので、より一層力を入れて頂ければと思う。1 年生の時の成績が割と優位に効いてくる。

Q: 感想だが、いろいろなデータを用いて教育改善をしていくことが分かったが、経済では全く

設問 1

研修会に参加した感想はいかがでした？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	6.7%
良かった	9	60.0%
どちらとも言えない	5	33.3%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	15	100.0%



こういう事をしてなくて、むしろ個別に捕まえてアナログ形式で一生懸命やっている。このやり方は理想だが、実際にやりだすと運営が大変だと思ったのと、もう一つは各学部にとりだけ協力というのが来るのかなと、ちょっとびくついた部分がある。現場の混乱も考えながらこれからの協力の体制を考えてもらいたいのでお願いします。

Q: 一般にはAOとか推薦は、失敗したと言われがちだが、ほとんど差がないという事は今日分かって良かったんじゃないかと思います。

アンケート

以下のような内容が見られた。

感想

- 基礎・予備的な分析としては理解できるが学術レベルは低い。もう少し明確な問い、仮説をもって方法を選んで欲しい。
- 学部分析を省略したが全学部分析の方を省略すべき。学部分析を中心にすべき。
- データに基づく説明で分かりやすいです。
- 総合大学では、学生数が多い為、学生の勉強状況・進路を確認出来る研修会があれば参加したいです。

参加したくない理由

- ある程度有益だが、教育・研究・公務等で忙しいから。
- 時間の無駄

希望の研修内容

- 講義(15回)をどのように構成すれば高い教育効果を得ることができるか?例: 座学、ARⁱ、DVD等の割合など。
- 本日の入試・卒業に関する詳細な分析のようなことを、学部別に詳しく説明。
- 初年次教育について。
- 非英語圏学生に対する英語論文指導。
- 教学 IR

実施時期

- 入試合否の教授会にすべき。今日のような「てんこもり」の日にすべきでない。いなくなった教員も多かった(失礼)。
- 教授会中はあまりこのましくないのではないか。会議の議論が中断されFD自体に十分に集中力がはたらかない。

以上



ⁱ 原文まま(Active Learning と思われる)

(8) 技術経営研究科

日程：平成 30 年 12 月 11 日（火）〔常盤地区〕 14:30～15:10

場所：大学院技術経営研究科棟 1 階 会議室

講師：岡田 耕一（大学教育センター講師）

林 寛子（アドミッションセンター准教授）

参加者：12 名（アンケート回収 11 名）

【★説明内容】

岡田 大学教育センター講師より、「教学 IR とは」と題し、教学 IR の目的や手法等について、島根大学の事例を交えながら概要説明があった。平成 28 年度に、大学教育センターの下に「教育開発部」「教学 IR 部」を新たに改編設置したことに伴い、教学 IR の環境整備や実質的運用が喫緊の課題となっている。「教学 IR とは何か」「教学 IR を通して何ができるのか」「教学 IR を活用するとどのような効果があるのか」といった点について、学部・研究科教員に分かりやすく説明し、理解を深める機会提供を行うのが今回の教育改善 FD 研修会の趣旨目的である。



具体的な事例として、林（寛子） アドミッションセンター准教授より「入学者のデータを用いた検証・改善例」が紹介され、特別選抜による入学者が大学教育に適応できたかという問いについて、①学業成績（GPA・TOEIC）、②在籍状況、③大学卒業後の状況、④大学教育における自己意識の分析を行い、平成 28 年度入試からの AO 入試改善に結び付けたことが説明された。さらには、平成 28 年度 AO 入試改善後の A 学部での AO 入試入学者 1 年次の TOEIC 成績の改善事例が紹介された。



その後、教学 IR に関する研究科のニーズを把握するため、意見交換を行った。研究科長はじめ、多くの教員から質問があり、関心の高さを窺えた。特に、各教育プログラムが設定している人材養成目標に対して、どれだけの学力が身に付いているかを追跡して、可視化・分析するような環境づくりの要望があった。

そのほかの質疑応答は以下のとおりである。

Q1 大学教育センター教学 IR 部では、データ整備がされていて、こちら側が要望するデータ分析がすぐにでも出来る状況なのか、それとも、両方で相談しながら分析作業を進める状況なのか。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	9.1%
良かった	9	81.8%
どちらとも言えない	1	9.1%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	11	100.0%

A1 後者の状況であり、学部・研究科と相談しながら、作業を進めていきたい。

Q2 技術経営研究科のように、学生数が少ない部局においては、データの散らばりが大きいと思われるが、分析方法として適切なものはあるか。

A2 経年変化のデータなどを提示しながら、その傾向を把握することが最適かと思われる。また、データを蓄積することを通して、総合的な分析を行うことも考えられる。

Q3 島根大学の事例のように、学士課程教育による教学 IR の実績はかなりあると思われるが、大学院教育における教学 IR の良い事例はないか。

A3 少し調べてみたい。

(9) 医学部医学科・医学系研究科

日程：平成30年12月12日(水) 13:00～13:40

場所：医学部本館6階第1会議室

講師：林 透（大学教育センター准教授）

林 寛子（アドミッション・センター 准教授）

参加者：32名（アンケート回収26名）

【研修内容】

最初、医学部藤宮龍也教授から研修会の主旨の説明があった。つづいて大学教育センター林透准教授より教学IRについて説明があり、島根大学理系学部の教学IR分析から対応策を導き出した事例紹介があった。次に、アドミッション・センターの林寛子准教授による、「入試データを用いた検証・改善例」について：特別入試により入学した学生の成績等に基づくデータ解析結果について説明があった。本研究会の趣旨としては、本学の入試の改善の解析に4年生学部の事例紹介として資料を用いており、6年制の医学部医学科とは異なるが、解析結果から入学者選抜方法を見直し改善事例として紹介された。

今後、教学データを元にして教学IRが教育効果の原因分析を行い教育の質を向上させる様に学部と大教センター間で協力・連携して進めて行っていく事が望ましいとなった。



【質疑応答・意見交換】

1. 医学部医学科の解析データがなかったが我々は医学科が聞きたかった。

A 今回4年生学部の事例紹介として資料として説明している。教学IRのアプローチとして紹介した。まだ未取組の部分が多く、IRの解析はまだ十分でない。要望があれば共同して解析していきたい。

2. GPの評価はなじみない。医学科の場合、特別入試からの学生の大学院進級率、留年率、国家試験合格率、が評価結果としての出力であり、これらを教学IRと結びつけられないのか。

A 医学部医学科でも教学関連のデータを解析すれば個別に分析できると思われるので、データから解析できると思う。

3. 医学部医学科の IR と教学 IR が緊密に連絡を取ったら良いと思う。
4. 医学部医学科は医学教育センターにIR機能を持たせたいと思っている。他学部の教学IRはどうでしょうか。
- A 学部毎に入試や教育成果については検討している。工学部はデータを提供してIRを行っている。国際認証資格所得する共同獣医学部, 医学部は既にIRに近いことをされている。

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	0	0.0%
良かった	17	65.4%
どちらとも言えない	7	26.9%
あまり良くなかった	1	3.8%
良くなかった	1	3.8%
無回答	0	0.0%
合計	26	100.0%

(10) 農学部・創成科学研究科（農学系）

日程 平成 30 年 12 月 19 日（水）15:00～15:40

場所 農学部大会議室（吉田キャンパス）

講師 林 寛子准教授（アドミッション・センター）木下 真 准教授（大学教育センター）

参加者 24 名(アンケート 20 枚回収)

内容

最初に教学 IR（Institutional Research）の目的と導入の意義、活用事例について大学教育センターの木下准教授から説明があった。教学 IR の定義については、「組織としての情報戦略のための研究」であり、「大学の理解,戦略,運営の改善に繋げる」活動であることが示された。また、導入目的としては、様々なデータを分析し、見える化を図ることにより、課題を発見し、その課題を解決するきっかけとなることで、組織的な教学改善に繋げる効果があることを明らかにした。さらに、具体的な事例としては、島根大学における単位修得が順調でない学生の躓きの原因を、教学 IR の手法を用いて、発見し、教学改善に結びつけた例が紹介された。

次に、アドミッション・センターの林寛子准教授から、「入試データを用いた検証・改善」について説明があった。分析・検証の結果、大学における学業成績（GPA）においては、センター試験を課さない特別選抜（AO 入試や推薦 I 入試）の学生と一般入試の学生とは成績の差（有意差）は認められず、パフォーマンスは同じであるという結果が明らかにされた。ただし、AO 入試の学生は、TOEIC の平均得点（スコア）が低く、躓きがみられること。その結果、留年・退学の割合が高くなる傾向があることが明らかにされた。また、2013 年 AO 入試合格者の TOEIC のスコアが例年より低いとの人文学部教員からの指摘を受け、この問題を改善するために、アドミッション・センターと人文学部は、平成 28 年度入試から AO 入試において加点評価項目を新たに新設し、英語能力資格保有者の志願者に対して加点していく入試改革が行われたそうだ。この結果、平成 28 年度の人文学部の AO 入試合格者の TOEIC スコアは有意に上昇したそうだ。また、これをきっかけに、他の学部も募集要項に AO 入試の評価基準を公表するようになったそうだ。これ以外に、特別入試の学生は、入学時および卒業時ともに自己評価が高い、在学中の活動率（ゼミ、部活、サークル活動等）が高い、大学院に進学するより就職する者が多いなどの傾向が示された。

説明後の質疑応答では、以下の質問と回答があった。また、以下のような要望事項があった。



図 1 農学部の教育改善研修会の様子

表 1 アンケート結果

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	0	0.0%
良かった	9	45.0%
どちらとも言えない	9	45.0%
あまり良くなかった	2	10.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	20	100.0%

Q1. 農学部としても今後、大学教育センターやアドミッション・センターと共同して教学 IR の取り組みに協力していきたいが、結果が 4~5 年後にならないとわからないということでは入試改善のスピードに活かさないのでは？農学部が欲しいデータ結果をなるべくスピーディーに提供できるのか？

A1. アドミッション・センターとしては、今後も、入試データと学生たちから集まった各種のアンケート調査結果と紐づけしながら、農学部が要求するデータ解析結果をスピーディーに提供していきたい。

Q2. 農学部で調べて欲しいことを大教センターやアドミッション・センターに要求してもよいか？

A2. 大教センターの教学 IR 部は本年度立ち上がったばかりであるが、体制を整備して学部からの IR ニーズに答えていきたい。

研修会後のアンケートでは、「非常に良かった」＋「良かった」を合わせて 45.0%で、「どちらともいえない」が 45%となり、満足度は残念ながらあまり芳しくなかった。満足度についてはもう少し調査する必要があると感じた。本研修会の感想については以下のようなものがあった。

- ・大学教育センターが取り組んでいる解析がよく分かった。学部としても活用していきたい。
- ・目的が不明で、大教センターの PR のように感じた。



図 2 講演中の林寛子准教授

(11) 国際総合科学部

日時 平成 31 年 01 月 16 日(水) 15:00～15:40

場所 国際総合科学部本館 2 階 大会議室

参加者 21 名 (アンケート回収 11 名)

担当者 林 寛子 (アドミッションセンター 准教授)、林 透 (大学教育センター 准教授)

内容

本研修会は「教学 IR」をテーマに、各学部を巡回している。国際総合科学部でも他学部同様、まず、FD コーディネーター星野准教授より趣旨説明があった後、大教センターの林准教授から「教学 IR について」と題した教学 IR についての概要説明、及びアドミッションセンターの林准教授から「入学者のデータを用いた検証・改善例」と題した本学アドミッションセンターにおける事例紹介が行われ、最後に質疑応答が行われた。

質疑応答

主に以下のようなやり取りがあった。

Q: IR は普通の学術的な研究とは違うのか？

A: 機関研究という訳語も申し上げたが実践で動いている経営のデータや教学のデータを分析しながら、どちらかと言うと実践の改善に生かしていくところがある。学術的な研究の価値もあるが実践への橋渡しがリンクしているところがある。業務改善を目的としたデータの蓄積と分析の提供、実践研究のような形。大学のシステムをどうしていくかが本意にある。

Q: いくつかデータ示して頂いたが、どう解釈すれば良いか分からない。こういう物をデータ解析するとこういう形で分かってくるという解析の仕方や指針を提示して頂けるとありがたい。

A: 他学部も回った中でデータはあって、いろんな分析方法をかけ合わせれば出るものがあるが、一番問題なのは、どこに問題があるかのエビデンス。どんなお題があるか。林先生の話も AO 入試のどこに問題があるか見ながら英語の問題を詰めていったところがある。我々が欲しいのは学部で感じている問題。

Q: そもそも何が分かるのかが分からない。毎年の変化、エラーバーがあったとして明らかに外れている物なんかが見えない。

A: 学部で問題意識がないとまだ大丈夫だと思われてしまうと、改善の担い手が学部の先生にな

設問1

研修会に参加した感想はいかがでした？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	2	18.2%
良かった	7	63.6%
どちらとも言えない	1	9.1%
あまり良くなかった	1	9.1%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	11	100.0%



るので、学部の問題意識とマッチするところがないと先に進まないと思う。

Q: たくさんの指標、項目あると思うが、どれを見ると効率的に見えるかがなかなか分からない。いろんな学生いるけど、単位の取り方のここに注目すると問題が見えるとか、成績悪いがここをつつくと良くなる可能性ある、別の学生は同じような成績だけどどう関与しても良くならないとか、見えてくるとか。

Q: それを大教センターが開発していくのか？

A: 大きなフレームとしては、属性の違いで傾向がどう違うかと、何か教育改善をした時に before after を見るのが基本的な軸と思う。

Q: 属性違うというのも、学生を傾向としてこういうグループに分けられますみたいな感じで、分けて考えると良いですよ。素人的に見ると全部同じに見えるが、実はここと、ここと、ここは明らかに違うので指導の仕方を変えると良いですよというようなアドバイスが頂けそうな雰囲気があると活用し易い。いろんな学生がいるので、どういうアプローチすればいいかとは思いますが、具体的には見えないので。

Q: 今回見せてもらった例では、センター課している推薦 II の学生の GPA が悪い。センターを課すと広い能力を持っていると思っていたが？

A: 例年は推薦 II の学生の方が高いが、ある学部で成績が低下していた。その学部では問題意識を持っていて、意見交換のなかで仮説立てて今、入試改善進めようとしているところ。他学部の推薦 II の学生は成績も高く自己意識も高いので教育効果の高い入学者層と理解している。

Q: YU CoB CuS の各科目の DP の小項目との結びつき、配点をどうするか。将来的には何らかの形で、まさに IR 等を通して検証していかないといけないが、今のままだと出来ない可能性がある。配点に大きな影響を及ぼすのがその先生がどういう授業設計をしているか。むしろ授業設計の仕方がむしろそういう能力の育成に強く結びついているがそこは数値化出来てない。点は触れるがそれが本当に授業設計から来るウェイトにはなっていない。あのやり方するとき常に悩みになっている。IR 的にこういう事を検証してみれば糸口になるとかないか。

A: CoB CuS は今年完成年度迎えるので、去年もこの場でお示しさせて頂いているが、CoB CuS の得点、学業成績、アンケートも取らせていただいている、去年の時点でコミュニケーション能力が PROG テストで負の相関も出ていたので、またお示ししたい。年度によって学生の傾向に特色もあるので、また聞き取りもさせて頂きたい。

Q: 推薦 I、II の違いはセンターのみか？

A: そう。

Q: これを見ると、AO よりも推薦 I、II の方が、ばらつきが大きいように見える。標準偏差が大きいので。

A: センター試験を課さない入試のほうが良い人は良い、悪い人は悪いという傾向が生じる。

Q: II の方が、標準偏差が大きいようだが？

A: 全学でくくって結果示しているもので、本来は学部、学科ごとに分析して出すもので、学部の違いが影響している。

Q: これビッグデータで量的なデータだが、構造的な問題は質的な調査をしないと出て来ないと思うがその組み合わせについてはどう考えているか？

A: 学生の自己評価のアンケート的な物で補うしかないところがあって、なかなか聞き取りまで

出来ないところがある。

Q: 例えば入試の主観的なところで量的なデータでは問題ないと思う一方で、AO入試の学生はどうも主観的なところがある。それをどう整合していくかとか、ある程度、質的な部分も考慮していく必要があるのかなと感じる。

A: AO入試の1~3期については全員30分面接を行って質的調査から追跡調査を始めた経緯がある。アドミッションセンターは入試区分の分析が使命としてあるのでAOだけを聞き取るということが全学に出来ないのでアンケート調査に替えていったという経緯。

Q: IRは当面は量的なデータ蓄積して指標作るのが中心になると思うが質的な分析も実は大切なんだということはどこかで考えてもらいたい。

A: ALとかについては先生や学生に聞き取りはしている。CoB CuSもアンケート取らせてもらっていて、また相談させていただきます。

アンケート

以下のような内容が見られた。

感想

- FD研修会の動画配信とかできませんか？
全学のものでは時間帯が遅かったりして参加できないことが多いので。
- IRの内容は理解できたが今後どのように発展していくのかは予想できないものがある。
- 意図がよくわかりません。
- 他学部の入試状況等がわかってよかった。

希望の研修内容

- 自身の学部の具体的な話があるといい。

- どんなものというよりは、むしろ自分の気がつかない弱点を補う内容を聞きたい。

参加したくない理由

-

実施時期

- できれば4年生の本論(PBL)指導と3年生の構想(PBL)指導が重なる時期は避けて欲しい。

以上



第2章 共通教育授業科目別部会のFD活動

1. FD活動を実施した授業科目別部会

(1) 情報処理部会（部会長：大学教育センター 木下 真）

授業担当教員向けには授業内容の説明会を実施した。また、「データ科学と社会Ⅱ」の学外講師に対しては、学生に講義を行う上での注意点等について、研修会を実施した。

また、授業期間終了後には、授業を担当した教員および学外講師にご参加いただいて、情報交換会を行い、授業に対しての様々な気づき等について意見交換をする場を設けた。

(2) 運動健康科学部会（部会長：創成科学研究科（農学） 宮田 浩文）

運動健康科学における運動実習（筋力トレーニング実習およびステップ実習）の授業参観をTA、SAと一緒にいき、授業運営について意見交換を行った。

(3) 英語部会（部会長：人文学部 太田 聡）

講師を招いて皆が揃って話を聴く、というようなタイプのFD活動は行っていない。しかしながら、次年度のTOEIC対策を含めた授業のやり方について繰り返し協議したことや、授業評価アンケートの改定に合わせて「よい授業とはどのようなものか」について意見を交わしたことや、障害のある学生への接し方のことを何度も話し合ったりしたことが、そのまま部会員のFD活動になったと思っている。また、ALCのNetAcademyNEXTに関する説明会を2月に開いた際には、多くの非常勤講師にも出席していただくことができたので、この機会に合わせて、山口大学のTOEICに関する目標や、新年度からの授業の変更点や、成績評価の方法などについて説明した。また、障害のある学生への対応方法などについての説明も行った。常勤の教員たちにとっては、それほど新しい情報はなかったかもしれないが、非常勤講師ならびに新任助教の方々には、よいFDの機会となったようである。そして現に、「今までは、なぜそうしなくてはならないのかが分からないまま授業を行っていたが、今回、事情が理解できてよかったです。こうした機会を作っていただいたことに感謝します」といったメールも非常勤講師の先生からいただいた。

授業外学習時間のデータは、「リモートコンテンツをブロックしました」と表示されて、見るができなかった。おそらく現時点での授業外学習時間は十分ではあるまい。しかしながら、新年度からはE-learningの進捗状況に応じて加点する評価基準になったので、授業外学習時間は確実に増えるかと推察できる。

同じ授業科目であっても試験の難易度等が違いすぎることは英語科目の場合にもあった。そこで、次年度の時間割作成の際に、あまりに厳しい評価をする教員は再履修クラスの担当から外す、などの配慮を行った。

(4) 数学部会（部会長：創成科学研究科（工学） 西山 高弘）

学生の授業外学習時間のデータによると、半数を超える学生が週2時間程度以上学習しているので、授業外学習時間はある程度確保されている。一方で、2割程度の学生は週1時間も学習していないことから、更なる取り組みが必要と考えられるが、現在のところ、分科会としての具体策は無く、各教員に任されている状況である。

(5) 物理学部会 (部会長：創成科学研究科 (工学) 仙田 康浩)

物理学の講義 (物理学Ⅰ、Ⅱ) の一部で集団討論を取り入れた講義が実施された。従来の受け身の講義スタイルから受講者が能動的に講義に参加する試みであり、今後はこの講義スタイルによる学習意欲や成績の変化などを評価していきたい。

なお、実験以外の講義 (物理学Ⅰ、物理学Ⅱ) に関しては、6割以上の学生が1時間以上の授業外学習をしている。物理学の習得には自習が欠かせないので、今後も引き続き担当教員に学生の授業外学習時間の確保を促していく。

物理学ⅠとⅡの成績分布はクラス間では違いは見られるものの、学部・学科内では公正を欠くものではない。

(6) 化学部会 (部会長：創成科学研究科 (工学) 笠谷 和男)

この5年間化学実験では、保護メガネの着用の徹底と、化学系学科は白衣着用を指導している。

化学実験のテキスト改訂を長年非常勤講師が実質中心になってやってきたが、来年度末で定年が適用されることから今回の改訂を最後に今後は常勤教員を中心に改訂していくことになる。

(7) 地球科学部会 (部会長：創成科学研究科 (理学) 大和田 正明)

地学教育の中でも重要な位置を占める野外実習に関して、授業研究会を2018年11月28日と2019年1月22日の2回実施した。具体的な内容は以下の通り。

- 野外実習 (3年生、4単位) は、地球圏システム科学科地域環境科学コースが必修科目、環境物質科学コースが選択科目となっているが、例年25名程度受講している。
- 特に野外での実習のため、安全対策や地域住民とのコミュニケーションもシラバスに記載している。
- FDでは、発表会に出席し、履修生たちの発表を聞いた上で、質疑応答が進められた。発表会自体を第1回目の授業研究会と位置付けている。第1回の研究会では、1) 発表技術、2) 発表会の進め方、3) 実習の目標に対する達成度、4) 発表者以外の履修生がどの程度発表会に参加しているか、そして5) 実習以外の講義や実験で学んだことをどの程度反映しているか、など、あらかじめ提案された項目について各自 (レビュアー) が評価した。
- 第2回授業研究会では、各自の評価書を取りまとめがあらかじめレビュアーへ配布され、その資料に基づいて、意見を交換した。特に、改善が求められる点と改善の方針を中心に議論された。調査は4~5名1班で実施する。特に大きな課題は、班員の中の理解度に差ができてしまうことで、これらを改善するため、情報を班内で共有するため、まとめの時間にお互いが疑問点を出し合えるような環境と時間を取ることが重要との意見が出された。班内での情報共有はこれまでも同じ野外実習の課題として出されていたが、学生側と教員側の間に共通する意識が定着しつつあり、今後さらに努力を積み重ねることで改善できると考えている。

(8) 日本語部会 (部会長：留学生センター 宮永 愛子)

特にFD研修という名目で活動を行っているわけではないが、学期終了時と授業期間中に数回、部会構成員が集まり、最近の日本語教育の動向や、最新の教材、授業方法についての情報交換を行っている。今後は、関連学会で、実践研究の発表などを行った際には、部会でも報告会を行い、情報を共有できる機会を設けたいと考えている。

(9) 日本国憲法部会 (部会長：教育学部 松原 幸恵)

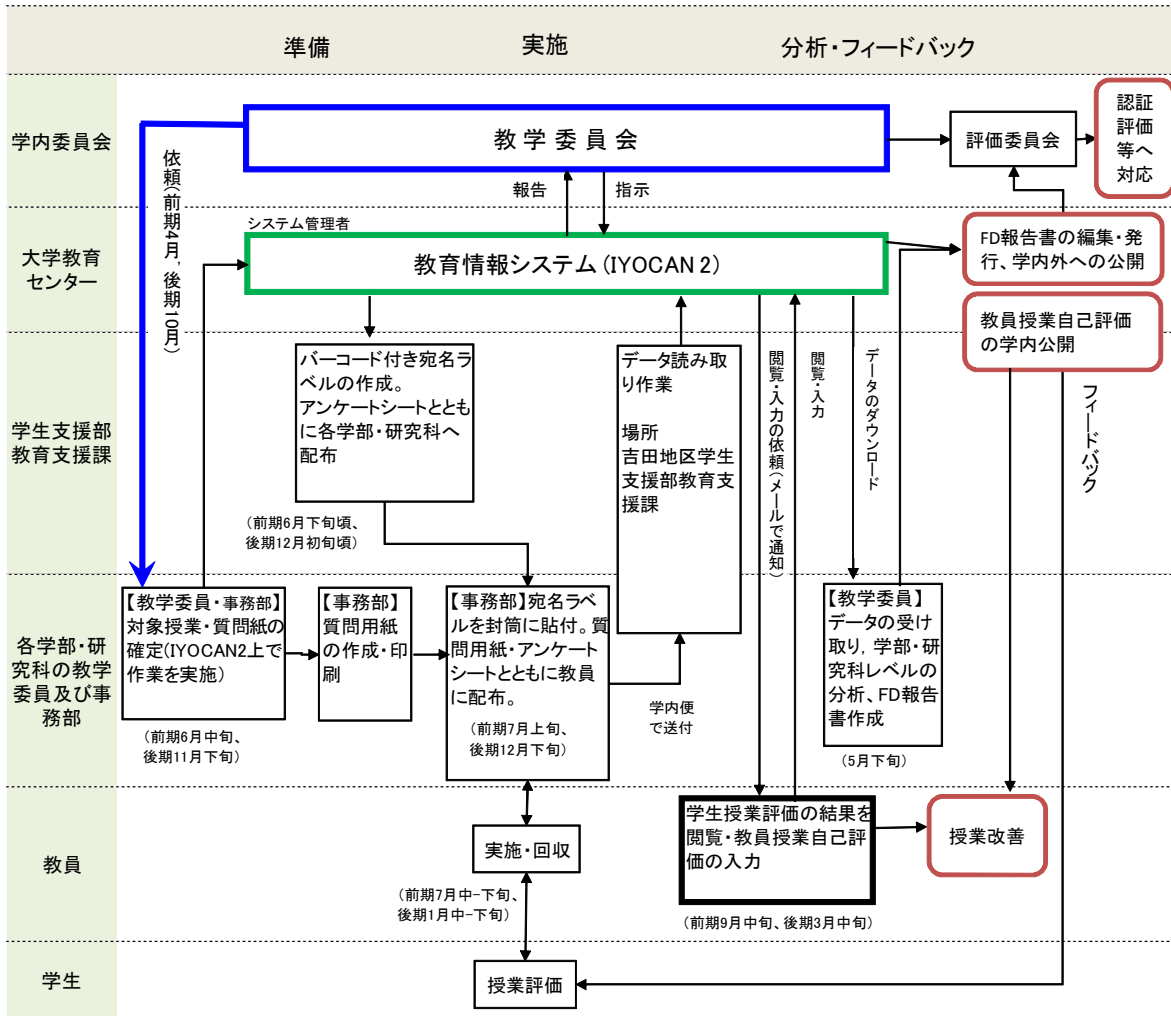
制度化したFD活動はないが、学生授業評価のデータを見る限り、授業外学習時間の一層の確保に向けた取り組みが、今後の課題として考えられる。

第3章 学生授業評価及び教員授業自己評価

第1節 実施方法・実施状況

(1) 実施方法

1) 教育情報システム(IYOCAN)による学生授業評価・教員授業自己評価



※教育情報システム(IYOCAN2)は授業評価のデータベースであり、共通教育、医学部の除く6学部、一部の大学院研究科の評価を扱っている。医学部は独自のシステムで実施しているためこれには含まれない。

山口大学では、平成17年度前期より、旧大学教育職員能力開発(FD)委員会(～2008年3月)。現在は教学委員会のもとで、学生による授業評価(以下、学生授業評価)および教員による授業自己評価(以下、教員授業自己評価)を全学的にスタートした。平成16年度までは7学部・共通教育でそれぞれ独自に学生授業評価を実施してきたが、効率化・簡便化を図る必要性や、認証評価への対応の必要性から、大学教育センターがこの実施業務を引き受け、現在まで統一的に実施している(医学部を除く)。下図はその一連の流れである。マークシートに記入された回答は教育情報システム「IYOCAN」(Information of YOur Course

ANalysis の略、いよかんと呼称)に蓄積され、教員は Web 上で結果の確認と自己評価を行っている。2010 年度からは新データベース「IYOCAN 2」を導入し、教務情報の新システム「修学支援システム」と連動することで様々な情報を授業評価に直接的に利用することが可能となった。

なお、以下に述べるように、医学部（医学科、保健学科）は全学に先駆けて Web による授業評価を実施しており、独自のデータベースを構築しているため IYOCAN は利用していない。

● 授業評価の閲覧・入力画面（大学教育センターホームページ上に配置）



2) 医学部医学科「医学教育総合電子システム eYUME」

平成 13 年度より、医学教育センターが管理する「医学教育総合電子システム eYUME」上で毎回の授業ごとにオンライン授業評価（進行評価）が実施されている。また、ユニット終了時にはマークシート方式による「ユニット学生振り返り評価」「ユニット責任者振り返り評価」が実施されている。その結果は同システム上で公開されている。

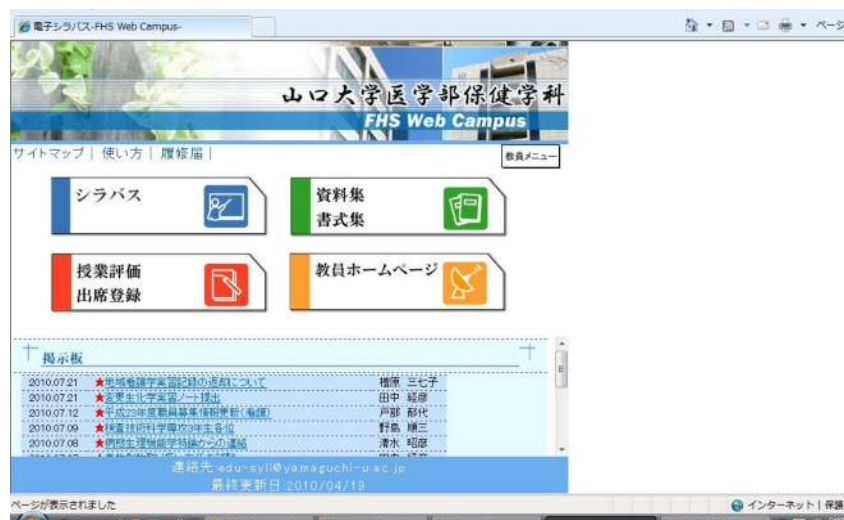
● 医学部医学科 医学教育総合電子システム



3) 医学部保健学科「山口大学医学部保健学科授業支援システム」

保健学科ホームページ上から「山口大学医学部保健学科授業支援システム」にログインし、教員が登録した授業評価メニューや出席確認メニューに対して、学生が教員から告げられた期間（時間）内にアクセスしてオンライン授業評価を行っている。

● 医学部保健学科 授業支援システム



(2) 質問紙の種類

質問紙は各学部・研究科ごとに異なっている。また、授業区分（講義、演習・実験・実習等）ごとに分かれており、学部・研究科独自の質問項目も設けられている（詳しくは4章以降の各学部・研究科のFD報告を参照のこと）。これは各学部・研究科のニーズに合った授業評価を実施するためである。

なお、本学のシラバスでは下表のように様々な授業区分が設けられているが、用いられる質問紙は大まかに分類して以下のようになっている(医学部を除く)。

シラバスの授業区分	質問紙の種類
「講義」の場合	講義用
「講義と演習」の場合	講義用
「講読」の場合	講義用
「演習」の場合	演習・実験・実習用
「実験・実習」の場合	演習・実験・実習用
「その他」の場合	講義用

共通教育では、上記に加えて、外国語系列の授業でシラバスの授業区分に関わらず「語学用」「TOEIC 準備用」の質問紙が使用されている。この2つの質問紙は基本的には「講義用」と同じであるが、授業技術を尋ねる質問の内容が異なっている。

シラバスの授業区分	質問紙の種類
共通教育・外国語系列 「講義」の場合	語学用（TOEIC 準備のみ TOEIC 準備用を使用）
共通教育・外国語系列 「演習」の場合	語学用

※「語学用」の質問紙は農学部専門授業の外国語科目でも使用されている

（３）質問項目

上述のように学部・研究科ごとに質問紙・質問項目は異なっているが、平成 17 年度からの統一的な実施に際して、全学共通の質問項目が 5 項目設定され、上記の「講義用」「演習・実験・実習用」「語学用」「TOEIC 準備用」の各質問用紙に盛り込まれた。この共通質問項目の導入によって山口大学全学の傾向の分析を行うことが可能となった。ただし、各学部・研究科では、共通質問項目に独自の質問項目を加えたオリジナルの質問紙を作成することができるので、これまで実施してきた学生授業評価との経年比較を行うことも可能となっている。

全学共通質問項目

- ①<授業外学習時間> あなたはこの授業のために授業時間以外にどのくらいの学習（予習・復習・宿題や関連した学習）を行いましたか？授業1コマ当たりの平均で教えてください
- ②<学習目標達成> あなたはシラバスに記載された学習目標を達成しましたか？
- ③<理解> あなたは授業の内容を理解しましたか？（講義、語学、TOEIC 準備）、内容理解や技能のレベルは向上しましたか？（演習、実験・実習）
- ④<満足> この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？
- ⑤<出席> あなたはこの授業にどのくらい出席しましたか？

（４）実施対象授業

1) 学部

基本的に全ての授業で実施しているが、授業評価の対象として適さない科目(例：教育実習、卒業論文等)については実施対象から除いている(詳しくは第 2 節「学生授業評価の結果について(全学)」の表を参照のこと)。なお、教員授業自己評価については学生授業評価を実施した授業を対象としている。

学生による授業評価実施要項（H17ー）

	実施対象科目	授業規模	その他
全学部 (学士課程)	全て。ただし、学生授業評価の対象として適さない授業科目については実施対象から除くことができる。	規模に関係なく全ての授業で実施。ただし回答者が 5 名未満の場合は授業担当者に結果を開示しないものとする。	非常勤講師についても実施

※評価を実施しない授業科目名は一覧にして質問項目とともに大学教育センターに情報を提供。

2) 研究科

平成 18 年度より大学院における授業評価は、a)学生授業評価は各研究科で最適な方法を決定・実施する(IYOCAN を利用してもよいし、自由記述形式等の独自の方式でもよい)、b)その代わり、学生授業評価の実施・非実施にかかわらず教員授業自己評価はすべての授業で実施し、授業の振り返りを通じた授業改善を促す、という方式で実施している。

●大学院・学生授業評価の実施方法 (H18-)

	実施対象科目	実施方法	その他
全研究科 (修士)	学生授業評価の対象として適する授業科目全て。	各研究科で選定した評価対象授業については、各研究科独自の方法で授業評価を実施する。学士課程と同様の方法を用いる場合は「いよかん」を利用できる。	独自で実施する場合は、質問項目の選定も自由とする

※実施方法および対象授業については大学教育センターに情報を提供。

●大学院・教員授業自己評価の実施方法 (H18-)

	実施対象科目	実施方法	その他
全研究科 (修士)	全て	学生授業評価の実施・非実施にかかわらず、全ての授業で自己評価を実施する。自己評価は「いよかん」で行う。 なお、評価項目については学士課程に準じるが、【28. 授業実施上の工夫】(10 項目)は任意とする。	

※授業形態の特殊性等の理由から学生授業評価を実施しない授業についても、教員自身による授業の振り返りを通じた授業改善を促す観点から自己評価については実施する。

なお、平成 23 年度前期からは以下のように変更することが平成 23 年度第 1 回教学委員会(平成 23 年 4 月 27 日開催)で承認された。

大学院における教員授業自己評価の対象授業選定方法の変更について(案)

大学教育センター

この度、大学院における教員授業自己評価の対象授業選定方法を以下のように変更する。

大学院・教員授業自己評価の対象授業

(現) 全て

(新) 学生授業評価と同じ (IYOCAN2 を利用する研究科)

対象として適する授業科目 (独自の方法で実施する研究科)

(理由)

現在、大学院における教員授業自己評価は、学生授業評価の実施・非実施にかかわらず「全て」の授業で実施されている (平成 17 年度第 10 回 FD 委員会承認)。これは、当時、大学院(修士)の授業は規模・形態の面で学生授業評価に適さないものが多いという意見が多数であったため、少なくとも教員授業自己評価だけは全ての授業で実施する、という方針が承認されたものであった。

しかし、現在、すべての研究科では学生授業評価が導入されており、修士論文に関係する科目(課題研究、演習、セミナー等)、集中講義、実習科目など、一部の科目を除いた大多数の授業で評価が実施されている。従って、これまでのように教員授業自己評価を一律に全て実施する必要はなくなっている。

加えて、修士論文に関係する科目や実習科目などは授業の形態上「担当時間数(分)」が入力しにくい面があることが指摘されている。

よって、今回、上記のように選定方法の変更を提案したい。

(5) 学生授業評価の結果の閲覧方法、教員授業自己評価の実施方法について

これまで各学部・共通教育では個々の教員への学生授業評価の結果の通知を印刷物で行ってきた。しかし、これは非常に手間がかかるため、より効率的で効果的な方法として、Web上での閲覧システムの導入が共通教育は平成16年度から、また専門教育は平成17年度から導入された(医学部医学科は平成13年度より)。

教員は大学教育センターのホームページにアクセスし、公式メールアドレスとパスワードを入力して教育情報システム「IYOCAN」にログインし、学生授業評価の閲覧と自己評価の入力を行うことができる。Web上では過去の評価結果も閲覧でき、PDFでダウンロードすることもできる。また、非常勤講師も学外からデータベースにアクセスできるようになっている。

なお、学生授業評価の回答者が5人未満の場合、集計結果は教員には開示されない。これは学生が特定される危険性を避けるためである。

閲覧・入力の手順で工夫したことは、学生授業評価の結果を見る前に、まず教員授業自己評価を行う点である。この目的は、自己の認識と学生による評価の「ずれ」を確認するためである。教員はこのずれを確認した上で、授業の反省点・改善点を記入することになっている。

(6) 学生への結果のフィードバックについて

平成18年度後期より、学生への結果のフィードバックの第一歩として教員授業自己評価の一部を学内公開した。具体的には【30.授業実施上の問題点・改善点(自由記述)】をWeb上で公開した。

●教員授業自己評価の学内公表用画面



The screenshot shows a web browser window displaying the IYOCAN2 system. The page title is "山口大学授業評価システム IYOCAN2". The main content area lists several courses with their respective feedback comments:

- 1002323001 美術鑑賞と作品記述 藤川 哲**
学生授業評価の結果は概ね好評だったと言えます。受講生の皆さん、有り難うございます。とても嬉しいです。評価指数による多角形状のグラフを見ると、唯一「家庭学習時間」の項目が2.5よりやや下と、大きくへこんでいる形になっていました。しかし、この評価項目で他と同じく4～5の指数を得るためには、毎回3時間以上かかるような宿題を課さなければならなりません。ちょっと考えられません。むしろ1コマ90分の授業に対して、同程度の家庭学習時間が望ましい、という話を聞いたことがあります。したがって、新年度は、「30分未満」と答えた48.4%の学生さんたちの層から、少しでも多く「30分～50分程度」の家庭学習を行う層へと移行してもらえよう、復習や発展学習の指示に心を配ります。
- 1002331027 経済学 兵藤 隆**
「新聞を読む習慣を」という学習目標を達成するにはまだまだ高いハードルがある。若い学生たちの社会に対する関心度が低すぎるということもあるが、教員側もさらなる努力が必要であると感じた。
- 1002331032 産業倫理 笠谷 和男**
新学科として最初の年であり、また、非常勤講師の方の入院で急速代理授業を行うなど、万全の講義が行えたわけではない。また、3年生の後期で一部の学生は就職活動のため休みがちであった。次は、学生の理解を促す工夫を重ねていきたい。
- 1002331035 地理学 荒木 一視**
ディスカッションが特定の学生に偏る。予習の指示はしているのだが決して十分ではない。
- 1002331036 産業倫理 佐伯 隆**

The bottom of the page shows a status bar with "ページが表示されました" and "インターネット | 保護モード: 有効".

第2節 授業評価の結果について(全学)

(1) 学生授業評価の実施状況

今年度も山口大学ではすべての学部・研究科(修士課程)において学生授業評価が実施された。次頁に掲載されている「2018年度山口大学学生授業評価および教員授業自己評価結果一覧(経年変化)」(2019年9月13日現在)は、教育情報システム(IYOCAN)で処理された学生授業評価と教員授業自己評価、および IYOCAN を利用しないで独自に授業評価を集計している学部・研究科のすべての授業評価の実施率をまとめたものである。また、学生授業評価の回答数については一覧表の後に別表(2014年度以降の経年変化)として掲載した。

2018年度の学生授業評価はすべての学部・研究科(修士レベル)・共通教育で実施され、回答数合計は118,970人(※IYOCANのみ)であった。

実施率が最も高かったのは医学部医学科(100.0%)、続いて高かったのは理学部(95.2%)、国際総合科学部(94.5%)であった。学部・研究科で全体的に昨年度より増加する結果となっており、改善充実が見られる。

(2) 教員授業自己評価の実施状況

教員授業自己評価は、医学部保健学科を除くすべての学部・研究科等で実施された。教員授業自己評価の実施率が最も高かったのは医学部医学科(100.0%)、医学部保健学科(73.8%)であった。多くの学部・研究科で昨年度より減少する結果となっており、改善充実が求められる。

2018年度 山口大学 学生授業評価および教員授業自己評価 結果一覧 (経年変化)

2019年09月13日 現在

<学部>学生授業評価

データベース	学部等	学生授業評価 (2013年度)	学生授業評価 (2014年度)	学生授業評価 (2015年度)	学生授業評価 (2016年度)	学生授業評価 (2017年度)	学生授業評価 (2018年度)	対象授業
I Y O C A N 2	共通教育	90.9%	91.0%	86.6%	84.8%	89.7%	91.7%	全て
	人文学部	89.3%	90.1%	82.8%	84.3%	79.7%	80.5%	卒業論文、集中講義、一部の演習を除く
	教育学部	82.1%	84.7%	81.0%	82.6%	75.5%	76.1%	卒業研究、教育実習、事前・事後指導、介護等体験実習を除く
	経済学部	83.3%	81.6%	81.4%	79.3%	81.4%	81.4%	卒業論文演習、演習I・IIを除く
	理学部	93.2%	95.5%	89.3%	93.6%	92.5%	95.2%	特別研究、集中講義、一部の演習等を除く
	工学部	85.2%	88.3%	88.5%	90.1%	85.2%	89.9%	卒業論文、国際実習、社会活動実習、インターシップを除く
	農学部	93.0%	94.7%	89.2%	87.7%	93.2%	86.6%	卒業論文、集中講義、特別演習、専攻演習、インターシップ等を除く
	共同獣医学部	92.0%	42.9%	90.4%	82.8%	88.0%	89.2%	卒業論文、集中講義、特別演習、専攻演習、インターシップ等を除く
	国際総合科学部	-	-	76.2%	89.9%	95.0%	94.5%	
独自	医学部(医学科)	98.8%	97.7%	91.6%	93.3%	92.7%	100.0%	自己開発コース、臨床実習1、臨床実習2、を除く
独自	医学部(保健学科)	97.5%	86.5%	72.3%	83.8%	81.1%	74.8%	授業評価の必要なものに限定

<学部>教員授業自己評価

データベース	教員授業自己評価入力率 (2013年度)	教員授業自己評価入力率 (2014年度)	教員授業自己評価入力率 (2015年度)	教員授業自己評価入力率 (2016年度)	教員授業自己評価入力率 (2017年度)	教員授業自己評価入力率 (2018年度)	対象授業
I Y O C A N 2	32.6%	39.9%	41.5%	34.8%	30.9%	29.1%	全て
	39.1%	44.7%	43.6%	31.1%	33.2%	32.7%	学生授業評価と同じ
	44.4%	50.1%	46.6%	40.1%	56.3%	46.6%	学生授業評価と同じ
	19.3%	38.2%	62.0%	61.7%	40.7%	33.8%	学生授業評価と同じ
	42.7%	49.4%	58.3%	35.9%	38.4%	69.0%	学生授業評価と同じ
	23.9%	35.2%	31.0%	27.1%	27.7%	10.3%	学生授業評価と同じ
	54.7%	73.3%	92.6%	57.3%	60.9%	64.5%	学生授業評価と同じ
	60.0%	47.1%	98.3%	97.1%	48.6%	19.2%	学生授業評価と同じ
	-	-	88.7%	70.4%	79.9%	49.8%	学生授業評価と同じ
独自	92.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	全て
独自	97.5%	62.9%	51.1%	68.0%	66.4%	73.8%	-

<大学院>学生授業評価

データベース	学部等	学生授業評価 (2013年度)	学生授業評価 (2014年度)	学生授業評価 (2015年度)	学生授業評価 (2016年度)	学生授業評価 (2017年度)	学生授業評価 (2018年度)	対象授業
I Y O C A N 2	技術経営研究科	74.2%	69.6%	58.3%	53.6%	67.9%	100.0%	全て
	医学系研究科	54.7%	54.7%	51.8%	72.6%	65.8%	93.6%	特別研究、オムニバスを除く
	教育学研究科	64.7%	76.7%	66.3%	67.5%	62.4%	71.4%	課題研究、総合研究、実習等を除く
	経済学研究科	42.9%	30.0%	24.2%	8.1%	42.3%	21.0%	演習、セミナーを除く
	創成科学研究科	-	-	-	71.6%	70.3%	76.5%	
	教育学研究科(専門職学位課程)	-	-	-	95.5%	78.5%	83.9%	
独自	人文科学研究科	50.0%	54.5%	21.4%	87.5%	50.0%	30.0%	半期の授業全体に対する評価を実施しており、授業ごとには実施していない。後期は実施せず。

<大学院>教員授業自己評価

データベース	教員授業自己評価入力率 (2013年度)	教員授業自己評価入力率 (2014年度)	教員授業自己評価入力率 (2015年度)	教員授業自己評価入力率 (2016年度)	教員授業自己評価入力率 (2017年度)	教員授業自己評価入力率 (2018年度)	対象授業
I Y O C A N 2	77.4%	69.6%	66.7%	14.3%	28.6%	16.7%	全て(ただし2011年度より学生授業評価と同じ)
	28.4%	22.1%	81.6%	15.9%	14.3%	0.0%	〃
	41.2%	47.3%	53.6%	40.2%	60.9%	47.8%	〃
	19.5%	35.0%	45.6%	58.6%	34.2%	17.9%	〃
	-	-	-	32.1%	27.7%	26.1%	〃
	-	-	-	59.1%	67.7%	23.0%	〃
独自	42.9%	33.3%	41.4%	40.9%	22.2%	20.0%	〃

なお、理工学・医学系研究科の博士後期課程、および連合獣医学研究科、連合農学研究科、東アジア研究科(すべて博士後期課程)は実施対象から除いている。

学生授業評価 回答数 (IYOCAN2 集計分のみ)

回答数									
	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2014)	43,813			2,140	6,557				52,510
共通教育(2015)	42,894			2,207	6,109				51,210
共通教育(2016)	43,021			2,168	6,228				51,417
共通教育(2017)	40,142			2,101	9,661				51,904
共通教育(2018)	39,575			2,033	9,481				51,089
人文(2014)	5,316	634	1,434				255		7,639
人文(2015)	5,183	556	1,205				613		7,557
人文(2016)	5,644	631	1,386				374		8,035
人文(2017)	4,233	819	1,262				627		6,941
人文(2018)	4,500	1,010	1,171				707		7,388
教育学部(2014)	7,925		778	642			3,032		12,377
教育学部(2015)	6,895		851	584			3,009		11,339
教育学部(2016)	6,330		783	650			3,047		10,810
教育学部(2017)	5,732		743	615			3,090		10,180
教育学部(2018)	6,147		713	646			2,673		10,179
経済(2014)	8,894								8,894
経済(2015)	9,147								9,147
経済(2016)	9,696								9,696
経済(2017)	8,334								8,334
経済(2018)	7,654								7,654
理(2014)	5,042		469	490					6,001
理(2015)	4,710		392	495					5,597
理(2016)	4,429		319	431				296	5,475
理(2017)	4,565		347	430				309	5,651
理(2018)	4,448		373	409				233	5,463
工(2014)	14,161		1,576	2,105				121	17,963
工(2015)	15,052		1,714	2,084					18,850
工(2016)	14,270		1,729	2,016					18,015
工(2017)	13,978		1,768	1,829					17,575
工(2018)	14,543		1,650	2,104					18,297
農(2014)	3,646			993					4,639
農(2015)	3,197			510					3,707
農(2016)	3,026			534					3,560
農(2017)	3,460								3,460
農(2018)	3,495								3,495
共同獣医(2014)	476			115					591
共同獣医(2015)	1,629			483					2,112
共同獣医(2016)	1,677			347			302		2,326
共同獣医(2017)	1,896			608					2,504
共同獣医(2018)	2,061			727					2,788
国際総合(2015)	4,298								4,298
国際総合(2016)	6,827								6,827
国際総合(2017)	8,137								8,137
国際総合(2018)	7,929								7,929
大学院・理工(2014)	2,737								2,737
大学院・理工(2015)	2,605								2,605
大学院・創成科学(2016)	3,571								3,571
大学院・創成科学(2017)	3,492								3,492
大学院・創成科学(2018)	3,399								3,399
大学院・技術経営(2014)								269	269
大学院・技術経営(2015)								312	312
大学院・技術経営(2016)								215	215
大学院・技術経営(2017)								238	238
大学院・技術経営(2018)								412	412
大学院・医学系(2014)	175		97					54	326
大学院・医学系(2015)	300		74						374
大学院・医学系(2016)	148		38						186
大学院・医学系(2017)	79		14						93
大学院・医学系(2018)	135								135
大学院・教育学(2014)	117		86	1			126		330
大学院・教育学(2015)	218		78	13			138		447
大学院・教育学(2016)	179		79	12			54	71	395
大学院・教育学(2017)	236		52				26		314
大学院・教育学(2018)	213		33				44		290
大学院・教育学・専門職(2017)	276								276
大学院・教育学・専門職(2018)	252								252
大学院・経済学(2014)								166	166
大学院・経済学(2015)								96	96
大学院・経済学(2016)	37								37
大学院・経済学(2017)	173								173
大学院・経済学(2018)	200								200
合計(2014)	92,302	634	4,440	6,486	6,557	0	3,413	610	114,442
合計(2015)	96,128	556	4,314	6,376	6,109	0	3,760	408	117,651
合計(2016)	98,855	631	4,334	6,158	6,228	0	3,777	582	120,565
合計(2017)	94,733	819	4,186	5,583	9,661	0	3,743	547	119,272
合計(2018)	94,551	1,010	3,940	5,919	9,481	0	3,424	645	118,970

(3) 全学共通の質問項目に関する分析

次に、全学共通質問項目である5項目を取り上げ、各学部・研究科ごとに経年変化をみていく。各質問項目の選択肢1～5の平均値を算出し、授業区分別（講義、講読、演習、実験・実習、語学）に結果を整理した。また、全体平均については図にも示した。

なお、大学院については、IYOCANを利用した学生授業評価を行っている研究科とそれ以外の独自の方法で実施している研究科が混在しているため、ここではIYOCANを利用している理工学研究科、技術経営研究科、医学系研究科、教育学研究科、経済学研究科のみの結果を整理した。ただし、教育学研究科については共通質問項目「満足」のデータのみ尋ねているため他の項目はデータが存在しない。

(1) 共通質問項目1「授業外学習時間」

Q. あなたはこの授業において、授業外学習(予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強)をどれくらい行いましたか？総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。

1. 3時間程度または以上、2. 2時間程度、3. 1時間程度、4. 30分～50分程度、5. 30分未満

共通質問項目1は、授業1回あたりの授業外学習時間を尋ねたものである。平均値は1)3時間程度または以上を5点、5)30分未満を1点として授業区分別の平均値を算出した。

2018年度の平均値データは2017年度の平均値と比べると、学部段階では、共通教育、教育学部、経済学部、農学部で増加傾向にある一方、人文学部、工学部、共同獣医学部で減少傾向にある。特に、共通教育は過去5年間で最高の数値を示している。なお、各学部・研究科とも講義形式の授業は授業外学習時間が短く、演習や実験・実習の授業の方が授業外学習時間は長い傾向にあるのは昨年度までと同傾向である。

(2) 共通質問項目2「学習目標達成」

Q. あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？

1. そう思う、2. ややそう思う、3. どちらとも言えない、4. あまりそう思わない、5. そう思わない

共通質問項目2はシラバスに記載された学習目標を学生自身が達成できたかどうかについて尋ねたものである。山口大学はシラバスに観点別の到達目標を記載する方式となっており、「知識・理解の観点」「思考・判断の観点」「関心・意欲の観点」「態度の観点」「技能・表現の観点」の5つのうちから教員が用いる観点を選び、それぞれについて具体的な到達目標を学生に示すことになっている。これらの学習目標を達成できたかどうかについて、「1.そう思う」を5点、「5.そう思わない」を1点として平均値を授業区分別に算出した。

今年度はほとんどの学部・研究科で平均値が現状維持又は上昇している。2009度から修学支援システムが新たに導入されたため、受講登録の際にweb上でシラバスを読み、各授業の到達目標を理解して授業に臨んでいる者が増えていると推察される。授業の到達目標を知り、どのような成績評価方法で評価を受けるのかを事前に知って受講するのとしないうちでは大きな差がでる。新システムの導入が学生の受講態度や理解度にいい意味で影響を及ぼしているとするれば喜ばしいことである。

(3) 共通質問項目3 「理解」

Q. あなたは、この授業の内容を理解したと思いますか？

1. そう思う、
2. ややそう思う、
3. どちらとも言えない、
4. あまりそう思わない、
5. そう思わない

共通質問項目3は授業の理解度について尋ねた設問である。多くの学部・研究科で昨年度を上回っており、特に共通教育は昨年度に比べ、上昇している。これは多くの学生が「そう思う」「ややそう思う」といった肯定的な回答をしていることを意味しており、授業担当の先生方の努力が実っていると考えられる。共通教育という大人数の授業が多い中でこのように高い理解度であることは喜ばしい状況にあるといえよう。

(4) 共通質問項目4 「満足」

Q. この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？

1. そう思う、
2. ややそう思う、
3. どちらとも言えない、
4. あまりそう思わない、
5. そう思わない

共通質問項目4は授業の満足度について尋ねた設問である。多くの学部・研究科で平均値が上昇しており、概ね一定の満足度が得られていることが確認できる。学部段階では、すべての学部で高い数値を示している。

なお、講義よりも実験・実習や演習の授業の方が平均値は高い傾向にあるのは例年どおりである。

(5) 共通質問項目5 「出席」

Q. あなたは、この講義にどれくらい出席しましたか？（括弧内は、15回講義の場合の出席回数参考値）

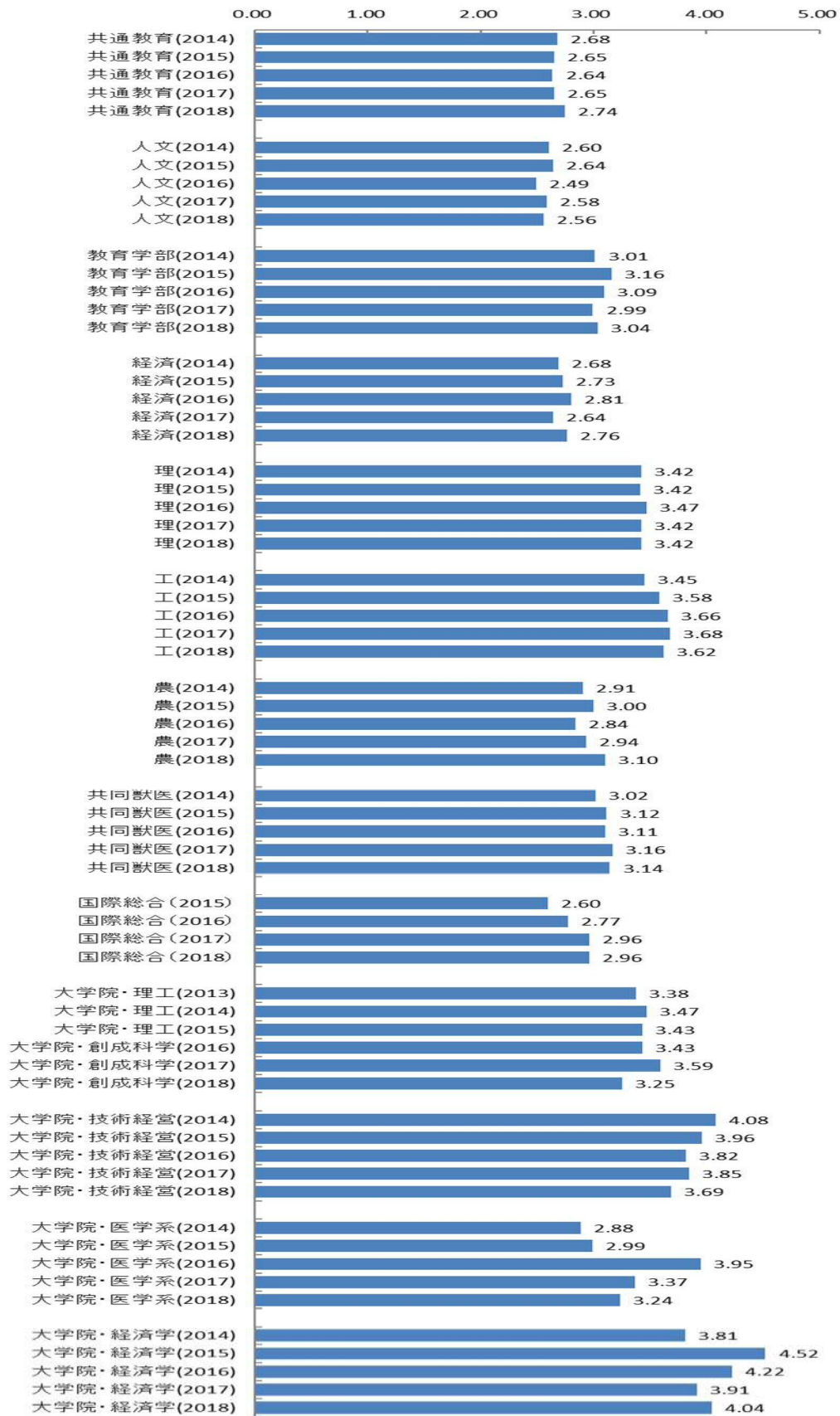
- | | | |
|-----------------|-------------------|------------------|
| 1. 90%以上（14回以上） | 2. 80～90%（12～13回） | 3. 60～80%（9～11回） |
| 4. 40～60%（6～8回） | 5. 40%未満（6回未満） | |

共通質問項目5は授業への出席状況について尋ねた設問である。本質問も選択肢1の90%以上を5点、選択肢5の40%未満を1として計算を行った。すべての学部・研究科で4.5を超える高い平均値となっている。全体的にみて山口大学の学生の授業出席率は非常に良好であるといえる。

< 全学共通質問項目 1 授業外学習時間 >

授業外学習時間	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2014)	2.54			3.70	3.23				2.68
共通教育(2015)	2.52			3.72	3.20				2.65
共通教育(2016)	2.49			3.75	3.24				2.64
共通教育(2017)	2.49			3.80	3.04				2.65
共通教育(2018)	2.60			3.93	3.09				2.74
人文(2014)	2.32	3.22	3.27				3.15		2.60
人文(2015)	2.27	3.25	3.17				4.23		2.64
人文(2016)	2.18	3.31	3.18				3.15		2.49
人文(2017)	2.22	3.35	3.06				3.08		2.58
人文(2018)	2.18	3.26	3.00				3.18		2.56
教育学部(2014)	2.88		3.39	3.55			3.14		3.01
教育学部(2015)	3.04		3.39	3.67			3.27		3.16
教育学部(2016)	2.92		3.42	3.38			3.32		3.09
教育学部(2017)	2.90		3.39	3.40			2.99		2.99
教育学部(2018)	2.88		3.52	3.31			3.19		3.04
経済(2014)	2.68								2.68
経済(2015)	2.73								2.73
経済(2016)	2.81								2.81
経済(2017)	2.64								2.64
経済(2018)	2.76								2.76
理(2014)	3.33		3.65	4.18					3.42
理(2015)	3.31		3.72	4.22					3.42
理(2016)	3.39		3.84	4.16				3.36	3.47
理(2017)	3.33		3.91	4.11				3.37	3.42
理(2018)	3.31		3.81	4.15				3.71	3.42
工(2014)	3.34		3.64	4.11				3.27	3.45
工(2015)	3.47		3.67	4.30					3.58
工(2016)	3.55		3.87	4.26					3.66
工(2017)	3.58		3.83	4.25					3.68
工(2018)	3.51		3.95	4.07					3.62
農(2014)	2.92			2.87					2.91
農(2015)	2.97			3.20					3.00
農(2016)	2.78			3.19					2.84
農(2017)	2.94								2.94
農(2018)	3.10								3.10
共同獣医(2014)	3.06			2.84					3.02
共同獣医(2015)	3.13			3.07					3.12
共同獣医(2016)	3.11			3.07			3.13		3.11
共同獣医(2017)	3.22			2.99					3.16
共同獣医(2018)	3.27			2.78					3.14
国際総合(2015)	2.60								2.60
国際総合(2016)	2.77								2.77
国際総合(2017)	2.96								2.96
国際総合(2018)	2.96								2.96
大学院・理工(2013)	3.38								3.38
大学院・理工(2014)	3.47								3.47
大学院・理工(2015)	3.43								3.43
大学院・創成科学(2016)	3.43								3.43
大学院・創成科学(2017)	3.59								3.59
大学院・創成科学(2018)	3.25								3.25
大学院・技術経営(2014)								4.08	4.08
大学院・技術経営(2015)								3.96	3.96
大学院・技術経営(2016)								3.82	3.82
大学院・技術経営(2017)								3.85	3.85
大学院・技術経営(2018)								3.69	3.69
大学院・医学系(2014)	2.26		3.39					3.98	2.88
大学院・医学系(2015)	2.91		3.32						2.99
大学院・医学系(2016)	3.88		4.24						3.95
大学院・医学系(2017)	3.46		2.86						3.37
大学院・医学系(2018)	3.24								3.24
大学院・経済学(2014)								3.81	3.81
大学院・経済学(2015)								4.52	4.52
大学院・経済学(2016)	4.22								4.22
大学院・経済学(2017)	3.91								3.91
大学院・経済学(2018)	4.04								4.04

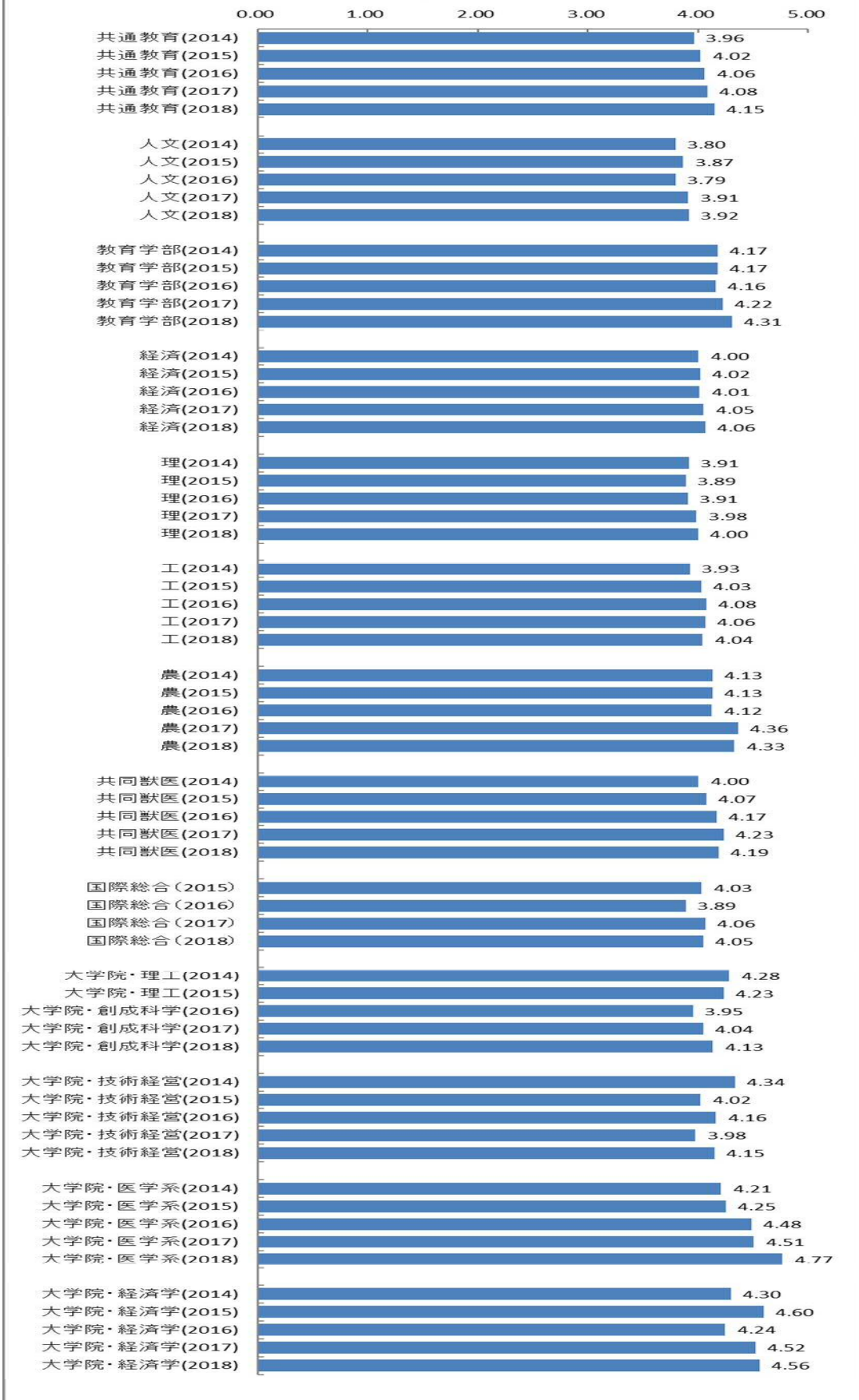
授業外学習時間(全体平均) — 経年変化 —



< 全学共通質問項目 2 学習目標達成 >

学習目標達成	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2014)	3.93			4.32	4.08				3.96
共通教育(2015)	4.00			4.37	4.07				4.02
共通教育(2016)	4.03			4.45	4.12				4.06
共通教育(2017)	4.02			4.37	4.26				4.08
共通教育(2018)	4.11			4.41	4.27				4.15
人文(2014)	3.73	3.90	3.97				3.93		3.80
人文(2015)	3.76	4.01	4.00				4.35		3.87
人文(2016)	3.71	4.02	4.00				3.82		3.79
人文(2017)	3.87	3.96	3.95				4.05		3.91
人文(2018)	3.87	3.99	3.94				4.05		3.92
教育学部(2014)	4.15		4.20	4.33			4.19		4.17
教育学部(2015)	4.16		4.20	4.42			4.15		4.17
教育学部(2016)	4.14		4.28	4.20			4.15		4.16
教育学部(2017)	4.17		4.49	4.42			4.22		4.22
教育学部(2018)	4.27		4.59	4.42			4.30		4.31
経済(2014)	4.00								4.00
経済(2015)	4.02								4.02
経済(2016)	4.01								4.01
経済(2017)	4.05								4.05
経済(2018)	4.06								4.06
理(2014)	3.88		4.00	4.19					3.91
理(2015)	3.84		4.02	4.20					3.89
理(2016)	3.86		4.12	4.14				4.02	3.91
理(2017)	3.95		4.10	4.23				3.98	3.98
理(2018)	3.96		4.13	4.21				4.19	4.00
工(2014)	3.90		3.97	4.07				4.17	3.93
工(2015)	4.01		4.00	4.17					4.03
工(2016)	4.07		3.98	4.16					4.08
工(2017)	4.04		4.10	4.20					4.06
工(2018)	4.01		4.17	4.15					4.04
農(2014)	4.21			3.85					4.13
農(2015)	4.16			3.95					4.13
農(2016)	4.13			4.10					4.12
農(2017)	4.36								4.36
農(2018)	4.33								4.33
共同獣医(2014)	3.94			4.28					4.00
共同獣医(2015)	4.03			4.22					4.07
共同獣医(2016)	4.12			4.38			4.20		4.17
共同獣医(2017)	4.19			4.37					4.23
共同獣医(2018)	4.11			4.39					4.19
国際総合(2015)	4.03								4.03
国際総合(2016)	3.89								3.89
国際総合(2017)	4.06								4.06
国際総合(2018)	4.05								4.05
大学院・理工(2014)	4.28								4.28
大学院・理工(2015)	4.23								4.23
大学院・創成科学(2016)	3.95								3.95
大学院・創成科学(2017)	4.04								4.04
大学院・創成科学(2018)	4.13								4.13
大学院・技術経営(2014)								4.34	4.34
大学院・技術経営(2015)								4.02	4.02
大学院・技術経営(2016)								4.16	4.16
大学院・技術経営(2017)								3.98	3.98
大学院・技術経営(2018)								4.15	4.15
大学院・医学系(2014)	4.11		4.27					4.41	4.21
大学院・医学系(2015)	4.22		4.39						4.25
大学院・医学系(2016)	4.43		4.71						4.48
大学院・医学系(2017)	4.47		4.71						4.51
大学院・医学系(2018)	4.77								4.77
大学院・経済学(2014)								4.30	4.30
大学院・経済学(2015)								4.60	4.60
大学院・経済学(2016)	4.24								4.24
大学院・経済学(2017)	4.52								4.52
大学院・経済学(2018)	4.56								4.56

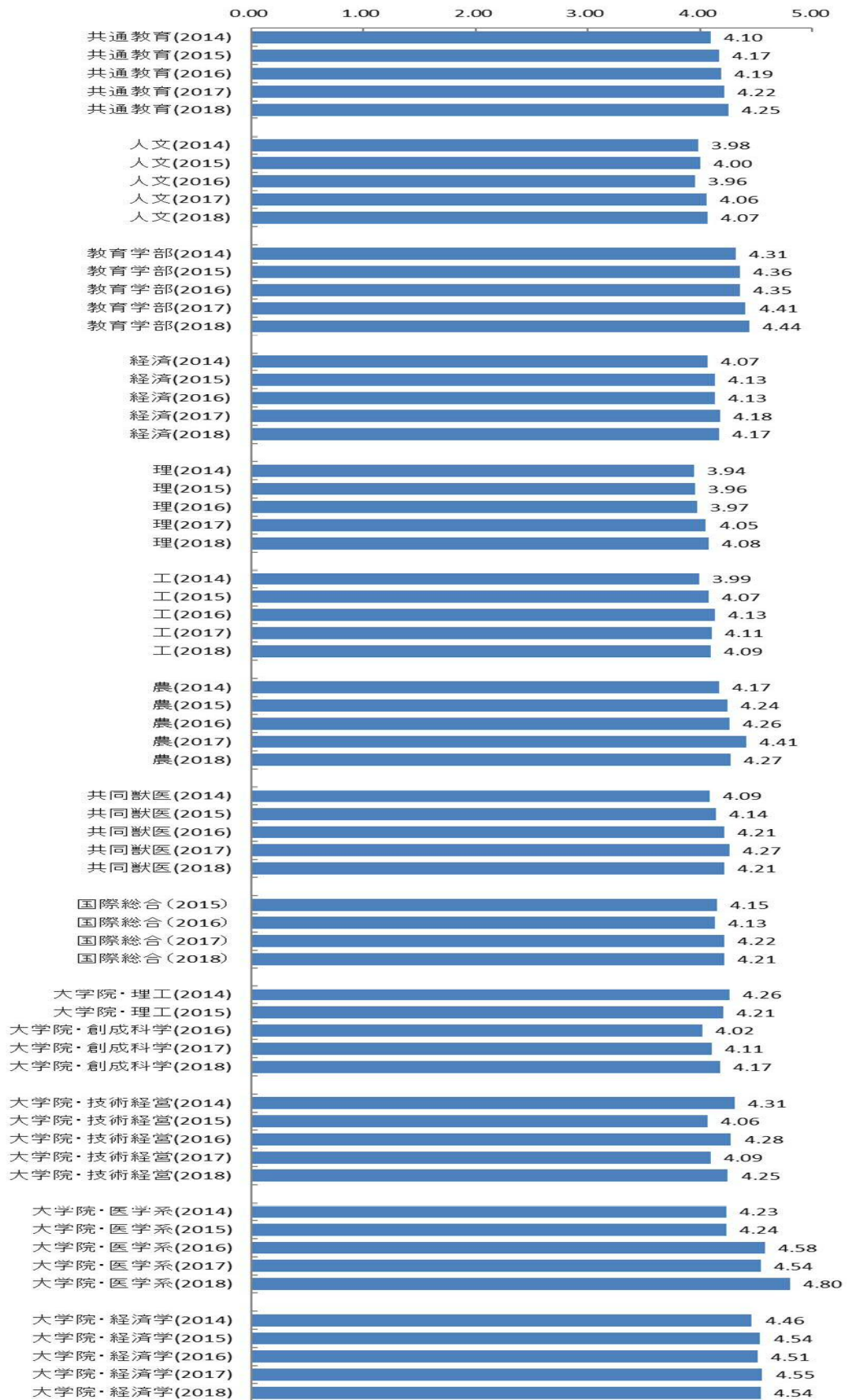
学習目標達成(全体平均) — 経年変化 —



< 全学共通質問項目 3 理解 >

理解	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2014)	4.05			4.49	4.27				4.10
共通教育(2015)	4.13			4.49	4.28				4.17
共通教育(2016)	4.15			4.52	4.32				4.19
共通教育(2017)	4.15			4.43	4.44				4.22
共通教育(2018)	4.19			4.48	4.45				4.25
人文(2014)	3.91	4.09	4.12				4.36		3.98
人文(2015)	3.93	4.16	4.18				4.10		4.00
人文(2016)	3.88	4.11	4.18				3.98		3.96
人文(2017)	4.01	4.11	4.11				4.24		4.06
人文(2018)	4.02	4.15	4.09				4.23		4.07
教育学部(2014)	4.30		4.38	4.48			4.31		4.31
教育学部(2015)	4.35		4.40	4.52			4.33		4.36
教育学部(2016)	4.33		4.47	4.49			4.34		4.35
教育学部(2017)	4.35		4.58	4.58			4.43		4.41
教育学部(2018)	4.40		4.69	4.55			4.42		4.44
経済(2014)	4.07								4.07
経済(2015)	4.13								4.13
経済(2016)	4.13								4.13
経済(2017)	4.18								4.18
経済(2018)	4.17								4.17
理(2014)	3.90		4.05	4.25					3.94
理(2015)	3.90		4.16	4.32					3.96
理(2016)	3.92		4.31	4.15				4.08	3.97
理(2017)	4.01		4.28	4.27				4.10	4.05
理(2018)	4.02		4.34	4.31				4.31	4.08
工(2014)	3.97		4.04	4.10				4.21	3.99
工(2015)	4.06		4.04	4.19					4.07
工(2016)	4.13		4.06	4.22					4.13
工(2017)	4.09		4.13	4.23					4.11
工(2018)	4.07		4.19	4.19					4.09
農(2014)	4.24			3.90					4.17
農(2015)	4.28			4.00					4.24
農(2016)	4.25			4.32					4.26
農(2017)	4.41								4.41
農(2018)	4.27								4.27
共同獣医(2014)	4.00			4.45					4.09
共同獣医(2015)	4.08			4.32					4.14
共同獣医(2016)	4.17			4.36			4.29		4.21
共同獣医(2017)	4.21			4.44					4.27
共同獣医(2018)	4.12			4.46					4.21
国際総合(2015)	4.15								4.15
国際総合(2016)	4.13								4.13
国際総合(2017)	4.22								4.22
国際総合(2018)	4.21								4.21
大学院・理工(2014)	4.26								4.26
大学院・理工(2015)	4.21								4.21
大学院・創成科学(2016)	4.02								4.02
大学院・創成科学(2017)	4.11								4.11
大学院・創成科学(2018)	4.17								4.17
大学院・技術経営(2014)								4.31	4.31
大学院・技術経営(2015)								4.06	4.06
大学院・技術経営(2016)								4.28	4.28
大学院・技術経営(2017)								4.09	4.09
大学院・技術経営(2018)								4.25	4.25
大学院・医学系(2014)	4.16		4.27					4.37	4.23
大学院・医学系(2015)	4.17		4.51						4.24
大学院・医学系(2016)	4.51		4.87						4.58
大学院・医学系(2017)	4.50		4.79						4.54
大学院・医学系(2018)	4.80								4.80
大学院・経済学(2014)								4.46	4.46
大学院・経済学(2015)								4.54	4.54
大学院・経済学(2016)	4.51								4.51
大学院・経済学(2017)	4.55								4.55
大学院・経済学(2018)	4.54								4.54

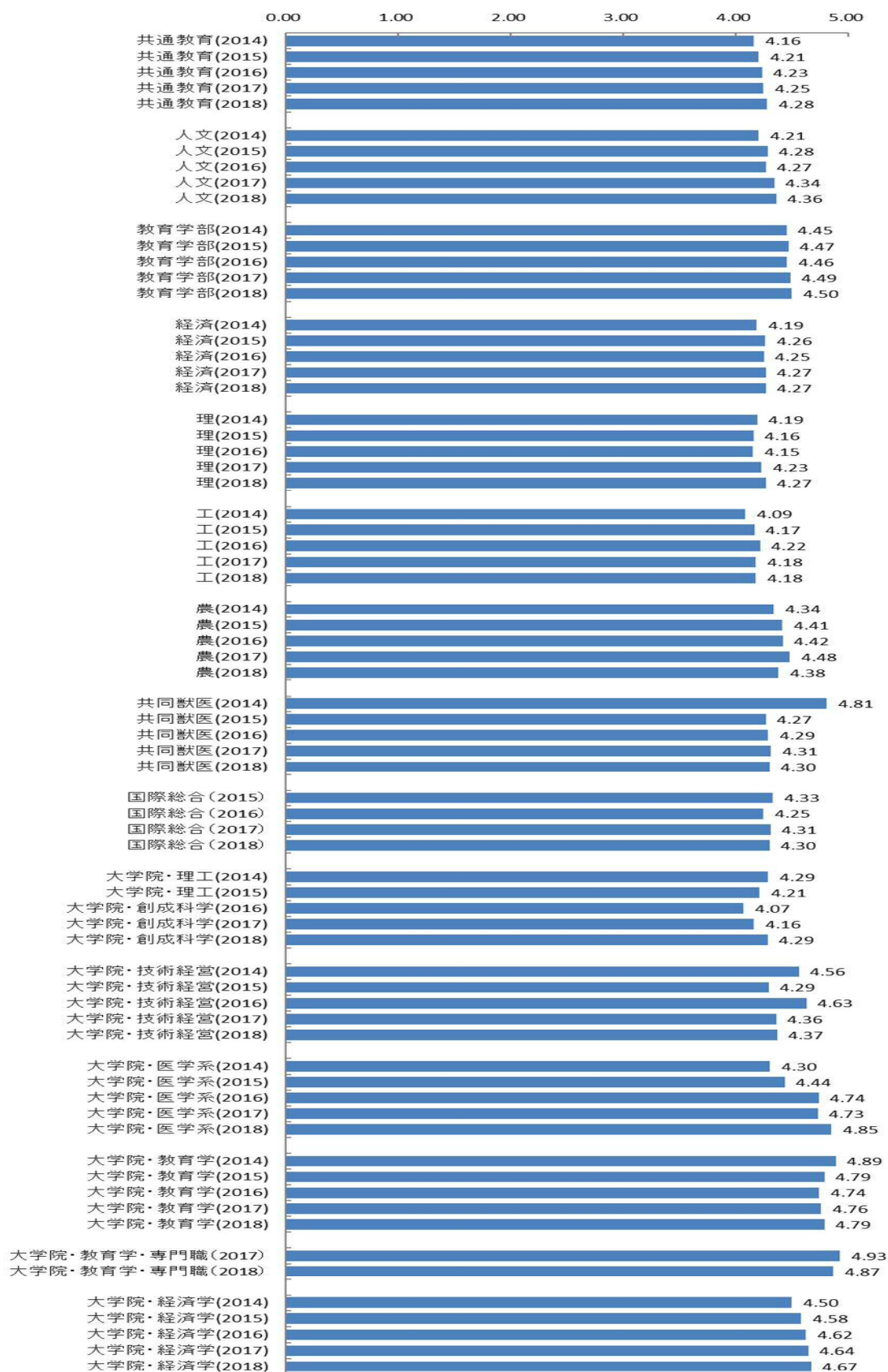
理解(全体平均) — 経年変化 —



< 全学共通質問項目 4 満足 >

満足	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2014)	4.12			4.56	4.34				4.16
共通教育(2015)	4.17			4.54	4.33				4.21
共通教育(2016)	4.20			4.54	4.35				4.23
共通教育(2017)	4.18			4.40	4.49				4.25
共通教育(2018)	4.22			4.49	4.47				4.28
人文(2014)	4.28	4.49	4.48				0.36		4.21
人文(2015)	4.26	4.58	4.46				3.84		4.28
人文(2016)	4.17	4.56	4.50				4.33		4.27
人文(2017)	4.28	4.49	4.39				4.44		4.34
人文(2018)	4.30	4.47	4.43				4.47		4.36
教育学部(2014)	4.43		4.58	4.63			4.45		4.45
教育学部(2015)	4.46		4.57	4.62			4.43		4.47
教育学部(2016)	4.44		4.59	4.56			4.44		4.46
教育学部(2017)	4.44		4.71	4.65			4.49		4.49
教育学部(2018)	4.46		4.79	4.58			4.48		4.50
経済(2014)	4.19								4.19
経済(2015)	4.26								4.26
経済(2016)	4.25								4.25
経済(2017)	4.27								4.27
経済(2018)	4.27								4.27
理(2014)	4.17		4.23	4.41					4.19
理(2015)	4.11		4.26	4.48					4.16
理(2016)	4.12		4.36	4.32				4.25	4.15
理(2017)	4.20		4.29	4.42				4.31	4.23
理(2018)	4.23		4.40	4.44				4.51	4.27
工(2014)	4.06		4.15	4.20				4.47	4.09
工(2015)	4.16		4.11	4.26					4.17
工(2016)	4.22		4.13	4.28					4.22
工(2017)	4.16		4.18	4.32					4.18
工(2018)	4.17		4.23	4.23					4.18
農(2014)	4.41			4.08					4.34
農(2015)	4.45			4.21					4.41
農(2016)	4.41			4.45					4.42
農(2017)	4.48								4.48
農(2018)	4.38								4.38
共同獣医(2014)	4.78			4.95					4.81
共同獣医(2015)	4.22			4.42					4.27
共同獣医(2016)	4.23			4.47			4.41		4.29
共同獣医(2017)	4.26			4.48					4.31
共同獣医(2018)	4.22			4.55					4.30
国際総合(2015)	4.33								4.33
国際総合(2016)	4.25								4.25
国際総合(2017)	4.31								4.31
国際総合(2018)	4.30								4.30
大学院・理工(2014)	4.29								4.29
大学院・理工(2015)	4.21								4.21
大学院・創成科学(2016)	4.07								4.07
大学院・創成科学(2017)	4.16								4.16
大学院・創成科学(2018)	4.29								4.29
大学院・技術経営(2014)								4.56	4.56
大学院・技術経営(2015)								4.29	4.29
大学院・技術経営(2016)								4.63	4.63
大学院・技術経営(2017)								4.36	4.36
大学院・技術経営(2018)								4.37	4.37
大学院・医学系(2014)	4.49		3.86					4.51	4.30
大学院・医学系(2015)	4.39		4.62						4.44
大学院・医学系(2016)	4.68		4.97						4.74
大学院・医学系(2017)	4.68		5.00						4.73
大学院・医学系(2018)	4.85								4.85
大学院・教育学(2014)	4.91		4.81	4.00			4.92		4.89
大学院・教育学(2015)	4.75		4.82	4.77			4.84		4.79
大学院・教育学(2016)	4.80		4.63	4.58			4.79	4.71	4.74
大学院・教育学(2017)	4.77		4.74				4.66		4.76
大学院・教育学(2018)	4.82		4.76				4.66		4.79
大学院・教育学・専門職(2017)	4.93								4.93
大学院・教育学・専門職(2018)	4.87								4.87
大学院・経済学(2014)								4.50	4.50
大学院・経済学(2015)								4.58	4.58
大学院・経済学(2016)	4.62								4.62
大学院・経済学(2017)	4.64								4.64
大学院・経済学(2018)	4.67								4.67

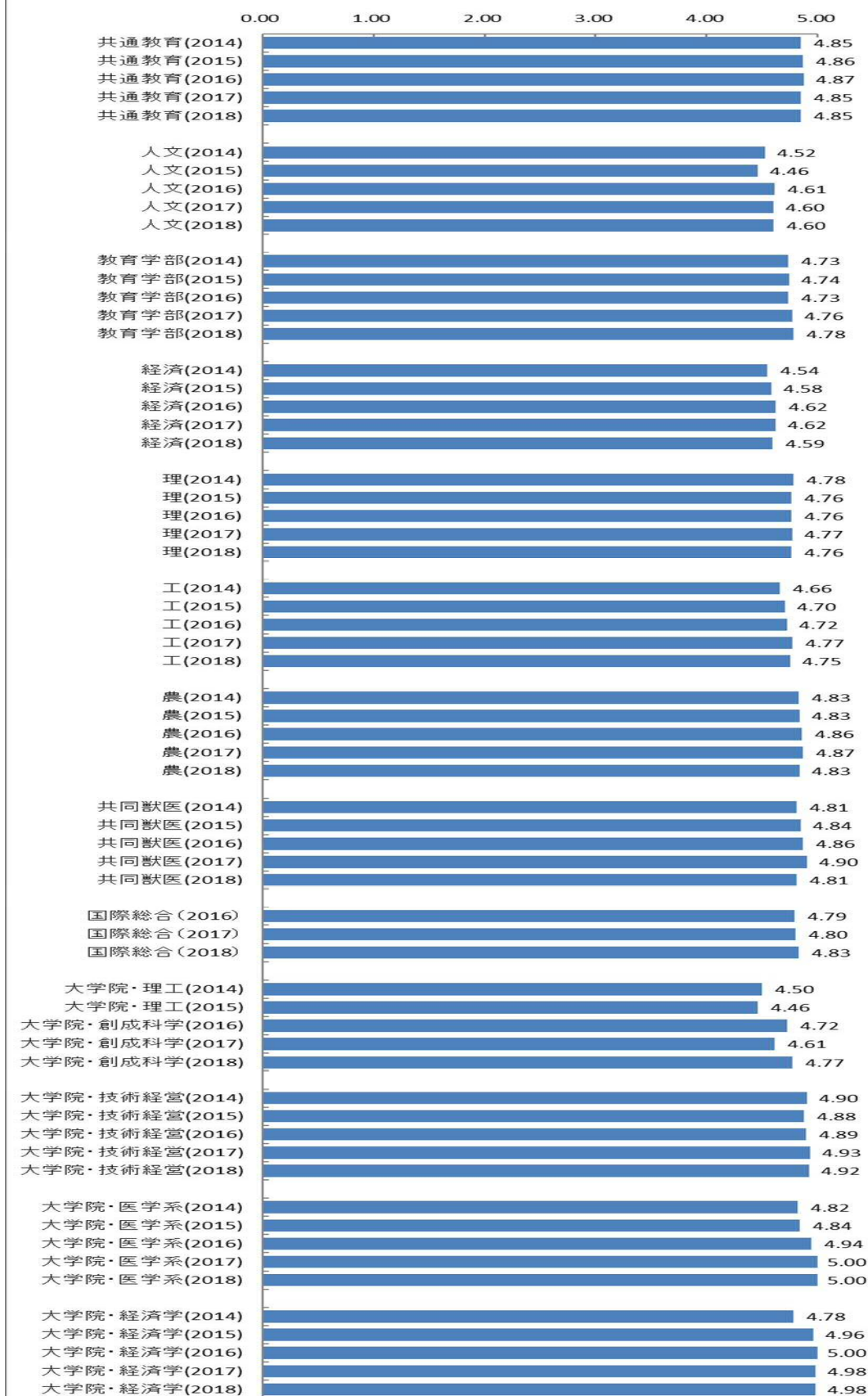
満足(全体平均) — 経年変化 —



< 全学共通質問項目 5 出席 >

出席	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	未指定	全体平均
共通教育(2014)	4.86			4.88	4.78				4.85
共通教育(2015)	4.87			4.87	4.80				4.86
共通教育(2016)	4.88			4.89	4.81				4.87
共通教育(2017)	4.86			4.89	4.79				4.85
共通教育(2018)	4.86			4.93	4.78				4.85
人文(2014)	4.52	4.55	4.50				4.64		4.52
人文(2015)	4.59	4.55	4.56				3.09		4.46
人文(2016)	4.60	4.64	4.60				4.70		4.61
人文(2017)	4.58	4.66	4.61				4.60		4.60
人文(2018)	4.61	4.58	4.61				4.58		4.60
教育学部(2014)	4.73		4.63	4.78			4.76		4.73
教育学部(2015)	4.73		4.69	4.83			4.74		4.74
教育学部(2016)	4.73		4.70	4.72			4.75		4.73
教育学部(2017)	4.76		4.70	4.87			4.78		4.76
教育学部(2018)	4.78		4.74	4.78			4.79		4.78
経済(2014)	4.54								4.54
経済(2015)	4.58								4.58
経済(2016)	4.62								4.62
経済(2017)	4.62								4.62
経済(2018)	4.59								4.59
理(2014)	4.75		4.86	4.95					4.78
理(2015)	4.75		4.82	4.90					4.76
理(2016)	4.74		4.83	4.93				4.77	4.76
理(2017)	4.74		4.89	4.92				4.76	4.77
理(2018)	4.74		4.80	4.89				4.82	4.76
工(2014)	4.64		4.65	4.78				4.51	4.66
工(2015)	4.69		4.73	4.80					4.70
工(2016)	4.71		4.73	4.76					4.72
工(2017)	4.76		4.79	4.84					4.77
工(2018)	4.73		4.77	4.84					4.75
農(2014)	4.80			4.93					4.83
農(2015)	4.82			4.94					4.83
農(2016)	4.84			4.97					4.86
農(2017)	4.87								4.87
農(2018)	4.83								4.83
共同獣医(2014)	4.78			4.95					4.81
共同獣医(2015)	4.82			4.92					4.84
共同獣医(2016)	4.86			4.94			4.79		4.86
共同獣医(2017)	4.89			4.93					4.90
共同獣医(2018)	4.78			4.90					4.81
国際総合(2016)	4.79								4.79
国際総合(2017)	4.80								4.80
国際総合(2018)	4.83								4.83
大学院・理工(2014)	4.50								4.50
大学院・理工(2015)	4.46								4.46
大学院・創成科学(2016)	4.72								4.72
大学院・創成科学(2017)	4.61								4.61
大学院・創成科学(2018)	4.77								4.77
大学院・技術経営(2014)								4.90	4.90
大学院・技術経営(2015)								4.88	4.88
大学院・技術経営(2016)								4.89	4.89
大学院・技術経営(2017)								4.93	4.93
大学院・技術経営(2018)								4.92	4.92
大学院・医学系(2014)	4.85		4.71					4.91	4.82
大学院・医学系(2015)	4.82		4.92						4.84
大学院・医学系(2016)	4.95		4.89						4.94
大学院・医学系(2017)	5.00		5.00						5.00
大学院・医学系(2018)	5.00								5.00
大学院・経済学(2014)								4.78	4.78
大学院・経済学(2015)								4.96	4.96
大学院・経済学(2016)	5.00								5.00
大学院・経済学(2017)	4.98								4.98
大学院・経済学(2018)	4.98								4.98

出席(全体平均) — 経年変化 —



第3節 学生授業評価の結果について（共通教育）

次に、第3節では共通教育に絞って2018年度の学生授業評価の結果を考察する。前節で示したデータのとおり、今年度の共通教育の学生授業評価実施率は91.7%、教員授業自己評価実施率は29.1%であった。学生授業評価実施率は4年ぶりに90%を超える実施率に回復した。この傾向を引き続き続けていくことが求められる。なお、回答数は合計51,089人であり、内訳は講義39,575人、実験・実習2,033人、語学9,481人であった。2013年度における共通教育の大幅なカリキュラム改正に伴い、新しい共通教育の科目系列・分野に応じて評価結果を掲載している。過去5年間の経年変化を見ていくこととしている。

なお、以下に示す学生授業評価の結果は質問紙の種類（講義用、語学用、実験実習用の3種類）別に分野別の平均値の変化を経年で示したものである。各分野に含まれる授業科目および開設科目は附表に掲載した。また、詳しい質問項目は節末に質問紙を掲載したので、適宜ご参照いただければ幸いである。

（1）講義系科目の結果について

以下の表・図は4種類の質問紙のうち「講義」用を使用している講義系科目を系列・分野別に整理し、評定平均値を算出したものである。講義系科目には大きく分類して「教養コア」「一般教養（人文教養）」「一般教養（社会教養）」「一般教養（自然教養）」「一般教養（学際的教養）」「専門基礎」に分けられる。またそれぞれ分野別に細かく分かれている。

Q1の出席状況は「1. 90%以上（14回以上）」を5点、「5. 40%未満（6回未満）」を1点として平均値を計算したものである。すべて4.5を超えており良好である。

Q2の授業外学習は予習・復習・宿題やレポート作成、試験勉強を行った総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算した時間を尋ねたものである。「1. 3時間程度または以上」「2. 2時間程度」「3. 1時間程度」「4. 30-50分程度」「5. 30分未満」をそれぞれ5,4,3,2,1として平均値を算出した。最も高いのは「理系基礎」が3.52、次に高かったのは、アクティブ・ラーニング型科目である「山口と世界」が3.12、「基礎セミナー」が3.09である。このほか「情報処理」が前年度の2.45から2.84に大幅に上昇している。なお、大学設置基準には「1単位の授業科目は45時間の学修を必要とする」と規定されており、この中には授業時間の他に予習、復習の時間が含まれている。例えば、2単位の講義を行う場合90時間の学修が必要であり、このうち授業の30時間を除く60時間が授業外学習となる。つまり、半期15回の授業では1回の授業2時間に対して4時間の授業外学習が必要という計算になる。単位の実質化という観点から、現在の傾向がさらに進むことが期待される。

Q3の教員の話し方が明瞭で聞き取りやすかったかについては「1. そう思う」「2. ややそう思う」「3. どちらとも言えない」「4. あまりそう思わない」「5. そう思わない」をそれぞれ5,4,3,2,1として平均値を算出した。すべての分野で3.5を上回っており、大半の科目が4.0を超えている。

Q4の専門用語や理論的な話が適切に説明されたかについては前問と同様に「1. そう思う」「2. ややそう思う」「3. どちらとも言えない」「4. あまりそう思わない」「5. そう思わない」をそれぞれ5,4,3,2,1として平均値を計算した。すべての分野で4.0を上回っている。

系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q3話し方	Q4説明	Q5教材	Q6板書・コンピュータ	Q7質問対応	Q8学習目標達成	Q9理解	Q10満足
教養コア	基礎セミナー(2014)	講義	4.86	3.17	4.36	4.29	4.20	4.25	4.30	4.06	4.30	4.35
教養コア	基礎セミナー(2015)	講義	4.90	3.13	4.44	4.41	4.35	4.29	4.37	4.15	4.37	4.46
教養コア	基礎セミナー(2016)	講義	4.90	2.94	4.43	4.37	4.30	4.43	4.38	4.17	4.41	4.46
教養コア	基礎セミナー(2017)	講義	4.88	3.09	4.44	4.40	4.27	4.44	4.40	4.16	4.39	4.43
教養コア	基礎セミナー(2018)	講義	4.89	3.09	4.43	4.42	4.34	4.39	4.43	4.20	4.41	4.45
教養コア	情報処理(2014)	講義	4.92	2.57	4.12	4.13	4.11	4.36	4.13	3.96	4.11	4.14
教養コア	情報処理(2015)	講義	4.93	2.51	4.14	4.17	4.16	4.38	4.14	4.00	4.20	4.19
教養コア	情報処理(2016)	講義	4.91	2.57	4.22	4.24	4.20	4.43	4.18	4.03	4.21	4.22
教養コア	情報処理(2017)	講義	4.92	2.45	4.17	4.20	4.18	4.45	4.19	4.06	4.20	4.21
教養コア	情報処理(2018)	講義	4.92	2.84	4.13	4.19	4.16	4.45	4.19	4.08	4.20	4.18
教養コア	運動健康科学(2014)	講義	4.87	2.34	4.40	4.35	4.34	4.23	4.20	3.96	4.15	4.23
教養コア	運動健康科学(2015)	講義	4.87	2.47	4.44	4.45	4.42	4.29	4.21	4.03	4.28	4.31
教養コア	運動健康科学(2016)	講義	4.88	2.25	4.39	4.43	4.40	4.24	4.19	4.07	4.28	4.33
教養コア	運動健康科学(2017)	講義	4.85	2.26	4.25	4.31	4.29	4.16	4.16	3.98	4.17	4.16
教養コア	運動健康科学(2018)	講義	4.86	2.44	4.21	4.33	4.27	4.26	4.21	4.09	4.19	4.18
教養コア	山口と世界(2014)	講義	4.91	3.06	4.40	4.28	4.22	4.29	4.33	4.19	4.37	4.32
教養コア	山口と世界(2015)	講義	4.90	3.10	4.45	4.33	4.24	4.43	4.41	4.28	4.45	4.37
教養コア	山口と世界(2016)	講義	4.93	3.03	4.47	4.31	4.26	4.43	4.41	4.28	4.44	4.35
教養コア	山口と世界(2017)	講義	4.93	3.26	4.48	4.34	4.23	4.44	4.45	4.28	4.43	4.35
教養コア	山口と世界(2018)	講義	4.91	3.12	4.37	4.28	4.23	4.42	4.33	4.27	4.38	4.29
教養コア	キャリア教育(2014)	講義	4.91	2.49	4.22	4.16	4.17	4.35	4.07	4.00	4.18	4.11
教養コア	キャリア教育(2015)	講義	4.91	2.69	4.28	4.24	4.24	4.30	4.15	4.07	4.22	4.13
教養コア	キャリア教育(2016)	講義	4.90	2.68	4.33	4.30	4.29	4.36	4.22	4.13	4.27	4.23
教養コア	キャリア教育(2017)	講義	4.88	2.52	4.21	4.20	4.22	4.31	4.15	4.04	4.20	4.10
教養コア	キャリア教育(2018)	講義	4.90	2.63	4.22	4.21	4.19	4.29	4.16	4.09	4.23	4.14
一般教養(人文教養)	哲学(2014)	講義	4.78	2.08	4.16	4.11	4.02	3.92	3.99	3.74	3.73	3.97
一般教養(人文教養)	哲学(2015)	講義	4.79	2.04	4.27	4.21	3.90	3.96	4.03	3.85	3.87	4.07
一般教養(人文教養)	哲学(2016)	講義	4.84	2.04	4.46	4.38	4.21	4.26	4.24	4.04	4.10	4.30
一般教養(人文教養)	哲学(2017)	講義	4.82	1.82	4.45	4.48	4.23	4.35	4.24	4.04	4.19	4.36
一般教養(人文教養)	哲学(2018)	講義	4.83	2.03	4.42	4.44	4.26	4.26	4.25	4.14	4.19	4.36
一般教養(人文教養)	歴史学(2014)	講義	4.81	2.13	3.97	4.09	4.19	4.08	3.93	3.74	3.77	3.85
一般教養(人文教養)	歴史学(2015)	講義	4.85	2.12	3.95	4.10	4.19	4.20	3.94	3.77	3.77	3.88
一般教養(人文教養)	歴史学(2016)	講義	4.86	2.05	3.96	4.17	4.20	4.07	4.04	3.90	3.93	4.01
一般教養(人文教養)	歴史学(2017)	講義	4.88	2.03	4.06	4.21	4.28	4.15	4.02	3.93	3.99	4.05
一般教養(人文教養)	歴史学(2018)	講義	4.86	2.08	3.99	4.16	4.26	4.21	4.04	3.95	3.92	3.99
一般教養(人文教養)	社会学(2014)	講義	4.90	2.53	3.99	4.10	4.06	4.16	3.97	3.82	3.92	3.98
一般教養(人文教養)	社会学(2015)	講義	4.91	2.33	4.09	4.19	4.12	4.21	3.99	3.87	4.01	4.01
一般教養(人文教養)	社会学(2016)	講義	4.87	2.25	4.05	4.27	4.23	4.30	4.07	3.99	4.09	4.14
一般教養(人文教養)	社会学(2017)	講義	4.82	2.27	4.31	4.38	4.26	4.39	4.20	3.99	4.20	4.23
一般教養(人文教養)	社会学(2018)	講義	4.84	2.33	4.32	4.39	4.31	4.38	4.22	4.12	4.19	4.23
一般教養(社会教養)	経済と法(2014)	講義	4.88	2.28	4.12	4.19	4.16	4.13	4.09	3.84	3.95	4.05
一般教養(社会教養)	経済と法(2015)	講義	4.87	2.25	4.28	4.37	4.40	4.28	4.18	3.96	4.13	4.24
一般教養(社会教養)	経済と法(2016)	講義	4.86	2.27	4.26	4.27	4.33	4.29	4.14	3.91	4.00	4.14
一般教養(社会教養)	経済と法(2017)	講義	4.84	2.24	4.28	4.31	4.33	4.25	4.19	3.94	4.05	4.15
一般教養(社会教養)	経済と法(2018)	講義	4.79	2.39	4.28	4.31	4.18	4.19	4.21	4.00	4.05	4.15
一般教養(自然教養)	自然科学(2014)	講義	4.86	2.17	3.84	3.92	4.07	4.10	3.80	3.75	3.78	3.82
一般教養(自然教養)	自然科学(2015)	講義	4.88	2.10	3.82	3.91	4.03	4.10	3.76	3.77	3.80	3.81
一般教養(自然教養)	自然科学(2016)	講義	4.86	1.99	3.82	3.97	4.03	4.12	3.77	3.81	3.83	3.85
一般教養(自然教養)	自然科学(2017)	講義	4.89	2.11	3.98	3.99	3.96	4.22	3.86	3.83	3.90	3.93
一般教養(自然教養)	自然科学(2018)	講義	4.89	2.23	4.03	4.08	3.97	4.24	3.95	3.95	3.96	3.98
一般教養(学際的教養)	人間の発達と育成(2014)	講義	4.86	2.30	4.45	4.45	4.33	4.43	4.31	4.06	4.25	4.38
一般教養(学際的教養)	人間の発達と育成(2015)	講義	4.87	2.38	4.44	4.40	4.29	4.40	4.29	4.08	4.28	4.36
一般教養(学際的教養)	人間の発達と育成(2016)	講義	4.89	2.21	4.49	4.50	4.33	4.45	4.39	4.13	4.34	4.45
一般教養(学際的教養)	人間の発達と育成(2017)	講義	4.86	2.17	4.40	4.44	4.41	4.33	4.28	4.03	4.21	4.29
一般教養(学際的教養)	人間の発達と育成(2018)	講義	4.87	2.25	4.43	4.49	4.49	4.46	4.36	4.14	4.28	4.37
一般教養(学際的教養)	文化の継承と創造(2014)	講義	4.85	2.36	4.33	4.30	4.21	4.31	4.13	3.99	4.16	4.23
一般教養(学際的教養)	文化の継承と創造(2015)	講義	4.88	2.35	4.27	4.29	4.16	4.27	4.12	4.01	4.18	4.19
一般教養(学際的教養)	文化の継承と創造(2016)	講義	4.87	2.32	4.32	4.33	4.27	4.27	4.17	4.05	4.23	4.25
一般教養(学際的教養)	文化の継承と創造(2017)	講義	4.86	2.37	4.29	4.34	4.23	4.28	4.16	4.04	4.21	4.24
一般教養(学際的教養)	文化の継承と創造(2018)	講義	4.87	2.51	4.27	4.36	4.32	4.29	4.18	4.08	4.18	4.23
一般教養(学際的教養)	社会と医療(2014)	講義	4.88	2.07	4.21	4.24	4.22	4.36	4.01	4.02	4.17	4.23
一般教養(学際的教養)	社会と医療(2015)	講義	4.87	2.03	4.30	4.32	4.25	4.44	4.05	4.03	4.23	4.30
一般教養(学際的教養)	社会と医療(2016)	講義	4.89	2.06	4.29	4.32	4.27	4.43	4.07	4.10	4.26	4.33
一般教養(学際的教養)	社会と医療(2017)	講義	4.86	1.95	4.34	4.36	4.32	4.47	4.08	4.12	4.25	4.30
一般教養(学際的教養)	社会と医療(2018)	講義	4.84	1.98	4.29	4.38	4.23	4.48	4.09	4.15	4.27	4.32
一般教養(学際的教養)	科学技術と社会(2014)	講義	4.91	3.07	4.25	4.30	4.35	4.40	4.35	4.01	4.12	4.13
一般教養(学際的教養)	科学技術と社会(2015)	講義	4.90	2.96	4.32	4.38	4.40	4.48	4.44	4.06	4.18	4.20
一般教養(学際的教養)	科学技術と社会(2016)	講義	4.90	3.06	4.23	4.30	4.35	4.36	4.20	4.02	4.13	4.12
一般教養(学際的教養)	科学技術と社会(2017)	講義	4.90	2.97	4.34	4.36	4.40	4.40	4.30	4.04	4.15	4.10
一般教養(学際的教養)	科学技術と社会(2018)	講義	4.91	3.03	4.36	4.40	4.45	4.45	4.34	4.15	4.24	4.19
一般教養(学際的教養)	環境と人間(2014)	講義	4.88	2.75	3.88	4.01	4.08	4.24	3.83	3.86	3.98	3.91
一般教養(学際的教養)	環境と人間(2015)	講義	4.86	2.87	4.17	4.18	4.18	4.30	3.96	4.00	4.13	4.07
一般教養(学際的教養)	環境と人間(2016)	講義	4.87	2.74	4.25	4.22	4.08	4.34	4.08	4.05	4.17	4.14
一般教養(学際的教養)	環境と人間(2017)	講義	4.86	2.81	4.22	4.26	4.12	4.36	4.11	4.07	4.16	4.14
一般教養(学際的教養)	環境と人間(2018)	講義	4.83	2.77	4.27	4.31	4.19	4.42	4.20	4.15	4.24	4.24
一般教養(学際的教養)	食と生命(2014)	講義	4.84	2.51	4.32	4.31	4.23	4.38	3.98	3.98	4.17	4.22
一般教養(学際的教養)	食と生命(2015)	講義	4.83	2.35	4.41	4.43	4.27	4.47	4.04	4.07	4.30	4.31
一般教養(学際的教養)	食と生命(2016)	講義	4.86	2.46	4.47	4.45	4.34	4.49	4.13	4.13	4.34	4.39
一般教養(学際的教養)	食と生命(2017)	講義	4.85	2.35	4.41	4.41	4.23	4.50	4.09	4.07	4.29	4.31
一般教養(学際的教養)	食と生命(2018)	講義	4.85	2.33	4.37	4.44	4.27	4.47	4.17	4.15	4.29	4.30
専門基礎	理系基礎(2014)	講義	4.82	3.40	3.68	3.84	3.80	3.66	3.89	3.74	3.76	3.80
専門基礎	理系基礎(2015)	講義	4.86	3.33	3.87	4.00	3.86	3.79	4.03	3.92	3.96	3.97
専門基礎	理系基礎(2016)	講義	4.86	3.45	3.76	3.94	3.87	3.83	4.00	3.85	3.83	3.87
専門基礎	理系基礎(2017)	講義	4.82	3.54	3.60	3.85	3.70	3.60	3.93	3.79	3.77	3.79
専門基礎	理系基礎(2018)	講義	4.83	3.52	3.87	4.10	3.94	3.96	4.11	4.02	4.00	4.04

Q5 のテキストやプリントなどの教材が効果的に使われたかについてと Q6 の板書や OHP、ビデオ、コンピュータなどが効果的に使われたかについては Q4 と同様の計算方法で平均値を算出した。なお、これらの設問には「6. この授業は該当しない」という選択肢があるが、平均値の計算には含めていない。ほぼすべての分野で平均が 4.0 を超えており、良好である。

Q7 の学生の疑問や質問への対応は充分でしたか？という問いについては、すべての分野で平均が 4.0 前後であり、良好である。共通教育は規模の大きな授業が多く、質問への対応が小規模授業で比べて難しいと考えられるが、学生授業評価の結果は現在のところ良好である。

Q8 のシラバスに記載された学習目標を達成したかについては「1. そう思う」「2. ややそう思う」「3. どちらとも言えない」「4. あまりそう思わない」「5. そう思わない」を 5,4,3,2,1 とし、「6. 答えられない」は平均値の計算から除いた。これはシラバスを読んでいない学生や学習目標を忘れた学生のために設けられた選択肢である。平均値はすべての科目で 3.5 を上回っており良好である。

Q9 のこの授業の内容を理解できたかという質問については大半の科目が 4.0 を上回っており良好であった。

最後に Q10 のこの授業はあなたにとって満足のいくものだったかという質問については最も平均値が高かったのは基礎セミナー (4.45) であり、次に高かったのは人間の発達と育成 (4.37)、哲学 (4.36) と続く状況であった。

(2) 語学教育科目の結果について

以下は「語学」の質問紙を用いた外国語科目の平均値である。「英語」「日本語」の 2 つの分野のそれぞれに含まれる授業科目の評価の平均値を表している。Q1 の出席は 4.5 を超えており良好である。Q2 の授業外学習については、前年度に比べ回復傾向にある。Q3 以降も 4.0 をすべて超えており大変良好な状況である。

英語分野については、2017 年度よりカリキュラム改編を行っており、2017 年度以降の経年変化の推移を注視していく必要がある。

系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q3話し方	Q4説明	Q5教材	Q6質問対応	Q7演習時間	Q8学習目標達成	Q9理解	Q10満足
英語	英語(2014)	語学	4.82	3.35	4.41	4.31	4.22	4.25	4.29	4.02	4.23	4.26
英語	英語(2015)	語学	4.77	3.49	4.49	4.49	4.22	4.39	4.48	4.21	4.35	4.43
英語	英語(2016)	語学	4.78	3.56	4.45	4.46	4.14	4.36	4.44	4.18	4.33	4.40
英語	英語(2017)	語学	4.81	2.95	4.46	4.49	4.21	4.47	4.54	4.23	4.43	4.47
英語	英語(2018)	語学	4.81	3.02	4.52	4.53	4.27	4.52	4.60	4.25	4.44	4.45
専門基礎	日本語(2014)	語学	4.49	3.45	4.73	4.74	4.69	4.80	4.64	4.64	4.70	4.72
専門基礎	日本語(2015)	語学	4.40	3.24	4.76	4.78	4.69	4.82	4.59	4.52	4.71	4.73
専門基礎	日本語(2016)	語学	4.59	3.35	4.69	4.69	4.72	4.80	4.53	4.54	4.70	4.68
専門基礎	日本語(2017)	語学	4.59	3.45	4.74	4.75	4.75	4.78	4.60	4.57	4.70	4.70
専門基礎	日本語(2018)	語学	4.57	3.45	4.66	4.61	4.66	4.69	4.56	4.38	4.56	4.59

(3) 演習・実験・実習系科目の結果について

以下は「演習・実験・実習」の質問紙を用いた授業の平均値である。共通教育のうちこのタイプに当てはまるものは、「理系基礎(実験)」分野の実験科目である。Q2の授業外学習については4.43と非常に高い。また、Q3以降も4.0をすべて超えており大変良好な状況である。

系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q3話し方	Q4指示の適切さ	Q5教材	Q6質問対応	Q7手本・示範	Q8雰囲気	Q9学習目標達成	Q10理解	Q11満足
専門基礎	理系基礎(実験)(2014)	演習・実験実習	4.96	4.47	4.38	4.43	4.50	4.51	4.45	4.56	4.29	4.41	4.51
専門基礎	理系基礎(実験)(2015)	演習・実験実習	4.94	4.49	4.37	4.39	4.50	4.46	4.46	4.55	4.33	4.42	4.47
専門基礎	理系基礎(実験)(2016)	演習・実験実習	4.95	4.43	4.38	4.43	4.53	4.50	4.51	4.59	4.44	4.45	4.48
専門基礎	理系基礎(実験)(2017)	演習・実験実習	4.92	4.40	4.26	4.30	4.44	4.34	4.37	4.48	4.31	4.33	4.28
専門基礎	理系基礎(実験)(2018)	演習・実験実習	4.96	4.43	4.37	4.41	4.54	4.45	4.46	4.60	4.39	4.43	4.44

附表 <各分野に含まれる授業科目および開設科目>

(1) 共通教育科目の授業科目及び単位数 (共同獣医学部を除く)

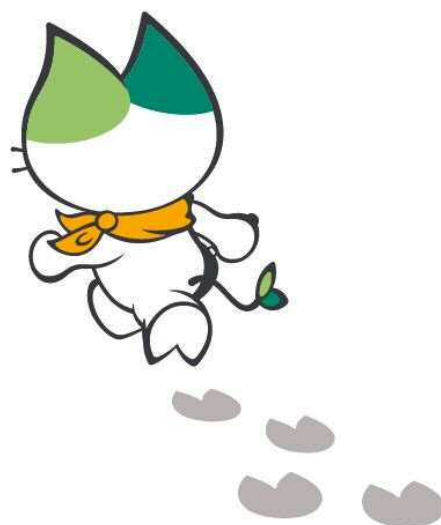
系列	分野	授業科目	単位数	
教養コア	基礎セミナー	基礎セミナー	2	
	情報処理	データ科学と社会Ⅰ	1	
		データ科学と社会Ⅱ	1	
	運動健康科学	運動健康科学	1	
	山口と世界	山口と世界	1	
	キャリア教育	知の広場	1	
キャリア教育		1		
英語	英語	英語Ⅰ aまたは英語Ⅱ a	2	
		英語Ⅰ bまたは英語Ⅱ b	2	
		英語会話Ⅰ aまたは英語会話Ⅱ a	2	
		英語会話Ⅰ bまたは英語会話Ⅱ b	2	
一般教養	人文教養	哲学	1	
		歴史学	1	
		社会学	1	
	社会教養	経済と法	経済と法1	1
			経済と法2	1
			経済と法3	1
	自然教養	自然科学	自然科学1	1
			自然科学2	1
	学際的教養	人間の発達と育成	人間の発達と育成1	1
			人間の発達と育成2	1
		文化の継承と創造	文化の継承と創造1	1
			文化の継承と創造2	1
		社会と医療	社会と医療	1
		科学技術と社会	科学技術と社会	1
環境と人間		環境と人間	1	
食と生命	食と生命	1		
専門基礎	理系基礎	数学Ⅰ	2	
		数学Ⅱ	2	
		物理学Ⅰ	2	
		物理学Ⅱ	2	
		化学Ⅰ	2	
		化学Ⅱ	2	
		生物学Ⅰ	2	
		生物学Ⅱ	2	
		地球科学Ⅰ	2	
		地球科学Ⅱ	2	
		物理学実験A	2	
		物理学実験B	1	
		化学実験A	2	
		化学実験B	1	
		生物学実験	2	
地球科学実験	2			

系列	分野	授業科目	単位数
専門基礎	学部専門基礎	ドイツ語入門1	2
		ドイツ語入門2	2
		フランス語入門1	2
		フランス語入門2	2
		中国語入門1	2
		中国語入門2	2
		中国語初級1A	2
		中国語初級1B	2
		中国語初級2A	2
		中国語初級2B	2
		ハングル入門1	2
		ハングル入門2	2
		ハングル初級1A	2
		ハングル初級1B	2
		ハングル初級2A	2
		ハングル初級2B	2
		医学のための統計学	2
		数学概論	2
		医学のための物理学入門	2
		医学英語1a	1
医学英語1b	1		
医学英語2	2		
医療英語	2		
基礎医療英会話	2		
医療心理学	2		
医療環境論1	1又は2		
医療環境論2	1又は2		

(2) 共通教育科目の授業科目及び単位数 (共同獣医学部)

系列	分野	授業科目	単位数
専門基礎	日本語	日本語Ⅰ(総合)	2~10
		生活日本語	2~6
		日本語Ⅱ(総合)	2~8
		日本語Ⅱ(読む・書く)	2~4
		日本語Ⅱ(聞く・話す)	2
		日本語ⅢA(総合)	2~4
		日本語ⅢB(総合)	2~4
		日本語Ⅲ(読む・書く)	2~4
		日本語ⅢA(聞く・話す)	2~4
		日本語ⅢB(聞く・話す)	2~4
		日本語ⅢA(文法)	2
		日本語ⅢB(文法)	2
		日本語ⅣA(総合)	2~4
		日本語ⅣB(総合)	2~4
		日本語ⅣA(読む・書く)	2~4
		日本語ⅣB(読む・書く)	2~4
		日本語ⅣA(聞く・話す)	2~4
		日本語ⅣB(聞く・話す)	2~4
		日本語ⅣA(文法)	2
		日本語ⅣB(文法)	2
		日本語ⅤA(総合)	2~4
		日本語ⅤB(総合)	2~4
		日本語ⅤA(アカデミックライティング)	2
		日本語ⅤB(アカデミックライティング)	2
		日本語ⅤA(口頭表現)	2
		日本語ⅤB(口頭表現)	2
		日本語ⅤA(ビジネス日本語)	2
		日本語ⅤB(ビジネス日本語)	2
		日本事情ⅠA	2
		日本事情ⅠB	2
		日本事情ⅡA	2
		日本事情ⅡB	2
プロジェクトワークで学ぶ日本語A	2		
プロジェクトワークで学ぶ日本語B	2		
教職基礎	教職基礎	日本国憲法	2
		スポーツ運動実習	1
教養展開	国際展開	国際展開科目	1又は2
		海外英語研修	2
	地域展開	地域展開科目	1又は2
	知財展開	知財展開科目	1又は2
デザイン展開	ユニバーサル	ユニバーサルデザイン展開科目	1又は2

系列	分野・科目	授業科目	単位数			
一般教育科目	人文・社会科学系	文化と芸術	文化の継承と創造1 文化の継承と創造2	1 1		
		思想と歴史	哲学 歴史学	1 1		
		人と社会	社会学 経済と法1 経済と法2 経済と法3 人間の発達と育成1 人間の発達と育成2	1 1 1 1 1 1		
	自然科学系	自然と科学技術	自然科学1 自然科学2 科学技術と社会 環境と人間 食と生命 生命科学概論	1 1 1 1 1 2		
			総合教養系	人間教養と将来設計 山口と世界 知の広場	1 1	
			体育・健康科目	健康とスポーツ分野	スポーツ運動実習 社会と医療	1 1
			初期教育科目	導入教育系	生命倫理学 コミュニケーション論	1 1
	情報科学系	情報セキュリティ・モラル 情報リテラシー演習		1 1		
	外国語科目	英語	英語Ⅰ 英語Ⅱ	4 4		
	基礎教育科目	数学・理科	基礎生物学 基礎化学 基礎物理学 分子生物学 畜産科学 生物統計学 作物・草地学 生物学実験	2 1 1 1 1 1 1 2		



<参考> 共通教育 学生授業評価 質問紙 (3種類)

共通教育 学生授業評価 (講義)

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

【授業科目名】 授業科目名を記入して下さい。

【担当教員名】 担当教員名を記入して下さい。

【学 年】 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

【学 生 区 分】 1. 一般学生 2. 留学生

【学 部】 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部 6. 工学部
7. 農学部

【質 問 Ⅰ】

1	あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？ (括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です) 1. 90%以上 (14回以上) 2. 80~90% (12~13回) 3. 60~80% (9~11回) 4. 40~60% (6~8回) 5. 40%未満 (6回未満)
2	あなたはこの授業において、時間外学習 (予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強) をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。 1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分~50分程度 5. 30分未満
3	教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
4	専門用語や理論的な話は、適切に説明されましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
5	テキストやプリントなどの教材が、効果的に使われましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない
6	板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが効果的に使われましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない
7	学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
8	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう

	思わない 6. 答えられない
9	あなたは、この授業の内容を理解できましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
10	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
11~30	<この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください>

【質問Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

共通教育 学生授業評価（語学）

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

【授業科目名】 授業科目名を記入して下さい。

【担当教員名】 担当教員名を記入して下さい。

【学 年】 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

【学生 区分】 1. 一般学生 2. 留学生

【学 部】 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部 6. 工学部
7. 農学部

【質問Ⅰ】

1	あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？ （括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です） 1. 90%以上（14回以上） 2. 80~90%（12~13回） 3. 60~80%（9~11回） 4. 40~60%（6~8回） 5. 40%未満（6回未満）
2	あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。 1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分~50分程度 5. 30分未満
3	教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったですか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
4	テキストやプリントなどの教材が、効果的に使われましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない

5	<p>板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが、効果的に使われましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない</p>
6	<p>学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
7	<p>教員は、授業内容の説明以外に、あなたたちに演習や練習の時間を十分に与えましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
8	<p>あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. 答えられない</p>
9	<p>あなたは、この授業の内容を理解できましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
10	<p>この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
11~ 30	<p><この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください></p>

【質問Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

共通教育 学生授業評価（演習・実習・実験）

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

【授業科目名】 授業科目名を記入して下さい。

【担当教員名】 担当教員名を記入して下さい。

【学 年】 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

【学生 区分】 1. 一般学生 2. 留学生

【学 部】 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部 6. 工学部
7. 農学部

【質問 I】

1	<p>あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です）</p> <p>1. 90%以上（14回以上） 2. 80～90%（12～13回） 3. 60～80%（9～11回） 4. 40～60%（6～8回） 5. 40%未満（6回未満）</p>
2	<p>あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。</p> <p>1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分～50分程度 5. 30分未満</p>
3	<p>教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
4	<p>演習・実習・実験の方法に関する指示は、わかりやすく説明されましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
5	<p>教材または器材が使用された場合、それらは適切に活用されましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない</p>
6	<p>学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
7	<p>教員から手本・示範が示された場合、それらは適切でしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない</p>
8	<p>授業中は、演習や実習に集中できる雰囲気でしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
9	<p>あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. 答えられない</p>
10	<p>あなたは、この授業の内容を理解できましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
11	<p>この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
12～30	<p><この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください></p>

【質問 II】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

第2部 学部・研究科のFD活動

第4章 人文学部のFD活動

第1節 授業公開

(1) ピアレビュー実施形態の変更

平成24年度以降、人文学部のピアレビューは、平成28年度開始予定（当初は平成27年度開始予定）の学科・コース改編に向けたカリキュラム整備を学部全体の課題ととらえ、新コースのカリキュラム構築や運営に資すべく、分野内・分野間で教育に対する共通理解を深めることを目的として通常の授業を互いに広く参観しあうという形で実施されてきた。しかし、当初予定されていた新コース体制が教職課程との連携に比重を置いたものへと練り直された結果、既存の教育組織に大幅な入れ替えが生じる必要が無くなった。この結果、平成27年度には教員のピアレビューに関する意欲に減退傾向がみられるようになった。平成28年度に新コースカリキュラムが実際に始動したことともあわせ、ピアレビューを実施形態や企画趣旨のレベルから見直す必要が生じていた。

このため、一昨年度は新カリキュラムの始動にあわせて改革された基礎セミナーを幅広く公開することにした。これは初年次教育のあり方について議論を深めるとともに、自身が担当する際に授業改善のヒントを得ることを目的としたもので、次年度（つまり昨年度）基礎セミナー担当の教員の多くが参加するなど、その意図は十分果たされたものと考えられる。

しかしFD部会においてピアレビューのあり方を議論した結果、基礎セミナーの授業内容は大枠において統一されているものの、授業の進行状況には自ずと差がでるため、ピアレビューに適した授業が同日に行われる保証はなく、この方式を毎年続けることには困難が予想されるとの意見が出された。さらに近年教員の事務作業量が増加傾向にあり、十分な研究・教育の時間が得られていないことがピアレビューについての意欲の減退を招いている一因となっており、より簡素で効率的なピアレビューのあり方が求められるとの見解で一致したため、昨年度より新たなピアレビューのあり方を試行することとなった。本年度（平成30年度）においても、同様の形式を踏襲している。

(2) 具体的実施方法

昨年度からのピアレビューの具体的な実施方法は以下の通りである。

- ・人文学部の教員のなかから5名を選出し、その5名が任意の授業を参観する。「ピアレビュー参加シート」を記入し、提出する。
- ・参観者は、事前にその旨を授業担当の教員に連絡し、同意を得ておく。
- ・授業を公開する教員は、普段とかわらず授業を行う。ただし、参観者を考慮してプリントなどがある場合は多めに印刷しておく。
- ・参観者は授業後「ピアレビュー参加シート」を書き、提出してもらう。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

(1) 大学教育機構との共催による研修会

平成30年度 教育改善FD研修会(人文学部・東アジア研究科(人文系))

日程 平成30年9月19日(水) 14:30~15:10
場所 人文学部・理学部大会議室
(吉田キャンパス)
講師 林 寛子准教授(アドミッション・センター)
小川 勤(大学教育センター)
参加者 36名(アンケート21枚回収)



図1 人文学部の教育改善研修会の様子

内容

本研修会のテーマは「教学IR」であった。最初に

教学IR (Institutional Research) の目的と導入の意義、活用事例について大学教育センターの小川教授から説明があった。教学IRとは、「組織としての情報戦略のための研究」であり、「大学の理解、戦略、運営の改善に繋げる」活動であることが最初に明らかにされた。また、導入目的としては、様々なデータを分析し、見える化を図ることにより、課題を発見し、その課題を解決するきっかけとなることで、組織的な改善

を促す効果がある。教学IRの具体的な事例としては、島根大学における単位修得が順調でない学生の躓きの原因を、教学IRの手法を用いて、発見し、改善方法を提案した事例が紹介された。

次に、アドミッション・センターの林寛子准教授より、本学の教学IRの導入事例として「入試データを用いた検証・改善」について説明があった。分析・検証の結果、大学における学業成績(GPA)においては、センター試験を課さない特別選抜(AO入試や推薦I入試)の学生と一般入試の学生とは成績の差(有意差)は認められず、パフォーマンスは同じであるという結果が明らかにされた。ただし、AO入試の学生は、TOEICの平均得点(スコア)が低く、躓きがみられ、その結果、留年・退学の割合が高くなる傾向がある。また、2013年AO入試合格者のTOEICのスコアが例年より低いとの人文学部教員からの指摘を受け、この問題を改善するために、アドミッション・センターと人文学部は、平成28年度入試からAO入試において加点評価項目を新たに新設し、英語能力資格保有者の志願者に対して加点していく入試改革が行われたそうだ。この結果、平成28年度の人文学部のAO入試合格者のTOEICスコアは有意に上昇したそうだ。また、これをきっかけに、他の学部も募集要項にAO入試の評価基準を公表するようになったそうだ。これ以外に、特別入試の学生は、入学時および卒業時ともに自己評価が高い、在学中の活動率(ゼミ、部活、サークル活動等)が高い、大学院に進学するより就職する者が多い等の傾向が示された。

説明後の質疑応答では、以下の質問と回答があった。

Q1 分析結果を見ると、一般入試前期、一般入試後期、AO入試という順で成績トップ層の学生は一般入試から入学して来る傾向がみられ、AO入試合格者は中程度の学力の者が主に入学している傾向が読み取れるが、その通りでよろしいか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	4	19.0%
良かった	15	71.4%
どちらとも言えない	1	4.8%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	4.8%
合計	21	100.0%

A1 確かに 2013 年度入試データだけを見るとその傾向があるが、AO センターでは 2012 年度以前のデータも分析して、大学における学業成績 (GPA) においては、センター試験を課さない特別選抜 (AO 入試や推薦 I 入試) の学生と一般入試の学生とは成績の差 (有意差) は認められないと判断している。

Q2 全学でデータをまとめてしまうと、学生数の多い学部への傾向が全学的に反映されてしまうので、人文学部だけのデータを示してもらえないか? 人文学部の AO 入試の場合、学部からの入試データと面接結果のデータとズレが生じているが、アドミッション・センターはその当りの分析はできるのか?

A2 人文学部だけの入試データ等の分析はできる。ただし、入試関係のデータの分析はアドミッション・センターで行うが、教務や就職関係のデータ分析は、教学 IR 部門を今年立ち上げた大教センターで今後、行っていく予定である。今回は、学部の先生方が教学 IR 部門で分析して欲しい内容をお聞きするためにこの FD を開催している。

Q3 人文学部では学部改組にともなって、カリキュラム改革が行われているので、学部としても独自でデータ分析を行う必要があるが、アドミッション・センターが分析したデータ等を利用させてもらいたい。

A3 アドミッション・センターも大学教育センターも、人文学部と連携して教学 IR を推進していきたいので、協力できる場所があれば随時行っていきたい。

研修会後のアンケートには、「非常に良かった」+「良かった」を合せて 90.4%であり、満足度の高い研修会になった。本研修会の感想については、「客観的なデータに基づく議論は生産的でよいと思う」、「授業アンケート、ポートフォリオ、進路希望等のデータを紐付けて欲しい」という意見があった。

平成 30 年度アラカルト研修会 (人文学部)

『障害のある学生への授業中支援～支援事例の紹介～』

日程：平成 31 年 3 月 1 日 (金) 14:30～15:10

場所：人文学部理学部管理棟 4 階大会議室

講師：学生特別支援室：岡田菜穂子准教授、田中亜矢巳カウンセラー

参加者：42 名 (アンケート回収 23 名)

学生特別支援室 (以下、SSR) の岡田菜穂子准教授 (コーディネータ) から、本研修のメインテーマである障害のある学生への授業中支援について、配慮願の流れと配慮願の中で授業中にどのような配慮をお願いするケースが多いのかを情報提供しながら研修会が進められた。

研修会は 2 部構成になっており、第 1 部では、SSR を中心とした障害学生の修学支援のしくみ (支援体制) およびその中での SSR の役割について岡田准教授から説明があった。この中で強調されていたのは、学部は教育 (授業) を学生に提供するので、学部と授業担当の先生方が一体となった支援を実施する必要があり、SSR はそのサポートを行うという役割分担を理解する必要

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか?		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	3	13.0%
良かった	20	87.0%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	23	100.0%

があることであった。また、配慮願送付の流れでは、障害学生本人と SSR が協力して配慮願の原案を作成し、学部の障害学生連絡会の学部の連絡員（教員）にその内容を確認していただいた後に、学部の連絡員（職員）から授業担当者に配慮願が配布されるという配慮願の一連の流れの説明があった。人文学部の先生方は、この流れは概ね理解されているようだった。

配慮願で授業中に具体的にどのような配慮をお願いするかについては、コミュニケーションに関する支援のニーズが多いので、プレゼンやグループワーク等での授業中の発言についての配慮をお願いするケースが多いようだ。

第2部では田中カウンセラーから、実際に利用されている配慮願の内容を事例に、あるケースを取り上げ、どのような支援を先生方に依頼しているのか説明が行われた。情報保障や注意事項の文書伝達、座席の指定などの効果的な支援方法についても説明があった。さらに、途中退席の可能性があることや発作の時の対応などについて、項目立てをして、どのような症状がどのような障害に該当する可能性があり、その際に配慮願の中でどのような支援を先生方をお願いしているのか、いくつかのパターンを示して具体的な説明があった。

講師の説明の後、会場の参加者から以下のような意見や要望があった。

最近、学生の定期試験の答案を見ていると、日本語の字が判別できないものや、英語のスペルが不明瞭で判断しにくいケースが増えてきている。大学に多様な学生が入学しているということを実感している。支援を行っていかねばならないケースが増加しているように感じる。

また、他の教員からは、コミュニケーションが難しい学生に対して卒論を書かせることが指導教員としていかに至難なことであるのか、SSR は実感できているのかという意見があった。日本語表現や論文の書き方を丁寧に説明しても、卒業論文が書けない学生に対して「なぜ書けないのか」と問いかけると、学生は精神的なショックから、それ以降、来れなくなってしまうケースもあり、指導教員自身も疲弊してしまう。SSR が言うようにこのような学生が増えてきた時に、大学はどこまで面倒をみたらよいのか、どこまで受け入れるのか等について、大学全体としてもう一度、よく考えた方がよいのではないかという意見があった。

SSR に対する要望としては、これまでに支援のノウハウが蓄積されてきていると思うので、ぜひ、共有するような機会を提供して欲しいという要望があった。同じようなパターンに他の先生方がどのように対応しているのかを知りたい。これに対して、SSR としては、支援ノウハウも確かに蓄積されてきているので、これからは個人情報保護に留意しながら、ノウハウを公開する方向で検討していきたいという回答があった。

これ以外に、周りの先生や学生が困っているのに、本人がその自覚がないケースの場合、どのように教員や周りの学生は対応したらよいのかといった質問があった。これに対して、SSR としては困った方が、まず SSR に相談に来てくださいという回答であった。

研修会後のアンケート結果では、非常に良かった（13.0%）、良かった（87.0%）と大変好評だった。自由記述の意見としては、「ここ数年、該当する学生を指導してきたので、大変実感のある研修内容だった」、「本件に関する蓄積の一端を知ることができ、貴重な機会だった。息の長い取り組みが必要と感じた」、「問題の深刻さが理解できた」、「障害のある学生の支援の在り方について知ることができた」、「グレーゾーンの学生の扱いが難しい」などの意見があったが、今回のような研修会を今後も行って欲しいという好意的な意見が多かった。

今回の研修会を通して、SSR と学部との役割分担を再確認できたことはよかった。また、さまざまな修学上の困難を抱える学生が増えている現実と、その対応に苦慮する先生方の状況を改めて再認識することができた。大学として、いかに組織的にこれらに対応したらよいのか、今後も解決しなければならない障害学生の支援を巡る課題は多いと感じた。

(2) 人文学部FD部会主催による研修会

新カリキュラムの成果と課題を抽出・共有するFD研修会

日時：12月19日（水）

場所：人文学部理学部管理棟4階大会議室

参加者：38名

既に述べたように、人文学部では平成28年度より新カリキュラムに移行し、その一期生が3年生となりコース・分野に所属して専門を学びはじめた段階にある。この機会に、教員一人一人が学生と接するなかでみえてきた新カリキュラムの成果と課題を共有し、さらなるカリキュラムの改善につなげるためにFD研修会を実施した。当日は多くの参加者から忌憚のない意見を聞くため、参加者全員が1・2分程度、新カリに関する意見や感想などを自由に発言し、他の参加者はそれに対して論評を加えることなく、次の発言者へと移るといった形式をとった。集められた意見は教務学生部会と共有し、今後のカリキュラム運用の改善に役立てられることとなった。

第3節 教育改善に関する活動

(1) 第1回基礎セミナー部会の開催

日時：平成31年1月24日（木）

場所：人文・理学部第一小会議室（人文・理学部管理棟4階）

参加者：FD部会・平成31年度基礎セミナークラス担当教員

内容：

FD部会では例年、FD部会・教務委員および次年度の基礎セミナー担当者を参加者とし、次年度の授業概要・授業目標・授業計画のすりあわせを行う基礎セミナー部会を開催している。

FD部会では平成28年度から基礎セミナーの改革を実施し、第1クォーターで学生の人間関係構築やアカデミック・スキルの習得に重点を置いたクラス別指導を行い、第2クォーターで各コースにおける履修のあり方などに関する合同のガイダンスを行うこととした。そして平成29年度には、平成28年度の成果と反省をふまえ、授業の枠組については平成28年度のあり方を踏襲し、成績評価の方法を簡素化するという方向性が示された。

これをうけて、人文学部FD部会では平成31年度基礎セミナークラス担当教員を主な参加者として第1回基礎セミナー部会を実施し、次年度の基礎セミナー実施にむけて意見交換と情報の共有をはかった。平成31年度については基本的に平成29・30年度の方針を継続することとし、授業概要・一般目標・到達目標および合同授業の内容について下記の通り共有し、平成30年度基礎セミナークラス担当教員に対し、下記に基づいて統一的なシラバスを作成するようお願いした。

人文学部基礎セミナー授業概要・一般目標・到達目標および合同授業の内容

【授業概要】

人文学部に入学した皆さんが、はやく大学生活に馴染み、大学を勉学の場として活用してゆけるように導きます。あわせて、今後四年間の勉学について各自の方向性や目的意識がより明確になるよう促します。

【一般目標】

(1) 自らの大学生活の目的について、明確な意識を持つことができる。

- (2) 大学の環境に適応し、大学を自らの勉学の場として活用できる。
- (3) 自らの勉学に必要な情報・文献を収集できる。
- (4) 日本語論述にかかわる基礎的知識を習得し、大学の授業で課されるレポートを作成できる。

【到達目標】

知識・理解の観点：自らの人生の展望を持ち、そのなかでの大学生生活の位置づけを理解している。

思考・判断の観点：自ら問いを発見し、よく考える習慣を体得している。

関心・意欲の観点：人文学全般に広く関心を持つとともに、特に自身の素質に適い、自らが深く関心を持てる分野に気づいている。

態度の観点：大学生生活を送る上で基本的な習慣やマナーを身につけ、主体性を確立している。

技能・表現の観点：大学の授業で課されるレポートの作成において、適切に情報を収集したり、文章を構成・表現したりする方法・技術を習得している。

【合同授業の内容】

- (1) 留学案内 第8回に実施予定 「人文学部生のための留学案内」 (国際交流部会と連携)
- (2) ポートフォリオとキャリア教育 第9回に実施予定
「人文学部生のためのキャリア教育」 (学生委員・就職支援部・学生支援センターと連携)
- (3) 各コースの紹介と履修モデルの解説 第10～14回に実施予定
「学際的視野を持つために (各コースの紹介と履修モデル)」 (各コースに委託)
- (4) 総括 第15回に実施予定
「ポートフォリオの返却・レポート課題アンケートの回収・授業アンケートの実施」 (FD部会)

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

(1) 平成30年度の状況

・学生授業評価

平成30年度の学生授業評価は、29年度の302科目実施率79.7%から354科目実施率80.5%となり、やや増加した。

以下、アンケートを実施した全授業における評価の平均値を29年度と比較して分析を行う。

【図2】平成30年度学生授業評価 全体平均

項目	29年度	30年度
授業外学習時間	2.59	2.56
学習目標の達成	3.91	3.92
理解度	4.06	4.07
満足度	4.35	4.36
出席率	4.6	4.6

平成30年度は授業外学習時間・学習目標の達成・理解度・満足度・出席率の各項目についてはほぼ横ばいであった。全体として各項目とも高い水準を維持しているが、授業外学習時間については低い傾向が続いており、何らかの具体的方策を立てる必要があるだろう。なお、言うまでもないことではあるが、学生授業評価の高低はそのまま授業の質の善し悪しを示すものではない。

・教員授業自己評価

教員授業自己評価の実施率は29年度の33.5%から32.7%とやや減少した。なお、平成29年度の実

施率が昨年度の報告書より上昇しているが、これは過去にさかのぼって入力が行われた結果によるものと考えられる。昨年度の報告書執筆段階と比較すると、実施率はやや増加していることとなる。平成30年度の数値も、さかのぼっての入力が行われることで上昇していく可能性はあろう。ともあれ、引き続き教員への周知徹底が今後の課題である。

以下、アンケートを実施した全授業における評価の平均値を29年度と比較して分析を行う。

【図3】平成30年度教員授業自己評価 全体平均

項目	29年度	30年度
学習目標の達成	4.2	4.48
理解度	4.23	4.53
満足度	4.06	4.23

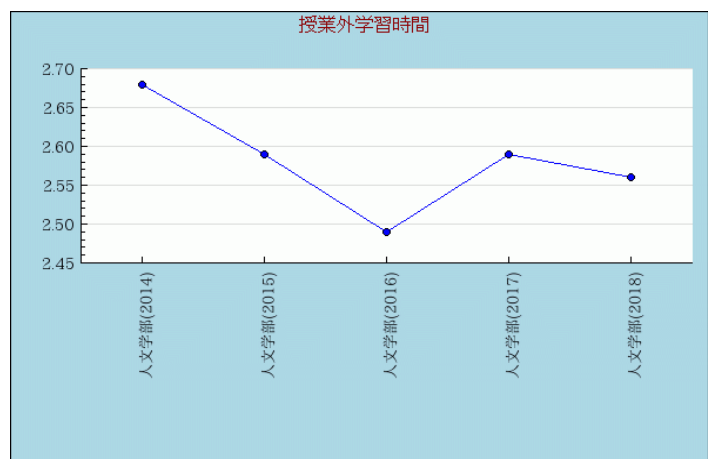
平成29年度と平成30年度を比較すると、学習目標の達成・理解度・満足度の各観点についてやや上昇している。【図2】と【図3】を比較すると、学習目標の達成、理解度について、学生の評価より教員の自己評価が高い。一方で、満足度については教員の自己評価よりも学生の評価のほうが高い。これは平成29年度と同じである。このあたりの誤差をどの程度少なくできるかが今後の課題である。

(2) 経年変化

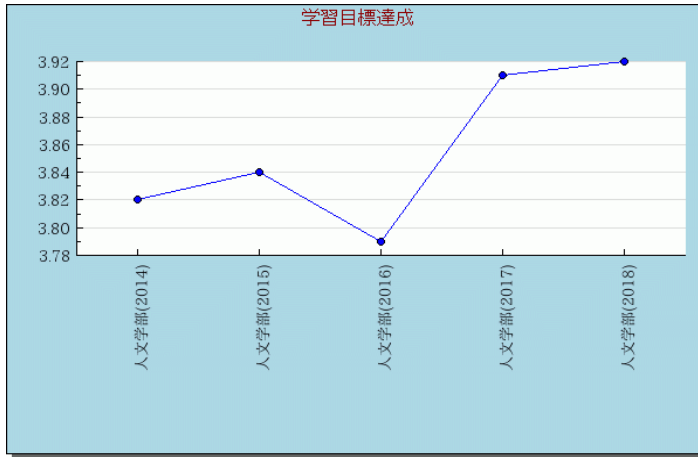
・学生授業評価

授業外学習時間、学習目標の達成、理解度、満足度、出席率について、平成26年度から30年度までの5年間の経年変化を【図4】～【図8】に示す。

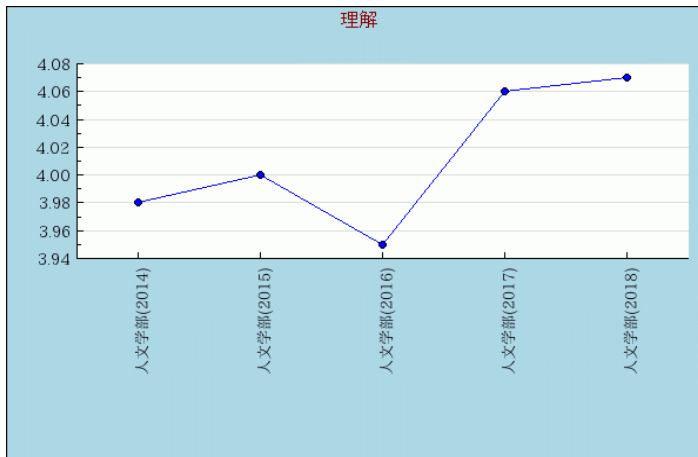
【図4】授業外学習時間 経年変化



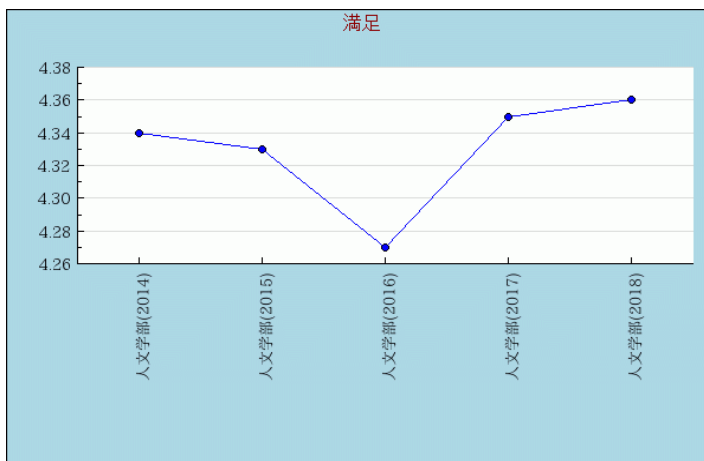
【図5】学習目標の達成 経年変化



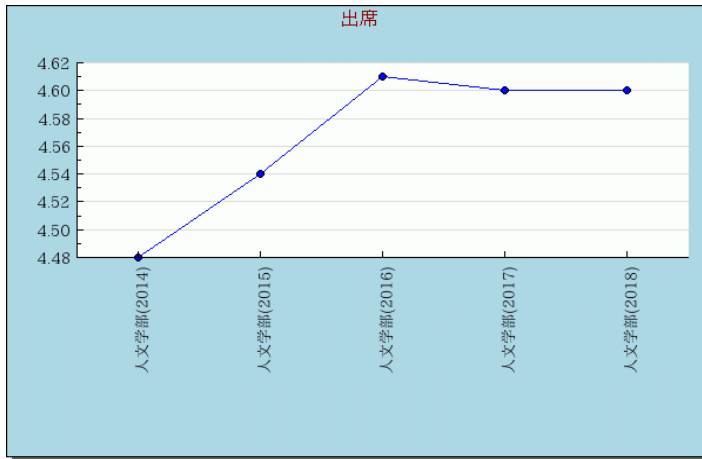
【図6】理解度 経年変化



【図7】満足度 経年変化



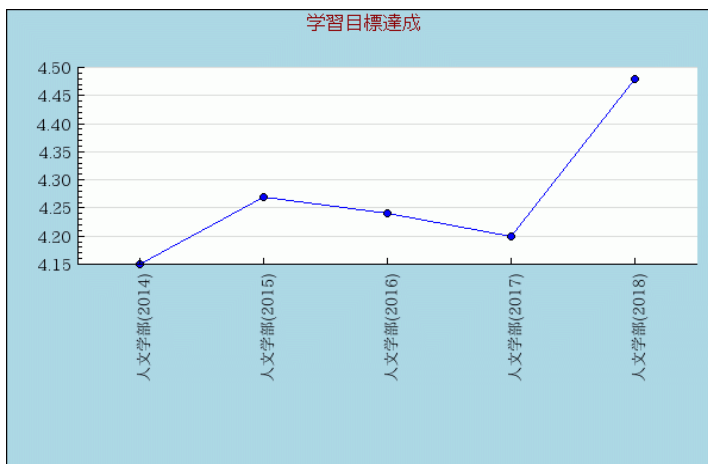
【図8】出席率 経年変化



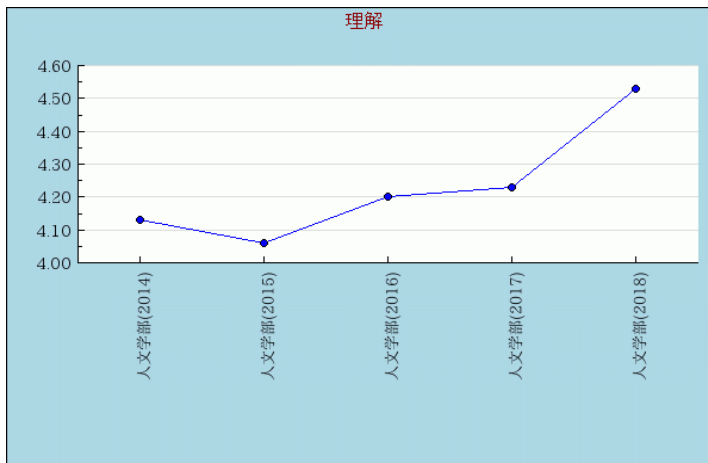
・教員授業評価

学習目標の達成・理解度・満足度について、平成26年度～30年度の5年間の経年変化を【図9】～【図11】に示す。なお、平成26年度～29年度の数値は、前年度の報告書と若干ズレている。これは前述のように、過去にさかのぼって入力を実施された結果によるものと考えられる。

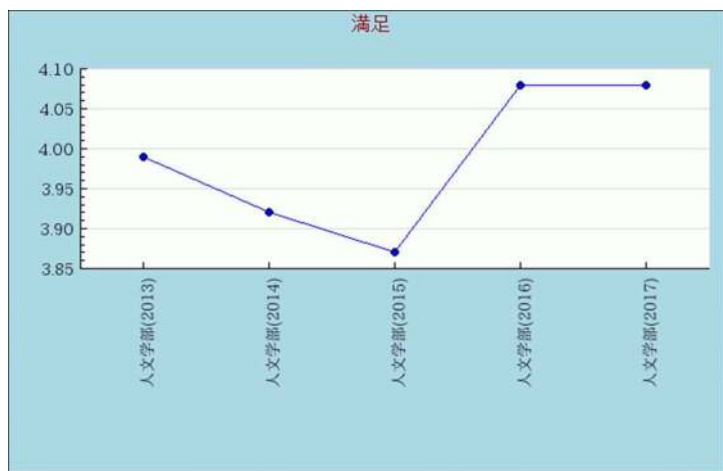
【図9】学習目標の達成 経年変化



【図10】理解度 経年変化



【図 1 1】満足度 経年変化



(3) 今後の課題

授業外学習時間の向上が今後の課題といえる。山口大学では平成 27 年度より各授業でアクティブ・ラーニングの数値化が開始されたが、人文学部では平成 28 年度から新コースカリキュラムが実施され、その一環として PBL 授業も導入された。そのような授業の導入により、学生の受動的学習スタイルも大きく変化することが予測される。それに応じて、教員自らも、従来の授業スタイルから、新しいスタイルへの移行が求められる。

教員授業自己評価の入力率向上については、このままの方式では飛躍的に改善されるとは考えにくい。一斉メールでの通知や教務委員による会議時の周知徹底だけでは、入力率の飛躍的な向上は難しい。特に平成 30 年度の場合、今後上昇していく可能性はあるものの、現状の数値ではむしろ低下傾向が確認できる。数年指摘していることだが、現在の学習目標の達成・理解度・満足度・出席率という項目では、時間を割いて入力してもフィードバックされる部分が少ない。教員一人一人にとってもっと有用な調査、つまり教育改善にすぐさま反映できる項目であれば、自ずと入力率も向上するのではないであろうか。

第 5 節 FD 実施経費報告書

平成 30 年度の FD 活動において経費は使わなかった。

第 6 節 来年度の課題

(1) 教員授業自己評価の入力率向上に関する組織的な取り組み

第 4 節(3)を参照のこと。

(2) 授業外学習時間の確保（単位制度の実質化）

第 4 節(3)でも言及した通り、人文学部では平成 28 年度から新コースカリキュラムが実施に移された。その中でリテラシー教育の充実が大きな目玉となっており、その中に PBL 授業がある。今やアクティブ・ラーニングの導入は、大学全体の流れとして学部教育にも浸透しつつあるが、その具体的

な方法は、人文学部の各学問分野により、自ずと変わってくるであろう。それぞれの分野に合ったアクティブ・ラーニングの研究開発が求められる。

一方、経済的事情などから、アルバイトに多くの時間を割かざるをえない学生も存在する。授業外学習時間の確保にむけた取り組みと同時に、学生への支援を手厚くし、彼・彼女らが学業に集中する環境を整えなければならないであろう。こうした点を含め、現状における適切なバランスについて、議論を深める必要がある。

(3) 適正な成績評価

基礎セミナーやオムニバス授業は、学部全体で統一した授業であり、難易度や成績評価に関して、ある程度の基準が求められる。FD部会では、既述のように平成 28 年度より基礎セミナーを改革し、基礎セミナー部会を複数開催した。オムニバス授業についても、平成 27 年度にFD研修会を開催した。こうした結果、評価基準や授業内容について、一定度の統一がはかられ、上述の諸点についてはかなり改善されたと考えている。なお、平成 28 年度よりはじまった新コースカリキュラムには、リテラシー科目群のなかに「必読名著」という必修授業があり、やはりこの授業に関しても、それが必修としてカリキュラムに組み込まれている以上、ある程度統一した基準のもとで成績評価を行うことが求められよう。その成績評価の基準作成へ向けて、人文学部FD部会が主導的な役割を担う必要があると思われる。

(4) その他

くりかえし述べているように、人文学部では平成 28 年度より新コースカリキュラムが実施されている。平成 27 年度から 28 年度にかけてFD部会が基礎セミナーの改革に注力したのも、新コースカリキュラム一期生の入学にあたって、より良い初年次教育のあり方を模索したためであった。平成 29 年度から、新コースカリキュラムの一期生はリテラシーなどカリキュラムの目玉といえる授業をうけはじめている。そのなかで教育改善のヒントや、逆に思わぬ問題点が浮上する可能性はあろう。学生や教員の要望をくみとり、新カリキュラムの成果や課題点を共有することが必要となる。

第5章 教育学部のFD活動

第1節 授業公開

教育学部としての授業公開は実施していない。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

第1回FD研修会

「新任教員FD研修会」

講師:丹 信介, 和泉研二, 松田信夫(教育学部総務会)

日時:平成30年4月25日(水) 15:00~16:30

場所:教育学部第一会議室

参加者:平成30年4月着任の新任教員3名

内容:教育学部のミッション、課程認定、教育学部・大学院・附属学校の現状と課題や改革の方向性等

第2回FD研修会

『教職概論～現職教員との座談会を通じた実践～』*

『学部教育における附属学校の活用事例について』**

講師:長友義彦(教育学部教員)*

吉川幸男(教育学部教員)**

日時:平成30年6月20日(水) 15:05~16:30

場所:教育学部21番教室

『教職概論～現職教員との座談会を通じた実践～』において、初めにカリキュラムにおける授業科目「教職概論」の位置づけ、目的、実施体制等の確認があった。その後、「現職教員との座談会」の目的、学生の座談会における学びのデザイン等の説明、また座談会の実践例の紹介があった。教職概論を通して、学生は次のような成果・実感:

【認知的側面】(1)教職のイメージ、教員に求められる力 (2)目指す教員像 (3)4年間の学びの道筋 (4)これからの自分に必要なこと

【非認知的側面】(1)初期における学生交流の多様化 (2)コミュニケーションマインドの変化 (3)責任感の醸成 (4)協働による学習の体験

等が期待できるこのとの報告があった。

『学部教育における附属学校の活用事例について』において、平成29年度に山口大学教育学部社会科教育教室が行った学部1年次授業科目「社会科授業実践基礎演習」における附属学校の活用についての報告があった。「社会科授業実践基礎演習」の目的は、社会科授業の実際をビデオ視聴等により観察し子どもの動きや教師の指導に関する議論を演習形式で行うことにより社会科学学習の観点から授業の見方を養うことである。今回の報告では、附属学校における社会科授業事例を4事例観察し協議を行う実践例を紹介した。また、今後の課題として、(1)学部と附属の時間割設定と調整、(2)学部・附属の「仲介者」、校長常勤化に伴う問題、(3)事務手続き、(4)「内容開発研究」における小主免学生の問題、以上4点があることを述べられた。

第3回 FD 研修会

平成30年度アラカルト研修会

『「教職課程」をお持ちではないですか？～これからの国立教員養成学部・教員の在り方について～』

講師：和泉研二

教職センター副センター長（教育学部教授）

日程：平成30年7月18日（水）15:00～15:40

場所：教育学部 21 番教室

参加者：72名（アンケート回収 32名）

教職センターの和泉副センター長（教育学部教授）より、本学の教職センターの紹介を兼ねて、設置された背景、組織、活動状況について説明があった。次に、センターのこれまでの活動と本年度の活動予定について説明があった。最初に教職課程のカリキュラムの企画・開発として平成31年度から導入される新教職課程への対応のための再課程認定等の活動が行われているとの報告があった。また、教員を目指す学生の支援としては、教職センターアドバイザーによる教育実習校訪問や教員採用試験面接事前対策等の活動が明らかにされた。これらの活動は他学部には十分周知されていないことが多いが、教員を目指す学生にとっては、大変有効な支援活動であることがわかった。本年度の活動予定としては、①教員採用試験事前ガイダンス、②都道府県・市町村採用試験の説明会の実施、③教員採用試験大学推薦候補者選考の実施、④センター主催の教員採用試験対策セミナー等の活動が行われるようだ。

次に、教員養成改革と有識者会議の動向について説明があった。最初に文部科学省の基本的な考え方・方向性が説明された。その中でも特に興味深かったのは、教員養成を行っている大学や文科省等のサプライサイドと新任教員を受け入れる教育委員会や学校現場等のデマンドサイドとの間に人材育成を巡って認識の「ずれ」があるという説明であった。大学や文科省は、教員養成に関して新しい教育課題にも対応できる人材を大学等で十分育成できているという認識がある。その一方、校長や教育委員会は、初任者教員に対して、子ども理解や対人関係能力、コミュニケーション能力等の不足を指摘し、教員養成が必ずしも十分でないという厳しい評価であることを明らかにした。このずれを各大学がどのように解消しようとしているのかについて、先行している各大学（北海道教育大学、弘前大学、東京学芸大学、福井大学、熊本大学等）の取組事例の紹介は大変興味深かった。

研修会後のアンケート結果からは、「非常に良かった」と「良かった」を併せて84.4%となっており、満足度の高い研修会であった。

自由記述には、「非常に内容の濃い研修だった」、「教職課程を設置しているすべての学部でこの研修を行うべきである」、「他大学の動きが良く見えてよかった」、「教員養成に対する国の政策の方向性や各大学のグッド・プラクティスがよく理解できてよかった」、「教員にとっては刺激的な内容であった」といった肯定的な意見がある一方で、「各大学が教員養成を巡って競争しているような感じがしたが、競争から何か生まれるのか」、「大学が教員養成に失敗しているようなイメージを受けた」、「教職センター以外の話が多かった」という意見もあった。また、今回の研修会に関連して今後開催して欲しい研修内容としては、「学生が教職力を付けることができる具体的な学習内容と支援・指導の在り方」



設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	6	18.8%
良かった	21	65.6%
どちらとも言えない	3	9.4%
あまり良くなかった	1	3.1%
良くなかった	1	3.1%
無回答	0	0.0%
合計	32	100.0%

や「教職力を評価するための意味のある評価項目と評価方法」に関する研修を開催して欲しいとの要望があった。

研修会の実施時期や実施場所については、ほとんど満足したという結果となった。

第4回 FD 研修会

「教育改善 FD 研修会」

『教学 IR』*

『入試データを用いた検証・改善例』**

講師:小川 勤(大学教育センター)*

林 寛子(アドミッションセンター)**

日時:平成30年10月17日 15:00~16:37

場所:教育学部 21 番教室

参加者:70 名程度

今回のFD研修においては、小川講師による『教学IR』においてIR(Institutional Research)の紹介、その目的や手法、また島根大学でのIR事例の紹介、教学IRの活用について述べられた。教学IRの活用については、(a)データ分析、見える化、(b)現状把握、(c) 関連・因果関係の発見、(d)改善方法等の検討、について教員と大教センターとの協力・連携が重要であることの説明があった。この後引き続いて、林講師による『入試データを用いた検証・改善例』において本学におけるアドミッションセンターによるIR事例「入学者のデータを用いた検証・改善例」の詳しい紹介があった。

第5回 FD 研修会

平成30年度アラカルト研修会

『本学学習支援システムの特徴と活用 ~修学支援システム及び Moodle の学習支援機能概要~』

講師:岡田 耕一(大学教育センター講師)

日程:平成30年12月19日(水) 15:00~15:30

場所:教育学部 21 番教室

参加者:72名(アンケート回収 43名)



【★説明内容】

岡田 大学教育センター講師より、『本学学習支援システムの特徴と活用 ~修学支援システム及び Moodle の学習支援機能概要~』と題し、本学の学習支援システム(LMS: Learning Management System)として運用されている修学支援システム(自己主導型学修総合電子システム(eYUSDL))及び Moodle の機能やメリット・デメリットについて説明があった。

まず、LMS で出来ることの整理

があり、「①資料作成・配布等、②課題や演習の出題・回収・講評等、③小テスト・アンケート等、④

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	4	9.3%
良かった	18	41.9%
どちらとも言えない	12	27.9%
あまり良くなかった	3	7.0%
良くなかった	4	9.3%
無回答	2	4.7%
合計	43	100.0%

学習活動の評価・採点等、⑤出欠の管理、⑥メッセージ・メール・掲示板・Wiki・チャット等のコミュニケーション」が挙げられた。その上で、LMS利用のメリットとして「ペーパーレス化、省力化、双方向性」の3点、デメリットとして「LMS自体の学習コスト、準備負担、周知に時間を要すること、設定ミスやシステムトラブルの可能性」の4点が指摘された。その後、修学支援システム(eYUSDL)及びMoodleの動線等について説明があった。

次に、修学支援システム(eYUSDL)の学習支援機能として、講義資料・レポート・小テストなどの機能について作成方法や教員・学生それぞれの画面表示方法などについて説明があった。同様に、Moodleの学習支援機能についても説明があり、Moodleについては、コース作成や学生登録などの諸準備の必要性について説明があった。

【★質疑応答・意見交換】

岡田 大学教育センター講師からの説明の後、以下のとおり、幾つかの質疑応答が行われ、学習支援システム活用のニーズと関心の高さが窺われた。

また、アンケートの自由記述からは、システムの個々の機能の説明よりも、実際の活用方法や活用度合を知りたいといったコメントがあった。

Q1 授業に関わらず、学部の学生全体にアンケートをとりたい場合に、修学支援システム(eYUSDL)の機能は活用できるのか。

A1 仮の授業グループ設定をするなどの対応で、可能かと思われる。

Q2 修学支援システム(eYUSDL)は学外からアクセス可能なのか。

A2 学外からアクセス可能である。出張時の授業準備などにおいて便利である。

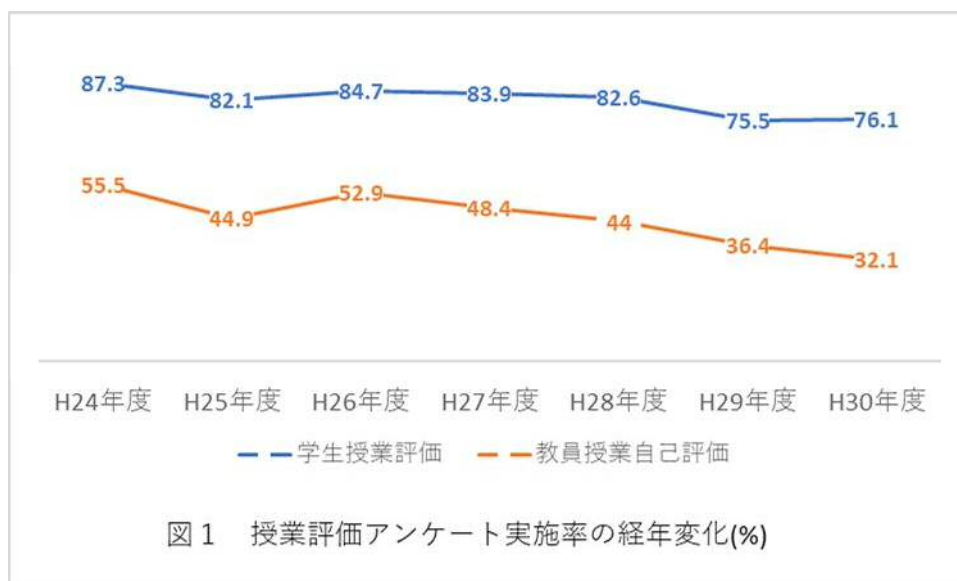
第3節 教育改善に関する活動

教育学部の改組に伴い、カリキュラムフローチャート等を作成した。その際、コース別のカリキュラムマップに共通教育を加え、一貫の学士課程としての、ディプロマポリシーと各授業科目の到達目標との関係が一覧できるよう、可視化を行った。これについては <http://www.epc.yamaguchi-u.ac.jp/curriculum.html> にて公開予定である。

【優秀教員表彰等】共通教育におけるアクティブラーニングの授業実践に顕著な成果を挙げた教員を表彰する第3回「ALベストティーチャー」において本学部霜川正幸教授が受賞した。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

平成31年度4月時点で確認できたデータによる学生授業評価、教員授業評価の実施率の経年変化を図1に示す。実施率は、昨年度に引き続き学生授業評価および教員授業評価とも減少傾向にある。教員授業自己評価については、昨年同様、全教員が出席する拡大教授会において入力に依頼が数度なされたが、それ以外の特別な呼びかけ等は今年度も行わなかった。教員授業自己評価の意義を再度認識し一人一人が取り組まなければならないという意識を高める工夫を行い、また、呼びかけを強化するなどを行い、実施率を回復することは次年度の課題である。



第5節 FD実施経費報告書

平成30年度教育学部FD活動において経費は使わなかった。

第6節 来年度の課題

平成30年度は、昨年度に引き続き学部としての公開授業を実施しなかったが、教育学部研究科専門職学位課程（教職大学院）では、原則すべての授業を公開している。また、平成30年度に卒業生に対し教育学部では授業、教育自習、卒業論文、ちゃぶ台プログラム等に関する調査を行い、その分析を行った。これらの点を踏まえて、学部における公開授業のあり方・方向性について検討することが課題となる。

教員自己授業評価の実施率向上についての組織的取り組みは、ここ数年非常に大きな課題である。平成30年度の実施率は32.1%となっており、早急に入力を促す方法を検討するべきである。

学生授業評価の実施率の緩やかではあるが減少の傾向がある。学生授業評価についても実施を促す方法を検討するべきである。

授業外学習時間の確保については、上で述べた授業、教育自習、卒業論文、ちゃぶ台プログラム等に関する調査を反映した形で対応が必要であると考えられる。調査によれば、山口大学教育学部のちゃぶ台プログラム等で小中学校においてチューターを行っている学生が多い。このような点を踏まえ授業外学習時間の確保について改めて考えることが必要である。

第6章 経済学部でのFD活動

第1節 授業公開

授業公開についてはそのあり方が非論されることとなり、昨年度に続き、今年度も実施しなかった。従来は、公開希望者を選出、公開当日都合のいい委員が授業を見学し、参加教員が感想を述べるというだけのものとなって実施の形骸化が進んでいた。公開希望者が一巡し、また、参加者の数も減少傾向にあったため、見直しをすることとなっていたが、よりより具体的な改善案が出で来なかった。ただし、一般市民を対象とする公開授業の数を増やすなど必要な努力は続ける。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

「科研獲得文化構築のためのFD研修」

以前より経済学部では、一部の若手研究者を中心に科研費獲得のための研修会などを実施してきたが、2018年度は、若手以外の研究者も含めて科研費獲得をひとつの組織文化として構築、定着させるための活動を本格的に実施した。そのために発足した6人のメンバーからなる科研獲得ワーキンググループを中心に検討を行い、以下のような活動を実施した。

第1回科研獲得戦略WG

4月18日（水）12時より、経済学部学生対応室にて

内容：昨年度の募集および採択状況の確認、今後のスケジュール確認などを行った。

昨年度科研採択者の報酬と今後の活動について

4月18日（水）13時30分より、経済学部第1会議室において

内容：教授会の開催にあたり、平成30年度の科研に採択された3名の方を全教員の前で学長が発表し、全教員で祝福の拍手を行った。また9月の応募にむけて講演会などの活動をFD研修の一環として実施していくことをアナウンスした。

第2回科研獲得戦略WG

5月16日（水）17時10分より、経済学部学生対応室にて

内容：昨年度末に行った科研費獲得戦略報告に対する各教員の意見集約と検討、および今後の取組について確認した。

第3回科研獲得戦略WG

6月6日（水）12時より、経済学部学生対応室にて

内容：科研獲得講習会の事前打ち合わせとアンケート調査の実施について

アンケート調査の実施

6月20日（水）13時30分より、経済学部第1会議室にて

内容：教授会の場を借り、科研費獲得に関するFD講習会としてどのような内容の話を聞きたいか、各教員にアンケート調査を実施。

アンケート調査ご協力のお願い

科研費獲得戦略WGでは経済学部教員の皆様に、科研費獲得のために有益な情報をご提供したいと考えております。つきましては、FD研修会等における講習内容に関して皆様方のご意見を参考にさせていただきたく存じます。お忙しいところ大変恐縮ではございますが、下記アンケートへのご協力をお願い申し上げます。なお、講習内容に関してご希望に沿うことができない場合がございますが、その場合は予めご了承くださいませようお願い申し上げます。

***** 以下、アンケート項目 *****

A: 該当するものに○をお付け下さい		
ご所属	1.経済学科	2.経営学科
		3.観光政策学科
ご職階	1.教授	2.准教授
		3.講師

B: 質問項目 (科研費獲得に関するFD講習会の内容について)	該当するものに ○をお付け下さい (複数選択可)
Q1 科研審査員の申請書の審査ポイントについて	
Q2 科研の採択者は何を重視して申請書を作成したのか	
Q3 具体的な申請書の作成アドバイス (「研究目的・研究方法」、「本研究の着想に至った経緯」、「研究代表者および研究分担者の研究業績」等の申請書の項目に関するアドバイス)	
Q4 やってはいけない申請書の書き方について	
Q5 科研に採択される人・されない人の申請書の違いとは	
Q6 URAの効果的な利用の仕方・URAで何が期待できるか	
Q7 科研費の獲得は研究者個人にとってどのような意義があるのか	
Q8 科研費の獲得は山口大学にとってどのような意義があるのか	
自由記述	

以上です。ご協力ありがとうございました

科研費講習会

7月18日（水）13時30分より、経済学部第1会議室にて

内容：教授会の開催に先だち、創成科学研究科（理学系）の松野浩嗣先生を講師としてお招きし、『科研費を「当てる」とはどういうことか ～第1段審査と第2弾審査の経験から～』というタイトルで講習を実施していただき、意見交換を行った。

第4回科研獲得戦略WG

8月2日（水）12時より、経済学部学生対応室にて
内容：第2回講習会の実施、およびピュアレビューの施行について検討を行った。

第2回科研講習会

9月19日（水）13時30分より、経済学部第1会議室にて
内容：経済学部の中でも科研獲得実績の多い2人の先生（寺地伸二、藤田健）に応募書類作成上の工夫や留意点などの体験談を報告していただき、有益な情報の共有を行った。

第5回科研獲得WG

1月16日（水）12時30分より、経済学部学生対応室にて
内容：平成31年度科研応募件数の確認と傾向分析、ならびに来年度以降の活動について検討を行った。

第3節 教育改善に関する活動

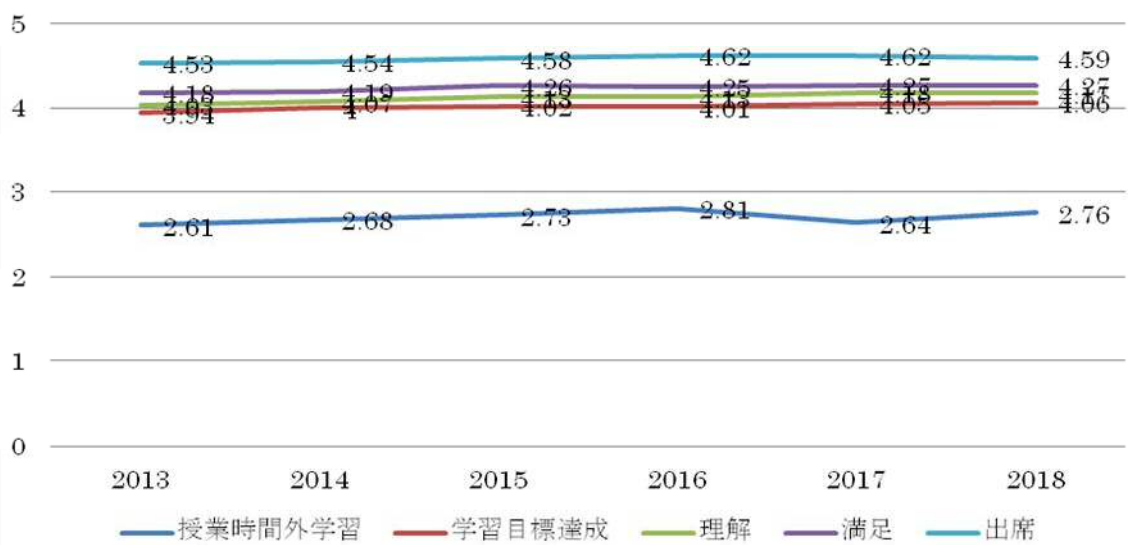
特記事項なし

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

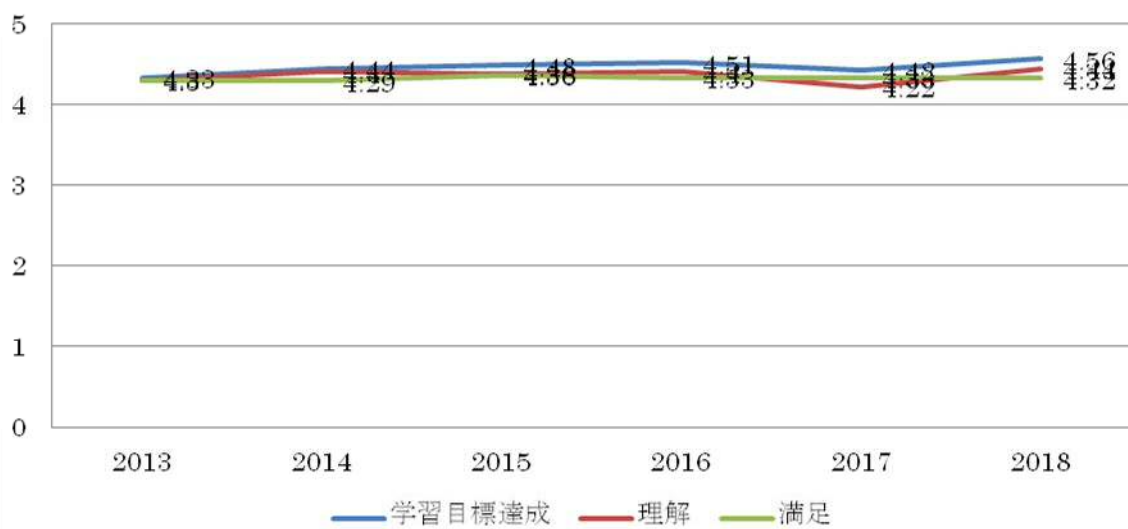
学生授業評価および教員自己評価の経年変化を調べてみたところ、以下のような特徴がみられた。

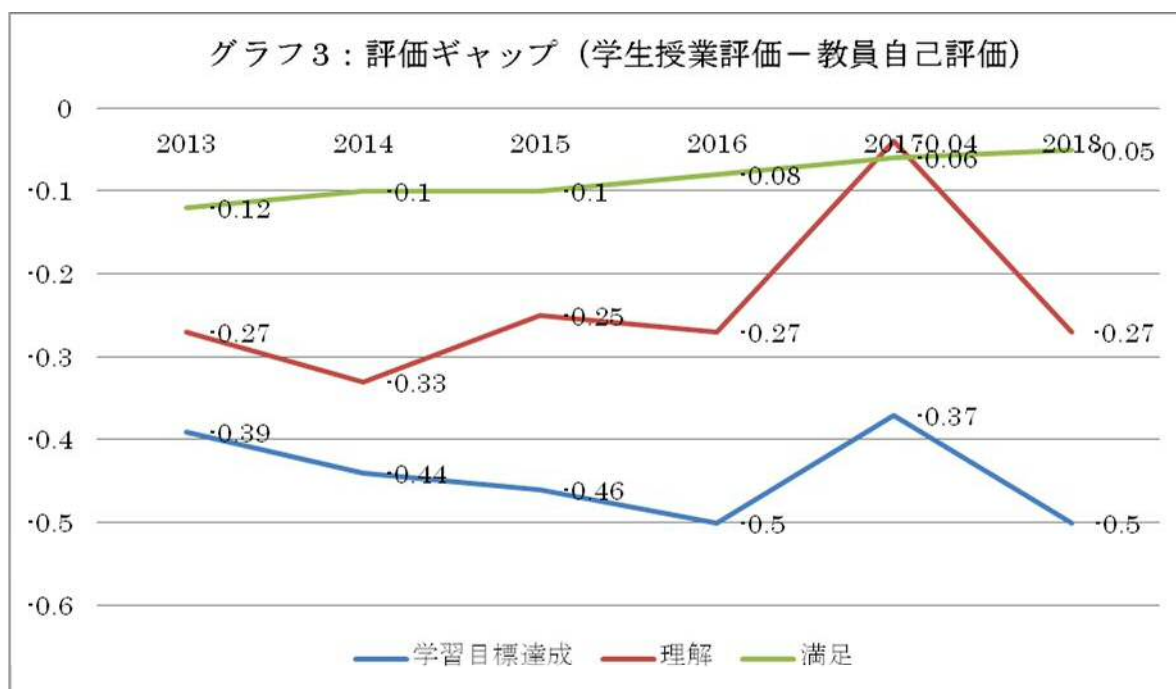
1. 学生による授業評価は、目標達成、理解、満足、出席ともにほとんど4.0以上の評価であり、質の高い授業を受けているという評価が継続して確保できているといえる。（グラフ1参照）
2. ただし、授業外学習時間の確保という点については、2点台と他学部と比較して満足できない状況にあるが、一方でその分だけ学生としてのプライベート時間をアルバイトや部活動、資格取得のための自己学習に向けられる余裕のある環境だとみられることもできる。（グラフ1参照）
3. 教員による自己評価でも、目標達成、理解、満足ともに4以上を継続的に確保できており、学生と教員がともに質の高い授業の評価を維持できているといえる。（グラフ2参照）
4. 学生評価と教員自己評価を比較してみたところ、明らかに教員による自己評価の方が高くなっている。特に「理解」と「満足」のギャップに関しては、2017年度に大きく収縮にもかかわらず、2018年度に再びギャップが拡大した。学生の視点にたった授業の工夫や改善を行うことにより、このギャップを埋めていく必要があるだろう。（グラフ3参照）

グラフ1：学生授業評価



グラフ2：教員自己評価





第5節 FD実施経費報告書

経済学研究科において記述

第6節 来年度の課題

- ・教員授業自己評価の入力率向上を目指す
- ・学生評価や成績分布共有システムなどの有効活用
- ・プライベート時間とのバランスを考慮しながら授業外学習時間の確保について検討する
- ・学生および教員の語学研修について検討する
- ・科研費を中心に外部研究資金獲得のための工夫
- ・公開授業（ピュア・レビュー）のあり方について議論する
- ・障害のある学生への合理的配慮について意識を高める取り組み

第7章 理学部のFD活動

第1節 授業公開

1. 数理科学科のピア・レビュー

(1) 実施科目「数理科学入門セミナー」

1) 概要

①日時：2018年6月21日(木)9・10限,7月5日(木)9・10時限

②対象学生：数理科学科1年生(約55名)

③授業概要：本授業は、線型代数と微分積分などについての90分間の試験と、その試験問題の解答を受講生がプレゼンテーション(受講生と教員とのディスカッション、教員による問題解説、別解紹介なども含む)することを交互に繰り返すという形で進められ、アクティブ・ラーニングを重視した授業である。特に、数理科学科のディプロマ・ポリシーの「2・汎用的技能(1)コミュニケーション・スキル：数学やその応用に関する様々な知見を、根拠・理由とともに理路整然と説明するためのプレゼンテーション能力や文書作成を行える日本語能力を身に付けています。また、他者の説明からその主張及び論理的妥当性を判断し、議論によってその理解を深化させることができます。将来、様々な知識を身に付ける上で必要な英語の基礎能力を備えています。」に対応する授業である。

プレゼンテーションは受講生が少人数(10~12名)の班に配属され、各班において前回の授業で受けた試験内容についての説明を、黒板を用いて行うものである。受講生の説明に対して、担当教員は質問し、発表者がそれに応じることによって数学に対する理解を深めるという形式のものである。これは発表者と教員だけの対話だけではなく、発表者ではない受講生が発表者に質問することで、班全体で、試験問題をディスカッションすることが大切である。各班の担当教員は受講生のプレゼンテーションに対して、発表の曖昧な点や理解の浅い点を質問する。これに対する受講生との対話により、受講生が数学に対する理解を深めることを目指している。

4年生の卒業研究では、テキストの内容を受講生が発表することが重要であるから、本授業では、それを意識してプレゼンテーションの方法についての指導も行う。

④授業担当教員：増本 誠, 宮澤 康行, 近藤 慶, 幡谷 泰史, 中内 伸光

レビュアー：倉富 要輔, 廣澤 史彦, 木内 功, 大関 一秀, 菊政 勲

2) レビュー結果

この授業の、受講生が班ごとに分かれて試験問題の説明を行う時間に、授業担当ではない教員が各班に一人ずつ参加して、その内容をレビューした。何れの班においてもレビューシートの評価欄はほぼ全て「4」又は「5」の高評価(5段階評価)であった。全ての教室で、効果的な授業が行われていると思われる。授業時間が限られている為、担当教員と発表者の対話になる傾向も少しあり、教員はその点に注意する必要もある。

レビューシートの自由記述欄には以下のような記述があった。

(優れた点)

- ・受講生は積極的に授業に参加し良い雰囲気の中で授業は勧められており、教員と学生との間に良好な関係が築かれていることがうかがえた。
- ・適宜学生の座席を周り、直接話しかけながら、問題や解答、採点について議論を行うなど教員と学生との間のコミュニケーションが良くとれていた。

- ・発表者が板書中に、発表していない学生を巡回し、質問を受け付けたりコメントしたりして積極的にコミュニケーションをとっていた。
- ・各発表の後に必ず丁寧な解説を加え、ポイントが分かり易いよう色枠で囲むなど、適切な指導がなされていた。
- ・学生がきちんと理解しているか、あるいは他の学生にも分かるように、曖昧なところは具体的に式を書かせて確認していた。
- ・ある問題の解答後に、後の2年次に於いて学ぶ固有値について触れるなど、今後のカリキュラムに於ける流れを意識した指導が行われていた。
- ・教員は発表者が解答を板書する時間を用いて机間指導を行うことで学生の習熟度を確認し、それに応じた解説を行っていた。
- ・問題への取り組み方、解答の書き方などについての説明があった。
- ・雰囲気作りが上手く出席学生がきちんとセミナーに参加していた。限られた時間の中で、学生のオリジナルの解法を評価すると同時に、模範解答や問題の背景なども適切に解説されていた。
- ・教員が問題の出題意図についての解説もあり、特に、中学・高校の教員を志望する学生にとって、そのような観点を知ることとはとても良い経験になると思う。
- ・全体的にテンポ良く発表が行われていた。
- ・学生たちの黒板の使い方（解答の書き方・構成）が簡潔明瞭であった。恐らく、これまでの入門セミナーにおける担当教員の指導の賜物であると思われる。また、学生の発表態度や姿勢についても指摘がみられるなど、プレゼンテーション全体に於いて指導が行き届いていた。
- ・発表者は「ポイントを絞って板書すること」、「そのような解答に至るまでの自分の考え方を伝えること」を意識していた。プレゼンテーションに関する指導が行き届いており、学生はその重要性を理解して、わかりやすく他人に伝えようとしていた。

（改善点）

- ・授業時間が限られているので難しいと思うが、教員の発問が発表者の説明に対する質問に限定されているので、欲を言えば、発表者以外の学生へも質問をするなどして、発表者以外の学生も巻き込んだ形になると更にすばらしいと思う。
- ・発表内容や方法について、学生同士で評価をし合う場面があるとより良いと思う。
- ・発表者が板書を終えてから次の発表者が出てきて解説を始めるまでに少し時間がかかってしまっていた。
- ・ごく一部であるが簡単（単純）過ぎる問題があった。問題の難易度の最低ラインは少し上げてても良いという印象を受けた。

2. 物理・情報科学科のピア・レビュー

（1）実施科目「物理学実験 III」（後期）

1) 概要

①日時：平成31年1月21・28日（月）12:50～15:40

場所：理学部第21講義室

②対象学生：物理・情報科学科物理学コース3年生（約30名）コース必修科目

③授業概要：実験テーマ群A, Bの中からそれぞれ希望する実験テーマを1つずつの計2つの実験テーマを選んだ。5週間を1クールとして、10週間かけて、選んだ2テーマの実験を行った。各グループの中で作った2-3人1組の班を単位として実験に取り組んだ。実験テーマ毎に担当教員が独自に作成した実験テキストに基づいて、まずは各自で考え判断し取り組むことを念頭において指導しながら実験を進めさせた。毎回、授業の最後には進捗状況の説明をさせて、次回に行うことを簡単に説明する

とともに予習の一端を兼ねた課題を与えることで、予習の方向性にある程度気付かせるような指導の工夫をとりこんだ。実験中の具体的な指導は、3名の教員と2名のTAが行った。第2クールで行った実験テーマについては、授業開講期間の最後で物理学実験Ⅲ発表会として実験結果と考察についてのプレゼンテーションを課した。その際には、実験を通じて物性物理学の知見に基づいて実験結果を考え、説明できる姿勢を会得する意識を芽生えさせることに重点を置いて指導を行った。

④担当教員：藤原哲也，野崎浩二，堀川裕加
レビュアー：朝日孝尚，齊藤遼，坂井伸之

2) レビュー結果

レビュアーから以下のコメントを頂いた。

- ・専門科目の物理学実験 I, II, III では、それぞれ発表会を行っている。2年生後期の物理学実験 I の発表会に比べると、まとめ方や話し方に格段の進歩が見られ、繰り返しこういう機会を設けることが大事だと思った。学生から質問が多く出ていたのも良かったが、質疑応答の時間が短くて打ち切りになることが多かったのが残念だった。

- ・物理学実験 III の講義内で行われている発表会に参加した。自分たちの行ったことの内容や成果を他者へ伝える能力は重要なものであり、ただ実験を行わせるだけでなく、こうした発表会という機会を設けることは非常に良いと思った。学生たちも事前にしっかりと準備をしてきており、時間配分や内容もきちんと構成されており、感心した。ただし、内容の理解や論理展開については、詰めきれていないところもあり、まだまだ課題があると感じた。限られた時間の中で難しいと思うが、TA などアドバイザーを交えたグループディスカッションなど、論理を詰める力を養う機会があれば、よりよくなるのではと感じた。

- ・実験の授業の中で発表会に2日間、4コマを使うのは思い切ったやり方だが、それだけの価値があると思った。この授業に限らず、1年生から様々な授業で発表の機会を設けている成果が出ているのだろう。ほぼ全員が所定の時間通りに発表していること、質問が多いことは良かった。それぞれの発表には改善の余地はあるが、卒業研究の課題とすれば良いだろう。1つ注文するとすれば、大体内容を知っている聞き手を想定しているためか、導入部の説明がややわかりにくい発表が幾つかあったので、予備知識がない人でもわかるように意識してほしいと思う。

(2) 実施科目「グラフ理論」(前期)

1) 概要

日時：平成30年6月11日(月) 14:30-16:00

場所：理学部22番教室

対象学生：物理・情報科学科情報コース 3年生

授業担当者：韓先花

レビュー方法：授業に参加し、終了後、問題点や改善点等を担当者に口頭または文章で指摘する。

授業概要：グラフ理論を中心とした離散数学の基礎的な内容である。プレゼン資料を使いながら講義を行なっている。教科書に従い、講義だけするのではなく、途中で練習問題を解かせる時間もあつた。

レビュアー：(情報)西井、末竹、川村、野崎 (物理)堀川 (数理)廣澤

2) レビュー結果

レビュアーから以下のコメントを頂いた。

- ・授業の最後に練習問題が付いていた点は良かった。
- ・グラフ理論の授業ではあつた。中身を少しずつ説明した後に問題を解く演習時間を設けてあり、で

き具合も見て回って確認されているのがよかった。

- ・授業の最後に次回の章の案内と予習のアナウンスをされているのもよかった。
- ・声量が十分あり、後ろまで声が聞こえた。
- ・教科書どおりに進んでいるので、教科書を持っている場合は内容の進行の予測がしやすい。
- ・(少々日本語が聞き取りにくいところもありましたが) 丁寧でわかりやすい授業だったと思います。

3) 改善点

- ・出欠確認は特にされていない。最後の練習問題の提出で出席は確認できるが、遅刻者の把握は困難であろう。
- ・1枚のスライドでかなり長く話していた。少し間延びしている感があった。各項目について、別々に説明するか、前回までの振り返りならば、もう少しテンポよく話しても良かっただろう。
- ・2番教室は大教室である。コース別の科目であるので、もう少し小さい方が授業に一体感がうまれると思う。
- ・重み最小のグラフの答え合わせのみでなく、重み最大のグラフの答えも表示してほしい。(教科書に明記されていて受講生には特に表示するまでもなかったのかもしれませんが)
- ・よく講義の準備をされていると思いました。残念なことに、説明のための一文が長くて、わかりにくく感じるがありました。一文一文を思い切って短く切って話すと、それだけで随分わかりやすい説明になると思います。例えば、「…ということなのですが、…」という言い回しをされることが多かったので、これを「…ということです。」とするだけでも、わかりやすくなりそうです。
- ・もう少しゆっくりと話すのも良いと思います。
- ・説明口調にするよりも普段話すような口調の方が、かえって良いことがあります。(実際、説明の合間にちょっとコメントするような普通の口調の方が、聞きやすかったです)
- ・スライドの背景は無地のほうが、文字とのコントラストが強くなって見やすくなると思います。
- ・スライドに表題や、サブタイトル等をもう少し書くようにし、また、解法のポイントや手順も具体的に書いてみてはどうでしょうか？ スライドの説明に対して、話している量が多く、何の話かわかりにくくなるがありました。
- ・最小連結子問題の例題の星型の図にあった、辺の重みの値は、後ろの方の座席からは見にくかったので、もう少し大きいフォントのほうが良かったです。
- ・例題の説明のときには、学生に当てながら進めると、理解度の把握もできますし、学生も眠くならないので良いと思います。
- ・一般的な手順を示しながら、例題を実際に学生に解いてもらうような形式をとれると良いかもしれません。
- ・アルゴリズム・証明・計算については、板書をした方が学生の理解を助けるはずで(学生がノートを書きやすくなり、その結果、記憶に残りやすくなります)。
- ・話している途中で何回か問いかけをしている(～でしょうか?) 時がありました。学生の興味を引く上で重要な手法ですが、問いかけの後に十分な間がないため、やや聞きづらかったです。適度に間を取るほうが良いと思います。

3. 生物・化学科のピア・レビュー

3. 1. 生物学コースのピア・レビュー

(1) 実施科目「植物生理学」

1) 概要

①日時：平成30年12月21日（金）1・2時限 理学部22番教室

②対象学生：生物・化学科、生物学コース2・3年生（60名）

③授業の概要：植物生理学では初回の講義で、シラバスに従って15回の講義内容や授業方針（パワーポイントを用いた講義、毎講義ごとに要点をまとめた資料の配付など）について説明をし、授業の到達目標を伝えている。大学の講義用に作成された15章からなる植物生理学のテキストを用いて、担当教員が章の内容に即してメリハリを付けて授業を行っている。授業の項目としては、植物の誕生と進化系統、多様性、光合成の仕組み、無機塩の代謝、植物ホルモン、光形態形成、環境適応などの基礎事項を解説している。今年度は開講時期の変更により、2、3年生が同時に履修する体制となった。

12月21日の授業では、植物ホルモンに関する導入と、「オーキシン」に関する機能発現の分子調節機構と関連するトピックスについて解説した。

④授業担当教員：三角修己

レビュアー：岩楯好昭，堀学（生物・化学科 生物科学分野）

⑤レビュアーの方法：90分の演習全体を聞いていただき、終了後、指導方法について改善点などを文書で指摘して頂く

2) レビュアー結果

授業に対して、レビュアーより以下の指摘を頂いた。

レビュアー1

理学部生物コース2, 3年生60名ほどを対象とした授業である。ピアレビューさせていただいた回では、植物ホルモンの応答に関する分子機構についての解説が行われた。授業の進行はプロジェクタによるプレゼンテーションを中心として行われる形式である。授業に先立ち、学生にはプレゼンテーションスライドの内容がプリントとして配布された。プリントはスライドそのものではなく、それをうまくまとめたものとして学生の理解を助ける工夫がなされている。

植物ホルモンの名前とそれが植物の何に効くかは高校でも学習するが、植物ホルモン分子(今回はオーキシン)が植物体内で分子レベルでどのように合成されるか、合成された植物ホルモン分子が受容体に結合してどのように効くかという大学レベルの分子レベルの解説がなされていた。さらに、植物ホルモン分子が発見される歴史的な背景やダーウインの実験、最近の重力屈性に関わる宇宙生物学の紹介など学生の興味を引く工夫がなされ、学生が居眠りせずに聴いており効果的に機能していた。また、詳細な解説については教科書の該当ページに触れており、それが試験に向けて勉強すべき箇所の指針となるだろう。

以上述べたように、学生の理解を促進するための工夫が随所になされており、それが有効に作用していた。今後、学生が能動的に授業に参加できるアクティブラーニングが加わりより発展するだろう。

レビュアー2

今回の講義内容は、植物ホルモンであるオーキシンとその作用機作であった。この講義には指定教科書があり、初めに第9章の形態形成と成長調節物質および、第10章の光形態形成にふれながら、植物の一生を講義するとの授業の流れについて説明があった。このことは、今日、何を学ぶのかというポイントを知るうえで役立つと思われる。また、授業で 사용되는スライドの内容を要約したプリントが2枚配布された。このプリントは、話し言葉では理解しづらい時や、授業内容を復習する際に、文字を読んでよく深く理解するうえで役立つものである。

講義の導入として、ホルモンの働きについて一般的な復習があり、植物ホルモンにはどのようなものがあるか、その性質、作用機作等の概論的な説明がなされた。そして各論として、オーキシンと近年発見された受容体 TIR1, および作用機作について詳細な説明があった。オーキシンは発見されてからの歴史は古いが、受容体は近年発見されたこと、そして、その結果、ようやく input と output の間で何が起きているのかわかってきたとの説明があり、新旧の結果が盛り込まれた内容であった。そのため、非常に情報量が多く、様々な現象もとりあげられるため、最初の導入部分で説明されたホルモンの概論的説

明が理解を助けるうえで、とても重要であると感じた。講義の中で、ところどころ植物ホルモンに関するコラムや小ネタ的な話も取り入れ、飽きずに聞かせ、他の現象との結びつきも理解させる工夫がなされていた。

一方で、スライドの中には文字数が多いもの散見され、プリントも配布されているが、説明を聞きながら文字を読むのは不可能なところもあった。また、それぞれの事象については、非常に丁寧にわかりやすく説明されていたが、少し板書をしたり、ところどころで間をおいてあげると、受講生が要点やキーワードを書いたりすることができるので、より理解が深まるのではないかと感じた。

二人のレビュアーからのコメントを参考にして、授業の改善に取り組みたい。

まず、講義内容について学生が質疑しやすい方策を検討したい。アクティブラーニングの重要性が指摘されている現状、できれば講義時間中での学生からの質疑と、それに対する教員の応答が望ましいと考えている。しかしながら、実際に質疑時間を設けても挙手をして質疑する学生が極めて少ないため、講義終了時に質疑用のカードなどを配布し、それに対して次回回答する、あるいは、講義支援サービスなどwebでの質疑のやりとりなども検討したい。

スライドの構成などについて指摘を頂いた点についてはその通りであり、見やすく分かりやすいスライドや講義資料の作成を心掛け、今後改善していきたい。また、一部を穴埋め形式にした講義資料を毎回配布しているが、学生がスライドの文字をプリントに穴埋めする機械的な作業になりがちなので、運用方法の工夫を図りたいと思う。授業の理解度を向上させるために、講義中の間の取り方や説明の順番なども再考し、植物科学への興味関心を引き出すような講義へと改善していきたい。

3. 2. 化学コースのピア・レビュー

(1) 実施科目「量子化学及び演習Ⅱ」

1) 概要

①日時・場所：平成30年7月24日(月)9・10時限、理学部2号館 第1計算機実習室

②対象学生：生物・化学科 化学コース3年生(13名)

③授業概要：「量子化学及び演習Ⅰ」を基礎とし、分子に対するシュレーディンガーの波動方程式の適用例を紹介する。水素分子イオンに対して分子軌道法を適用し、エネルギーと波動関数を求める過程を示す。原子価結合法と分子軌道法の二つの方法で水素分子の解を求める。2原子分子や多原子分子の分子軌道の取扱いを紹介する。多原子分子について、結合の極性、電子密度、結合次数等を説明する。パイ電子系の分子に対してヒュッケル近似を適用し、さらに高度な近似計算法である半経験的分子軌道法と非経験的分子軌道法についても触れる。分子軌道計算プログラム「Gaussian 16W」を用いて実際に分子軌道やエネルギーを求める方法を説明する。

授業の到達目標：水素分子イオンと水素分子に対してシュレーディンガーの波動方程式を適用し、原子価結合法と分子軌道法により解を得る。二原子分子や多原子分子の結合について理解する。ヒュッケル近似でパイ電子系の波動関数とエネルギーを求める。分子軌道計算プログラムを用いて二原子分子の平衡構造や軌道エネルギーを求め、分子軌道を可視化する。

④授業担当教員 谷 誠治

レビュアー 石黒勝也・安達健太

⑤レビューの方法：実施後のアンケート調査により、授業内容、授業の進め方、その他改善を要する点についての意見を用紙またはメールにて回答

2) レビュー結果

レビュアーから以下のような意見が寄せられた。

1. 授業内容に対する意見
 - ・実習課題としては昨年（平成 29 年度）よりも簡略化された印象を受けた。
2. 改善を要する点
 - ・実習課題の発表に対する学生の準備不足のためか、他の発表を聞かずに自分の発表の準備をしている学生が目立った。
 - ・多くの学生が計算により何を求めるのかを理解しておらず、作業報告に終わっているように感じた。
 - ・発表内容が、計算結果のイメージ（図）とエネルギー（数値）のみとなっており、計算結果の妥当性に関する検討までを考えさせることが必要。
3. 改善を要する点
 - ・課題を全員の前でプレゼン発表するスタイルは、学生のプレゼン能力の向上にもつながるので、非常に良いと感じる。
 - ・2年生を対象とする授業科目の内容（Diels-Alder 反応や芳香族性）と本授業科目で取り扱われている内容との関わりがどの程度学生に理解されているかが気になる。

4. 地球圏システム科学科のピア・レビュー

(1) 実施科目「野外実習」

1) 概要

①日時：平成 30 年 11 月 28 日（水） 12:50～16:00 人文学部大講義室

②対象学生：地球圏システム科学科 3 年生（地域環境科学コース 3 年生必修：4 単位）

③授業の概要

「野外実習」は通年・集中の授業であり、春および夏に 1 週間ずつ泊りがけの野外調査を行い、地質調査の方法、地層や岩石の観察法、データの解析法、地質図の作成、調査成果の発表、論文の書き方等について基本的な能力を養うことを目的としている。本年度の実習地は山口県萩市須佐高山周辺であり、1 班（5～6 名）ごとに割り当てられた調査範囲を踏査し、共同作業を通じてグループ調査のやり方や協調性を身につける。各班による中間発表（7 月）および最終発表（11 月）が設けられており、本ピア・レビューは最終発表会を対象として行われた。

④授業担当教員：太田岳洋、宮田雄一郎

レビュアー：脇田、大和田、志村、阿部、川村、永畷、大橋

⑤レビューの方法：講義後に行う学生授業アンケート（無記名）とレビュアーによるコメント（授業観察カード記載）、授業研究会の開催

2) レビュー結果

① 発表技術に関して（声の大きさ、話の速度、プレゼンテーション一般）

発表に用いたスライドは概ね見やすく、聞き取りやすい説明が多かったが、一部に不明瞭な写真の使用や不適切な用語を使用したためにわかりにくい箇所があったこと、スライドの順序が一部不適当であったこと、一部の発表者の声が聞きづらかったことなどが指摘された。

② 発表会の運営・構成に関して（会場設定に関する準備等）

会場については、容量にも余裕があり、ダブルスクリーンで見やすく、またマイクを使用したので聞き取りやすかったが、ダブルスクリーンとしたためにポインターが一つだったため、ポインターで指示されない画面ではややわかりづらく、PC のカーソルの使用などの工夫が必要であるとの指摘があ

った。また、当日はリマインドの連絡があるほうが良いとの指摘があった。

発表構成については、始めに全体の概要の説明があったほうが良く、ルートマップを壁などに提示するほうが良いとの指摘があった。

③ 授業の目標に対する達成度や理解度に関して

本授業は野外での地質調査能力を習得させるだけでなく、自身の観察事実に基づいて考察を行い、結論にまとめる論理的思考力を養うことが大きな目的である。今年度は、前半では自分で取得したデータに基づいて地質を理解し、後半で既存文献との対比を行い、地質構造を理解することを目標に授業を行った。しかしながら、多くの学生は概要は理解しているが、細部に関しての理解が不十分な点が認められ、スケッチなどの基本的な記載が不足している、専門用語を正しく使用できていない、ルート間の対比をよく理解できていない、地層の上下判定後されていない、などの問題点が指摘された。地層命名規約について理解させる必要があるとの指摘があった。また、班により文献調査の精度に差があり、班によっては自分で得たデータよりも文献の内容を重視した考察となっている場合もあり、自分のデータから考察させるようにする必要がある旨の指摘があった。

④ 学生のまとめ方や聴講していた学生の参加度について

発表に用いた図やスライドは、きれいに作成されていたが、班による完成度や調査の質の差が大きい、質疑に対しては特定の学生が対応しており、班の中で理解度の差がある、などの指摘があった。また、聴講していた学生からの質問がなく、積極的に参加させるための工夫が必要であるとの指摘があった。

⑤ 野外教育における注意点（講義との関係、安全教育など）

地質区分、地質図、柱状図の書き方についてより深く理解させる必要がある、転石情報の大切さを理解させる、など野外実習を行う前あるいは行いながら教育すべき事項についての指摘があった。また、自分の記載を基に層序を立てて、そのうえで既存研究と対比するという流れで成果をまとめさせるほうが良いとの提案があった。

⑥ 学生の授業アンケートについて

項目「自分自身が考えるこの授業の学習達成度」に関しては、6割の学生が70%以上、4割の学生が30~70%未満であった。また、「この実習の内容に興味をもちましたか」という項目に関しては、8割強の学生が「もてた」、「非常にもてた」と答え、「もてなかった」と回答した学生はいなかった。自由回答では、「自分の目で露頭を観察できることは心躍る経験だった」、「卒業研究に向けて力をつけることができた」、「調査を通して学ぶことばかりだったので良い野外実習になった」と好意的な意見が多くあった一方、「自分自身の努力、実力の足りなさを痛感した」、「詰めが甘かったので、とても悔しい」、「自分たちの考えがまだ不十分であったことを痛感した」など学生が自身の実力を実感した意見も多く寄せられた。この点が、本授業に多くの学生が興味を持ったことに対し、学習達成度が低い理由と考えられる。また、「始めに調査をどのように行えば研究がうまく進められるかを指示してほしい」、「事前に調査するにあたってのポイントを知っておきたかった」など、事前の教育に対する要望も挙げられた。調査地域による難易度の差異、班内での作業量の多寡、など不公平感に対する意見が依然としてあり、これらを是正するため今後も工夫が必要である。

3) 授業研究会

日時：平成31年1月22日（火） 14:30~15:30

出席者：宮田、大和田、志村、坂口、阿部、太田、川村、永瀧、大橋

研究会概要：

学生アンケートとレビュアーによるコメント（授業観察カード）をもとに授業研究会を開催し、意見交換を行った。授業内容については、今年の取り組みが一定の成果を上げたことに対して評価がなされた一方で、地質図、総合柱状図を作成する際に既往文献に頼るのではなく、自分で取得したデータに基づいて作成することをより徹底して指導すべきとの指摘がなされた。また、文献調査の位置付

けと重要性を理解させる必要があるとの指摘もあった。そのほか、発表会における会場の設定や全体の発表の流れ、個別のプレゼンテーション手法、学生の参加度の向上について、今後も継続的に改善の努力が必要であるとの意見が出されるなど、多くの指摘と議論があり、次年度につながる有意義な場となった。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

1. 教育改善FD研修会（理学部・創成科学研究科（理学系））

日程：平成30年9月3日(月) 15:00～15:30

場所：人文学部・理学部大会議室

講師：岡田 耕一（大学教育センター講師）

藤原 勇（大学教育センター准教授）

参加者：42名（アンケート回収32名）

研修内容

最初、理学部末竹規哲教授から研修会の主旨の説明があった。つづいて大学教育センター藤原勇准教授より教学IRについて説明があり、島根大学理系学部の教学IR分析から対応策を導き出した事例紹介があった。次に、アドミッション・センターの林寛子准教授の代理として大学教育センターの岡田耕一講師による、「入試データを用いた検証・改善例」について：特別入試により入学した学生の成績等に基づくデータ解析結果について説明があり、解析結果から入学者選抜方法を見直し改善した事例が紹介された。今後、教学IRが可能なデータ分析を学部と大教センター間で協力・連携して進めて行っていくことになった。



質疑応答・意見交換

「入試データを用いた検証・改善例」の説明に関連して、入試関連の要望が多かった。
要望・意見

1. 全学でのデータはまるめこまれている。部局毎の細かいものがみたい。高校別の推薦合格の人数の関係を知りたい。

入試について入学判定会議で合格者を何名多く取ること適切であるかについての過去の実績から予想がつくと思われるので提供して頂きたい。

2. 成績の平均値として差がないとしても A0 入試の優秀な学生とそうでない学生がいるので平均点で検定しても疑問である。A0 入試は平均点についてのものが多い。サンプル数が少ないのはわかるが平均でなく分散が知りたい。

GPA が入試に有益な情報となるかどうかは疑問である。平均点に対する評価ではなく落ちこぼれている学生に対する分析がしたい。A0 入試調査は平均点についてのものが多い。サンプル数が少ないのはわかるが平均でなく分散が知りたい。

3. 以前ACの林寛子先生に入試分析についての研修を受けたことがある。詳細な入試の分析を学部毎にされているのでその蓄積データがあれば解析結果を提供して頂けると良い。入試の場合、学部・学科間で違うため対応できるデータを比較しないと解析結果が出ない、また次の対応に結びつかない、と思う。以前、学部でなく全学科で解析していたと思う。

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	0	0.0%
良かった	16	50.0%
どちらとも言えない	15	46.9%
あまり良くなかった	1	3.1%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	32	100.0%

2. 講師派遣型アラカルト FD 研修会「学生の主体的な学びを引き出す授業デザイン～シラバス点検からはじめてみよう！～」（理学部 FD 研修会）

日時 平成 31 年 02 月 13 日(水) 15:00～15:40

場所 人文・理学部管理棟 4 階 大会議室

担当者 林 透 (大学教育センター 准教授)

参加者 58 名 (アンケート回収 46 名)

研修内容

はじめに理学部 FD コーディネーターの宮澤教授より、折しも来年度のシラバス入力時期でもあるので、よりよいシラバスの作成に役立てて欲しいと趣旨説明があり講演に入った。

林教授からは、まず、学生の主体的な学びを引き出す授業デザインに必要なものとしてシラバスが原点にあるだろうということで、シラバスを点検してもらうワークショップ形式も含めて進めたいとしながら、この話は先生方にとっては当然している、一度は聞いている話だが、来年度のシラバス、授業に向けて準備される時期なので確認の意味で聞いてもらいたいと前置きがあり、米のデータとして、教員の行動のうち学修成果に寄与しているのは、説明の分かり易さも重要だが、トップは先生方の授業の準備と設計が学修成果に結びついており、授業デザインが重要であると説明があった。



全体的な話としては、インストラクションモデルという授業デザインの理論があり、その中で有名なものに ADDIE モデルがあること。その中で授業を設計して行く PDCA サイクルがあり、分析、設計、開発、実施、評価によりインプルーブメントしていくサイクルになっていること。担当される授業を設計する時、そこで学ぶ学習者がどんな学習者か特性、前提知識を入れる必要があること等が挙げられた。その上で教える内容を分析、明確化され設計に入っていくと思う。授業デザインするときに大事な 3 本柱があって、到達目標、授業計画、評価方法決定して、開発、実施して評価していく。これを文章にまとめた物、授業の設計図がシラバスになる。学生と教員の契約書という言い方もされる。授業全体をデザインする文書、写し鏡がシラバスなので、点検しながら毎年シラバスを充実したものにしてほしいと説明があった。

また、シラバスは授業の設計図であり、学生に明示する物でもあるが、もう一つ気を付けないといけないのは、シラバスは学外の目にも晒されている。学部学科のカリキュラム、大学全体としても大学教育のアカウントビリティのエビデンスにもなっている。2011 年に公表することが法令で義務化された。そういう意味でも緊張感をもって作ってもらうことが必要になってくるとも説明があり、まずは入力率が重要という事で、学部別の入力率の紹介等も含めつつ、しっかりとしたシラバスを作る意義について訴求が行われた。

次に個別的な話として、「初回の授業でシラバスの内容を学生に明示して説明しているか?」「授業計画各回の内容、授業外指示を記入し明示しているか?」という質問と共に、授業計画各回の内容、授業外指示に関して現状の入力率が示された。更に、到達目標の設定の妥当性について、当該授業科目が求められているレベルとの整合性について、専門の科目自体のレベル、学科のカリキュラムの中での位置付けという、専門分野と組織との 2 段階の観点があること、他学では DP(Diploma Policy) との関係性をシラバスに記入される例等が紹介され、DP を意識した到達目標の設定についてチェックしてもらいたいと述べられた。また、到達目標の書き方としては、行動目標(Can Do「〇〇できる」)の形式で書くこと、学生を主語として書くこと、目標を記述する際に用いる動詞等の紹介もあり、実際の理学部におけるシラバスについて幾つか例示による紹介もあった。そこではよい例と共に、「…理解する」という記述が多く見られるが、出来る限り認知的表現(観察可能な行動表現)を心掛ける、出席や予習復習は学生がすべき行為なので、授業を通して育成される態度の記載を心掛ける等の注意喚起も行われた。成績評価に関しては、評価ツールとしてルーブリックについての紹介や、修学支援システムにおける観点の示し方等の紹介もあった。その他にも、「シラバスの内容を毎年度、点検・見直しをしていますか?」という質問と共に、セルフチェックのツールとして授業評価や成績分布共有システムの紹介、組織レベルのチェックとしてピアレビューの推奨等も行われた。

最後に、授業角界の項目・内容授業外指示が適切に記入されているか?、到達目標が適切な記述(Can

Do)になっているか?、今年度の授業実践を踏まえ、来年度の授業計画の点検・見直しが出来ているか?の3つの観点で、シラバスのセルフチェック、ピアチェックとして5分程度時間を取り、会場からは相談し合う声が聞こえた。

クロージングでは、東京大学FDのページにあるインタラクティブティーチングのMooc教材¹の紹介の後、今後に向けてとして、シラバスが質保証の原点であり、シラバスに基づいて授業をしているか厳格な成績評価がされているかが原点であり大学の教育の質保証はそれに行き着くとしてシラバスの重要性を再度強調すると共に、シラバスの各教員によるチェック、学部・学科単位でのチェックのお願いの他、大教センターとして今回のようなWSの形による継続的なサポート、マニュアル類の充実等についても努力したいとして講演を締めくくられた。

質疑応答

主に以下のようなやり取りがあった。

Q: 態度の観点の書き方はどういう形で書くのが一番良いか?

A: 授業に積極的に参加するというのがまずあり、知識理解と重なるかもしれないが、授業で積極的に発言できるとか、グループ活動では協調しながら授業参加できるという書き方になると思う。次のステップについての学修に取り組むことが出来るとか、始めるという言葉もあるので、そういう形になると思う。くれぐれも出席と予習復習はマストな世界なので、シラバスに書くことではないと思う。もしそう書かれていたらまずそこは訂正されたほうが良いと思う。

Q: 学生からするとシラバスを見たときに重要なのは評価と思うが、我々がシラバスを作成するときはどこを一番重要視すればよいか?

A: 他の学部でこの話をした時に言われたのは、学生はシラバスを見ないんじゃないかという話があったが、それはおかしくて、先生方がこの授業が何を狙いに行っているか話しかけることが重要。学生が一番見るのは成績評価で、それも大事だが、その成績評価の前にこれ(授業デザイン)がある。これは説明する必要があるし、この授業はこういう狙いがあると常に語り掛ける。各回も今日は何をしているか。そうしないと、自立した学習者は多分自分で理解するが、今日は何を学んだかな?で終わっては右から左にsなる。逆に先生方には良いシラバス作ってもらって、学生自身にもチェックしてもらって、そこに注意行くように授業の目標を語り掛ける必要がある。その上での成績評価をしっかりしていく必要があるが目標が大切。

アンケート

以下のような内容が見られた。

感想

- シラバスを授業設計に使用しようと思いました。
- 学問の性質に配慮なく、一般化した話だった。一般的なシラバスに、理学をどう納めていくのか聞きたかった。
- 項目以外にも「内容」と「授業外指示」等の入力は重要と感じた。
- 「学生の主体的な学びを引き出す授業」とはシラバスが詳しい授業ですか?聞く価値のある話は全くなかった。
- 単位シラバスの書き方にすぎなかった。
- タイミングが良かった。
- とても参考になりました。ありがとうございました。
- シラバスをどう書くべきか参考になった。
- 授業デザインについて知りたかった。

¹ <https://www.utokyofd.com/mooc/contents>

- オンラインコンテンツの紹介がよかった。

希望の研修内容

- ビアレビューや教員相互のシラバスチェック法
- 目からウロコの落ちるように理解させることの可能な教え方。
- (試験問題作成等のための)正しい日本語表現。
- どんな内容でも、出来る限り参加します。
- 卒論を書こうとしない学生、セミナーをいい加減にする学生への対応方法について(今年度は3名もいて、とてもしんどかった)
- 上から目線でなく同業者として工夫や提案などを含む業務工場に直結するもの。
- シラバスの良い例、悪い例を具体的に提示してほしいです。
- 研究室での学生指導方法について。
- 発達障害学生の指導。学習意欲低下学生の指導。
- システム等が新しくなった場合、そのシステムの使用方法等に関する研修。
- 参考になれば参加したい。
- 授業スキル。

参加したくない理由

- 今日のようにプリント読めばわかるような研修会は意義が小さいように思う。常識的な内容は不要であり、もっと具体的にアドバイスするなどしてほしい。
- もう少し具体的に。ためにならない。

実施時期

- 今回のテーマについてはベストであった。別のテーマであれば、夏季休業期間等。
- 講義が終わっているので参加しやすい。
- 今回、卒論や成績つけなどで最も多忙な時期だった。このような時期はさけてほしい。
- 2月中は多忙過ぎる。今日はなされたことを反映する時間がとれない。

実施場所

- 学内なので助かります。
- スライドが見にくい
- 指導に問題ある学生への対応方について。
- 今回と同様のもの。

設問1

研修会に参加した感想はいかがでした？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	4	8.7%
良かった	27	58.7%
どちらとも言えない	6	13.0%
あまり良くなかった	5	10.9%
良くなかった	2	4.3%
無回答	2	4.3%
合計	46	100.0%



第3節 教育改善に関する活動

1. 「サイエンス実習」、「数理科学企画研究」、「数理科学トピック」における学士力育成の取り組み

理学部全学科に共通する学士力育成の取り組みとして挙げられるのが授業科目「サイエンス実習 I, II」（数理科学科にあっては、「数理科学企画研究」、「数理科学トピック」）である。この授業は、学生の問題発掘解決能力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力の育成を目的として開講されるものである。履修学生は、科学理解増進活動事業（例えば、山口大学理学部サイエンスワールド）に向け、自らが企画立案し、計画をたて、準備を行い、効果的な展示・説明を考案し、実際に当該事業において、一般市民に対して科学を分かり易く伝えることを目標に、プレゼンテーションを行う。担当教員からの適切な指導のもと、これら一連の活動・経験を通して上記能力を身に付け、さらには磨きをかけ、学士力の向上を目指している。本年度は75名ほどの学部生がこの授業を履修した。

2. 理学部における低年次教育改革

理学部では、「理学教育企画センター」が中心となり、さまざまな教育改革の取り組みを実施している。その一つが低年次教育改革である。以下、本年度に実施された学科単位での取り組みを報告する。

（1）e-ラーニングを積極的に利用した教育の取り組み

1) 数理科学科におけるe-ラーニングの活用事例

本年度、数理科学科では以下の二つの科目でe-ラーニングを活用した。いずれも数学の基礎知識のみならず、プレゼンテーション能力をも重視した科目であり、数理科学科のディプロマ・ポリシーの2・汎用的技能(1)、及び3・態度志向性に対応する。より良いプレゼンテーションを行うには、日頃から知識を蓄える必要があるが、その実践にはアクティブ・ラーニングである講義外学習を受講生に期待したい。e-ラーニングがその機会になればと願う。

授業科目名：数理科学入門セミナー

対象学生：数理科学科1年生（約55名）

活用方法：この授業では授業外学習時間の増加を期待してe-ラーニングの活用を行っている。その内容は高校数学の復習を含んだ内容の宿題を一定回数課すという形式である。講義の成績評価の10パーセントはe-ラーニングのテストの成績である。多くの受講生は意欲的に取り組んでおり、アクティブ・ラーニングの効果はかなりあったと思われる。しかし残念ながら、e-ラーニング学習をあまり実行していない受講生もいる。より多くの学生が授業外の自学自習に取り組むような工夫を検討している。

授業科目名：数理科学基礎セミナー

対象学生：数理科学科2年生（約55名）

活用方法：この授業でも、授業外学習時間の増加を期待して e-ラーニングを活用している。その内容は1年次の数学の講義の復習及び、2年次の専門科目で履修をしている微分積分学や線型代数学の内容の問題を2週間に1回解答させるというものである。この授業の成績の10パーセントを e-ラーニングのテストの成績で評価している。受講生の多くが e-ラーニングを活用した。授業外で、e-ラーニングの問題を学生同士で検討している姿を見かけることもあり、アクティブ・ラーニング効果は十二分にあると思われる。しかし、殆ど手を付けていない学生も僅かにいる。このような受講生に対して、学習意欲を掻き立てる工夫が必要である。

2) 物理・情報科学科における e-ラーニングの活用事例

物理・情報科学科では数学関連科目を中心とする以下の科目で e-learning システムを活用している。

- ・「物理と情報のための基礎数学 I」
- ・「物理と情報のための基礎数学 II」
- ・「物理と情報のための応用数学 II」
- ・「ロジカルシンキング II」
- ・「計算モデル論 I」
- ・「計算モデル論演習 I」
- ・「計算モデル論 II」
- ・「計算モデル論演習 II」
- ・「数値解析」
- ・「プログラミング演習 I」
- ・「バイオインフォマティクス」
- ・「確率論と情報理論」
- ・「情報ネットワーク」

昨年度と同様、上記の科目で宿題や自習のための小テスト配信、講義資料配布、出席管理、レポートの相互採点等を行うために必要な教材の改訂およびコンテンツの追加を行った。「物理と情報のための基礎数学 I、II」、「ロジカルシンキング II」では講義時間の不足を補うため、e-learning システム上にビデオ講義を用意し、これを見ることを理解度確認のための小テストとともに宿題とする取り組みを継続している。学生へのアンケート結果から授業で理解できなかった内容を e-learning を通して理解している学生も多く、また、e-learning の問題を解くことが授業の理解につながっていると回答する学生も多い。年々、少しずつであるが教材の充実を行っている。

(2) 学力別クラス編成の導入

物理・情報科学科では、「低年次導入教育の改革」の取り組みとして、平成23年度に4つの授業で学力別クラス編成授業を試行した。その結果に基づいて、平成24年度には、1年生、2年生の5つの必修科目で学力別クラス編成を本格導入した。その後、学力別クラス編成の改編を行い、平成27年度以降は、「物理と情報のための基礎数学 I、II、III」、および「力学 I」において、学生の学力に応じた授業を行っている。ただし、いずれの授業においても、学力別クラスに関係なく期末試験には同じ問題を使用し、単位修得の基準も統一することで、評価に不公平はない。今年度も引き続き学力別クラス編成により授業を行った。このように、学力別クラス編成が定着している。今後も学生の習熟度を確認しながら、引き続き、改善を行っていく予定である。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

2018年度に理学部で開設している専門科目238科目のうち、学生授業評価対象科目は169科目である。そのうち、実際に学生の授業評価を実施したのは158科目で、実施率は93.5%であった。

下図は2018年度における学生授業評価および、教員自己評価実施アンケートの年度推移である。

図1から図5までは、学生の授業評価項目である。図1は学生の授業外学習時間の年度推移、図2は学生の授業目標達成の自己評価に関する年度推移、図3は学生の授業理解度についての年度推移、図4は学生の授業満足度に関する年度推移、図5は学生の授業出席の自己評価の年度推移である。分野間で若干の差があるものの、学部全体としては、いずれの項目も高い数値で安定して推移している。

一方、図6から図8までは教員側から見た授業自己評価である。図6は教員側から見た学生の授業目標達成の年度推移、図7は教員側から見た学生の授業理解度の年度推移、図8は教員側から見た学生の授業満足度を示す。教員側から見た評価は年度毎、あるいは分野間の差異が大きい傾向にはあるが、総じて評価点の高い好ましい結果が得られていると解釈できる。分野間で自己評価に差が生じる理由としては、多分に学問特性が影響していると考えられるが、評価基準の違いも要因の一つであろう。自己評価であるが故に、基準を統一することは極めて難しい問題であるが、検討する余地はあるかもしれない。なお、今年度の学部全体の教員授業自己評価の入力数は過去5年間で最多であった。教員のFDへの意識の変革の表れであり、FDへの取り組みが浸透してきていることの証であると考えられる。

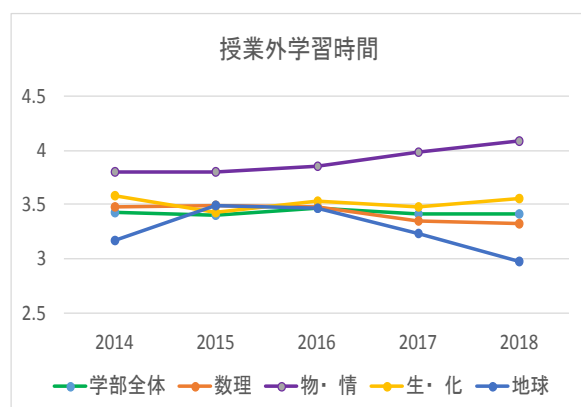


図1

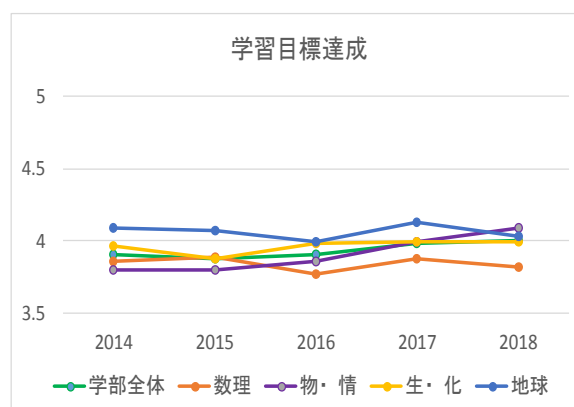


図2

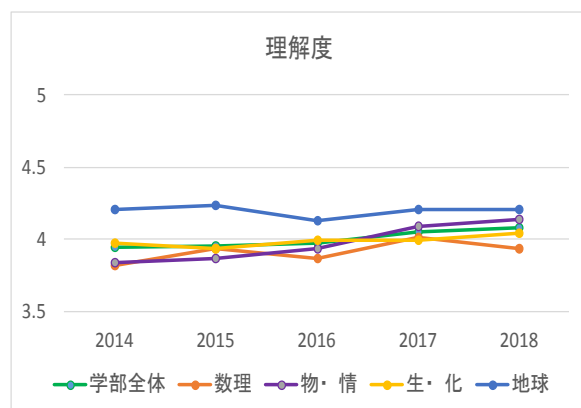


図3

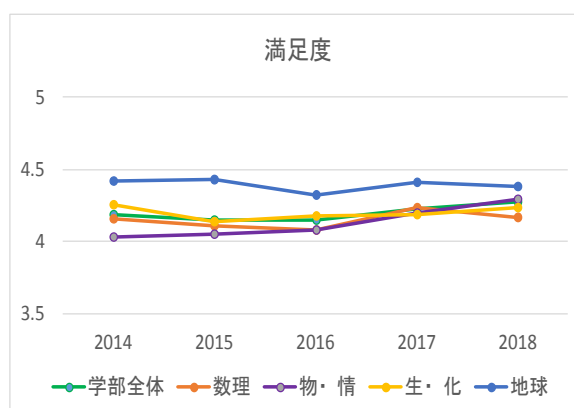


図4

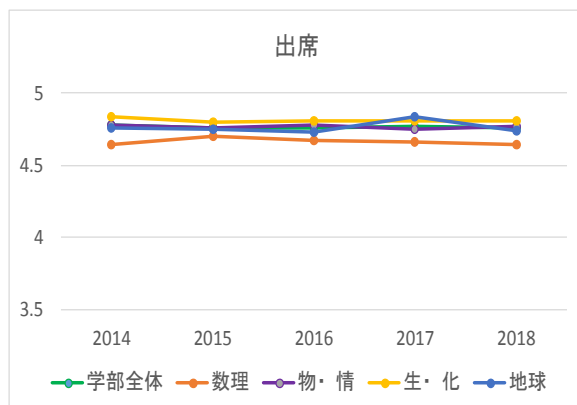


図 5

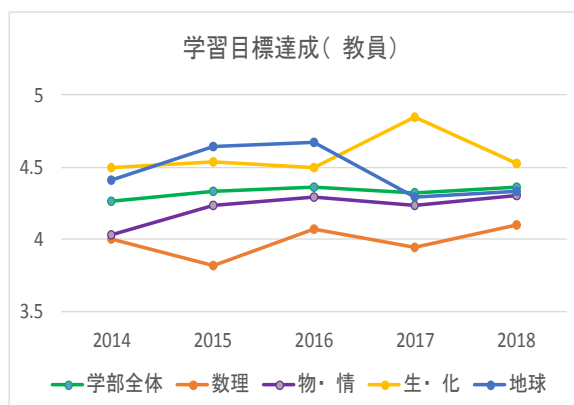


図 6

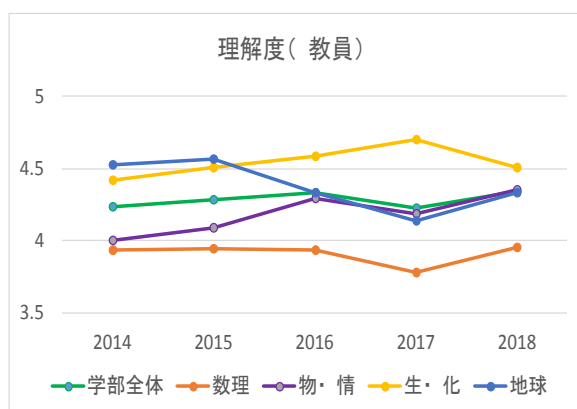


図 7

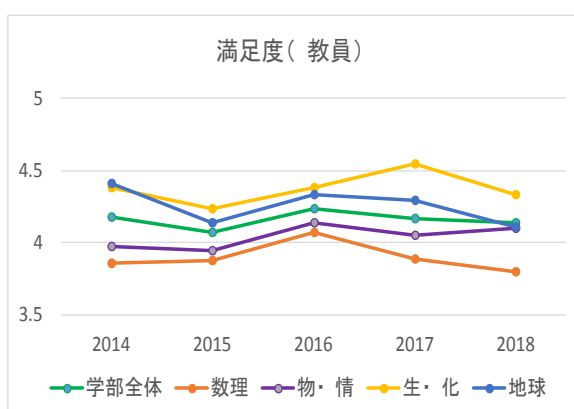


図 8

第 5 節 F D 実施経費報告書

今年度は理学部では F D 実施経費を使用していない。

第 6 節 来年度の課題

ピア・レビューや授業評価アンケートの結果を生かし、毎年、授業内容に関して工夫や改善が積み重ねられ続けている。慢心することなく少しでも質を高めるべく努力を継続していきたい。

数年前から、学生の学習時間の向上と教育効果の向上を狙い、e-ラーニングの活用を模索してきた。その甲斐あって、e-ラーニングの利用が進みつつある。また、Moodle の利用実績も増えてきている。次年度以降も積極的に e-ラーニング、Moodle の活用を推進していきたい。

大学としても力を入れている「学士力」の向上を目指すにあたり、科学理解増進活動事業（「サイエンスワールド」等）への教員の積極的参加と指導を促すことで、講義科目とは別角度から F D を実施することに繋げていきたいと考えている。

第8章 医学部のFD活動

第1節 授業公開

1.医学科

実施なし

2.保健学科

開催日時：平成30年12月12日（水）14：30～16：00

開催場所：S2教室

科目および対象学年：検査技師のための看護学 検査3年

担当教員：堤雅恵教授、野垣宏教授、永田千鶴教授、河村敦子講師、清永麻子助教

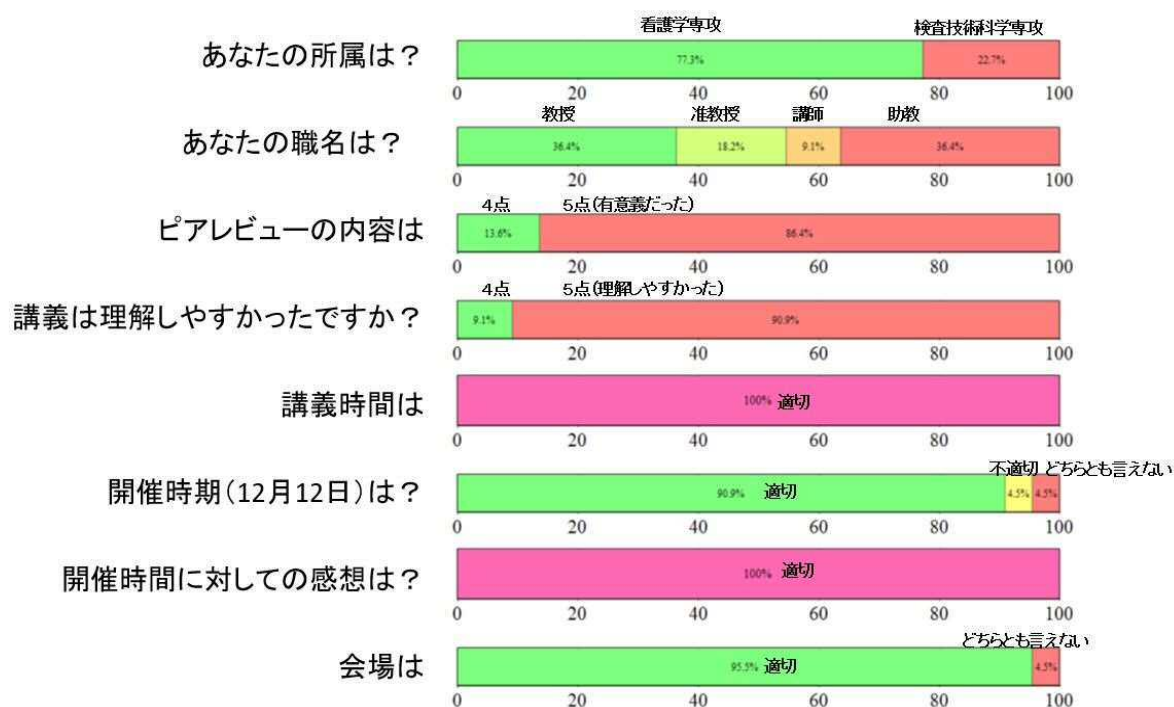
参加教員：28名（アンケート回答22）

授業の内容：

「検査技師のための看護学－視覚障害者の誘導－」

視覚障害者の誘導について、初めはスライドを用いて、後半は2人1組になって片方の学生が目隠しをして実際に誘導しつつ行った。学生が歩く経路上には実際の点字ブロックも有り、大変参考となった。

教員へのアンケート結果も下記のように大変好評であった。



第2節 学部・研究科主催FD研修会

1. 医学科

医学科主導FD研修会

(1) 国試対策セミナー

- 1) テーマ： 医師国家試験対策 セミナー
- 2) 開催日時： 平成30年4月20日
- 3) 実施時間/回数： 合計1.50時間 1.50時間/1回
- 4) 主催者： 医学教育センター
- 5) 開催場所： 学内
- 6) 企画立案者： 医学教育センター
- 7) 講演出席者： 講演者：4人 聴衆者：130人（6年生、コーチ関係者）
- 8) 講演1： 国試の現状について
講演2： 合格体験記
- 9) 演者/専門： 学内教員/医学教育
- 10) 講演時間： 1.50時間
- 11) 主な内容： 医師国家試験対策についてのセミナー

(2) 新eYUME操作説明会

- 1) テーマ： 新eYUMEの操作及びeYUSDLの操作について
- 2) 開催日時： 平成30年4月24日 17:00-18:00
- 3) 実施時間/回数： 合計1.00時間 1.00時間/1回
- 4) 主催者： 医学教育センター
- 5) 開催場所： 学内
- 6) 企画立案者： 医学教育センター
- 7) 講演出席者： 講演者：3人 聴衆者：66人
- 8) 講演1： 新eYUMEの操作説明
講演2： eYUSDLの操作説明
- 9) 演者/専門： 学内教員/医学教育
- 10) 講演時間： 1.00時間
- 11) 主な内容： 新eYUMEの操作説明 及び eYUSDLの操作説明

(3) CBT問題ブラッシュアップ講習会及びワークショップ

- 1) テーマ： CBT問題ブラッシュアップ講習会及びワークショップ
- 2) 開催日時： 平成30年4月20日
- 3) 実施時間/回数： 合計3.00時間 3.00時間/1回
- 4) 主催者： 医学部長

- 5) 開催場所： 学内
- 6) 企画立案者： 医学教育センター
- 7) 講演出席者： 講演者：1 人 聴衆者：33 人
- 8) 講演 1： CBT 作問について
- 9) 演者/専門： 学内教員/医学教育
- 10) 講演時間： 3.00 時間
- 11) 主な内容： CBT 作問ブラッシュアップに関する説明とワークショップ

(4) 医学科教育主任説明会

- 1) テーマ： 医学部医学科教育主任説明会
- 2) 開催日時： 平成 30 年 4 月 24 日
- 3) 実施時間/回数： 合計 1.00 時間 1.00 時間/1 回
- 4) 主催者： 医学部長
- 5) 開催場所： 学内
- 6) 企画立案者： 医学教育センター
- 7) 講演出席者： 講演者：1 人 聴衆者：20 人
- 8) 講演 1： 医学科教育主任の業務について
- 9) 演者/専門： 学内教員/医学教育
- 10) 講演時間： 1.00 時間
- 11) 主な内容： 平成 29 年度における医学科各講座教育主任の業務の説明

(5) 国際認証受審準備対応講演会

- 1) テーマ： 国際認証受審予定大学の講師による講演会
- 2) 開催日時： 平成 30 年 5 月 2 日
- 3) 実施時間/回数： 合計 1.50 時間 1.50 時間/1 回
- 4) 主催者： 医学部長・教務部委員会・教育 FD 部会・医学教育センター
- 5) 開催場所： 学内
- 6) 企画立案者： 医学教育センター
- 7) 講演出席者： 講演者：1 人 聴衆者：50 人
- 8) 講演 1： 岡山大学の国際認証の取り組みについて
- 9) 演者/専門： 学外講師/医学教育
- 10) 講演時間： 1.50 時間
- 11) 主な内容： 国際認証・分野別認証に向けての教育改善について

(6) 臨床実習入門実施担当者講習会

- 1) テーマ： 臨床実習入門実施についての説明会
- 2) 開催日時： 平成 30 年 7 月 20 日
- 3) 実施時間/回数： 合計 1.00 時間 1.00 時間/1 回
- 4) 主催者： 医学部長
- 5) 開催場所： 学内
- 6) 企画立案者： 医学教育センター
- 7) 講演出席者： 講演者：1 人 聴衆者：24 人

- 8) 講演 1 : 臨床実習ログブック改訂の概要説明
- 9) 演者/専門 : 学内教員/医学教育
- 10) 講演時間 : 2.00 時間
- 11) 主な内容 : 臨床実習ログブック改訂の概要説明
記載・評価方法の説明、miniCEX 説明

(10) CBT 試験問題作成講習会

- 1) テーマ : CBT 試験問題の作問
- 2) 開催日時 : 平成 31 年 3 月 22 日
- 3) 実施時間/回数 : 合計 2.00 時間 2.00 時間/1 回
- 4) 主催者 : 医学部長
- 5) 開催場所 : 学内
- 6) 企画立案者 : 医学教育センター
- 7) 講演出席者 : 講演者 : 1 人 聴衆者 : 37 人
- 8) 講演 1 : CBT 作問について
- 9) 演者/専門 : 学内教員/医学教育
- 10) 講演時間 : 2.00 時間
- 11) 主な内容 : CBT 作問に関する説明

平成 30 年度 教育改善 FD 研修会 (医学科)

日程 : 平成 30 年 12 月 12 日(水) 13:00~13:40

場所 : 医学部本館 6 階第 1 会議室

講師 : 林 透 (大学教育センター准教授)

林 寛子 (アドミッション・センター 准教授)

参加者 : 32 名 (アンケート回収 26 名)

【研修内容】

最初、医学部藤宮龍也教授から研修会の主旨の説明があった。つづいて大学教育センター林透准教授より教学 IR について説明があり、島根大学理系学部の教学 IR 分析から対応策を導き出した事例紹介があった。次に、アドミッション・センターの林寛子准教授による、「入試データを用いた検証・改善例」について：特別入試により入学した学生の成績等に基づくデータ解析結果について説明があった。本研究会の趣旨としては、本学の入試の改善の解析に 4 年生学部の事例紹介として資料を用いており、6 年制の医学部医学科とは異なるが、解析結果から入学者選抜方法を見直し改善事例として紹介された。



今後、教学データを元にして教学 IR が教育効果の原因分析を行い教育の質を向上させる様に学部と大教センター間で協力・連携して進めて行っていく事が望ましいとなった。

【質疑応答・意見交換】

1. 医学部医学科の解析データがなかったが我々は医学科が聞きたかった。
A 今回4年生学部の事例紹介として資料として説明している。教学IRのアプローチとして紹介した。まだ未取組の部分が多く、IRの解析はまだ十分でない。要望があれば共同して解析していきたい。
2. GP の評価はなじみない。医学科の場合、特別入試からの学生の大学院進級率、留年率、国家試験合格率、が評価結果としての出力であり、これらを教学 IR と結びつけられないのか。
A 医学部医学科でも教学関連のデータを解析すれば個別に分析できると思われるので、データから解析できると思う。
3. 医学部医学科の IR と教学 IR が緊密に連絡を取ったら良いと思う。
4. 医学部医学科は医学教育センターにIR機能を持たせたいと思っている。他学部の教学IRはどうか。
A 学部毎に入試や教育成果については検討している。工学部はデータを提供してIRを行っている。国際認証資格所得する共同獣医学部、医学部は既にIRに近いことをされている。

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	0	0.0%
良かった	17	65.4%
どちらとも言えない	7	26.9%
あまり良くなかった	1	3.8%
良くなかった	1	3.8%
無回答	0	0.0%
合計	26	100.0%

2. 保健学科

保健学科主導 FD 研修会

第1回保健学科 FD 研修会

開催日時：平成 30 年 9 月 19 日（水） 17：30～18：30

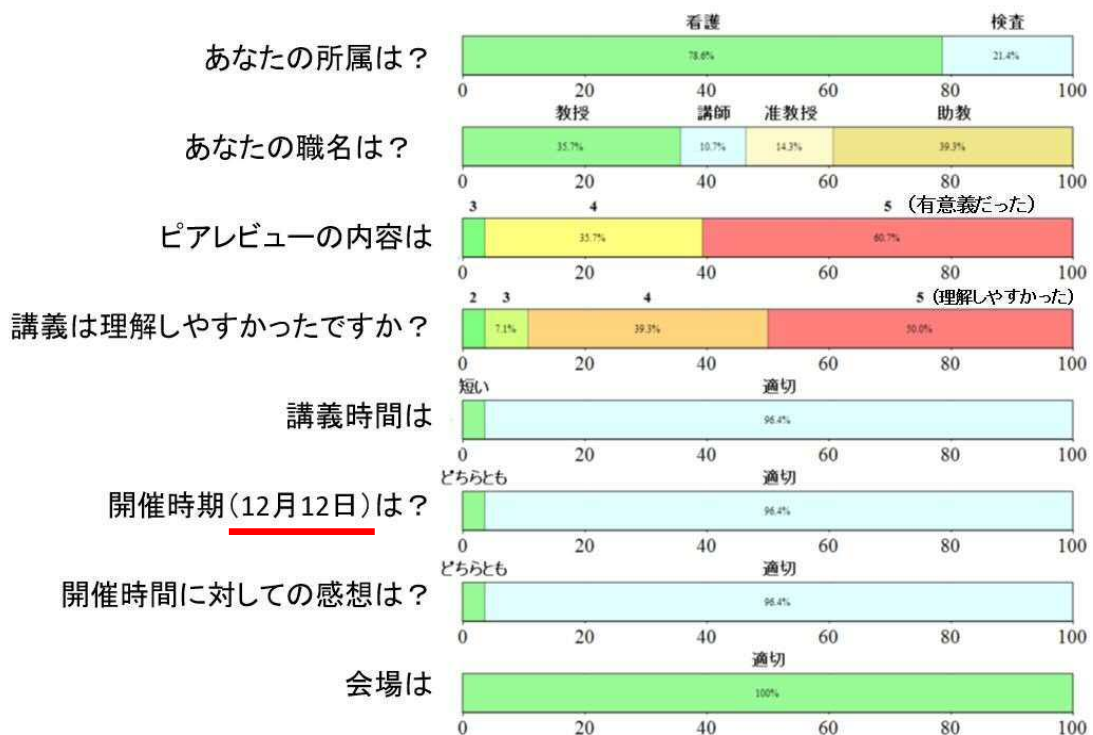
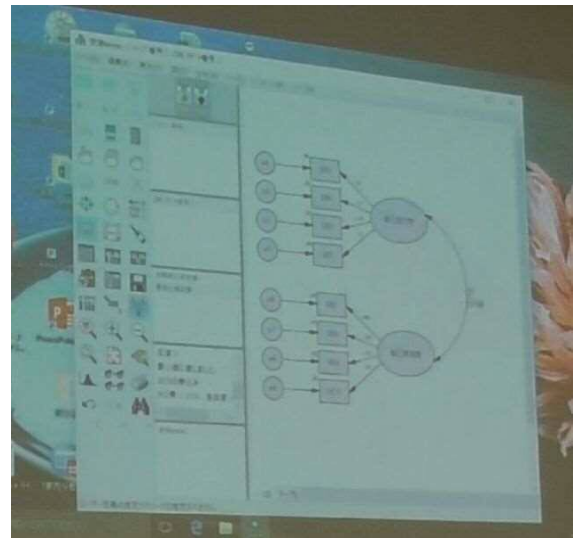
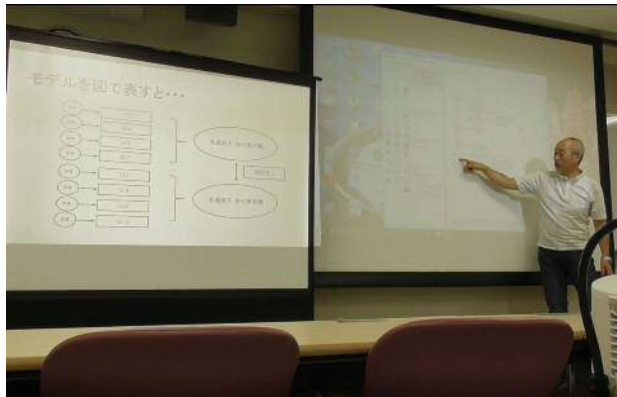
開催場所：HD1-1

講師：安達圭一郎教授

参加教員：28 名

テーマ：「共分散構造解析をやってみよう」

アンケート調査では非常に重要となる SPSS-AMOS を用いた共分散構造解析(SEM)について安達圭一郎教授にまずは理論を講義いただき、その後はサンプルデータを用いて実践的に解析していただいた。左に講義用スライド、右に実際の解析画面を投影しながら行った。いままで AMOS を使用したことのない教官にとっても大変わかりやすい講義となった。



第2回保健学科 FD 研修会

開催日時：平成 31 年 1 月 9 日（水） 16：30～17：30

開催場所：HD1-1

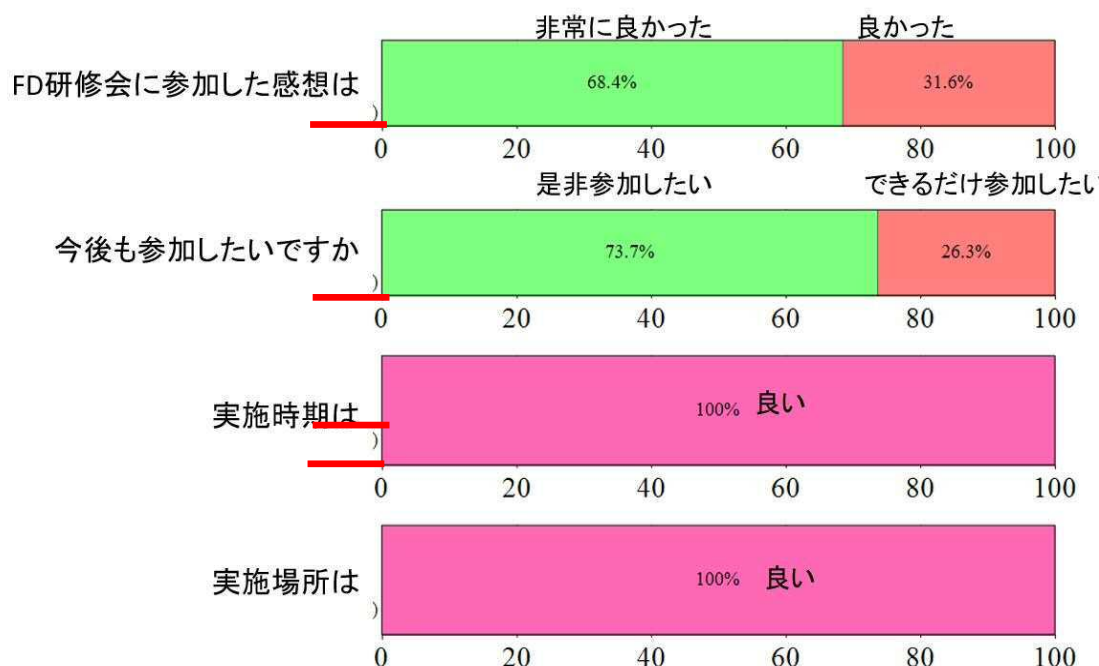
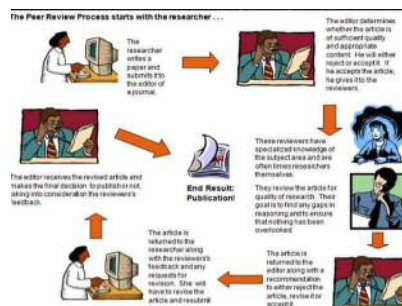
講師：N&HS 編集長 テレサ・ストーン先生

参加教員：33 名

テーマ：「Peer reviewing a journal article」

レビュアーとなる場合に気をつけてほしいことについて、実際に問題の多い論文を見ながら、グループで意見をまとめた。

アンケート結果も好評であった。



平成 30 年度アラカルト FD 研修会（医学科保健学科合同）

開催日時：平成 30 年 8 月 22 日（水） 17：00～17：30

開催場所：総合研究棟 2 階 S1 教室

講師：大学教育機構 大学教育センター 岡田耕一先生

参加教員：44 名（保健学科教官 21 名）

テーマ：「本学学修支援システムの特徴と活用
～学修支援システム及び Moodle の学習支援機能概要～」

【研修内容】

最初、医学部山本健教授から研修会の主旨の説明があった。岡田耕一大学教育センター講師より、『本学学修支援システムの特徴と活用～学修支援システム及び Moodle の学習支援機能概要～』と題し、新学修支援システム（自己主導型学修総合電子システム（eYUSDL））及び Moodle の機能やメリット・



デメリットについて説明があった。本研修会は主に概要の説明となった。細かい所は資料を読んで学習して欲しいとの補足があった。まず、eYUSDL と Moodle の特徴について説明があり、eYUSDL と moodle の相互移動については eYUSDL→moodle は移行が簡単であるが、逆の moodle→eYUSDL には簡単に移動できないが方法はある。eYUSDL にも簡単な学習支援システム (LMS : Learning Management System) 機能が付加している。複雑な事をする場合には moodle の機能が充実している。これらの機能を使う事で資料配布や課題等の提出物管理、出席管理、簡単な小テストや成績処理等が可能なので両者の機能を考えて使ってほしい。

【★質疑応答・意見交換】

質問事項

Q1 1) eYUSDL と学部独自のシステムは同じシステムにできないのか？

2) 大学としてはシステムを使えますよという事か？使ってくださいという事か？使ってくださいくらいではなかなか浸透しないと思う。

A1 藤宮先生から出席の先生に対して、使用上のアドバイスおよび補足説明があった。

1) 医学部の eYUME が想定しているシラバスと授業毎の授業評価についての機能は全学システムではない。

2) このFDは使用して下さいではなくて電子化することで仕事の効率が良くなる場合は利用し、悪くなる場合は利用しなくて良い。随時先生方で判断して利用して欲しい。このシステムは先生方の利便性を上げる道具として認識して頂きたい主旨で企画している。

3) その他

・医学部では学生評価でルーブリック評価があり、この作業を行うと多量の紙が発生する。この評価作業はシステムを利用すると便利だと思う。実際にルーブリック評価を学生毎に5段階評価する作業が、使い始めると便利になったと思った。また授業アンケートでも使っている。Excel ファイル上で 2,000 字までの文章が入力できる学生へのレポートが出題出来て採点できる。等を考えると結構便利である。

・eYUSDL については、授業は自動的に登録される。医学科の場合 eYUSDL を使いたい時は医学科教務係に連絡して集中講義として登録する必要がある。一方、Moodle の場合は、メディア基盤センターにコース作成申請が必要。作成後、登録キーを学生通知し、学生が自分で登録番号を用いて登録することになる。

Q2. 講義中で教材を開示、学生とインタラクティブな授業を行うには Moodle システムは便利であると思われる。授業で PDF 書式の論文を活用する事を考えているがシステムにアップロードする場合、著作権の問題が有るのでは無いか。

A2. 教材配布について、著作権法では紙媒体の配布は大丈夫であるが、電子版の配布は保証金を払う必要が生じるので要注意である。その対策として論文資料のリンク先を示すことで解決する。また学生が自宅学習で PubMed 等を閲覧するにはリモートアクセスの設定が必要である。

Q3. 小テストは学内限定のみか、また自宅からも可能かであるか。

A3. Moodle では IP アドレスによる制限が可能のため小テストも可能である。

Q4. ビデオを利用する場合は、資料の容量が心配である。

A4. 本学の Moodle は「ファイル」と「videofile」と「Kaltura Media Resource」の3種類の方法が

使える。ビデオの容量が大きい場合は「Kaltura Media Resource」を利用する方が良い。

Q5. 吉田地区の共通教育ではLAN使用可能であるが、使用出来ない教室があった。

A5. 通常の講義室とメディア講義室は使えるが、1番、2番教室はLANが整備されてない。

その他

本研修会は30分の設定であり、実際に演習形式でシステムの使い方の要望もあった。

研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合 (%)
非常に良かった	4	11.4%
良かった	8	22.9%
どちらとも言えない	11	31.4%
あまり良くなかった	10	28.6%
良くなかった	1	2.9%
無回答	1	2.9%
合計	35	100.0%

平成30年度 教育改善FD研修会（医学部保健学科）

指定研修：教育改善FD

開催日時：平成30年11月7日（水）13:00～13:25

開催場所：総合研究棟2階 S2教室

講師：大学教育センター岡田 耕一先生 アドミッション・セン

ター 林 寛子 准教授

参加教員：26名

テーマ：教学IRについて

13:00～13:02（2分）開催挨拶とスケジュール説明（FDコーディネータ）

13:02～13:07（5分）教学IRについて説明（大学教育センター教員）

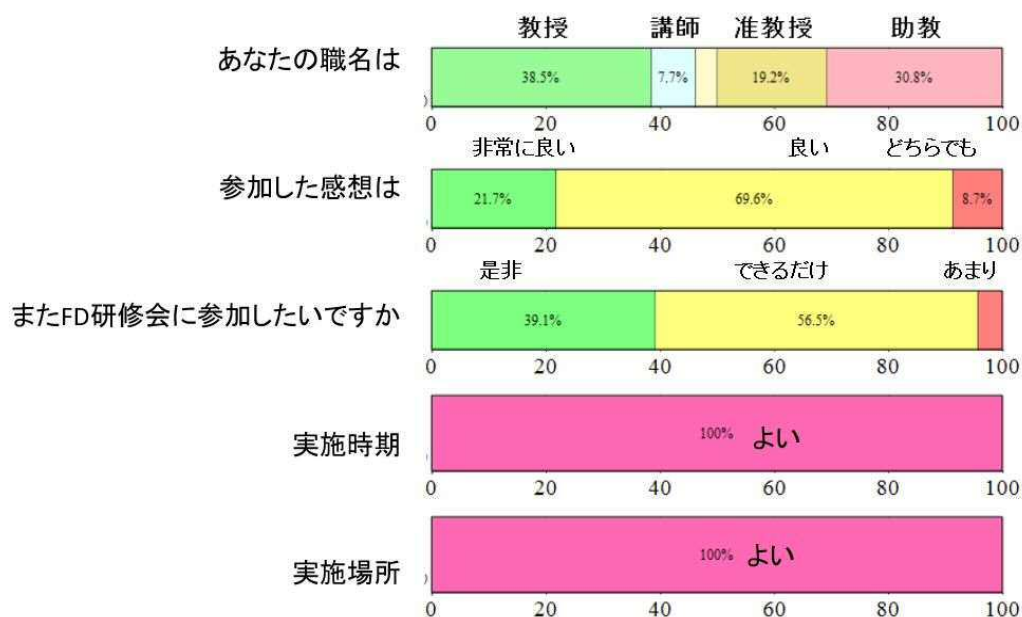
13:07～13:22（15分）事例紹介「入試データを用いた検証・改善例」
（アドミッション・センター 林 寛子 准教授）

13:22～13:25（3分）「IRニーズを掘り起こす」・質疑応答・意見交換
（大学教育センター教員）

入試データの統計解析結果について初めて見る機会があった教官が多く、その意味では新鮮であったが、これらのデータを今まで見る事が出来なかったこと、またこれらのデータをもとに入試の改革の議論を学科内で出来ていないことに不満の声も聞かれた。

また大教センターからの指定で、教授会前30分開始で、討論の時間がとれないタイトなスケジュールであった点は改善が望まれる。アンケート結果は比較的好評であった。





第3節 教育改善に関する活動

1. 医学科

(1) 医学科医学教育自己点検評価委員会及び領域部会（領域1～8）の開催

平成31年10月28日～11月1日に、日本医学教育評価機構による評価を受審することが決定している。そこで、医学教育分野別評価における医学教育の自己点検評価報告書を作成すべく、平成30年6月に医学科医学教育自己点検評価委員会を立ち上げ、7月に当委員会を開催した。その後、平成30年10月から平成31年3月に、順次領域ごとに部会を開催し、自己点検評価報告書の作成・ブラッシュアップを行ってきた。あわせて、様々な教育改善に関する活動を実施しており、主な取り組みを下に記す。

(2) ユニットの變更

平成30年度カリキュラムにおいて、以下のとおりユニットを變更し、“医療プロフェッショナルリズム”や“国際対応力”を強化した。

- ・ネイティブ外国人教員による「All English」を新設
- ・“医学・医療総論”を“プロフェッショナルリズム”にコース名を改変。あわせて、“プロフェッショナルリズム”に共通教育「生命倫理学」、「行動科学」、「医学史1・2」を追加
- ・“プロフェッショナルリズム”に、「行動医学テュートリアル」を新設
- ・「医用統計学」を「医用統計学・医用AI学」に改変

(3) eYUMEの改修

平成30年度より、eYUMEに簡単にHPの編集を行うことができるCMS（content management system）

を掲載した。各講義を担当する教員が自身の ID とパスワードで学内からログインし、授業内容詳細等を適宜更新することで、学生が自己学修を行うための情報を常に最新にすることが可能となった。また、カリキュラムマップ、カリキュラムフローチャート等の医学科の特徴あるカリキュラムについて、学外に積極的に公開を行っている。加えて電子化のメリットを活かし、“医学教育モデル・コア・カリキュラム”や医学・医療の発展に即時的に対応している。

eYUME の定義：山口大学医学教育総合電子システム (electronic system of Yamaguchi University Medical Education) の頭文字によるネーミングであり、山口大学医学部医学科で行われる全ての授業内容を電子化したシラバスで、平成 13 年より Web サイト上に公開している。

(4) 学修目標 (H28 コアカリ) の修得状況の把握の開始

平成 30 年 4 月、H28 コアカリで定めた 1,788 の学修目標 (A~G) と、山口大学独自に設けた 286 の学修目標 (Y) の合計 2,074 の学修目標について、それぞれのユニット、授業で身に付く学修目標を eYUME 上で明示し、学生は講義毎に学修目標が身に付いたかを自己評価する取り組みを開始した (平成 16 年度より全てのユニットとコアカリの到達目標を eYUME 上で関係付けている)。授業担当教員は、学生毎の評価結果を閲覧することができ、形成的評価を行うと同時に、次回の講義の向上に活用することができる。また、ユニット毎に結果をとりまとめ、平成 30 年度末にユニット長にアンケートを行い、組織的に授業改善に取り組んでいる。

設問1

当授業の“学修目標”は、身に付きましたか【必須】

①身に付かなかった ②あまり身に付かなかった ③だいたい身に付いた ④身に付いた

(5) 学修成果基盤型教育の推進

平成 30 年 9 月、“全国医学部長病院長会議 医学教育モデル・コア・コンピテンシー (初版)”を反映させた“山口大学医学部医学科ディプロマ・ポリシーと医学教育モデル・コア・コンピテンシー対応表”を作成した。また、平成 31 年 1 月、“医学教育モデル・コア・コンピテンシーに基づく H31 カリキュラム強化策”をまとめ、学修成果基盤型教育を推進している。

学修成果基盤型教育の定義：卒業時到達目標から、それを達成するようにカリキュラムを含む教育全体をデザイン、作成、文書化する教育法

(6) “医学教育 IR” 業務を規則に規定

平成 30 年 7 月、山口大学医学部附属医学教育センター規則を一部改正し、医学教育センターの業務に、新たに“医学教育 IR”を規定した。

(業務)

第 3 条 センターは、次の業務を行う。

- (1) 医学教育の実施に関すること。
- (2) 医学教育 IR に関すること。
- (3) 医学教育総合電子システムに関すること。
- (4) 卒前卒後教育の連携に関すること。
- (5) 医学教育の改善に関すること。
- (6) その他医学教育に関すること。

(7) 医学科教育プログラム評価委員会の設立

平成 30 年 9 月、医学教育 IR を実質化すべく、収集したデータに基づき、教育プログラムの効果及び適切性を評価することを目的として、医学科教育プログラム評価委員会を立ち上げた。医学科教育プログラム評価委員会は、学生や広い範囲の教育の関係者及び外部の専門家を委員としており、平成 30 年 11 月に開催した。協議議題は以下のとおり。

1. 医学科卒業生のディプロマ・ポリシー (DP) 修得状況について
2. 医学科学生のユニット別学修目標修得度について
3. 進級基準に規定する各試験結果の評価について
4. 医学科卒業生の地域医療貢献の評価について
5. 学生アンケートのフィードバックについて
6. 教員アンケートのフィードバックについて

(8) 医学科カリキュラム委員会の設立

平成 30 年 7 月、学生、教職員、広い範囲の教育の関係者及び外部の専門家の相互の協力のもと、カリキュラム等の医学教育全般に関する改善検討を行い、その結果を教育企画会議に提言することを目的として、医学科カリキュラム委員会を立ち上げた。平成 30 年 11 月に医学科カリキュラム委員会を開催し、3つのポリシーや学修成果基盤型教育等について意見交換を行った。協議議題は以下のとおり。

1. 山口大学医学部医学科ディプロマ・ポリシーについて
2. 山口大学医学部医学科ディプロマ・ポリシーと医学教育モデル・コア・コンピテンシー対応表について
3. 山口大学医学部医学科カリキュラムマップについて
4. 山口大学医学部医学科カリキュラム・フローチャートについて
5. 山口大学医学部医学科らせんの段階発展型教育プログラムについて
6. 山口大学医学部医学科カリキュラム・ポリシーについて
7. 山口大学医学部医学科ユニット毎の教育方法と評価方法について
8. 山口大学医学部医学科アドミッション・ポリシーについて
9. 山口大学医学部医学科3つのポリシーについて
10. 学修成果基盤型教育、臨床実習のマイルストーン、YU CoB CuSの開始について

(9) 入試改革（地域枠定員の増）

医学教育センターの IR 業務として、地域枠（山口県出身で成績優秀な学生を確保する推薦入試枠で奨学金の貸与はなし）を拡大した際、大学入試センター試験の最低点及び2次試験も含めた合計最低点数がどこまで下がるかのシミュレーションを、平成 30 年 7 月、8 月に4回にわたり検討会議を行った。大学入試センター試験については予想以上に点数が下がらず、また国家試験合格との相関が低いため、地域枠を拡大（15名→22名）することが、平成 30 年 10 月の医学科会議で承認された。平成 32 年度入試に反映する。

医学部医学科 入試枠の変遷

H30.8作成

入試枠	H20入試	H21入試	H22入試	H23入試	H24入試	H25入試	H26入試	H27入試	H28入試	H29入試	H30入試	H31入試	H32入試	H33入試	(H34入試)
一般前期	50	60	51	52	52	52	52	60	60	60	60	60	55		(注)▼2
一般後期	15	15	15	15	15	15	15	10	10	10	10	10	10		
(地域枠)													(内数3)		
推薦Ⅱ	10	10	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	22		
地域枠	10	5	10	10	10	10	10	7	7	7	7	7	5		
全国枠		5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	▼5	
緊急医師確保対策枠			*7	*9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	▼9	
地域医療再生枠【山口県枠】			*1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	▼1	
地域医療再生枠【鳥取県枠】															
小計	20	20	38	40	40	40	40	37	37	37	37	37	42		
学士編入学	10	10	10	10	10	10									
3年次編入															
(地域枠)		(内数3)	(内数3)	(内数3)	(内数3)	(内数3)									
2年次編入						10	10	10	10	10	10	10	10		
(地域枠)						(内数3)	(内数3)	(内数3)	(内数3)	(内数3)	(内数3)	(内数3)	(内数3)		
合計	95	105	114	117	117	127	117	117	117	117	117	117	117		

* 認可のタイミングにより一般前期日程で行った
 ※ 認可のタイミングにより9名の内2名を一般前期日程で行った
 (注) ▼2は、研究医養成枠

早くてH32入試で交渉中
 平成34年度入試は、文部科学省、厚生労働省の通知等により変更の可能性あり

(10) 臨床実習におけるマイルストーンの本格的な開始

平成 31 年 1 月，学生に eYUME 上で，“臨床実習で医学生として信頼され任される役割（EPA）”，“基本的臨床手技”，臨床推論（実習で経験した症例や臨床推論を学んだ疾患名を記録）を自己評価させることで，各学生が最終的な到達点の中でどの程度修得しているかを把握させることにより，臨床実習においてマイルストーンを本格的に開始した。

臨床実習ログブック（電子媒体版）

“臨床実習ログブック（電子媒体版）”を使用して、各自“学んだ／経験した”疾患等を確認しながら臨床実習を効率よく進めてください。常に入力・変更することが可能です。

臨床実習で医学生として信頼され任される役割
(EPA: Entrustable Professional Activities)

* 臨床実習 1・臨床実習 2 の各々終了 2 週間前を目途に入力願います

基本的臨床手技
※臨床実習 1・2 共通

* 臨床実習 2 終了 2 週間前を目途に入力願います

臨床推論
(実習で経験した症例や臨床推論を学んだ疾患名を記録)
※臨床実習 1・2 共通

* 1 つの診療科が終わった節目等で入力して下さい

(11) 臨床実習におけるアンプロフェッショナルな学生評価の開始

平成 31 年 1 月，臨床実習における学生の態度や行動について，特に医療安全やコミュニケーションの面からこのままでは将来患者の診療に関わらせることに不安がある学生（アンプロフェッショナルな学生）を即時に把握することで，プロフェッショナルリズムの高い臨床医の育成を行う取組を開始した。

アンプロフェッショナルな学生の評価試行

山口大学医学部医学科では臨床実習の評価の一つとして、アンプロフェッショナルな態度の評価を行います。
「アンプロフェッショナルな学生」は以下のように定義します。

臨床実習における学生の態度や行動について、特に医療安全やコミュニケーションの面から、このままでは将来患者の診療に関わらせることに不安がある学生
【医学教育モデル・コア・カリキュラム（平成28年度改訂版）より改変】

現場で患者さんの診療にあたる臨床医としての視点で、今後この学生が臨床医になって診療に関わる上で、特に医療安全やコミュニケーションの面から、明らかに不適切と思われる態度や行動が見られた場合、その事例について下記にできるだけ詳しく記述下さい。その際に、直接ご自身で観察された情報と間接的に得た情報を可能な限り区別していただくようお願いいたします。
なお、本評価は、各診療科での臨床実習の評価（合否判定）とは独立して運用します。アンプロフェッショナルとして報告しつつ、診療科の評価で合格（再実習なし）あるいは不合格（再実習あり）のどちらとされても構いません。
一度の報告で学生の処遇が決定することはありませんので、学生の態度・行動で気になる点があり、指摘しても変わらないようであれば、診療科長ともご相談の上、記入・提出いただくよう、お願いします。

1. 学生氏名【必須】

必須

2. 診療科【必須】

必須

(12) ユニットコマ数の見直し（ゆとりあるカリキュラム）

臨床医学教育に十分な時間をかけつつ、臨床実習期間の延長・前倒しにより過密になった「展開系医学科目」のカリキュラムを再編成し効率化させるため、各コース・ユニットにおいて平成31年4月からの講義のコマ数や講義内容の見直しを行った（総コマ数で約100コマの減少）。これは平成29年度に開催した拡大カリキュラム改善WG（各学年のカリキュラム委員が委員として参加）の答申を受けて、平成30年度に具体化したものである。なお、“自己開発力”と“科学的探究力”を育成する本学の特徴あるユニットである「自己開発コース」、「修学論文チュートリアル」のコマ数は、現状維持としている。

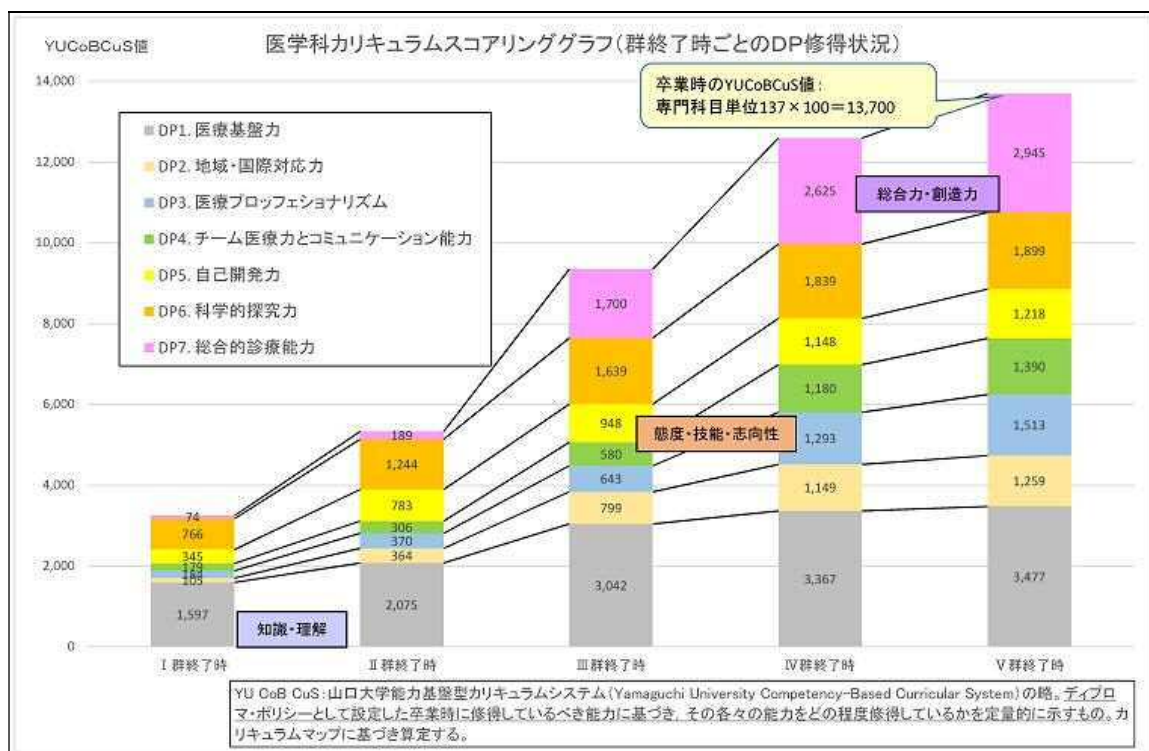
	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	H31
総コマ数	3,253	3,224	3,214	3,241	3,195	3,168	3,273	3,435	3,473	3,452	3,355
臨床実習1	726	656	760	776	788	788	912	812	812	808	792
	2週×19	2週×19	2週×20	2週×20	2週×20+1	2週×20+1	2週×4+2週×20	2週×21	2週×21	2週×21	2週×21
臨床実習2	236	224	236	236	232	228	224	493	489	485	473
	4週×3	4週×3	4週×3	4週×3	4週×3	4週×3	4週×3	2週×2+4週×3+1	6週×4+1	6週×4+1	6週×4+1
臨床実習1+臨床実習2	962	880	996	1,012	1,020	1,016	1,136	1,305	1,301	1,293	1,265
	50週	50週	52週	52週	53週	53週	60週	67週	67週	67週	67週
臨床実習1, 臨床実習2以外	2,291	2,344	2,218	2,229	2,175	2,152	2,137	2,130	2,172	2,159	2,090
自己開発コース	419	445	479	483	440	438	419	411	440	444	424
修学論文チュートリアル	83	113	73	77	80	80	80	80	90	80	76
自己開+修学論文チュ	502	558	552	560	520	518	499	491	530	524	500

(13) YUCoBCuS の導入（カリキュラムマップの見直し）

平成31年4月よりYUCoBCuSを開始すべく、準備を行ってきた。具体的には、ユニット毎に7つのディプロマ・ポリシーへの貢献度を数値化（1単位あたりの合計値を100とする）し、カリキュラムマップに反映させた。成績によって係数を掛ける（秀：×1.4、優：×1.2、良：×1.0、可：×0.8）。卒業要件にはしない。

また、医学専門群終了時ごとのディプロマ・ポリシー修得状況を数値化・可視化した”医学科カリキュラムスコアリンググラフ”を作成し、教職員や学生に、医学専門各群での段階的修得の積み重ねによる学修成果基盤型教育の理解を求めている。

YU CoB CuS の定義：山口大学能力基盤型カリキュラムシステム（Yamaguchi University Competency-Based Curricular System）の略。ディプロマ・ポリシーとして設定した卒業時に修得しているべき能力に基づき、その各々の能力をどの程度修得しているかを定量的に示すもの。カリキュラムマップに基づき算定する。



2. 保健学科

学生へは担任を通して進路や、学習状況についてもアンケートを実施し、さらに年1回程度は面談を行っている。

医学科、保健学科ともに国家試験の合格率で学部教育の充実が評価される。本年度も医学科においては、国家試験対応後援会や保健学科では下記のように教員による国家試験対策講義を実施した。

国家試験対策特別講義

開催日時：平成30年9月18日～21日

開催場所：保健学科 総合研究棟 S5 講義室

内容：4年生に対する講義及び問題演習

	10:30～	13:30～
9/18 (火)	病理(山本美)	臨床化学(山城)
9/19 (水)		微生物(常岡)
9/20 (木)	血液(湯尻)	免疫(稲光・本木)
9/21 (金)	生理(田中伸)	

臨床検査技師国家試験の合格率は70%台であり、国立大学においても同程度の合格率の大学がある中、看護学専攻では95-100%の合格率を長年維持している。検査技術科学専攻においては、本年度は3名が不合格となり、やや合格率が低下した。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

1. 医学科

授業評価については、医学科では医学教育総合電子システム[eYUME]上で、保健学科は、保健学科授業支援システム[FHS Web Campus]上で、学生授業評価、教員授業自己評価を引き続き行っている。またその結果については、教員へ直接フィードバックし、次年度以降の授業の改善に活用している。

医学科では新たに、平成30年4月より、学生がeYUMEを使用して入力した診療科（部）ごとの臨床実習評価結果は、即時に該当診療科に所属する全ての教員が閲覧することが可能となっており、診療科の教員は、次のクールでの臨床実習の参考にし、より質の高い臨床実習の実施に活用している。また、評価シートは医学教育モデル・コア・カリキュラム（平成28年度改訂版）に沿ったものに修正した。

さらに、平成31年度より、ユニット毎に設定した山口大学独自の“到達目標”により、学生はユニット終了後に、“到達目標”をどの程度身に付けることができたかをeYUME上で自己評価する取り組みを開始する（紙媒体のユニット学生振り返り評価票は廃止）。ユニット責任者及びシラバス責任者はその結果を閲覧することができ、形成的評価を行うと同時に、次回のユニットの向上に活用することが可能となる。ユニットの1つである「医療概論・倫理序説」の到達目標は以下のとおり。

目標	
1.主題	
1. 医学・医療の倫理問題全般を理解する。 2. 医学・医療の各領域の倫理問題に対する現在の考え方や解決のあり方について理解する。 3. 医療概論全般について理解する。	
2.到達目標	
1. 医療倫理の歴史的な流れを概説できる。 2. 臨床倫理の歴史的な流れを概説できる。 3. 患者の基本的権利を概説できる。 4. 患者の自己決定権を概説できる。 5. 臨床諸領域における代表的な倫理問題を概説できる。 6. 倫理問題に対する解決法を4分割表を用いて概説できる。 7. キャリア形成のあり方について概説できる。	

第5節 FD実施経費報告書

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔に)
医学部	国際認証受審準備対応講演会(5/2)	講師旅費・謝金	65	本学部の国際認証受審のために大いに参考になった。
	国際認証受審準備対応講演会(1/31)	講師旅費・謝金	144	本学部の国際認証受審のために大いに参考になった。
	Post-CC OSCEについての講演会(3/25)	講師旅費・謝金	94	本学部のPost-CC OSCE実施にあたり大いに参考になった。
計			303	

第6節 来年度の課題

1.医学科

(1) 医学教育分野別評価の受審

令和元年10月28日～11月1日に医学教育分野別評価を受審する。これに伴い、平成30年度に医学教育自己点検評価委員会を設置し、精力的に準備に取り組んでおり、これを加速させていく。

(2) 教務委員会と入試委員会の協働による受験生・入学生の質確保

一般入試前期の競争率が低下してきており、また地域枠の入学定員の増員が、令和2年度入試から実施される。教務委員会と入試委員会の協働による受験生・入学生の質確保の細やかなフォローを行う。また、大学入試制度の変革に対応するための検討を引き続き行う。

(3) 学生委員会による担任制導入など学生支援の充実化

平成29年度より開始された担任制も3年目となる。担任制の充実化・実質化をさらに進めていく。

(4) 教育主任制度の更なる充実によるカリキュラム改革の普及

平成25年度より、各講座、診療分野毎に、教育主任制度を開始した。これは、医学教育センターと、実際の教育を担当する各講座教員グループとの情報の伝達、共有を密にすることにより、複雑化する医学教育を円滑に進めることを目的とした。教員間の戸惑いや伝達ミス等も散見されたが、概して軌道に乗ったものと思われる。来年度は、今まで以上にこの制度の更なる活用により、より充実した内容の教育を目指していく。また、来年度からは臨床実習終了後OSCEも開始されるので、これにも併せて対応していく。

(5) 学外での地域医療実習の更なる充実

将来選択する専門領域に関わらず、プライマリ・ケアや地域医療に一定の理解・能力を有する医師を養成することが必要になってきている。そこで、6年生を対象に山口大学医学部近辺の各診療科同門の診療所を中心とした診療参加型地域医療臨床実習を、平成25年度より導入している。引き続き、施設関係者との密なコンタクトを行い、実習内容の細かな検討、あるいは学生アンケート等を実施して実習の更なる充実を図る。

(6) 成績不振者への個別指導の更なる充実と対象学生の拡充

個別試験で成績不良であった4年生と卒業留年学生が対象であり、個別指導等の更なる充実と拡充に向けて、議論をさらに加速させる。今後の検討課題として、低学年時の成績不振者に対する個別指導体制の構築についても検討していく。

(7) 臨床実習の充実化、mini-CEX の普及

臨床実習の更なる充実に向けて、ログブックの一部を eYUME 上で行えるように改訂を行ったので、運用等の問題点を整理する。また、mini-CEX も 3 年目になり、主要な診療科での実施をさらに進めるとともに、問題点などについても整理していく。

(8) eYUME の改定と e-learning の普及

eYUME の機能強化を引き続行っていく。また e-learning のトライアルを開始していく。

2.保健学科

保健学科では、医療の変化や国際化に対応でき、医療チームの一員として活躍できるとともに地域医療の向上に貢献できる人材の育成を教育目標としており、この視点から現在の教育を更に充実させる予定である。国家試験については、今後とも高い合格率を維持するとともに、キャリア教育等の充実により進路への意識を高め、学生がスムーズに社会人として医療人として活躍していく環境を整えていきたい。加えて、大学院への進学者の増加についても取り組んでいきたい。

1. 国家試験対策とその成果

授業外に教員が率先して、国家試験対策の講義をシリーズで企画し、行っている。保健学科ではほぼ 100%の国家試験合格率を継続して達成している。臨床検査技師国家試験の合格率は全体では 70%台であり、卒業研究、論文作成、多くの講義・実習をこなしながら、高い合格率を達成していることを内外に強くアピールする必要があると考えている。ただし、今年度検査技術科学専攻においては 3 名の不合格者が出て、合格率が 92.7%まで低下したため、来年度は、毎月行っている模試の受験率をあげるなどの対策が必要。また授業外のグループ学習を実施したいが、学習場所の確保が課題である。

2. APAHL (Asia-Pacific alliance of Health Leaders)

国際化に関しては、APAHL (Asia-Pacific alliance of Health Leaders) などを通し、より国際的な人材育成のための努力を行っていきたい。APAHL への参加にあたっては、学生に対する英会話能力等の向上を促す取り組みを充実させる必要がある。

3. 適正な成績評価

保健学科では学科内シラバスにおいて、成績入力により学生成績がヒストグラム化され瞬時に見えるため、教官は自分の行った試験の分布がすぐに把握でき、適正な評価を行う上で役に立っている。

第9章 工学部のFD活動

第1節 授業公開

工学部では毎年、前期と後期に公開授業を実施している。今年度も学部の全開講授業を対象に、前期は7月、後期は12月に実施した。参観者は「公開授業参観感想表」を提出し、授業を行った教員にその参観感想表が配布され、授業改善に役立てることにしている。

今年度の学科別参観者数と参観率を以下の表に示す。全体的な参観率は9%であった。昨年度は3%で若干の増加は見られたが、低参観率であることは否めない。

工学部では各教員が年に最低1回は授業参観することを目標として参観を呼びかけているが、目標の達成には全く至っていない。この件については制度設計の見直しを含めて今後の改善が必要であるが、後述の学生授業評価から判断すると、ほとんどの授業は好評価されており、これまでの授業改善の取り組みの成果と言える。

平成30年度 学科別参観者数及び参観率(1年間・実人員)							
※教員数は、30年12月1日付							
	教員数合計	30年度前期参観者	30年度後期参観者	参観者合計	参観者(実人員)	未参観者数(実人員)	参観率
機 械	24	4	0	4	4	20	0.17
社会建設	24	2	0	2	2	22	0.08
応用化学	25	0	0	0	0	25	0.00
電気電子	21	1	1	2	2	19	0.10
知能情報	24	3	0	3	3	21	0.13
感性デザイン	15	0	0	0	0	15	0.00
循環環境	16	2	0	2	2	14	0.13
工学基礎教育	11	1	1	2	2	9	0.18
計	160	13	2	15	15	145	0.09

・参観者は重複があるため(1人が両方を参観、又は同期に2回参観)、参観者合計と参観者(実人員)は必ずしも一致しない。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

1. 教育改善FD研修会

以下の要領で教育改善FD研修会を実施した。

日程：平成30年11月14日(水) 14:20～15:00

場所：工学部D棟 D11講義室

講師：岡田 耕一（大学教育センター講師）
 林 寛子（アドミッション・センター准教授）
 参加者：25名（アンケート回収 21名）

【研修内容】

岡田大学教育センター講師より、「教学 IR とは」と題し、教学 IR の目的や手法等について、島根大学の事例を交えながら概要説明があった。平成 28 年度に、大学教育センターの下に「教育開発部」「教学 IR 部」を新たに改編設置したことに伴い、教学 IR の環境整備や実質的運用が喫緊の課題となっている。「教学 IR とは何か」「教学 IR を通して何ができるのか」「教学 IR を活用するとどのような効果があるのか」といった点について、学部・研究科教員に分かりやすく説明し、理解を深める機会提供を行うのが今回の教育改善 FD 研修会の趣旨目的である。

具体的な事例として、林アドミッションセンター准教授より、「入学者のデータを用いた検証・改善例」が紹介され、特別選抜による入学者が大学教育に適応できたか、という問いについて、①学業成績（GPA・TOEIC）、②在籍状況、③大学卒業後の状況、④大学教育における自己意識の分析を行い、平成 28 年度入試からの AO 入試改善に結び付けたことが説明された。さらには、平成 28 年度 AO 入試改善後の A 学部での AO 入試入学者 1 年次の TOEIC 成績の改善事例が紹介された。

その後、教学 IR に関する学部のニーズを把握するため、意見交換を行った。特定の課題を決めて分析することが望ましいが、そのような課題の特定が難しい場合には、ビッグデータを利用して探索的な方法でもって、幾つかの集計結果を提示しながら協議・対話することを通して、課題を見出し、特定していくことが有効ではないかとの意見があった。

そのほかの質疑応答は以下のとおりである。

Q1 2013 年度工学部の推薦入試Ⅱの入学者の GPA が低いとの指摘があったが、その原因について分析されているのか。

A1 まだ十分に把握できておらず、これからの分析課題である。

Q2 島根大学の事例が紹介されたが、その後の改善結果（効果）を明らかにした論文等はないのか。分析結果については、よくある事例のように思われるが、その後の改善結果（効果）が大事なように思われるが、いかがか。

A2 大事な指摘であるが、その後の改善結果（効果）を明らかにした論文等まで把握が及んでおらず、確認してみたい。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	4	19.0%
良かった	10	47.6%
どちらとも言えない	5	23.8%
あまり良くなかった	2	9.5%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	21	100.0%

2. 講師派遣型アラカルト FD 研修会

学部・学科等の FD 活動に大学教育センターから講師を派遣して実施する「講師派遣型アラカルト FD 研修会」を以下の要領で実施した。

日程：平成 31 年 3 月 4 日（月）14:20～15:00

場所：工学部 D 棟 D11 講義室

講師：平尾 元彦（学生支援センター教授）

参加者：34 名（アンケート回収 23 名）



1. 採用活動時期での変更でいま何が起きているか？

2018 年 10 月、経団連が学生の就活ルールとなる「採用選考に関する指針」を廃止したことについての説明があった。この指針は国公立の大学等で構成する就職問題懇談会による申し合わせの基礎となるものであり、大学生に 3 年生までは学業をしっかりと行ってもらい、その後最終学年で就活を行うように取り決めを定めたものである。1995 年頃からインターネットが普及し学生が全国から就活を自由に行えるようになり、企業も学生も職種等を自由に選ぶことができるようになり、結果として大量の学生を企業に集めて選考し、大量に不採用にする約 20 年間の方法に企業も学生も疲れていることから、学校推薦による就活、学内セミナー、小規模イベントの開催、大学や企業がスポンサーになって就活カフェの設置による就職支援が多くなった。またここ数年労働力不足により企業は良い人材を採用したいことから、卒業生のリクレーター、スカウト、エージェントによる採用が多くなっている。また 2-3 年生を対象にインターンシップを活用して企業を良く知った後で採用する方法をとることで 1-2 割を採用しており、事実上の採用ツールとして企業も学生も利用し機能している。学生さんには「しっかり考え、じっくり育み、スパッと決める」と進めて欲しいと思っている。

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	6	26.1%
良かった	14	60.9%
どちらとも言えない	2	8.7%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	1	4.3%
無回答	0	0.0%
合計	23	100.0%

2. 大学生の就職活動と企業の採用活動

我が国では 4 月に一斉に新卒採用する文化であることから、これに伴い卒業の前年度に就活が一斉に行われることになる。学生の就活起点はエントリーシートの作成からであるが、先ほど述べたように、今後はそれよりも先にインターンシップからになると思われる。就職活動の自由の原則は尊重しなければいけないが、採用したい学生は重複内定をもらっており、内定辞退に企業は困っている。また就職してもすぐに離職する学生も多く、職業への定着が課題となっている。大学としては学業成績を高めたまま、並行して就職活動やインターンシップを行って欲しいし、これらの学修成果を可視化する事が課題となっている。

3. 学生支援センター就職支援室の取り組み～キャリア学習の推進機関として

学生支援センターについて説明があり、本学では、山口大学のキャリア教育の基本方針が制定されていることが他大学にない特徴であり、本学はこれに基づいて活動している。この中で「就業する力・進路を選択する力をつけるためのキャリア学習の場を提供する」が掲げられているのでこれを活用して欲しい。また本学では共通教育授業科目として「キャリア教育科目」があり全学必

修として学生は受講している。また「本」から学ぶことを重要視し、就職支援室には関係書籍も多く揃えてあり、新聞の読み方に関する講座も開講している。また「人」から学ぶことの重要性においては学内業界・企業研究会等もあり、企業の方と実際に会って就職についての理解を深めてから就活を行ってほしいと考えている。また就職情報のメールを配布するサービスを行っている、等の活動の説明があった。

質疑応答

Q1: 今後、採用の比重はインターンシップへシフトするのか？

A1: インターンシップは採用の一つの手段であり、これだけではない。企業はOB、OG訪問、懇談会もしている。効率的に採用を進める方法として最近ではSNS、AI、WEB配信等のIT技術が支えている。地方の学生が不利ではあるが、山口大学を含め地方大学の学生は経験が少なく、素直であるので都会の大学に比べて辞退が少ない事を知っている。ベンチャー企業も地方大学に来てから学生に接触して採用したいと思っている。

Q2: 進路指導について、大学は親の対応について苦労している。親は自分の子供がどの程度の会社採用されるかわからないために教員や学生との意見の相違が生じる事がある。進路について学生の希望条件と現状の違いについて余り強く言うと教員との信頼関係が無くなること心配している。さらに学生が大学と親との板挟みになる事がある。

A2: 学生支援センターでは、なるべく早く就活の前から家族で就活について話すように勧めている。最後は自分で就職は決めるように言う。その前に親にデータを持って就活については説明しなさいと指導する。未だに大企業は学閥等があり、思うように就活して採用されない事情もあることを説明する必要がある。また企業では採用したいために親向けの内定を出すところもある。

Q3: インターンシップについて1日インターンシップは本当にインターンシップなのか？ 企業はインターンシップに対してマッチングしているのか？

A3: 1日インターンシップは増えているが、1日から2-3日のものも増えている。1日ではわかりにくいので2-3日の中身のあるものを企業は準備している。先生方にはインターンシップに行った学生には是非インターンシップの内容を聞いて頂き、もし要望を申し入れることが出来るのであれば、もう少し改善して欲しいと申し入れて行かないと、実は企業側は気が付いてない可能性があると思われる。1日のインターンシップが企業説明会と同じだったとの学生の意見もあった。5日のインターンシップであっても正味は3日のものもあるので、内容については検証する必要がある。

Q4: インターンシップについてどのくらいの学生が行っているのか把握しているのか、またインターンシップの説明をどの様にしているのか？

A4: インターンシップに対しては個別に対応している。インターンシップの説明については、夏休みにインターンシップを企画している企業が多いので、それに合わせて4月から夏休みが始まる前には頻繁に説明会をして情報を提供している。山口大学を通して申込みを行うインターンシップがある一方、企業が開催するものをインターネットで直接申し込んでインターンシップに参加しているものもある。どの方法で申し込んだものでも参加登録についての書類を大学に提出してからインターンシップに行くようには指導している。また事前に研修を受けてからインターンシップに行くように指導している。無届けでは事故が起こったときの保険対象にならないことも指導している。就活、インターンシップは個別対応が必要なので、相談員が吉田地区はほぼ毎日、常盤地区は通常期は1回/週ではあるが、繁忙期の4-6月では2-3日/週、閑散期の9-10月は1回/月になり基本的にはそこに申し込んで入ってもらおう。急ぎのときには私(平尾先生)がこちら

(常盤)に来て対応することもあることで、その場合は就職支援室に相談してもらえると助かる。

第3節 教育改善に関する活動

工学部では、以下の様な教育改善に関する活動を実施している。

(1)カリキュラムマップ及びカリキュラムフローチャートの見直し

学部における各学科、大学院研究科における各コースのカリキュラムマップ及び学部における各学科におけるカリキュラムフローチャートの見直し及び作成がなされた。

(2) 工学部サロン

平成 18 年度 (2006 年度) から、吉田キャンパスの研究 1 号館の 1 階に「工学部サロン」を開設している。「工学部サロン」では工学部 1 年生のいろいろな相談にいつでも対応できるように、工学部教員の OB、大学院生が待機している。また、工学部のいろいろな情報提供も行い、学生交流の場としても利用できるようになっている。

(3) 工学教育研究センター

先駆的な教育実践活動について情報を収集・分析して新しい企画を提案し、教育実践活動をとりまとめ、学内外に公表するための工学部付属のセンターである。また、「山口大学工学教育」の発刊も行っている。

(4) 「山口大学工学教育」の発刊

(3)で触れた「山口大学工学教育」は、工学教育に関する論文、調査報告、学外シンポジウムなどの参加報告、各学科における教育改善の事例報告などが掲載されており、工学部における教育改善に役立っている。

(5) グローバル技術者養成センター

平成 25 年度 (2013 年度) から常盤台キャンパスに「グローバル技術者養成センター」が設置され、工学部と理工学研究科 (平成 28 年度より創成科学研究科) のグローバル化教育プログラム開発が実施されてきた。教員の FD 研修として海外研修プログラム開発や専門科目のバイリンガル化が進められると同時に、グローバル教育プログラム実施のための英語テクニカルコミュニケーション教材やアクティブラーニング教材などの開発が進められてきた。また、教員に対する SD 研修プログラム開発とその実施が行われ、教職員のグローバル教育力の向上のための体制を整備する取り組みが推し進められた。昨年度からは、(3)の工学教育研究センター内に組織変更され、学生の海外留学の支援を実施している。

(6) ステップアップノートの配布

平成 23 年度 (2011 年度) から全学科の 1 年生に対して「ステップアップノート」の配布を始めている。また、平成 24 年度 (2012 年度) に「ポートフォリオ」として利用することが工学部学生委員会で承認された。今年度においても 1 年生にステップアップノートが配布された。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

工学部の点検・評価委員会では、学生授業評価データを利用して、優秀授業の表彰を行っている。優秀授業の選考は、「学生授業評価表彰実施要綱」（平成19年制定、平成25年、平成29年改正）に従って実施しており、その概要は以下の通りである。

まず、学生授業評価の質問項目の中から下記の3項目の合計点を出す。

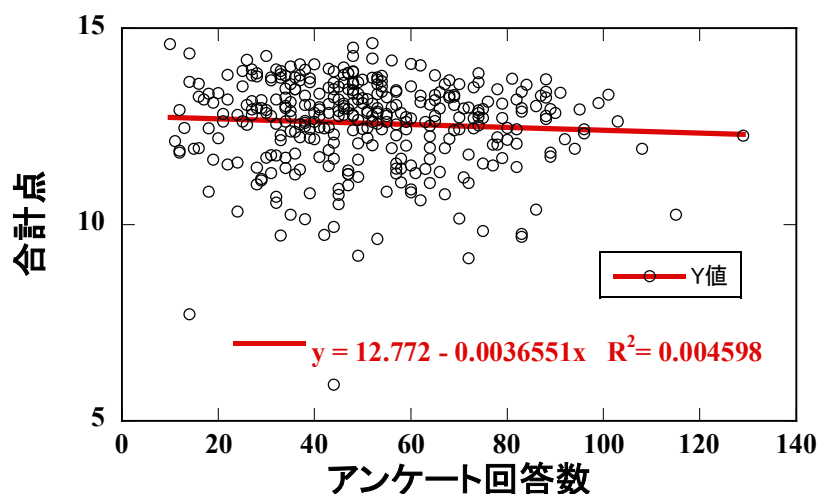
- 項目2：理論や考え方、専門用語などがわかりやすく説明されましたか？
項目9：あなたは授業の内容を理解しましたか？
（実習・演習の場合は、内容理解や技能のレベルは向上しましたか？）
項目10：この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？

次に、授業評価アンケート回答数と合計点の相関を考慮した補正式から補正合計点を算出する。この補正合計点を評点とし、これにより学部では全開講科目数の10%、大学院では20%を「優秀授業」としている。ただし、授業評価アンケート回答数が10未満の授業は正確な評価が期待できないとして「優秀授業」の対象から除いている。

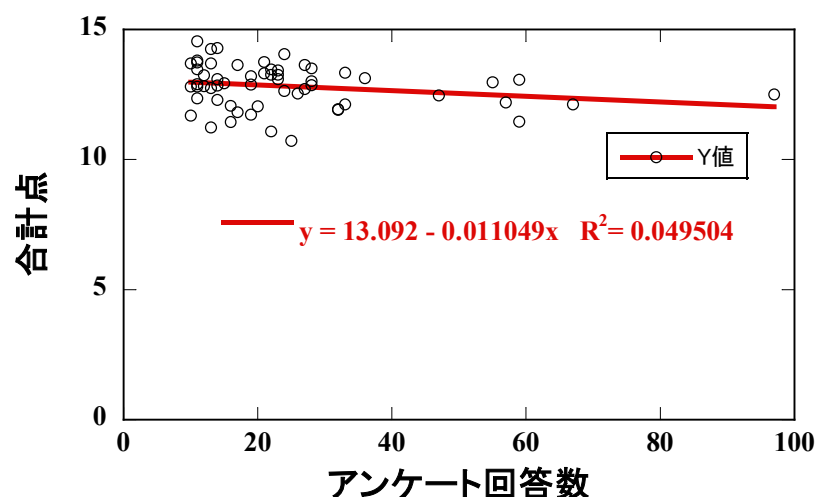
学部の「優秀授業」に関しては、昨年度、「学生授業評価表彰実施要綱」を一部改正し、学科間のバランスを考慮し、「各学科の補正合計点の上位3授業」とそれら以外の「学部全体での補正合計点の上位授業」を「優秀授業」とするよう選考方法を変更した。また、大学院に関しては、これまでと同様、研究科全体での補正合計点の上位20%の授業を「優秀授業」としている。

また、学部では学部全体と各学科の最高点の授業を、大学院では各専攻の最高点の授業を「最優秀授業」として、これらの授業の担当教員を表彰している。

平成29年度（2017年度）開講の工学部と大学院博士前期課程（工学系）の授業について、上記3項目の合計点と授業評価アンケート回答数の相関（授業評価アンケート回答数が10未満を除く）を以下に示す。全開講授業数は、学部は369科目、大学院は81科目である。授業評価アンケート回答数が10未満を除く授業数は、学部は341科目、大学院は58科目である。



合計点と授業アンケート回答数の関係(学部)



合計点と授業アンケート回答数の関係(大学院)

前述の3項目の質問に対する学生の回答は、「そう思う」が5点、「ややそう思う」が4点、「どちらとも言えない」が3点、「あまりそう思わない」が2点、「そう思わない」が1点である。したがって、合計点が12点以上であれば「良い評価」、9点以上12点未満であれば「概ね良い評価」と考えて良い。

学部では12点以上の科目が全開講授業369科目の内282科目、9点以上12点未満の科目が85科目、9点未満の科目が2科目であった。全体平均値は12.7点であった。比率で表すと、「良い評価」が76.4%、「概ね良い評価」が23.0%で、両者を合わせると99.4%であった。なお、前年度(平成28年度[2016年度])は、全体平均値が12.8点、「良い評価」が80.7%、「概ね良い評価」が18.3%であり、平成29年度は「良い評価」が若干減少しているものの、「概ね良い評価」が増加しており、全体平均値もほとんど変わらず、昨年度同様良好な結果である。

大学院では12点以上の科目が全開講授業81科目の内67科目、9点以上12点未満の科目が14科目、9点未満の科目は無かった。全体平均値は12.9点であった。比率で表すと、「良い評価」が82.7%、「概ね良い評価」が17.3%で、両者を合わせると100%であった。なお、前年度(平成28年度[2016年度])は、全体平均値が13.0点、「良い評価」が87.0%、「概ね良い評価」が12.0%であり、平成29年度も昨年度同様、良好な結果である。

しかしながら、このような評価に満足せず、今後も授業改善のための活動を進めていきたい。以下に平成29年度の学部および大学院の優秀授業の一覧を記載する。

平成29年度優秀授業一覧表（学部）

科目名	担当者	学科等	評点	
流体工学Ⅱ	望月 信介	機械工学科	14.209	最優秀授業
ものづくり創成実習Ⅱ	新銀 秀徳、岩谷 健治、上田 政洋、前川 昇司、宮崎 清孝、伊藤 望美	機械工学科	14.114	
ものづくり創成実習Ⅰ	葛山 浩、田之上 健一	機械工学科	14.082	
機械設計論	古賀 毅、後藤 宏（宇部興産機械㈱）、谷口 雅紀（NSプラント設計㈱）	機械工学科	14.068	
数値解析	堀田 一敬	社会建設工学科	14.433	最優秀授業
国際建設技術演習Ⅱ	M.D.AZULMOQSUD、森 啓	社会建設工学科	14.414	
土質力学演習Ⅱ	原 弘行	社会建設工学科	13.935	
テクニカルコミュニケーション基礎	植村 隆	応用化学科	14.249	最優秀授業
無機化学Ⅱ	中山 雅晴	応用化学科	14.208	
常微分方程式及び演習	池田 敏春	応用化学科	14.084	
線形代数及び演習	堀田 一敬	電気電子工学科	14.353	最優秀授業
電気回路Ⅱ	山田 陽一	電気電子工学科	14.257	
半導体工学Ⅰ	山田 陽一	電気電子工学科	14.239	
ものづくり創成実習Ⅱ	間普 真吾	知能情報工学科	13.926	最優秀授業
論理設計	松元 隆博	知能情報工学科	13.823	
ものづくり創成実習Ⅰ	佐村 俊和	知能情報工学科	13.757	
建築設備工学	小金井 真	感性デザイン工学科	14.124	最優秀授業
確率統計	堀田 一敬	感性デザイン工学科	13.984	
空気調和計画法	小金井 真、金 炫兌	感性デザイン工学科	13.733	
環境プロセス論及び演習	佐伯 隆、貝出 絢	循環環境工学科	14.847	最優秀授業
移動現象論	佐伯 隆	循環環境工学科	14.729	
単位操作Ⅰ	中倉 英雄、佐伯	循環環境工学科	14.509	
確率・統計学	佐伯 隆	循環環境工学科	14.442	
環境情報学Ⅱ及び演習	長井 正彦	循環環境工学科	14.399	
環境微生物学	通阪 栄一	循環環境工学科	14.288	
環境高分子化学	比嘉 充	循環環境工学科	14.248	
循環環境工学実験Ⅱ	今井 剛、田中 一宏、通阪 栄一、江口 毅、比嘉 充、安川 政宏、遠藤 宣隆、隅本 倫徳、山本 豪紀、佐伯 隆、貝出 絢、小淵 茂寿、樋口 隆哉、長井 正彦、熊切 泉、新苗 正和、鈴木 祐麻	循環環境工学科	14.222	
環境ビジネス論	今井 剛	循環環境工学科	14.189	
単位操作Ⅱ	中倉 英雄	循環環境工学科	14.139	
環境適合型材料	熊切 泉	循環環境工学科	14.127	
数値解析	柳下 剛広	循環環境工学科	14.125	
廃棄物処理工学	今井 剛	循環環境工学科	14.104	
環境浄化技術Ⅰ	今井 剛、関根 雅彦	循環環境工学科	14.069	
常微分方程式及び演習	栗山 憲	循環環境工学科	14.047	
テクニカルコミュニケーションⅠ	Gimour Graeme John	工学部	14.633	
テクニカルコミュニケーション基礎	植村 隆	工学部	14.47	
特許法	佐田 洋一郎	工学部	14.295	
*講義総数369、その内アンケート数10以上の講義数341				
*講義総数369の10%として、37件を表彰				

平成29年度優秀授業一覧表（大学院）

科目名	担当者	専攻	評点	
材料強度学特論	合田 公一	機械工学系専攻	14.672	最優秀授業
電力変換工学特論Ⅱ	山田 洋明	電気電子情報系専攻	14.456	最優秀授業
社会システム分析特論	榊原 弘之	建設環境系専攻	14.381	最優秀授業
都市代謝工学特論	今井 剛	建設環境系専攻	14.373	
半導体物性特論	只友 一行、山田 陽一	電気電子情報系専攻	14.05	
建築構造設計学特論	秋田 知芳	建設環境系専攻	14.026	
電磁波工学特論Ⅰ	堀田 昌志	電気電子情報系専攻	13.953	
環境保全工学特論	山本 浩一、樋口 隆哉	建設環境系専攻	13.941	
電子システム工学序論	田中 俊彦、山田 洋明、堀田 昌志、西藤 聖二、若佐 裕治、中島 翔太	電気電子情報系専攻	13.86	
表面材料化学特論	酒多 喜久	化学系専攻	13.852	最優秀授業
地圏工学特論	清水 則一、鈴木 素之	建設環境系専攻	13.833	
機械工学系特論	藤井 文武、三上 真人 大木 順司、國次 公司	機械工学系専攻	13.777	
超伝導工学特論	原田 直幸	電気電子情報系専攻	13.761	
土質基礎工学特論Ⅱ	M D . A Z I Z U L M O Q S U D	建設環境系専攻	13.744	
固体物性論特論	嶋村 修二	電気電子情報系専攻	13.739	
電気電子情報系特論	長 篤志、瀧本 浩一、間普 真吾、木戸 尚治、大原 渡、山本 節夫、只友 一行、荻原 千聡、西藤 聖二、若佐 裕治、中島 翔太、久保 洋	電気電子情報系専攻	13.715	
* 講義総数81、その内アンケート回答数が10以上の講義数58				
* 講義総数81の20%として16件を表彰				

第5節 FD実施経費報告書

昨年度実施したFD実施経費を下表に記載する。

平成30年度 各学部・研究科FD実施経費報告票				
部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔に)
工学部	優秀授業の表彰	消耗品, 印刷費	3千円	学部及び大学院の授業改善
	工学部ポートフォリオ(ステップアップノート)の改訂	消耗品, 印刷費	56千円	学部新入生に対する教育改善の準備
計			59千円	

第6節 来年度の課題

(1) 公開授業の参観率の向上

参観率は、昨年度 3%、本年度 9%と昨年度より改善したが極めて低い値である。工学部の点検・評価委員会で各学科委員を通して参観を呼び掛けているが、参観率改善にはつながっていない。引き続き、改善策について点検・評価委員会で検討していくが、制度の目的の再確認とともに制度設計の見直しも検討したい。

(2) 教員授業自己評価の入力率向上に関する組織的な取組み

これまでも、入力率向上のために学科長・専攻長会議などにおいて、学科長などを通して入力を促すことをしている。今後もこのような対応をお願いしていく。

(3) 授業外学習時間の確保, 適正な成績評価

工学部では、JABEE に代表されるように、工学教育における学習時間の確保, 適正な成績評価についての十分な理解とその実践がなされているが、引き続き、各学科に実践をお願いしたい。

(4) 共通教育における試験監督体制

引き続き、問題点を整理した上で適正な試験監督体制を検討したい。

第10章 農学部のFD活動

第1節 授業公開

1. 生物資源環境科学科の授業公開（ピアレビュー）

生物資源環境科学科では、本年度は、教員の授業を公開し、複数教員によるピアレビューを実施し、教員どうしの意見交換が活発に行われた。以下に、本年度に実施した公開授業（2件）を示す。

- (1) 根の物質吸収に基づいた植物工場環境調節
日時：2018年6月5日（火）15:00～ 佐合 悠貴 助教
- (2) 西日本地域の小麦で生じる登熟不良の原因と改善方法
日時：2019年3月14日（金）16:00～ 荒木 英樹 准教授

2. 生物機能科学科の授業公開（ピアレビュー）

生物機能科学科では、「生物機能科学科セミナー」として、教員の授業を公開し、複数教員によるピアレビューを実施してきた。本年度も、公開授業が行われ、教員どうしの意見交換が活発に行われた。以下に、本年度に実施した公開授業（7件）を示す。

- (1) 植物二次代謝の生合成能を紐解き利用する
日時：2018年5月25日（金）17:00～ 肥塚 崇男 助教
- (2) プロピオン酸酸化細菌の代謝および共生機構に関する研究
日時：2018年6月29日（金）17:00～ 高坂 智之 助教
- (3) 病原性細菌のヘム代謝に関する研究
日時：2018年7月27日（金）17:00～ 小崎 紳一 教授
- (4) 酢酸菌に特徴的な細胞表層代謝に関する研究
日時：2018年10月5日（金）17:00～ 薬師 寿治 准教授
- (5) CDU施用による分解菌の集積と土壌病害防除技術開発の可能性
日時：2018年10月31日（水）17:00～ 横山 和平 教授
- (6) 細胞間コミュニケーションと口腔細菌バイオフィーム ～クオラムセンシングをターゲットとしたバイオフィーム制御～
日時：2018年11月29日（木）17:00～ 阿座上 弘行 教授
- (7) ムシのいい話 ～今あえて虫を食べる理由～
日時：2018年12月21日（金）17:00～ 井内 良仁 准教授

第2節 学部・研究科主催FD研修会

1. 平成30年度 アラカルトFD研修会「2018著作権法改正と教育機関対応の方向性」(農学部FD研修会)

日程 平成30年10月24日(水)
[吉田地区] 13:30~14:15
場所 農学部・共同獣医学部大会議室
(吉田キャンパス)
講師 木村 友久
(知的財産センター 教授)
参加者 32名(アンケート17枚回収)

内容

本研修会では、大幅な改正が行われた著作権法35条について解説が行われた。また、今回の法改正に伴い、大学入試の2次試験問題の公開にどのように対応する必要があるかについて説明が行われた。

昨年度の研修内容を復習すると、著作物が生み出されると、その著作物に対して著作権者人格権と著作権財産権が生じる。その著作物の実演、レコードやCD等への固定については著作権隣接権が発生する。また、著作権者が複製権を他者に許諾した場合は、その者(出版社等)には出版権が与えられる。その一方で、著作権には、権利保有者に対する制限(以下、権利制限)も設けられている。その代表例のひとつとして、授業の過程における複製があげられるが、これはかなり強力な権利制限といえる(著作権法35条)。

今回の著作権の改正では、全体的に社会の実情に沿った改正が行われたと考えている。権利制限規定については3つの層が設けられ、従来法よりも著作物の柔軟な運用ができるようになった¹。例えば、サーバでは障害発生時に備えて、データバックアップとしてRAIDを用いるが、RAIDではひとつのHDDの内容を他のHDDに自動的にコピーする仕組みがある²。これは、従来法の原則では違法複製となるため、RAIDに絞った権利制限の条文を規定していた。今回の改正では、RAIDに限らず、人間の感覚として著作物の享受ではない利用を包括的に合法とする条文が設けられた(第1層に対応)。また、セキュリティの確保を目的にソフトウェアを解析する場合、改正前は解析が権利侵害になる可能性があったが、このような場合はおしなべて合法であるという法改正が行われた(第1層に対応)。学生が論文を盗用していないかを調べるソフトウェアについては、学生が執筆した論文との比較が目的であるが、本著作権者の許諾を得ずに論文を収集し、比較結果の提示のために他人の著作物を表示するため権利侵害の懸念を持たれると思う。だが、これについても、本来のサービス提供に付随する軽微な範囲での利用との解釈で合法の範疇にある(第2層に対応)。また、障がい者に関する権利制限では、改正前の本法においても、視覚障がい者の読書については、本の内容を聴覚で享受できるよう

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	5	29.4%
良かった	11	64.7%
どちらとも言えない	1	5.9%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	17	100.0%

¹ 権利制限規定に関する3つの層には、「権利者の利益を通常害さないと評価できる行為類型」(第1層)、「権利者に及び得る不利益が軽微な行為類型」(第2層)、「著作物の市場と衝突する場合があるが、公益的政策実現等のために著作物の利用の促進が期待される行為類型」(第3層)が設けられている。

² RAIDはRedundant Arrays of Inexpensive Disksの略。

に、音声としての録音を認める条文があった。しかしながら、従来法では、肢体不自由のために自ら本を手にとって読めない障がい者は、このような聴覚による著作物の享受は認められなかった。このたびの法改正では、視覚障がい者でなくとも、このような肢体不自由の障がい者についても合法となった（第3層に対応）。

一方、学校教育に関しては、改正後の35条では異時送信を中心として、権利制限の範囲が限定されることになった。

現行法の35条においても、権利制限の対象は授業を担当する者（教員）とそれを受ける者（学生、生徒）であるため、授業の過程では他人の著作物を用いることができる³。また、スライドなどを授業中に上映する場合は、従来の紙ベースの複製の延長と解釈できるので、これについても合法と判断される。また、キャンパス間を通信回線で結び、ひとつの教室で実施される授業をリアルタイムに中継する場合（以下、同時送信）も権利制限の対象に含まれる。

これに対して、反転授業等のために、授業のビデオ映像や配布資料等（許諾を得てない他人の著作物を含む）をデータ化してサーバ上に蓄積し、授業時間外に学生に利用させる場合（以下、異時送信）は、従来法ではグレーゾーンであったが、改正法では権利制限の対象外となる。この条文の発効は、5月22日の公布より3年以内に施行される。教育機関においても、他者の著作物が含まれるコンテンツについて異時送信を行う場合は、権利処理が求められることになる。権利処理については、コンテンツごとに手続きを行うこともできるが、今後設立される権利者団体を通じて包括的な補償金を支払う方が現実的であると考えられる^{4,5}。

文部科学省は大学に対して2次試験の問題を年度内に行うように求めている。入試問題についても、他者の著作物が含まれる場合には、公開に際して権利処理を行う必要がある。文部科学省によると、著作権処理が追い付かない場合には、一部黒塗りで公開することもやむを得ないとの見解を示しているが、それでは本来の問題公表の目的が満たされない恐れがある。従って、問題の著作権処理を想定した上で入試業務の運営を行う方が無難であると考えられる。入試業務の著作権処理についても、十分な検討が必要であるとの解説があった。

講演後には以下の質疑応答があった（Aは研修実施時点（改正法施行前）での回答となっている）。

Q1 補償金の支払いによって利用できる著作物は、海外の著作も含まれるか。例えばオンラインジャーナルの中にあるような著作物も使用できるか。また、Web上のみで公開されている図などのうち、取り扱いに言及されていないものはどのように取り扱うべきか。

A1 海外の著作物も補償金の範疇に含まれる。ただし、但し書きにもあるように、大学の授業だけで需要があるような教科書を無断でコピーして、学内限定であってもネットワーク上で閲覧させることはできない。また、Web上の取り扱いに言及がないコンテンツについては、基本的にそのコンテンツが掲載された正規のWebサイト上で閲覧する場合に限って利用できると解釈しなければならない。

Q2 パワーポイント資料をプリント（紙に印刷）して学生に配るのはだめか。後からプリントを求

³ ただし、副教材であるような場合は、複製は認められない（市販の本を丸ごと複製することはできない）。

⁴ 補償金額は、権利団体との初期の交渉では学生一人当たり1,000円であったが、現実的には300~500円程度になる可能性がある。補償金の支払い方法としては、大学全体としての支払い、または各部署ごとの支払いが考えられるが、本学の規模では前者の方が現実的と思われる。

⁵ サーバを用いた教材の配布を行う際には、第3者の閲覧を防止するために、認証を設ける必要がある。

める学生がいた場合はどうなるのか。

A2 プリントは公衆送信とは異なり、複製である。複製権は、授業の過程であれば権利制限の範疇である。一方、そのプリントの内容を電子化して、配布する行為は異時送信に該当する。

Q3 Web テキストという形で、授業のテキストを Web 上に載せて、受講する学生は認証を経てそれをダウンロードできるようにする場合はどうか。

A3 もし、テキストが大学独自のテキストではない場合、例えば一般の本である場合を考えると、同時ではない状態で教材を配信しているのが、違法である。そのため、原則通りの権利処理が必要である。

Q4 保証金の支払いを学部単位で行う場合に、授業の内容の差によって学部ごとに保証金額が変わるのか。

A4 まだ権利者団体の座組が決まっていなかったのではっきりしたことはわからないが、学部別に保証金を支払うような場合には、学部間で保証金額の調整が必要になるであろう。本学の規模を考えると、学部単位での保証金負担を検討するよりも、大学としての包括的な保証金契約の方が現実的だと考える。

Q5 授業の範囲はどのように考えればよいか。オープンキャンパスの模擬授業は授業と解釈されるのか。

A5 オープンキャンパスの模擬授業については、権利者団体は授業ではないと主張すると考えられる。従って模擬授業では、受講者に配布する資料を限定するなど、講義内容が後に残らないようにする方が良い。またその場では、講義内容をネットワーク上に掲載するなど、その講義外で用いることを禁止することを明示しておくべきである。これによって、受講者が講義内容を無断でアップロードするなどの問題が生じた場合も、あくまでも受講者が行ったこととして、講師の責任回避が可能である。

Q6 授業で利用するために、Moodle に本来は有料のデータをアップロードしてある。そのデータを作成した会社には、授業において無料で利用して良いとの許可を得ている。学生に対しては、授業以外の目的でそのデータを持ち出して利用してはならないことを明示しているが、もし学生がその情報を持ち出し、授業外で無断利用した場合、教員の責任が問われるのか。

A6 学生に授業外利用を禁じることを説明したかがポイントとなるので、授業開始前に学生に対して紙文書で目的外利用をしないように注意を与えることが重要である。また、文書には、必ず日付を入れること。特に機微な情報を扱わせる場合には、学生からデータ利用の制限についての同意書（署名付き）を得ておくことも有効である。

Q7 授業で配布可能なプリントを、後で参照させてレポートを作成させるために、ネット上に置いて利用させるのは違法か。

A7 厳密にいうと違法である。

Q8 本が売れなくなることが問題だという話であったが、その本が絶版である場合はどうすべきか。

A8 絶版になっている場合、訴えを起こす者がいるかどうかによる。ただ、これはフェアユースの観点から反論できるかどうかの問題であるから、それが果たしてコンプライアンスの側面から見て適切かどうかについては別の話である。従って、一概に判断することは出来ない。

Q9 不安がある場合は、プリントして紙ベースで配るのが良いか。

A9 そう考える。保証金を払う場合は、授業での利用に限られるが、プリントであればこのような場合にも対応できる。

Q10 時間の経過とともに、著作物の価格が吊り上げられてゆく傾向がある。このような状況で、学生にとって異時公衆送信をすることに本当に意味があるのかということも考えるべきではないか。

A10 これまでの著作権の権利制限を振り返ると、旧著作権法では大学における複製はすべて認められていなかった。旧法の権利制限は普通教育の国語だけに限定されていた。それが昭和 44 年の改正で、大学を含めて権利制限が大幅に拡大したため、権利者団体が慌てた経緯がある。その後、権利者団体は継続的に権利制限の縮小を訴えてきた。他国の法律では補償金を支払うことを定め、その代わりに著作物利用の許諾を与えている。補償金の支払いを行っている国では、国が補償金としての予算を用意するケースが一般的であるが、今回の法改正では予算の手当なしに大学に補償金を求めているところは、異例かもしれない。著作物の高騰については、補償金について主導権をもっている組織には価格を抑えたいとの意思があるので、それほど極端な高騰を招く可能性は低いと思われる。

研修会後のアンケートには、「状況を知ることができた」、「法的なものはこれからどんどんやるべき」、「問題がよくわかった」、「法律改正にともなう教員の対応方法等」、「大変勉強になりました」との回答があった。また、今後希望する研修会については、「今回のように講義の実施に直接かかわってくるようなもの」、「特にはありませんが、知識が広がるものでしたら良いと思います」、「法を無知であるは済まされない時代だから」、「著作権」、「本日と同等の内容」、「知的財産」との回答があった。

2. 平成 30 年度 教育改善 FD 研修会(農学部)

日程 平成 30 年 12 月 19 日 (水) 15:00~15:40

場所 農学部大会議室 (吉田キャンパス)

講師 林 寛子准教授 (アドミッション・センター)、木下 真 准教授 (大学教育センター)

参加者 24 名(アンケート 20 枚回収)

内容

最初に教学 IR (Institutional Research) の目的と導入の意義、活用事例について大学教育センターの木下准教授から説明があった。教学 IR の定義については、「組織としての情報戦略のための研究」であり、「大学の理解,戦略,運営の改善に繋げる」活動であることが示された。また、導入目的としては、様々なデータを分析し、見える化を図ることにより、課題を発見し、その課題を解決するきっかけとなることで、組織的な教学改善に繋げる効果があることを明らかにした。さらに、具体的な事例としては、島根大学における単位修得が順調でない学生の躓きの原因を、教学 IR の手法を用いて、発見し、教学改善に結びつけた例が紹介された。



図 1 農学部の教育改善研修会の様子

次に、アドミッション・センターの林寛子准教授から、「入試データを用いた検証・改善」について説明があった。分析・検証の結果、大学における学業成績（GPA）においては、センター試験を課さない特別選抜（AO 入試や推薦 I 入試）の学生と一般入試の学生とは成績の差（有意差）は認められず、パフォーマンスは同じであるという結果が明らかにされた。ただし、AO 入試の学生は、TOEIC の平均得点（スコア）が低く、躓きがみられること。その結果、留年・退学の割合が高くなる傾向があることが明らかにされた。また、2013 年 AO 入試合格者の TOEIC のスコアが例年より低いとの人文学部教員からの指摘を受け、この問題を改善するために、アドミッション・センターと人文学部は、平成 28 年度入試から AO 入試において加点評価項目を新たに新設し、英語能力資格保有者の志願者に対して加点していく入試改革が行われたそうだ。この結果、平成 28 年度の人文学部の AO 入試合格者の TOEIC スコアは有意に上昇したそうだ。また、これをきっかけに、他の学部も募集要項に AO 入試の評価基準を公表するようになったそうだ。これ以外に、特別入試の学生は、入学時および卒業時ともに自己評価が高い、在学中の活動率（ゼミ、部活、サークル活動等）が高い、大学院に進学するより就職する者が多いなどの傾向が示された。

説明後の質疑応答では、以下の質問と回答があった。また、以下のような要望事項があった。

- Q1. 農学部としても今後、大学教育センターやアドミッション・センターと共同して教学 IR の取り組みに協力していきたいが、農学部が欲しいデータ結果をなるべくスピーディに提供できるのか？
- A1. 大教センターの教学 IR 部は本年度立ち上がったばかりであるが、体制を整備して学部からの IR ニーズに答えていきたい。
- A2. アドミッション・センターとしては、今後も、入試データと学生たちから集まった各種のアンケート調査結果と紐づけしながら、農学部が要求するデータ解析結果を提供していきたい。

研修会後のアンケートでは、「非常に良かった」＋「良かった」を合せて 45.0%で、「どちらとも言いえない」が 45%となり、満足度は残念ながらあまり芳しくなかった。満足度についてはもう少し調査する必要を感じた。本研修会の感想については以下のようなものがあつた。

- ・大学教育センターが取り組んでいる解析がよく分かった。学部としても活用していきたい。
- ・目的が不明で、大教センターの PR のように感じた。

表 1 アンケート結果

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	0	0.0%
良かった	9	45.0%
どちらとも言いえない	9	45.0%
あまり良くなかった	2	10.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	20	100.0%



図 2 講演中の林寛子准教授

第3節 教育改善に関する活動

昨年度、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーに変更はない。カリキュラムポリシーにより即するために、授業科目の再検討を行なった。また、継続審議事項であった授業科目のナンバリングについても決定した。さらに、データサイエンス系授業の充実を目的として、アグリインフォマティクスAL活用のためのYuCoBCuSを検討した。

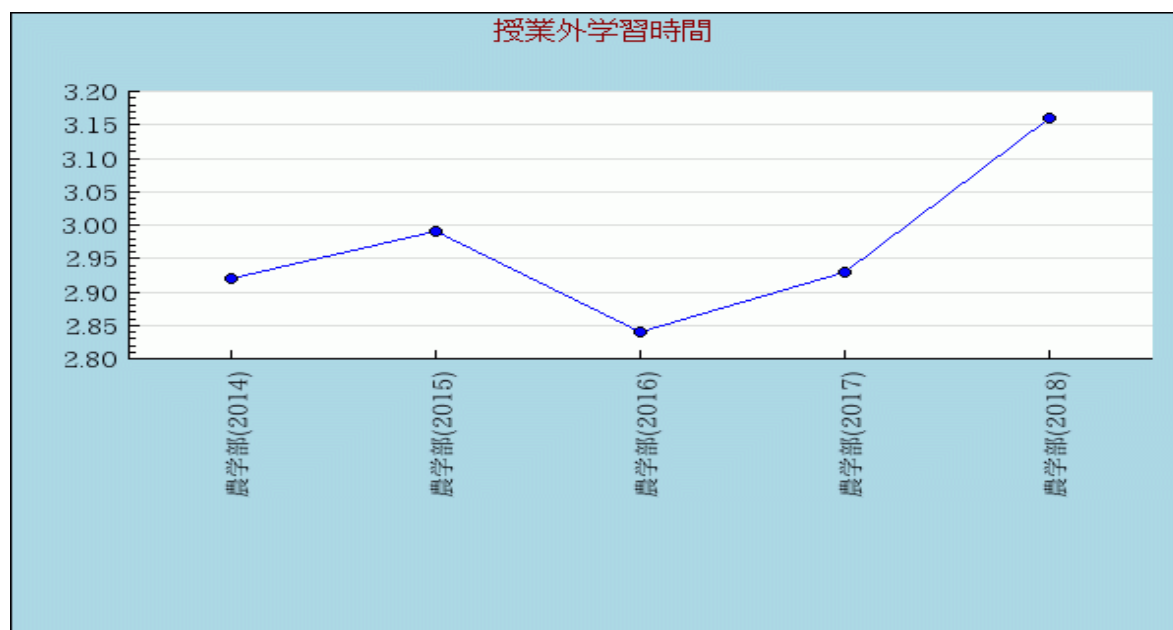
第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

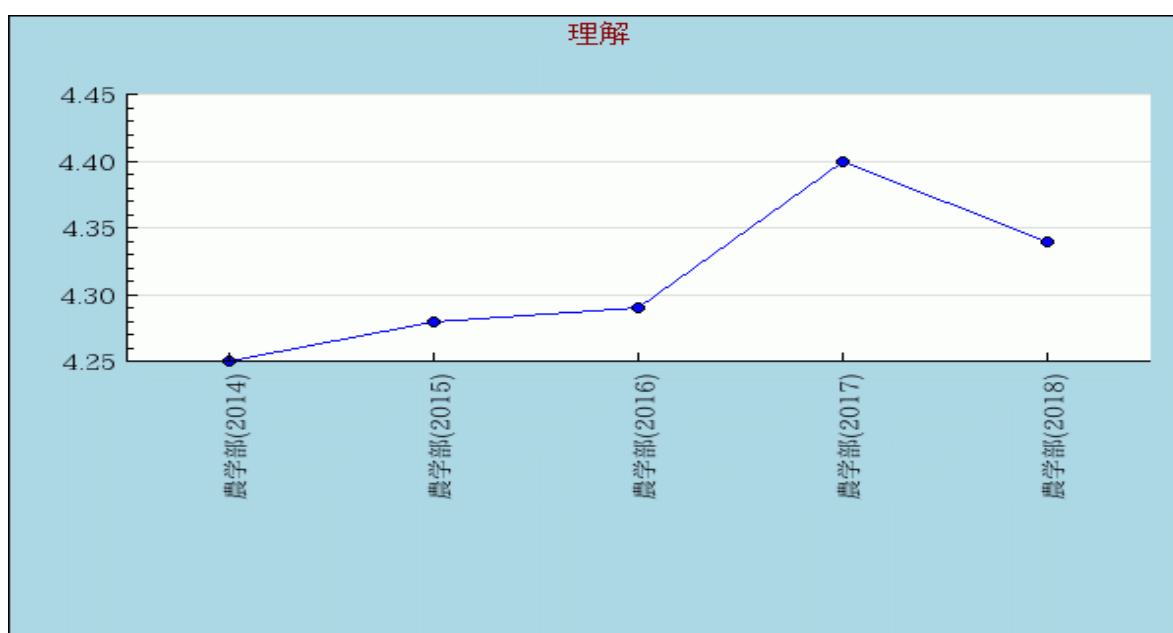
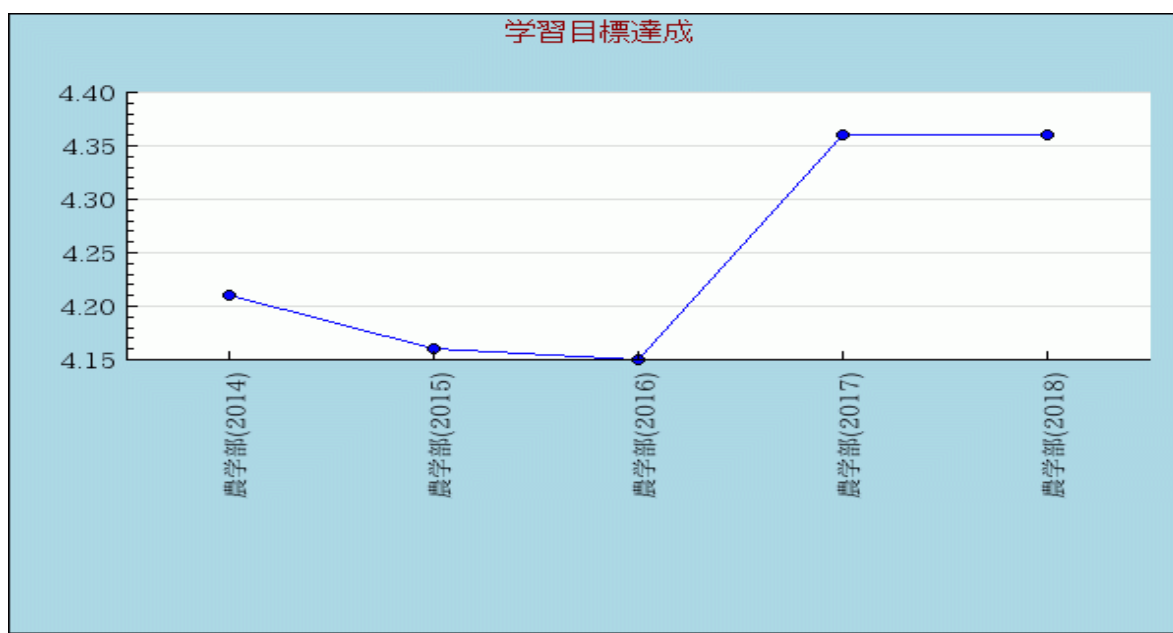
1. 学生授業評価

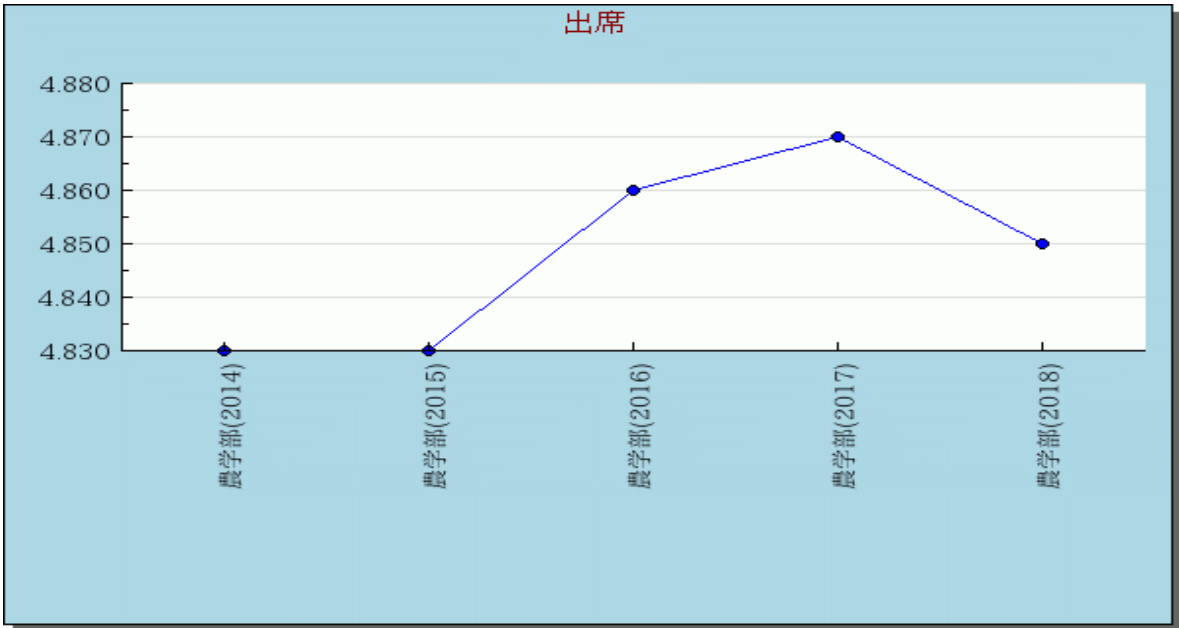
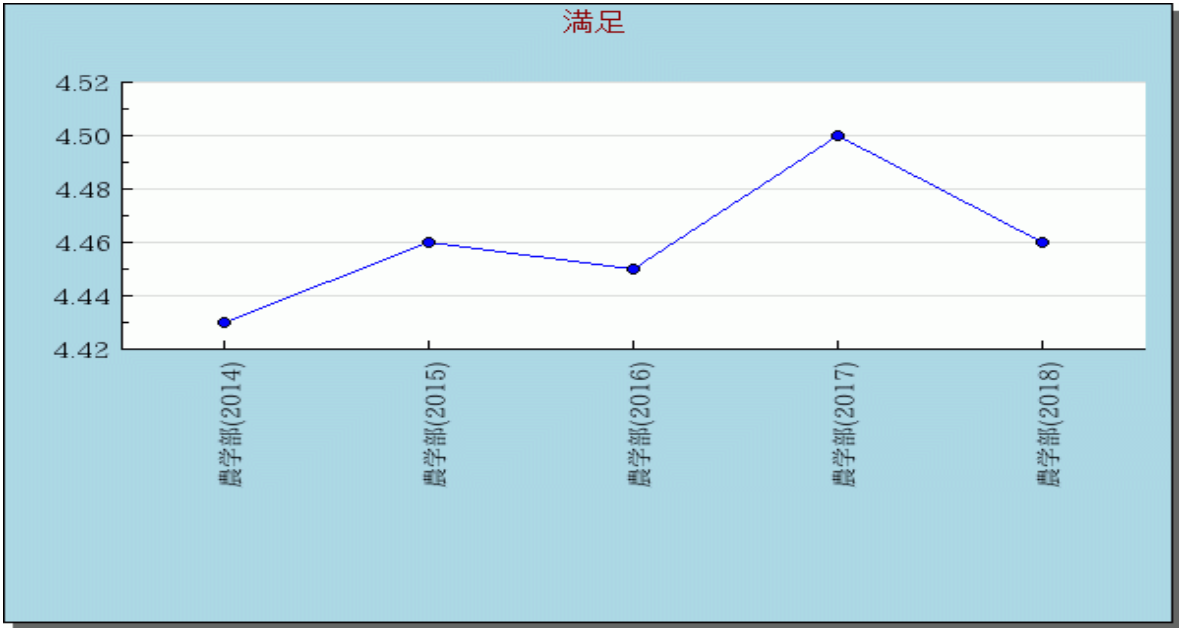
授業外学習時間及び学習目標達成は、前年度を上回っていたが、その他の3項目は昨年より減少していた。

回答数

	講義	講読	演習	実験・実習	語学 (共通教育)	語学 (農学部 専門)	その他	語学 (人文学部 専門)	未指定	合計
農学部(2014)	3458			894						4352
農学部(2015)	3019			609						3628
農学部(2016)	3026			513					21	3560
農学部(2017)									3414	3414
農学部(2018)									1985	1985





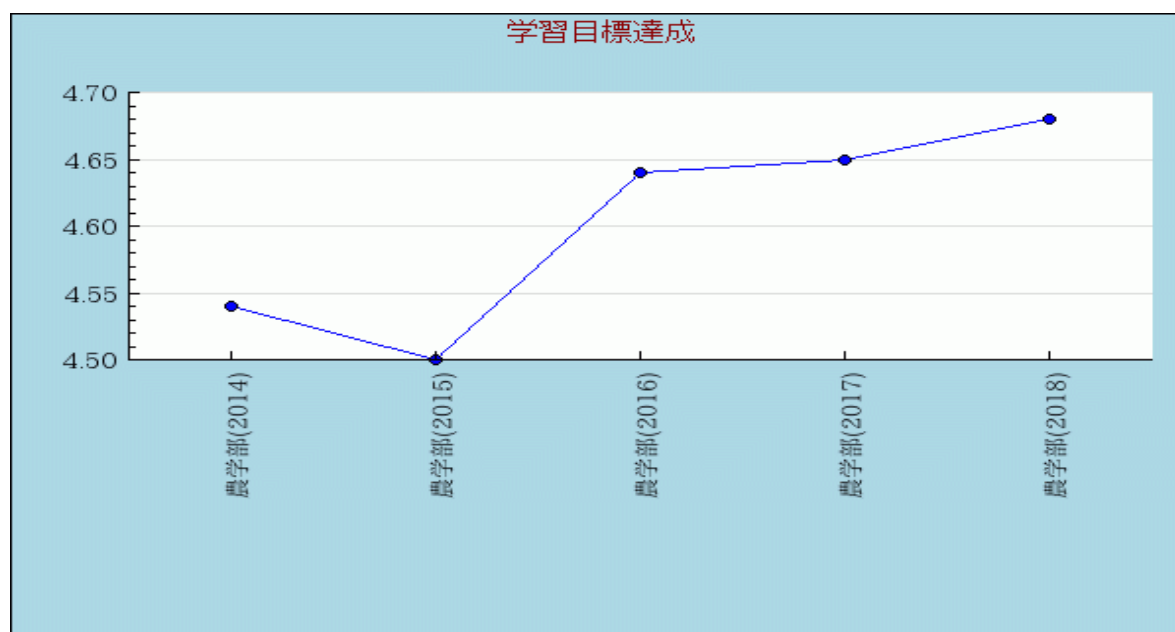


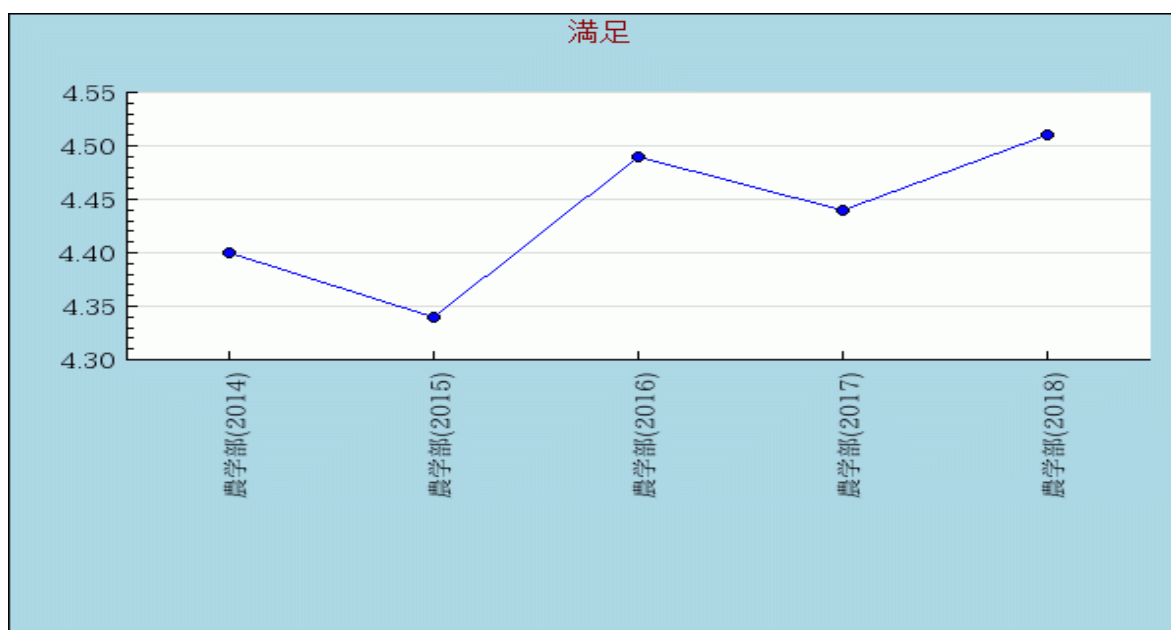
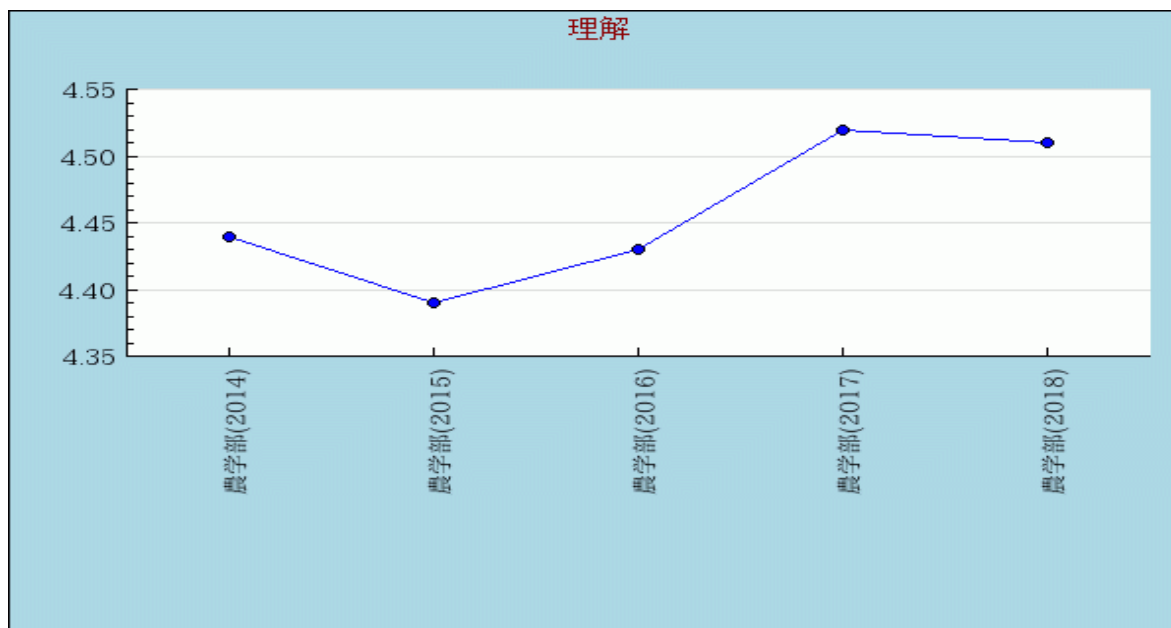
2. 教員授業評価

本年度はいずれの項目も高い評価点数が得られた。昨年に引き続き高評価であった。今後もこの傾向を保持していきたい。

回答数

	講義	講読	演習	実験・ 実習	語学 (共 通教 育)	語学 (農 学部 専 門)	その 他	語学 (人 文学 部専 門)	未指 定	合計
農学部(2014)	79			33						112
農学部(2015)	75			34						109
農学部(2016)	52			16					2	70
農学部(2017)									66	66
農学部(2018)									47	47





第5節 FD実施経費報告書

本年度はFD実施経費の申請はなかった。

第6節 来年度の課題

1. ピアレビュー

生物資源環境科学科におけるピアレビュー数が少なかった。次年度は、これまで一度もピアレビューに関わったことがない教員に対してピアレビューへの参加を勧めるとともに、ピアレビュー実施数を多くしたい。また、他の教員の授業を参観できるようなシステムについても再検討したい。

2. 学生授業評価および教員授業評価

昨年度と比較すると本年度の評価点は、学生授業評価および教員授業評価ともに上昇した項目もあるが、減少したものもあった。ただし、2018年度後期の教員授業評価の入力がまだであるようなので、次年度以降に結果が分かると思われる。

第11章 共同獣医学部のFD活動

第1節 授業公開

(1) 授業公開（獣医学セミナー）

第69回 獣医学セミナー

講師：水野 拓也 先生（山口大学獣医臨床病理学）

演題：「イヌのガンに対する新規抗体医薬の確立」

日時：平成30年4月25日（水）16:00-17:00

場所：農学部共同獣医学部本館2階 大会議室

第70回 獣医学セミナー

講師：奥田 優 先生（山口大学獣医内科学）

演題：「犬リンパ腫の治療のための基礎的研究」

日時：平成30年5月23日（水）16:00-17:00

場所：農学部共同獣医学部本館2階 大会議室

第71回 獣医学セミナー

講師：佐藤 宏 先生（山口大学獣医寄生虫学）

演題：「種同定が抱える課題-Gongylonema 研究を例として」

日時：平成30年6月27日（水）16:00-17:00

場所：農学部共同獣医学部本館2階 大会議室

第72回 獣医学セミナー

講師：和田 直己 先生（山口大学獣医生体システム科学）

演題：「モトクロスライダーの姿勢制御に関する研究」

日時：平成30年10月17日（水）16:00-17:00

場所：農学部共同獣医学部本館2階 大会議室

第73回 獣医学セミナー

講師：度会 雅久 先生（山口大学獣医公衆衛生学）

演題：「細胞内寄生菌とは何か」

日時：平成30年11月21日（水）16:00-17:00

会場：獣医学研究科棟4階 大講義室

第74回 獣医学セミナー

講師：馬場 健司 先生（山口大学獣医内科学）

演題：「犬の胆嚢粘液嚢腫の原因を探る

～あれから20年、この先20年～」

日時：平成30年12月19日（水）16:00-17:00

会場：獣医学研究科棟4階 大講義室

(2) 授業公開（総合臨床セミナー）

第15回総合臨床セミナー

日時：平成31年3月3日（日）12:30~17:00

場所：山口大学吉田キャンパス・獣医学研究科棟4階 大講義室

演題「これからの動物病院経営と健康診断」
講 師：牛草 貴博 先生（動物再生医療センター）

演題「臨床病理学的な検査の考え方～米国獣医臨床病理専門医はこう考える～」
講 師：藤田 直 先生（FUJIFILM モノリス）

演題「細胞を使って治療する～獣医再生医療の現状～」
講 師：福田 威 先生（動物再生医療センター）
水野 拓也 先生（山口大学）
日時：平成30年12月2日（日） 12：30～17：00

第14回総合臨床セミナー

日時：平成30年12月2日（日） 12：30～17：00
場 所：山口大学吉田キャンパス・獣医学研究科棟4階 大講義室
演題「画像診断を使い切る！～診断で立ち止まらないための方法を教えます～」
講 師：戸島 篤史 先生（日本小動物医療センター・画像診断科）

（3）獣医学特別セミナー

第43回獣医学特別セミナー

講 師：永廣 信治 先生（徳島大学病院 病院長、前 脳神経外科 教授）
題 目：「脳動脈瘤の病態と治療に関する研究」
柔道家・大学人としてのメッセージ
日 時：平成30年9月21日（金）16：30～18：00
場 所：獣医学研究科棟4階大講義室

第44回獣医学特別セミナー

講 師：海老原 秀喜 先生（米・メイヨークリニック・Department of Molecular Medicine）
題 目：「エボラウイルスを紐解く：
天然のナノマシンが、なぜ人類の脅威になり得るのか？」
日 時：平成30年10月26日（金）17：00～
場 所：農学部大会議室（農学部本館2階）

第45回獣医学特別セミナー

講 師：川口 寧 先生（東京大学 医科学研究所）
題 目：「単純ヘルペスウイルスの増殖・病態発現機構」
日 時：平成30年11月2日（金）17：00～
場 所：獣医学研究科棟4階大講義室

第2節 学部・研究科主催FD研修会

平成30年度 教育改善FD研修会(共同獣医学部)

日程 平成30年10月10日（水）13：30～14：00
場所 農学部大会議室
（吉田キャンパス）

講師 林 寛子准教授 (アドミッション・センター) 小川 勤 (大学教育センター)
参加者 25名 (アンケート 10 枚回収)

内容

本研修会のテーマは「教学 IR」であった。最初に教学 IR (Institutional Research) の目的と導入の意義、活用事例について大学教育センターの小川教授から説明があった。教学 IR の定義については、「組織としての情報戦略のための研究」であり、「大学の理解, 戦略, 運営の改善に繋げる」活動であることが示された。また、導入目的としては、様々なデータを分析し、見える化を図ることにより、課題を発見し、その課題を解決するきっかけとなることで、組織的な教学改善に繋げる効果があることを明らかにした。教学 IR の具体的な事例としては、島根大学における単位修得が順調でない学生の躓きの原因を、教学 IR の手法を用いて、発見し、教学改善に結びつけた事例が紹介された。

次に、アドミッション・センターの林寛子准教授より、本学の教学 IR の導入事例として「入試データを用いた検証・改善」について説明があった。分析・検証の結果、大学における学業成績 (GPA) においては、センター試験を課さない特別選抜 (AO 入試や推薦 I 入試) の学生と一般入試の学生とは成績の差 (有意差) は認められず、パフォーマンスは同じであるという結果が明らかにされた。ただし、AO 入試の学生は、TOEIC の平均得点 (スコア) が低く、躓きがみられ、その結果、留年・退学の割合が高くなる傾向がある。また、2013 年 AO 入試合格者の TOEIC のスコアが例年より低いとの人文学部教員からの指摘を受け、この問題を改善するために、アドミッション・センターと人文学部は、平成 28 年度入試から AO 入試において加点評価項目を新たに新設し、英語能力資格保有者の志願者に対して加点していく入試改革が行われたそうだ。この結果、平成 28 年度の人文学部の AO 入試合格者の TOEIC スコアは有意に上昇したそうだ。また、これをきっかけに、他の学部も募集要項に AO 入試の評価基準を公表するようになったそうだ。これ以外に、特別入試の学生は、入学時および卒業時ともに自己評価が高い、在学中の活動率 (ゼミ、部活、サークル活動等) が高い、大学院に進学するより就職する者が多い等の傾向が示された。

説明後の質疑応答では、以下の質問と回答があった。また、以下のような要望事項があった。

Q1. 島根大学の教学 IR について分析をしている組織が存在しているのか？

A1. 3、4 年前から教学 IR 室を設置して分析を行っている。

Q2. 入試の予想値については、大手予備校のどのデータなのか？

A2. 河合塾の前年度の予測値を用いている。11 月以降の公表データである。

また、次のような要望事項があった。

1. 推薦入学の学生の成績を前期日程と後期日程と比較したい。また、過去 10 年間の成績の比較をしたい。



表 1 アンケート結果

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	0	0.0%
良かった	6	60.0%
どちらとも言えない	3	30.0%
あまり良くなかった	1	10.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	10	100.0%

今年の倍率は6.4倍であり、大手予備校の予測値が他と比べて低いと倍率が上がる。
 学生の成績が良くなっているのか確認がしたい（具体的には昨年4倍であり、今年の一年生との比較をしたい）

2. 授業の理解能力に係わるので学生の日本語能力について知りたい。

センター試験のどの科目を比較することで日本語能力を評価できるのか（関係があるのか）調べてもらいたい

研修会後のアンケートには、「非常に良かった」＋「良かった」を合せて60.0%であり、参加人数に比べてアンケート回収枚数が少なかったため、満足度についてはもう少し調査する必要があると感じた。本研修会の感想については特になかった。



講演中の林寛子准教授



講演中の小川勤教授

平成30年度 アラカルトFD研修会

「大学生の就職活動・企業の採用活動の最新事情」（共同獣医学部FD研修会）

日時 平成31年3月13日(水) 14:00～14:40
 場所 農学部・共同獣医学部大会議室
 講師 平尾元彦（山口大学学生支援センター教授）
 参加者 30名（アンケート回収14名）

内容

はじめに共同獣医学部FDコーディネーターの西垣教授より山口大学学生支援センター平尾元彦先生の紹介があり講演に入った。

最初に平尾元彦教授の自己紹介があり、その後講演内容に入った。

1. 採用活動時期での変更でいま何が起きているか？

2018年10月、経団連が学生の就活ルールを「採用選考に関する指針」を廃止したことについての説明が



表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	2	14.3%
良かった	8	57.1%
どちらとも言えない	4	28.6%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	14	100.0%

あった。この指針は国大協による申し合わせであり、政府主導で大学生に3年生までは学業をしっかりしてもらい、その後最終学年で就活をして欲しいとの要望からの取り決めであること。1995年頃からのインターネットが普及し学生が全国から就活が自由にできるようになり、会社も学生も職種等を自由に選ぶことができる様になり、結果として大量の学生を会社に集めて選考し、大量に不採用にする約20年間の方法に企業も学生も疲れていること。学校推薦による就活、学内セミナー、小規模イベントの開催、大学や会社がスポンサーになって就活カフェの設置による就職支援が多くなった。またここ数年労働力不足により企業は良い人材を採用したいことから、卒業生のリクルーター、スカウト、エージェントによる採用が多い。また2-3年生を対象にインターシップを活用して会社を良く知った後で採用する方法をとり1-2割を採用している。事実上の採用ツールとして会社も学生も利用し機能している。学生さんには「しっかり考え、じっくり育み、スパッと決める」と進めて欲しいと思っている。

2. 大学生の就職活動と企業の採用活動

我が国では4月に一斉に新卒採用する文化であることから、これに伴い卒業の前年度に就活が一斉に行われることになる。学生の就活起点はエントリーシートの作成からであるが、先ほど述べたように、今後はそれよりも先にインターンシップからになると思われる。就職活動の自由の原則は尊重しなければいけないが、採用したい学生は重複内定をもらっており、内定辞退に会社は困っている。また就職してもすぐに離職する学生も多く、職業への定着が課題となっている。大学としては学業成績を高めたまま、並行して就職活動やインターシップを行って欲しいし、これらの学修成果を可視化する事が課題となっている。

3. 学生支援センター就職支援室の取り組み～キャリア学修の推進機関として

学生支援センターの説明があった。山口大学では、山口大学のキャリア教育の基本方針が制定されていることは他大学にない特徴である。本学はこれに基づいて活動している。この中で「就業する力・進路を選択する力をつけるためのキャリア学習の場を提供する」が掲げてありこれを活用して欲しい。また本学では正課として「キャリア教育科目」があり全学必修として学生は受講している。また「本」から学ぶとして就職支援室には本も多く揃えてあり、新聞の読み方の講座も開講している。また「人」から学ぶにおいては学内業界・企業研究会等もあり、企業の方と実際に会って就職についての理解を深めてから就活に行ってほしいと考えている。また就職情報のメールを配布するサービスを行っている、等の活動の説明があった。

質疑応答

Q: 大学を卒業後にも学生支援室にきてもよいのか?

A: 相談事があるときにはどうぞ来てください。できることは協力します。できないことについては外部の方と連絡を取ります。例えばハローワークとも連絡を取り合うことができます。

以上

第3節 教育改善に関する活動

鹿児島大学共同獣医学部との共同FD研修会を開催した。以下に、その報告書の抜粋を記載する。

平成30年度 山口大学・鹿児島大学共同獣医学部 合同FD研修会 報告書

1. はじめに

本年度(平成30年度)は、第5回目の合同FD研修会として山口大学共同獣医学部主催により、平成30年9月18日(火)に山口大学および鹿児島大学で実施され、山口大学共同獣医学部教員およ

び鹿児島大学共同獣医学部教員の合計 64 名が参加した。研修会当日の 9 月 18 日（火）14 時より、佐藤晃一山口大学学部長挨拶の後、九州大学の大槻恭一教授による基調講演が実施され、その後に 5 分野（基礎、病態予防、病理、伴侶動物臨床、産業動物臨床）に分かれて遠隔システムを用いてワークショップが実施された。宮本篤鹿児島大学共同獣医学部長の閉会の挨拶が行われた後、各会場では情報交換会が実施された。

以下に、本年度実施された合同 FD 研修会の詳細について報告する。

2. 研修会次第

日時：平成 30 年 9 月 18 日（火）14 時～18 時

場所：山口大学共同獣医学部（山口大学主催）、鹿児島大学共同獣医学部

【実施内容】

14:00～14:05 開会の挨拶：山口大学 共同獣医学部 学部長 佐藤晃一教授
山口大学 iCOVER 1 階 101 教室
鹿児島大学 302 講義室

14:05～15:20

基調講演：九州大学 大槻 恭一先生
「大学の教育における安全管理について」

15:35～17:55 教育ワークショップ

1) 基礎（世話役：日下部先生）

〈山口大学第 2 講義室、鹿児島大学 303 講義室〉
テーマ：講義・実習などの改善すべきこと

2) 病態予防（世話役：豊福先生）

〈山口大学第 4 講義室、鹿児島大学 302 講義室〉
テーマ：講義・実習などの改善すべきこと

3) 病態予防—病理（世話役：森本先生）

〈山口大学第 5 講義室、鹿児島大学組織学実習室〉
テーマ：講義・実習・剖検などの改善すべきこと

4) 伴侶動物臨床分野（世話役：谷先生）

〈山口大学 iCOVER 101 実習室、鹿児島大学 301 講義室〉
テーマ：講義・実習などの改善すべきこと
24 時間診療など

5) 産業動物臨床分野（世話役：佐々木先生）

〈山口大学 iCOVER 201 実習室、鹿児島大学軽種馬センター〉
テーマ：講義・実習などの改善すべきこと

17:55～18:00

閉会の挨拶：鹿児島大学 共同獣医学部 学部長 宮本 篤 教授

iCover 山口大学 iCover 1階 101 教室
鹿児島大学 302 講義室

19:00～21:00 情報交換会

山口大学会場:ホテルニュータナカ 2F 平安の間

鹿児島大学会場:DearRose from RheinBach

【教育ワークショップ参加者】

1) 基礎

鹿児島大学会場 (鹿児島大学 303 室) : 8 名参加

山口大学会場 (山口大学第 2 講義室) : 1 名参加

2) 病態予防

鹿児島大学会場 (鹿児島大学 302 室) : 13 名参加

山口大学会場 (山口大学第 4 講義室) : 6 名参加

3) 病理

鹿児島大学会場 (鹿児島大学組織学実習室) : 2 名参加

山口大学会場 (山口大学第 5 講義室) : 4 名参加

4) 伴侶動物臨床

鹿児島大学会場 (鹿児島大学 301 室) : 3 名参加

山口大学会場 (山口大学 101 室) : 14 名参加

5) 産業動物臨床

鹿児島大学会場 (鹿児島大学軽種馬センター) : 1 名参加

山口大学会場 (山口大学 201 室) : 10 名参加

6) その他

鹿児島大学会場 : 2 名参加



各部の内容

1. 基調講演

大槻恭一 九州大学 大学院農学研究院 環境農学部門 森林科学講座 (演習林)

演題 「大学の教育における安全管理について」

九州大学では、平成 28 年に授業の実施期間中に九州大学学生が亡くなる事故が発生したことを受け、教育研究活動における安全の確保、安全教育の充実、事故災害の発生防止、及び安全意識の向上を図るため、安全教育・安全管理の向上に努めている。それらの活動の中心におられる大槻恭一教授により、大学の教育における安全管理についての講演会が実施された。

本基調講演に使用されたスライド資料は巻末に添付する。

2. 教育ワークショップ

以下の分野に分かれて討論がなされた。

1) 基礎

2) 病態予防 (感染症分野)

3) 病態予防 (食品衛生分野)

4) 病理分野

5) 伴侶動物臨床分野

6) 産業動物臨床分野

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

(1) 学生授業評価アンケート

平成30年度の学生授業評価アンケートは実施率が87%となっており、2015年度（平成27年度）から継続して80%を超えて推移している（表2）。

表2 学生授業評価アンケート実施状況の推移

2016年度			2017年度			2018年度		
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
99	82	82%	101	89	88%	102	89	87%

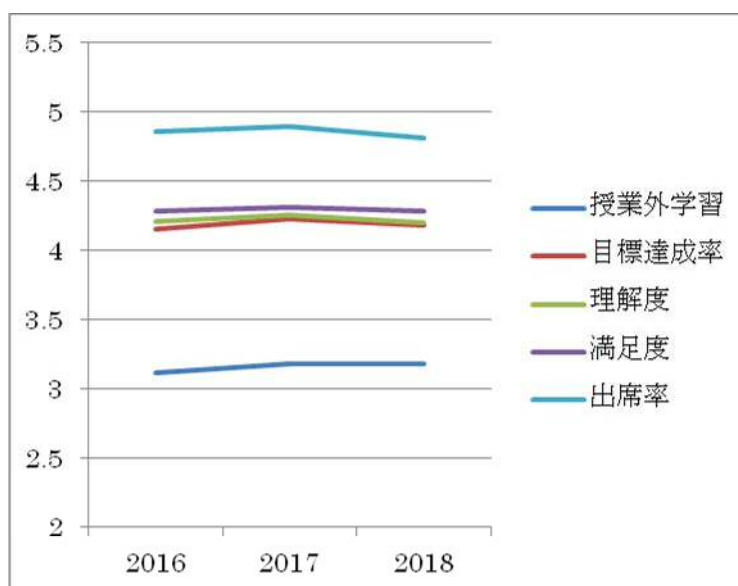
全額共通の質問5項目（授業外学習時間、目標達成、満足度、理解度、出席）については、ほぼ近年と同様の数値となっている（図）。

授業外学習時間については、臨床・スキルスラボを整備し、シミュレーターを用いた基本的なトレーニングや録画講義の閲覧、コアカリに準拠教科書を始めとした図書を備え、学生の自主的な学習の場としての活用が見込まれるため、学習時間の増加が期待される。

表3 平成30年度の学生授業評価アンケート全学共通項目における全体平均

授業外学習時間		目標達成率		理解度		満足度		出席率	
講義	実験・実習	講義	実験・実習	講義	実験・実習	講義	実験・実習	講義	実験・実習
3.24	2.89	4.11	4.39	4.13	4.44	4.21	4.55	4.78	4.9

図 学生授業評価アンケート全学共通項目における全体平均の推移



(2) 教員授業自己評価

平成30年度は、前年と比較して実施数が少なく、実施率も6%であった。これまでは、未入力の教員

に対してFD担当委員が入力依頼を行っていたが、FD担当教員の異動により、十分な申し送りをすることができず督促ができなかったことが原因と考えられる。また、全教員間で教員授業評価を実施することについて、再度、共通した認識を持ち実施することが重要である。

表4 対象科目における教員授業自己評価実施状況の推移

2016年度			2017年度			2018年度		
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
70	68	97%	72	35	49%	73	4	6%

第5節 FD実施経費報告書

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔に)
共同獣医学部 連合獣医学研究科 共同獣医学研究科	鹿児島大学共同獣医学部・共同獣医学研究科との 合同FD研修会	旅費	70	鹿児島大学と共同でFD研修会を開催することで、両大学教員のコミュニケーションを深め、共通又は個別に抱える課題や問題点を把握することができた。
計			70	

第6節 来年度の課題

共同獣医学部は、欧州獣医学教育認証機構(EAEVE)による認証取得に向けた教育改革事業に学部全体で取り組んでいる。世界標準の教育を担保するため、教育改善を行うとともに、教員の教育力向上のため、鹿児島大学共同獣医学部と合同FD研修会を行ってきた。積極的に対面でのFD研修会を行い、物理的に困難な場合には双方向遠隔講義システムの利用によって研修会の開催を企画している。また、EAEVE取得後には、新たな目標を設定して取り組む。

学生授業評価及び教員授業自己評価では、それらの結果を教育改善に繋げていく。教員授業自己評価の入力率向上のため、FD担当教員による未入力者への督促等を行い、入力率の向上に取り組む。

授業外学習時間の確保については、臨床的・スキルスラボを整備したことにより、学生の学習内容・学習環境が改善され、主体的な学習が期待される。

また、適正な成績評価のため、成績評価に関する異議申立制度について、全学生へオリエンテーション開催時に説明を行っている。併せて、授業毎の成績分布状況を全教員が確認し、今後、必要に応じて評価方法の改善等を行うことができるよう取り組んでいく必要がある。

第12章 国際総合科学部のFD活動

第1節 授業公開

今年度は以下の3回のピア・レビューを実施した。参加者の間では活発な議論が交わされたが、通常の授業時間割内の実施であるため参加者が少ないという問題がある。授業研究日は多くの教員が参加できるよう、授業日時の設定に工夫が必要である。またピア・レビューそれ自体への教員の関心も高いとはいえない。ピア・レビューの必要性和有効性を教員が認識するにはどうしたらいいかを検討する必要がある。

第1回 ピア・レビュー

第1部 公開授業

日時： 平成30年6月1日（金）10時20分～11時50分
場所： 共通4番
内容： ピアレビュー（対象授業：「科学技術史」）
担当： 川崎先生

第2部 授業研究

日時： 平成30年6月1日（金）16時10分～17時40分
場所： 大会議室
内容： 授業研究会
参加者： 7名

第2回 ピア・レビュー

第1部 公開授業

日時： 平成30年6月28日（木）10時20分～11時50分
場所： 共通教育棟 演習室2B
内容： ピアレビュー（対象授業：「日本語VA アカデミックライティング」）
担当： 永井先生

第2部 授業研究

日時： 平成30年6月28日（木）16時10分～17時40分
場所： 大会議室
内容： 授業研究会

第3回 ピア・レビュー

第1部 公開授業

日時： 平成30年12月7日（金）12時50分～14時20分
場所： 国総402
内容： ピアレビュー（対象授業：「国際メディア論」）
担当： レール先生

第2部 授業研究

日時：平成30年12月7日（金）16時20分～17時40分

場所：大会議室

内容：授業研究会

第2節 学部・研究科主催FD研修会

本学部主催のFD研修会は、学部内各委員会・部会が必要に応じて企画・実施するFDと、FD委員会が独自に企画するFDから構成される。本年度の委員会・部会企画は、PBL推進部会と就職支援部会の二つのみであった。今年度が完成年度であることもあり、来年度は振り返りや改革案に関わるFDが多く開催されることが予想される。

第1回 国際総合科学部FD研修会

- ・ テーマ：プロジェクト型課題解決研究（PBL）を振り返る
- ・ 企画・話題提供：教務委員会 PBL推進部会
- ・ 日時 平成30年12月12日 13:30～15:00
- ・ 場所 国際総合科学部棟402教室
- ・ 参加者 22名
- ・ 概要

崎山PBL推進部会長から趣旨説明があった後に、現行のPBLについて討論が行われた。

- ・ 討論
- ・ 卒業研究の方へ持っていくことへの疑問。そのような道がどのようにして可能なのか？教育学部では教室ごとに分かれたうえで、それなりの専門教育を実施している。教育学部は入試段階でも卒業研究が可能なかたちで設計されている。では、国総ではそれはいかにして可能なのか？
- ・ この学部は専門性を持たせる教育はやっていない。社会における課題というのは、社会人では解決できない課題であるが、専門性を持たない学生がそれを解決できるのか？実際、現在のPBLでは、かなり教員が介入している。それはPBLの趣旨としてどうなのか？
- ・ それはマッチングの問題では。必ずしも専門性がないと創造性のあることができないというわけではない。たとえば、プログラミング技術を知らなくても、現状のサービスや環境においてはプロトタイプが作れる、というように。後半の話についてはそのとおりだが、それはマッチングの問題では。
- ・ そこでいう専門性とは、既存のディシプリンのことか。
- ・ それもあるし、ソフトウェアを使うスキルも含む。先方から「学生はなにができるのか」を聞かれるが、明確に答えられること答えられないこともある。糸長先生のおっしゃったことは個別論であり一般論にはならない。実際に現行のPBLでクリエイティビティはどれほどあらわれているか。現状はそうではない。
- ・ スクラッチでもプログラミングなんてできるよという話だが、そもそも論理的な考え方が不十分であり、プログラミングができなくてもよい、という話にはならない。今の学生を見ると、まだまだである。専門性が必要だという議論が出てくるのは、そういう点なのでは。
- ・ ご指摘はそのとおり。論理的に考える訓練は必要。
- ・ 結局、PBLもDPも、課題解決ができる人を育てることが重要であるとされている。4年間でこれまでがあつてきたことをやらねばならない。それは難しいので、今のままでよいのでは？
- ・ 設置審を読む限り、専門性を排除しているわけではない。では、担任の専門性のフレームに乗せるかどうか。

・自分は専門性に近いところでプロジェクトを進められていて、学生もよくやっていて、山口市からもよい評価をもらっている。もっとも、これはマッチングの問題であり、これ以外のプロジェクトに配属されて同じことができるとは限らない。なので、自分の専門性と近いところでできれば大変よいのでは。

・自分の専門に近い方が良いとは思いますが、いろんな企業の問題に対応できる教員と、そうではない教員がいる。それと同時に、統計に関しては特定の教員に聞くといった「～班」といった仕組みができればよいのでは。主担当副担当ではなく。

・先に、特定教員の負担増問題があるので「なし」ということになった経緯がある。

・本当はもっとスタッフがいればよいのだが。

・研究に寄せるのが難しいというのはそのとおり。通常の卒業研究ならできるが、PBLでは難しい。教員によってそれ難しいという人をどのように考えるか。

・PBLの問題はカリキュラムと結びついているので、カリキュラムの話もしなければならぬ。いまPBLで学生ができることについて考えると、デザインは1年生のときにしか学ぶ機会がない(3,4年次の選択科目は除く)。また、学生はデザインに本当に興味がない。1年の留学はカリキュラム上ブラックホールになっている。1,2年次にやったことを忘れ、あとはどうすれば卒業できるかという思考になってしまう。根本的にカリキュラムの問題を考えなければ、PBLだけの話をしてもよいとは思えない。私の意見としてはPBLはいったんゼロにしたほうがよい。

・基本的にクリス先生と同じ意見。ポジティブな面を言うと、PBLの設定のレベルは問題。これはなくなならない問題である。どうやってそれをフィージブルにするかが問題。現在担当しているPBLも専門性ではない。留学のブラックホールは強く感じている。1年次に統計の基礎もデザインの基礎もやっているはず。しかし、学んだことを活かす2年次には留学してしまい、そこで学んだことを忘れてしまう。留学時にそれを活かすようなPBL課題を与えるべきでは。そして3年次にPBL準備の講義が必要では。そのあたりはカリキュラムの改訂で対応できるのでは。

・PBLの話をする場合、カリキュラムの話になるのは織り込み済み。この点は議論すべき。

・在学は現状と同じ教育を続けざるをえない。かなり抜本的に変えていかないと、いま抱えている問題は解消できない。1年次の文理融合、教養的なことを学び、2年次にコース分ける。一人5~6名のコースに分けて、その学生が4年になったら、そのコースの担当教員とPBLを実施するといったアイデアがある(マッチングの問題はさしあたりクリアしたものと仮定する)。留学から帰ってきたあとの科目履修は、コースの指示するものに準拠する。留学中にやることも、コースの担当教員が指示することをするようにすればよい。コア科目3つのうち、2つは必須にするといったかたちも考えられる。本学の意向もあり1年の留学は外せない。

・留学をB1の秋から行くことは可能か?中国とイギリスの大学の協定にはそのような事例がある。

・それは別途考えればよい。

・プロジェクトベースにするか、教室ベースにするか。経済学では2年のときから同じ学生を指導している。そこで信頼関係が生まれる。現在のPBLでは、それまでの担任から外れて、4年次に突然配属されるので、ケアの仕方が難しい。学生がプロジェクトを選ぶというよりは、教員、またはその専門性を選ぶというやり方がある。

・担当教員が自分の専門にマッチングする相手を選べればよい。どこが相手でもそれなりにやってくれるよという教員はそれでもよいだろう。

・デザイン科学をこの学部はやるのか?という問い。そのあたりはご理解いただいているのか。

・現在は「デザインプロセスを踏まえる」くらいしか書いていないし、そのような前提で他の教員もPBLを指導しているのではないか。

・それだったらふつうの卒研と同じでは。

・そもそもそのデザイン科学というのが明確に定義されていない。この学部で言っている「デザイン」というのはかなり広い意味で使っている。研究を研究のためにするというのはデザインではない。こ

の点が他の学部の卒研との違い。

- ・今の学生はそういうことを意識してやるという感じではないのでは。
- ・学生から「プロトタイプを作る」といった言葉は出てくるので、そういうことは意識しているのでは。
- ・いまは中途半端な状態であるように見える。やるならしっかりやるべきだし、やらないなら規模を縮小させるなどを考えたほうがよい。
- ・この学部が育てたい人材は「課題解決ができる人材」となっている。となると、プロセスが重要。
- ・プロセスを踏まえる経験をしているかどうかが問題であり、うちの学生はできているのでは？
- ・そういうプロセスのなかに学生を放り込んで、課題解決においてはプロセスが重要であるということを理解させるというのが重要。設置審はそのように書いてあるので、それが我々の目指すところである。だから、それについては皆が理解できる環境を準備する必要がある。
- ・そういうつもりでFDもやってきたし、3年次Q3でPBL準備をやっているつもり。なにがどのようになり足りないのかわからない。
- ・デザインでやっていくことが、教員間でコンセンサスがとれていて、また理解したうえで取り組んでいるのか、という問題。
- ・どうしてこのアンケートをやっている？母集団は何人？先行する取り組みは何か？そういうことを聞いても、学生からは芳しい返答が返ってこない。そもそもレベルが低いという問題。
- ・そういう話ならば、簡単な話で、社会調査をしっかり学ばせるなどすればよい。シラバスに書かれていることがしっかり身につけていればまったく問題が、実際はそうではない。
- ・カリキュラムについては抜本的に、一年かけて議論しなくてはいけない。だから、PBL単体で議論してもよくない。PBLはカリキュラムに埋め込まれているものだから。学部長が言ったように、指導体制も含めて考えねばならない。
- ・なにも実経験なしに、文科省とのやりとりのなかで、方便とまでは言わないが、いろいろ認めてもらうために書いた。留学がブラックホールになっているという議論が出てきたように、問題は出てきた。現状の拘束条件のもとにいま議論する必要がある。
- ・同じことを経済学部の観光政策コースを作ったときに経験した。最初はダメだった。4年過ぎたときに、一気に変えた。この学部も問題点や強みがよくわかったので、今変えるべきだと思うし、チャンスだと思う。
- ・別の議論として、デザインというものをカリキュラムのなかにどう位置付けるのか。文科省からデザインやれと言われていたのでカリキュラムの中心に据えた（文科省から言われた言葉は設計科学）。これについてはもう一度議論すべきだと思う。
- ・学部の資料ではデザイン思考という言葉が使われている。何をやったらいいのかわからない。
- ・デザイン～のとらえ方は現状いろいろ。だからわからない、ではなく、デザインに対する関心とか、それぞれの授業に対する関心を高めるなど考えればよいのでは。
- ・学部予算で教員に教科書的な本を買って配ればよいのでは。
- ・デザインという言葉を使わないので、「これをやる」という風にすればよいのでは。
- ・自分もやめたほうがよい。別のコンセプトを使ったほうがよい。講義でいえば1, 2, 3, 4 デザインの講義があれば使ってもよいかもしれない。
- ・学生に対してはなんらかのコンセプトが必要。デザインでいくのであればもっと強化しないといけない。
- ・最終的なプロジェクト型課題解決研究なわけで、デザインといった概念を使うかどうかは別として、社会的課題を解決するところはいいだろう。それに対してデザインという言葉を使っているという側面はある。
- ・デザインという言葉を使って、その中身をしっかりとすればよいのでは？学生だけでなく、教職員も。
- ・最初に崎山先生が言われたPBLの質、レベルの問題はどう考えればよいのか？

・質をどうするかはカリキュラムをしっかりとせねばならないというこれまでの議論とつながっているのでは？

・カリキュラムをしっかりとしたところで完成度は上がらないように思う。学生の意識の問題。自分のところの PBL の学生だと、自己満足で止まっている。このレベルで止まってしまうところ、外から見て到達してほしいレベルにどうやってもっていくか。自分の研究であれば、最先端のレベルまでもっていくかせるようにする、という設計になっている（オリジナリティはどうであれ）。

・そこが卒業研究と PBL の大きな違い。教員が徹底的に手を入れれば卒業研究のレベルは高くなるが、PBL ではどうか。

・企業の側が設定したレベルとの差を埋めるのは教員しかないないので、自分の専門性でしか埋められないので、専門性とのマッチングが必要。また、企業にもそのあたりを十分に理解したうえでレベルの設定をしてもらえるようにすべき。中小にとっての 20 万円は大きいので、見返りを大きく求めるのはしょうがないところが、それを PBL で常態にしてよいか。また、PBL にマッチした専門性をもっていない教員はどうすべきか。一案として、学部提供 1/4、オリジナル 1/4、教員個別提供 1/4、卒業研究 1/4 といったかたちで教員を割り振るなどがある。

・たしかにデザインという言葉は使わなくてもよい。調査→分析→提案→評価のプロセスは押さえるとして、それが研究とどう違うのかわからない。それが押さえられていけばよいのでは。前職の企業では、研究なくして開発はない。研究とプロジェクトを分けること自体が理解できない。

・ジレンマがある。JTB と一緒にやっていて、その下請けになってしまっている感がぬぐえない。そういうかたちでいいのかというジレンマ。

・問題意識としてもっているのは留学期間。自分の PBL の学生であれば留学中もいろいろ言えるので早めに配属が決まるとよい。

・カリキュラムの改革は必要。そのような動きはすでにあるのか。

第2回 国際総合科学部FD研修会

- ・ テーマ：就職支援について
- ・ 企画・話題提供：学生・国際交流委員会 就職支援部会
- ・ 日 時 平成 30 年 12 月 19 日 15:10~16:00
- ・ 場 所 国際総合科学部大会議室
- ・ 参加者 23 名
- ・ 概 要

崎山就職支援部会長より、今年度の就職実績、傾向分析等を振り返る説明があった。

質疑応答では、学生の就資金の状況、企業が実施するインターンシップと就活の相関の有無等について質問があった。本学部は今年度最初の卒業生を世に出すわけであるが、とにかくデータを蓄積していく必要があるということが確認された。

第3回 国際総合科学部FD研修会

- ・ テーマ：多国籍クラスの授業をどのように設計・運営するか
- ・ 企 画：FD委員会
- ・ 話題提供：
 広島大学総合科学部国際共創学科 学科長 フンク カロリン 教授
 広島大学総合科学部国際共創学科 国際小委員会 柴田 美紀 教授
- ・ 日 時 平成 31 年 2 月 28 日 15:30~17:00
- ・ 場 所 国際総合科学部棟 402 教室

- ・ 参加者 18 名
- ・ 概要

広島大学大学院総合科学研究科研究課長補佐フク教授より、広島大学総合科学部国際共創学科のカリキュラムや教育実践事例の紹介を踏まえ、多国籍クラスの授業の設計・運営方法についてお話しいただいた。

また、同大学総合科学部柴田教授より、グローバル化する大学教育における英語教育の実践事例を踏まえ、英語による授業運営にあたっての課題や工夫についてお話しいただいた。

その後、内容に関する質疑を行い、具体的な実践事例の中にも、国際総合科学部が持つ課題と共通する部分も窺えた。今後も情報交換等実施を希望する意見が双方から出された。

- ・ 主な質疑

(前半)

Q：チューターとは？

A：主に指導する教員。3年生まで修学上のアドバイスや指導を行う。

Q：多言語・多文化の環境である一方、英語で完結する学科ということだが矛盾はないか？

A：留学は英語圏以外に行って欲しいと思っている。

トリリンガルを目指して欲しい。第二外国語を積極的に。

Q：留学の際の「日本人以外」の定義は？

A：(参考までに)日本人は「留学しないとイケない」が留学生は「留学してもいい」。「日本人」の定義は難しいとは思っている。

(後半)

Q：「英語＝授業のツール」ではないということ？

A：心理的な影響もあるので道具という見方だけでは不十分。英語だけの問題ではない。

Q：英語だけで授業をやることに関する課題は？

A：留学生が日本語で話すので、日本人学生から不満が出ている。

留学生は押しが強い。留学生は日本語を話したい。日本人が押し切られ、英語を話す機会を逃してしまう。

アジア圏の留学生が大半で日本人が少ない授業。日本人が当然知っているレベル留学生はわからない

Q：授業内容のレベル設定は？

A：基本的にある程度、同じ授業の中でわかる。合気道の指導を参考にしている。合気道では、有段者と初心者が混ざって練習をする。1/3がわかる内容と2/3がわかる内容に分けている。

理解度は質問を行って確かめる。

難しい質問はクラス全体に対して行うといつも同じ学生にしかチャンスがない。簡単な質問は直接当てて回答させる。

簡単な内容から難しい内容にシフトして、理解度が低いと簡単な内容を重点に扱う。

サイエンスについては、国によって基本的な理解度が異なるので難しい。

Q：授業のなかで使用言語をきっちり分けて欲しいというニーズがあったとのこと。どう使い分けているか？

A：どっちがいいのか難しいが、ある程度分けたほうがいい。

ちゃんぽんでいいとは言わないが、混ざっていてもそれは自然。問題は間違った時に「失敗した」という感覚を得てしまうことがまずい。

言葉以前にコミュニケーションなので、伝われば混じってもいい。授業はで行うが英語。コミュニケーション手段としては混ざってもいい。授業では目的に応じて分けている。

Q：英語のプレゼンテーションの必修授業を行っている。履修者は100名でグループワーク。グルー

プのメンバーが日本人学生のみだと日本語で会話する。留学生がいる場合、多少英語を使うか、留学生が日本語をわかっていないと認識しながらも日本語を使う。というような課題がある。

A：原因として、日本人同士で英語を話すことの違和感

工夫としては、留学生を必ずグループに1人入れる

ジェンダーとナショナルリティを混ぜるグループを作らせる。

Q：比較文学、教育言語政策、文学に重要、広島大学 INU に入っている。コンソーシアムに入っていることの利点と難点は？

A：INU サマーコースを設けている、IGS の学生も参加している。イタリアに留学できた。

留学に行けない学生は INU を受けるように指導している。

Q：社会的な授業、基本は地理と歴史、入学する学生の基本的な知識があまりにもバラバラ。高校で、理科と社会が選択になっている。内容を知らない学生が多い。30～40 人くらいなら分けられる。100 人の授業はどうやって授業やっているか？多様性は重要だが、知識レベルのギャップにどう対応するか？

A：1 年生は基礎、2 年生になると同じ問題が出てくる。積み重ねのカリキュラムになっているので悩ましい。知識習得レベルがわからない。

Q：必須授業は内容は広いが深められていない。学生は積み上げようという意識で履修していない

Q：チューターの役割が大きい、チューターの関与の仕方は？

A：主に履修内容のチェックなど

Q：「コアを身につけさせる必要」、コアとは？

A：専門外の先生がチューターになった場合は、専門の先生に聞くように促す。

教育改善 FD 研修会 （大学教育センターとの共催 F D 研修会）

- ・ テーマ：教学 IR
- ・ 話題提供：林 寛子（アドミッションセンター 准教授）、林 透（大学教育センター 准教授）
- ・ 日 時 平成 31 年 01 月 16 日(水) 15:00～15:40
- ・ 場 所 国際総合科学部大会議室
- ・ 参加者 21 名（学生 10 名程度も聴講）
- ・ 概 要

最初に星野 F D コーディネーターより趣旨説明があった後に、大教センターの林准教授から「教学 IR について」と題した教学 IR についての概要説明があった。つづいてアドミッションセンターの林准教授から「入学者のデータを用いた検証・改善例」と題した本学アドミッションセンターにおける事例紹介があった。その後質疑応答が行われた。

質疑応答では、主に統計についてのテクニカルな問題、統計・その解釈・実践をどのように結びつけるか、質的調査との併用の必要、入試との相関などについて議論された。

第 3 節 教育改善に関する活動

教務委員会の実施したピア・レビュー、PBL や多国籍クラスについての F D 研修会以外、特に学部をあげての教育改善に関する活動は行われなかった。

第 4 節 学生授業評価・教員授業自己評価

学生授業評価・教員授業自己評価について、今年度は学部としての組織的な分析は行っていない。

第5節 FD実施経費報告書

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果 (簡潔に)
国際総合科学部	学部FD「多国籍クラスの授業をどのように設計・運営するか」	講師謝金・旅費 2名	66	同様の課題を抱える広島大学総合科学部の講師2名と有意義な情報交換ができた
		計	66	

第6節 来年度の課題

完成年度を終えた来年度は、現行カリキュラムや各授業の振り返りと修正・改善の年になる。4年間動かしてみて、交換留学、デザイン科学・思考の位置づけ、PBLの在り方など、カリキュラムや教育プログラム全般にわたって多くの問題が見いだされており、カリキュラム全体の抜本的な改革に着手しなければならない。そのためには、振り返りや新たな提案の吟味のためのFD研修会やディスカッションの機会を多く設けなければならない。

第13章 人文科学研究科のFD活動

第1節 授業公開

人文科学研究科としての授業公開は実施していない。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

本年度は、研究科主催のFD研究会は行わなかった。

第3節 教育改善に関する活動

人文科学研究科としての教育改善活動は特に実施していないが、後述するように大学院生アンケートを実施している。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

(1) 学生アンケート

受講学生数が少ないことから、IYOKAN2 を利用した学生授業評価は実施しておらず、人文科学研究科独自の様式による学生授業アンケートを実施してきた。平成30年度もこれを踏襲した。アンケート実施時期については、大学院生の多くが出席する「修士論文報告会」に行うこととし、平成31年2月18日の同報告会において配布・回収した。アンケート提出者は3名で、回収率は30%であった。

アンケートの質問項目と主な回答は以下の通りである。

(1) 人文科学研究科の授業（講義・演習）について、良いところ、このまま継続してほしい点があれば、お教えてください。

- ・ほとんど個別指導のような形で教えていただけるのでありがたいです・
- ・演習が少人数なところ。

(2) 人文科学研究科の授業（講義・演習）について、今後できれば改善してほしい点があれば、お教えてください。

- ・授業の大幅な延長がたまにあり、ありがたいことではあるが予定が狂うので考えていただきたい。
- ・人文科学総論はオムニバスではなく、もうちょっと深い話がききたかった。
- ・専門外の授業を多くとる必要があり、負担が大きい。

(3) 研究環境（例えば、大学院生用研究室など）についてご要望があれば、お教えてください。

- ・特定の人が院生室にずっとおり（それ自体は構わないのだが）、少しいきづらい雰囲気になっているように思う。
- ・去年も書いたかもしれませんが、パソコンを新しいものにしてほしい。

(4) その他、ご意見ご要望ご感想があれば、お教えてください。

- ・来年の修論や就職を考えると不安ですが、がんばります。

(2) 教員授業評価

人文科学研究科の在籍院生数は少なく、授業数も限られている。平成 30 年度の実施率は 20%であった。

第 5 節 F D 実施経費報告書

人文科学研究科で実施した F D 活動にともなう経費執行はない。

第 6 節 来年度の課題

人文科学研究科は規模が小さいため、研究科独自の F D 活動は展望しにくい。少人数であるがゆえに、よりきめ細やかな大学院生アンケートを継続させて、院生の要望をよく聴取し、院生の研究や研究環境の充実・改善にむけた提言を行っていくべきである。

第14章 教育学研究科のFD活動

第1節 授業公開

平成28年度から発足した専門職学位課程（教職大学院）教職実践高度化専攻では、原則、すべての授業を公開しており参観を認めている。教職大学院担当教員であれば、その授業担当者に断って普段から多数参観をしている。また教職大学院担当教員以外の参観希望者には、3週間程度前に授業担当者に参観希望を伝え、許可を得たうえで参観してもらうようにしている。

従来の授業公開は、特定の期間、特定の授業を公開するかたちで行われてきたと思われるが、それでは、参観の予定が合わない、普段とは違うよそゆきの授業を意識してしまうといったことが生じてしまう。授業公開を日常的なものにすることで、授業者としての普段の努力、教育力の向上を、また学生の緊張感維持と学習成果の向上を期待して精度化したものである。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

平成30年度は、教育学研究科主催のFD研修をおこなっていないが、専門職学位課程(教職大学院)教職実践高度化専攻では下記のFD研修会(1件)をおこなった。尚、この研修会は、教育学部、教育学研究科内の教員に呼びかけ、FD・SDとして実施した。

第1回FD研修会

『「認証評価」を通して教職大学院を学ぶ』

講師：松岡敬興、佐々木司、和泉研二（発表順）

日時：平成31年 3月6日(水) 15:00～16:00

場所：教育学部 43番教室

参加者：25名

平成30年度に受審した認証評価の際に作成した「自己評価書」を、参加者に事前に読んでもらい、その上で当日は、認証評価の具体例、本教職大学院の課程等について報告、説明の後、質疑応答を行った。特に、31年度から教職大学院担当になる教員に理解を深めてもらうように努めた。

第3節 教育改善に関する活動

平成31年4月の教育学研究科の改組に伴い、カリキュラムマップを作成した。これについては <http://www.epc.yamaguchi-u.ac.jp/curriculum.html> にて公開予定である。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

平成31年4月にIYOCAN2システムで確認した平成30年度および過去6年間（ただし、専門職学位課程については、平成28・29・30年度のみ）の学生授業評価、教員授業自己評価の実施率を

図1、図2に示す。



平成 30 年度における学生授業評価の実施率は、修士課程、専門職大学院ともに増加している。一方、教員授業自己評価は昨年度同様に減少傾向にある。平成 31 年 4 月に教育学研究科は改組するため、新しい枠組みで授業評価に対する意識の向上を図る必要がある。また、昨年度と同様に IYOCAN2 システム等からの情報に基づく、未入力の授業科目担当者への直接実施を促す対策を講じることも必要である。

第 5 節 FD 実施経費報告書

平成 30 年度教育学研究科 FD 活動において経費は使わなかった。

第6節 来年度の課題

平成31年4月に教育学研究科は、これまでの教職実践高度化専攻（学校経営コース、教育実践開発コース）、学校教育専攻（学校教育専修、学校臨床心理学専修）、教科教育専攻教科教育専修からなる研究組織から教職実践高度化専攻（学校経営コース、教育実践開発コース、特別支援教育コース）、学校臨床心理学専攻学校臨床心理学専修の研究組織に改組する。この変革を踏まえたFD研修会開催が必要である。

教員自己授業評価の入力率は、ここ数年著しく減少している。入力率の向上に関する組織的な取り組みは、教育学研究科においても大きな課題であり、早急にその原因を特定し改善策を講ずべき課題である。

第15章 経済学研究科のFD活動

第1節 授業公開

授業公開についてはそのあり方が非論されることとなり、昨年度に続き、今年度も実施しなかった。従来は、公開希望者を選出、公開当日都合のいい委員が授業を見学し、参加教員が感想を述べるというだけのものとなって実施の形骸化が進んでいた。公開希望者が一巡し、また、参加者の数も減少傾向にあったため、見直しをすることとなっていたが、よりより具体的な改善案が出で来なかった。ただし、一般市民を対象とする公開授業の数を増やすなど必要な努力は続ける。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

「教員向け英語研修」

経済学研究科の公共管理コースでは、全ての講義を英語で開講している。担当教員を中心にその英語能力を高め、留学生向けの英語授業や留学生とのディスカッションをより円滑にするために同研修を以下通り行った。

第1回 教員向け英語研修

日時：9月28日（金）、10時から12時
場所：経済学研究科・東アジア研究科棟205号室
講師：尊田 望
参加者：6名



第2回 教員向け英語研修

日時：3月11日（月）、13時から16時
場所：経済学研究科・東アジア研究科棟205号室
講師：尊田 望
参加者：4名



第3回 教員向け英語研修

日時：3月13日（水）、13時から16時
場所：経済学研究科・東アジア研究科棟205号室
講師：尊田 望
参加者：5名

第4回 教員向け英語研修

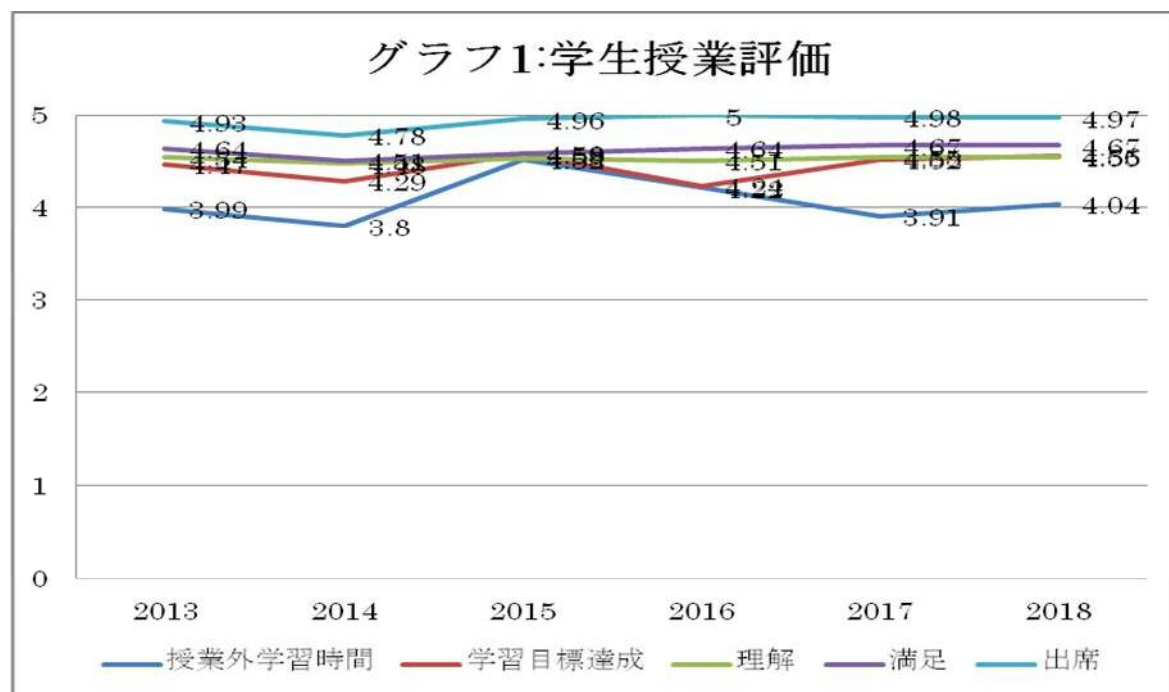
日時：3月28日（木）、13時から16時
場所：経済学研究科・東アジア研究科棟205号室
講師：尊田 望
参加者：4名

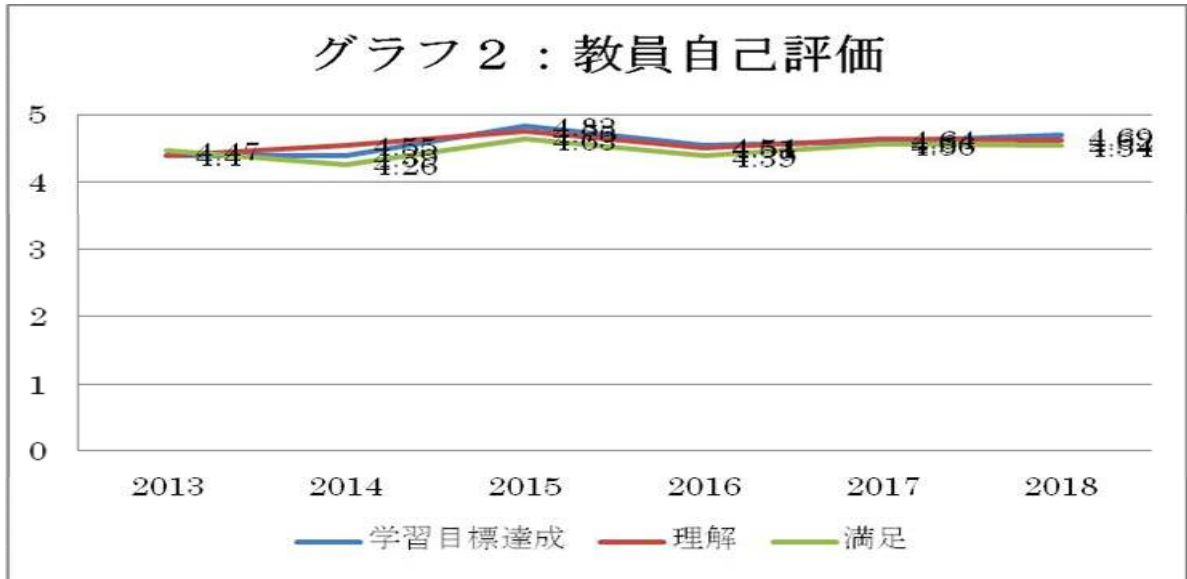
第3節 教育改善に関する活動

経済学研究科の将来構想として、①データ・サイエンス教育の充実、②地方創生とダイバーシティ・キャンパスの実現、③リカレント教育の実践の3本を柱に検討を行った。うち、①のデータ・サイエンス教育に関しては、その一環として平成31年度（令和元年）よりデータ・サイエンス特論を大学院共通科目として開設することを決定した。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

1. 学生授業評価をみると授業外学習時間において若干3点台の年があるが、どの次元・どの年度においてもほぼ4点台後半を維持しており、質の高い教育が提供できていると思われる。（グラフ1参照）
2. 特に公共管理コースでは、英語による講義が行われているために学生授業評価が低くなる可能性も懸念されたが、学生自身からの評価は高いという。（グラフ1参照）
3. 教員による自己評価においても学習目標達成、理解、満足のどれにおいても4点台後半をほぼ維持しており、質の高い教育が提供できているとの自覚がある。（グラフ2参照）

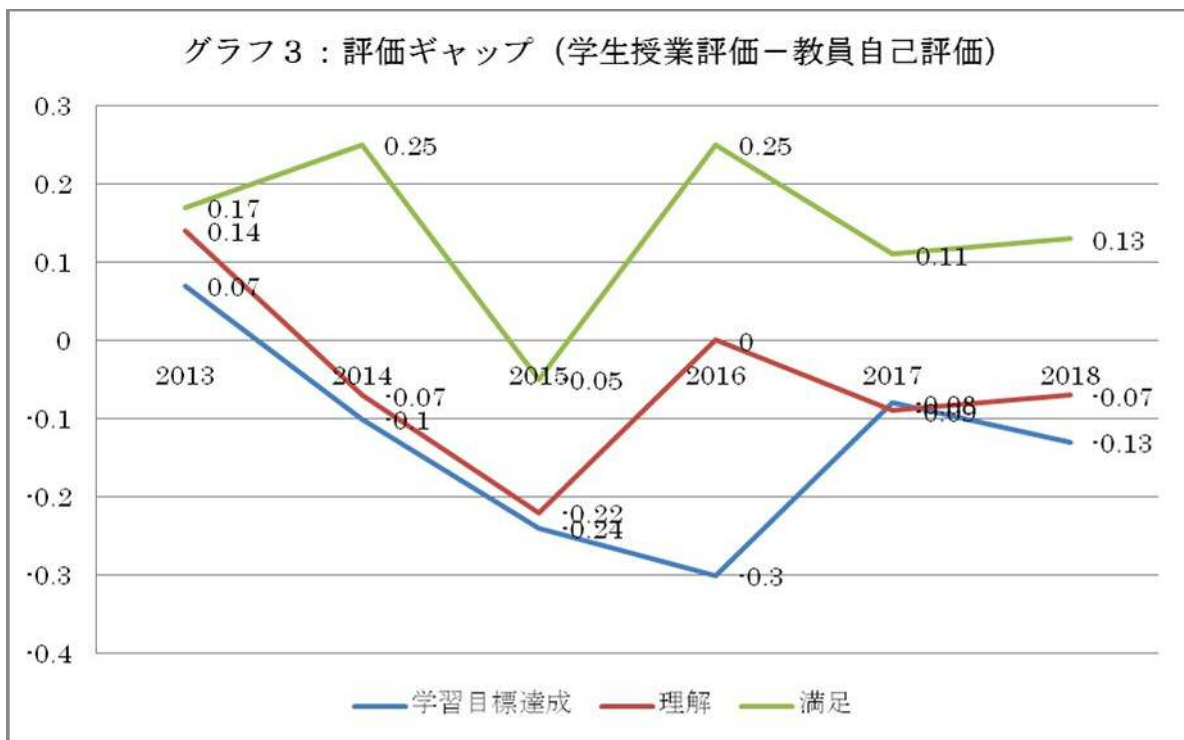




4. 評価ギャップ（学生授業評価－教員自己評価）をみると、満足評価に関しては、2015年度を除いてプラスを維持しており、教員よりも学生の満足度の方が高く、より良い教育が提供できていると判断できる。

5. 一方で、学習目標達成および理解に関しては、マイナスの値が続いている。しかし2015年や2016年時に比べると、この2年間はマイナス幅が縮小しており、特に2018年度に関しては、理解の評価ギャップがさらに縮小した。

6. 全体的として大学院教育に関しては、学部教育よりも評価ギャップが少なく、学生・教員の双方にとって質の高い教育環境が提供できているといえる。



第5節 FD実施経費報告書

教員向け英語研修における講師料、および関連図書費として計6万2000円を使用した。

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔に)
経済学研究科	教員向け英語研修	講師謝金・旅費 1名	59	英語による講義資料の添削を中心に教員の英語能力向上の研修を行った
	教員向け英語研修	図書	3	上記研修の資料として役立つ図書を購入した
		計	62	

第6節 来年度の課題

- ・教員授業自己評価の入力率向上を目指す
- ・学生評価や成績分布共有システムなどの有効活用
- ・学生と教員の評価ギャップを出来るだけない状態、もしくはプラスの状態にもっていく
- ・学生および教員の語学研修について新しいシステムを作る
- ・科研費を中心に外部研究費獲得のための工夫
- ・公開授業（ピュア・レビュー）のあり方について議論する。

第16章 医学系研究科のFD活動

平成21年度より、医学部と医学系研究科において「学部と研究科のFD企画をできるだけ相乗りの形で実施する」という方針が定められた。この方針に基づき、医学系研究科所属教員は、それぞれが関連深い（実際に兼担で教育を担当している）各学部（あるいはその上部の研究科）のFD活動に参加する形でFD活動を行った。具体的には医学部の学部教育を兼担している教員は医学部（第8章）のFD活動に、理学部・工学部の学部教育を兼担している教員は理学部（第7章）・工学部（第9章）ないしは創成科学研究科（第17章）のFD活動に、農学部の学部教育を兼担している教員は農学部（第10章）ないしは創成科学研究科（第17章）のFD活動に参加した。具体的活動内容に関しては、それぞれの該当の章を参照されたい。

第 17 章 創成科学研究科の F D 活動

理学系

第 1 節 授業公開

1. 基盤科学系専攻情報科学コースのピア・レビュー

(1) 実施科目「情報科学ゼミナール I、II」

1) 概要

- ①日時： 平成 29 年 12 月 14 日(金)
- ②対象学生： M1, M2
- ③授業概要： 情報科学ゼミナール I, II の履修者が、各自の研究課題に関するポスター発表を行い、同時に他の学生の研究発表を聞き相互に評価し合う。研究発表能力の向上、および聞き手として友人の研究に建設的・批判的にかかわる態度の養成を目指した。
- ④授業の到達目標：
 - ・各自の研究テーマを分かりやすく発表する。
 - ・同級生の研究発表を聞き、批判的・建設的に討論を行う。
- ⑤授業担当教員： 情報分野教員
- ⑥レビューの方法： 授業に出席の後、授業改善点等について議論する。

2) レビュー結果

①授業内容

・学生を 5 グループに分け、ポスター発表を 25 分間ずつ行った。発表者以外の学生は、レビューアールとして、質疑応答を行った。

・総発表件数と発表スケジュールは以下の通りである。

第 1 グループ： 10:00-10:25 (発表 4 件)

第 2 グループ： 10:25-10:50 (発表 4 件)

第 3 グループ： 10:50-11:15 (発表 3 件)

第 4 グループ： 11:15-11:40 (発表 3 件)

第 5 グループ： 11:40-12:05 (発表 3 件)

②授業の進め方

- ・各レビューアールはそれぞれ発表に対して採点を行い、その結果は授業の成績の参考に使う。
- ・採点では、「ポスターには研究の概要が簡潔、かつ分かりやすくまとめられていたか?」、「説明(話し方)はわかりやすかったか?」、「発表者は研究内容を十分に理解して研究を行っていると思われるか?」の各項目に対して 5 段階評価を行った。さらに、発表の改善点、発表を聞いたコメントを発表者にフィードバックした。
- ・理学部物理・情報科学科では研究室の仮配属を開始したこともあり、3 年生に対してレビューアールと

しての参加を呼び掛けた。3年生が参加するため、発表者はより分かりやすい説明を心掛ける必要がある。

③その他、改善点

- ・昨年度と同様、1グループあたりの発表者を極力少なくし、レビュアーの人数を多くした。
- ・近年は教員が参加しなくても学生間で自由な意見交換が行われている。情報科学ゼミナール I, II を通して M1 と M2 が参加し、より良い議論の場ができあがっていると思われる。
- ・これまでと同様に一人あたりの持ち時間が25分間と若干短めであることから、発表内容によっては議論する時間が少なかつたようにも感じられる。ただ、発表時間を長くするためには発表グループ数を少なくする必要があるため、引き続き、このタイムスケジュールで様子を見たいと考える。

2. 地球圏生命物質科学系専攻生物学コースのピア・レビュー

(1) 実施科目「生物科学ゼミナール I」

1) 概要

- ①日時場所：平成30年12月18日（火）13:00～16:30 22番教室
- ②対象学生：創成科学研究科地球圏生命物質科学系専攻生物学コース1年生（13名）
- ③授業の概要：M1 大学院生が、研究課題の中間発表を10分間の口頭発表で行い、その後5分間の質疑応答を行った。発表会への参加者は、同生物学分野の教員、大学院生および学部生など約60名であった。
- ④授業担当教員：岩尾康宏
レビュアー：三角修巳、岩楯好昭
（生物・化学科 生物学分野）
- ⑤レビューの方法：発表会に参加し、改善点などを文書で指摘していただく。

2) レビュー結果

授業に対して、レビュアーより以下の指摘をいただいた。

レビュアー1

本科目では、博士前期課程1年生が特別研究の進捗状況について発表をおこなった。何れの学生も日常の実験成果を分かりやすくスライドにまとめ、指定時間通りにプレゼンテーションを実施した。後期学期より研究室配属された学部3年生も聴講者として出席していたので、3年生は研究成果発表のコツや質疑に対する応答のやり方について学習する機会になったと考えられる。しかしながら、聴講している学生からの質疑はととも少なく、今後学生のディスカッションへの積極的な参加への方策がとられると良いと思われる。例えば、質疑応答の際に、初めに学生からの質問を受け付ける時間を設けて、その後、教員からの質疑というように、区別して質疑応答を実施しても良いかもしれない。

レビュアー2

内容は各研究室に配属されている大学院生が修論研究として行っている内容を、学会の口頭発表の形式で発表するものであった。発表者は研究途中の内容であるにもかかわらず、それをうまくまとめ、専門外の人間にもわかるように工夫されていた。また、丁寧な質疑応答がなされ、参加している教員から研究内容の疑問点、改善すべき点が丁寧に指導されていた。発表した院生らには、今後の研究をどのように発展させていくのかの理解に役立つと思われる。交代で学生による座長が進行する形式での進行という工夫がなされ、今後、教員以外の質疑応答も活発になることが期待される。

レビューアの指摘を参考に、今後、生物科学ゼミナールⅠの改善をはかっていきたい。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

今年度は、創成科学研究科(理学系)として単独ではFD研修会を実施していない。理学系教員は、理学部で開催された以下のFD研修会に参加した。詳細は理学部第2節のFD活動を参照されたい。

- ・教育改善FD研修会
- ・講師派遣型アラカルトFD研修会「学生の主体的な学びを引き出す授業デザイン～シラバス点検からはじめてみよう！」

第3節 教育改善に関する活動

創成科学研究科(理学系)単独での教育改善に関する活動は行っていない。理学部と共通で活動している。詳細は理学部第2節のFD活動を参照されたい。

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

2018年度の授業アンケートにおいては学生回答数が41件、教員回答数が26件であった。

下図は2018年度における学生授業評価および、教員自己評価実施アンケートの年度推移である。創成科学研究科は今年度で創設3年目であるので、3年分のデータを表にしている。

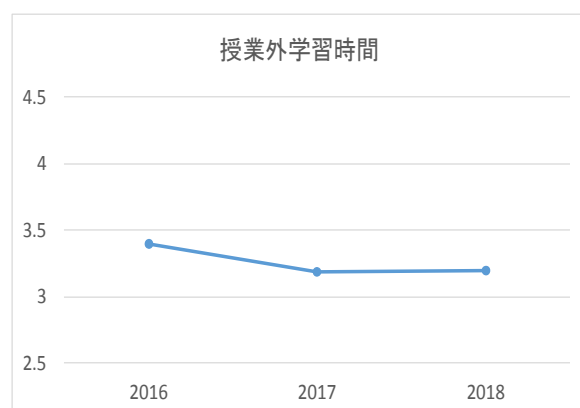


図1

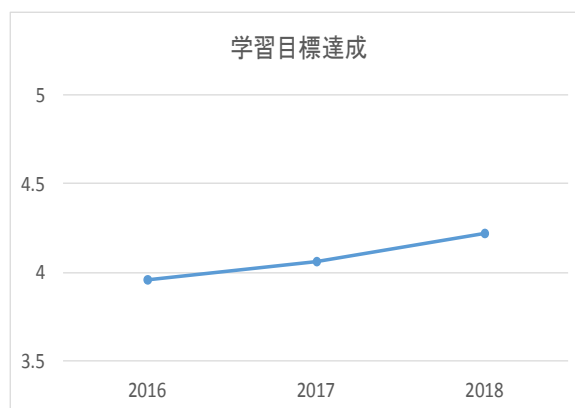


図2

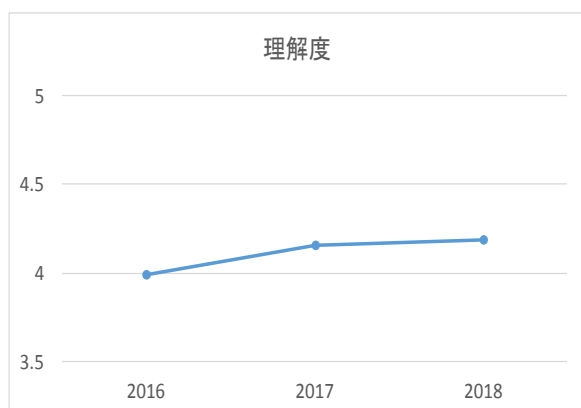


図 3

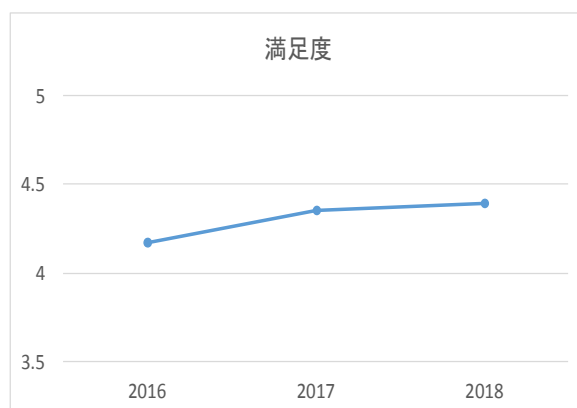


図 4

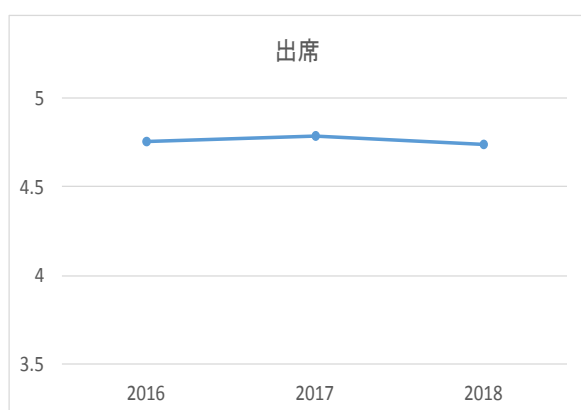


図 5

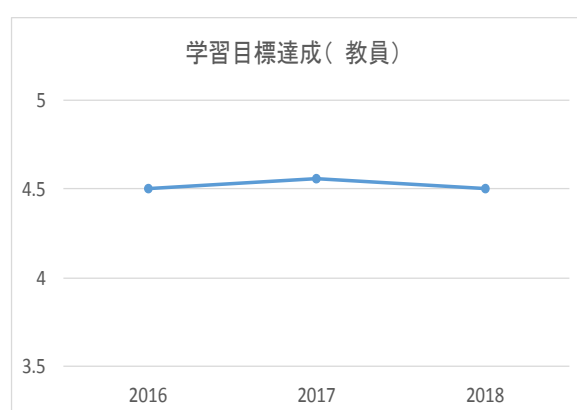


図 6

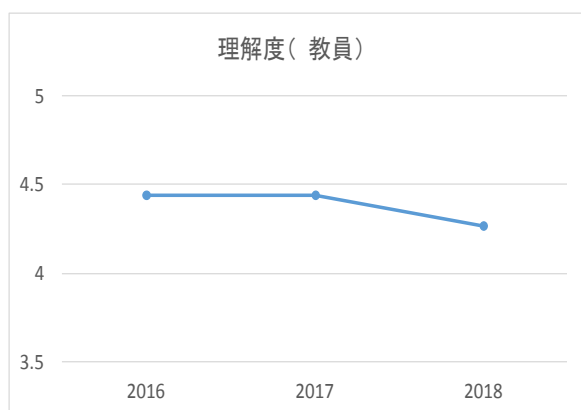


図 7

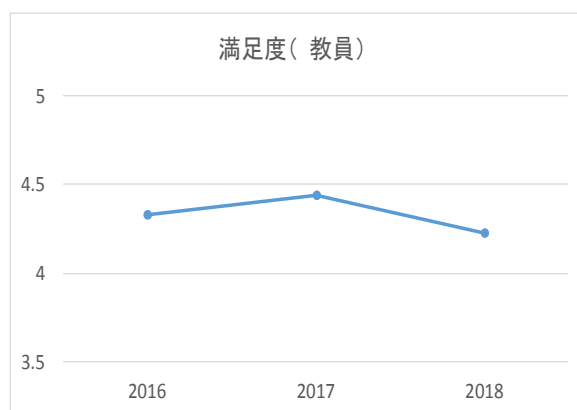


図 8

図 1 から図 5 までは、学生の授業評価項目である。図 1 は学生の授業外学習時間の年度推移、図 2 は学生の授業目標達成の自己評価に関する年度推移、図 3 は学生の授業理解度についての年度推移、図 4 は学生の授業満足度に関する年度推移、図 5 は学生の授業出席の自己評価の年度推移である。図 6 から図 8 までは教員側から見た授業自己評価である。図 6 は教員側から見た学生の授業目標達成の年度推移、図 7 は教員側から見た学生の授業理解度の年度推移、図 8 は教員側から見た学生の授業満足度を示す。経年変化を判断するのは難しいが概ね高い評価で良好に推移していると考えられる。

第5節 FD実施経費報告書

今年度は、創成科学研究科（理学系）・理学部ともに、FD 実施経費を使用していない。

第6節 来年度の課題

創成科学研究科（理学系）の教員は理学部の教員でもあるため、理学部第6節の課題を創成科学研究科（理学系）の検討事項として掲げる。

農学系

第1節 授業公開

創成科学研究科（農学系学域）の各教員が、全ての教員と大学院生に対して研究紹介を行い、意見交換等により、各教育研究分野の活性化と分野間の総合理解の促進を図った。

- (1) 合成代謝経路の構築による有用物質生産
日時：平成29年4月28日（金）17時 ～ 片岡 尚也 助教
- (2) ニオイの不思議
日時：平成29年5月26日（金）17時 ～ 赤壁 善彦 教授
- (3) 原子レベルでの立体構造情報に基づく 植物プラスチドの還元力供給系タンパク質の機能解析
日時：平成29年6月30日（金）17時 ～ 木股 洋子 准教授
- (4) 哺乳類の骨格筋細胞に関する適当な話
日時：平成29年7月27日（木）17時 ～ 宮田 浩文 教授
- (5) 活性酸素の謎を解く鍵物質 活性カルボニル種
日時：平成29年10月7日（金）17時 ～ 真野 純一 教授
- (6) 耐熱性好中温微生物の耐熱性機構と高温育種による耐熱化～研究の取り組みとそれから見えてきたもの～
日時：平成29年11月24日（水）17時 ～ 山田 守 教授
- (7) 炭素循環に関わる微生物の探索と性状解析
日時：平成29年12月25日（月）17時 ～ 藤井 克彦 准教授
- (8) 酢酸菌の耐熱性に関する研究
日時：平成30年1月22日（金）17時 ～ 薬師 寿治 准教授

第2節 学部・研究科主催FD研修会

創成科学研究科（農学系学域）では、農学部FD研修会と一緒に、各種FD研修会を以下の内容で開催した。

第1回 研修会名：平成30年度 アラカルトFD研修会「2018著作権法改正と教育機関対応の方向性」
（農学部FD研修会）

日程 平成30年10月24日(水) [吉田地区] 13:30～14:15

場所 農学部会議室

講師 木村 友久 (知的財産センター 教授)

参加者 32名 (アンケート17枚回収)

第2回 研修会名:「教育改善FD研修会」

日時 平成30年12月19日(水) 15:00~15:40

場所 農学部大会議室

講師 林 寛子 (アドミッション・センター准教授)、木下 真 (大学教育センター准教授)

参加者 24名 (アンケート20枚回収)

第3節 教育改善に関する活動

創成科学研究科(農学系学域)は、人類の生存に必要な食料を始めとして、生物機能の開発・応用に関する技術を発展させつつ、各種資源と自然環境との保全・再生との調和を図り、豊かな人間性を醸成する分野といえる。このような広範囲な科学と技術を深化させるために、広範な基礎学力に基づいて高度な専門知識と能力を備えた、豊かな人間性のある科学者、技術者を養成することを目的とし、活動を実施している。

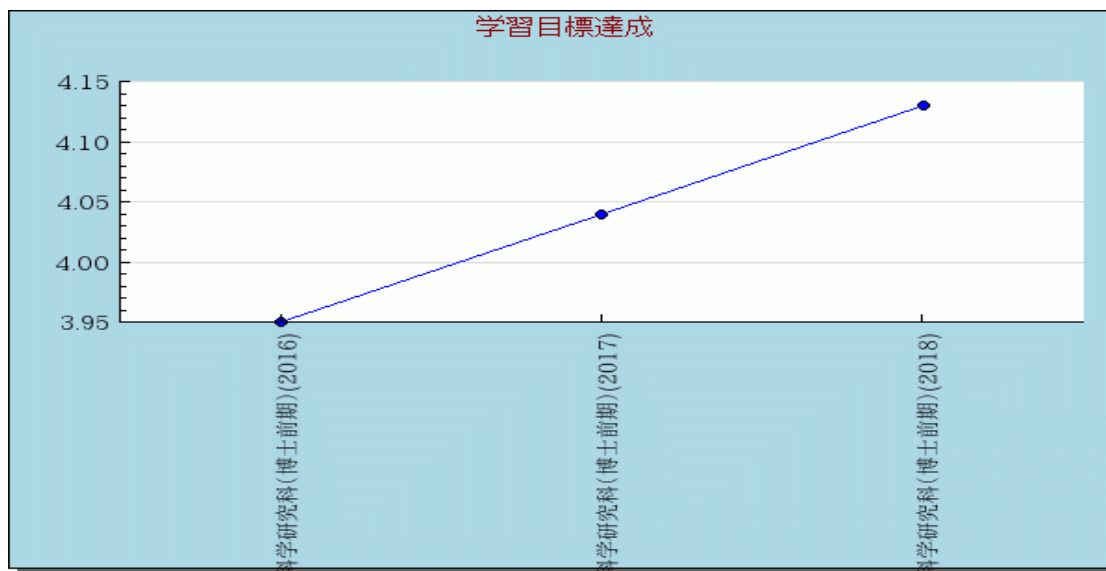
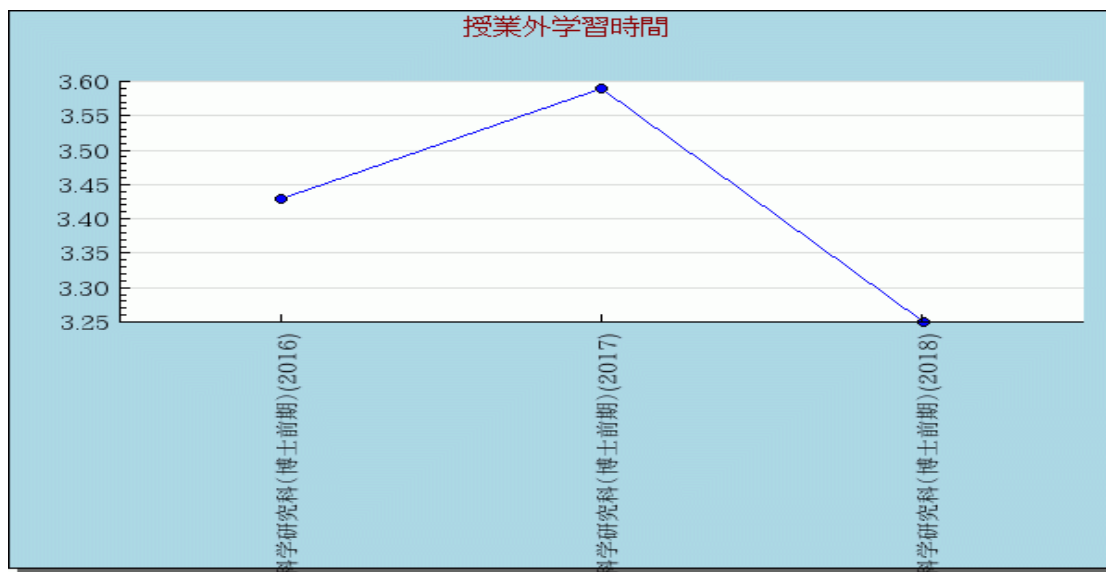
31年度に設置申請中のジョイントディグリープログラムによる山口大学・カセサート大学国際連携農学生命科学専攻(仮称)のアドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーについての再検討を行った。

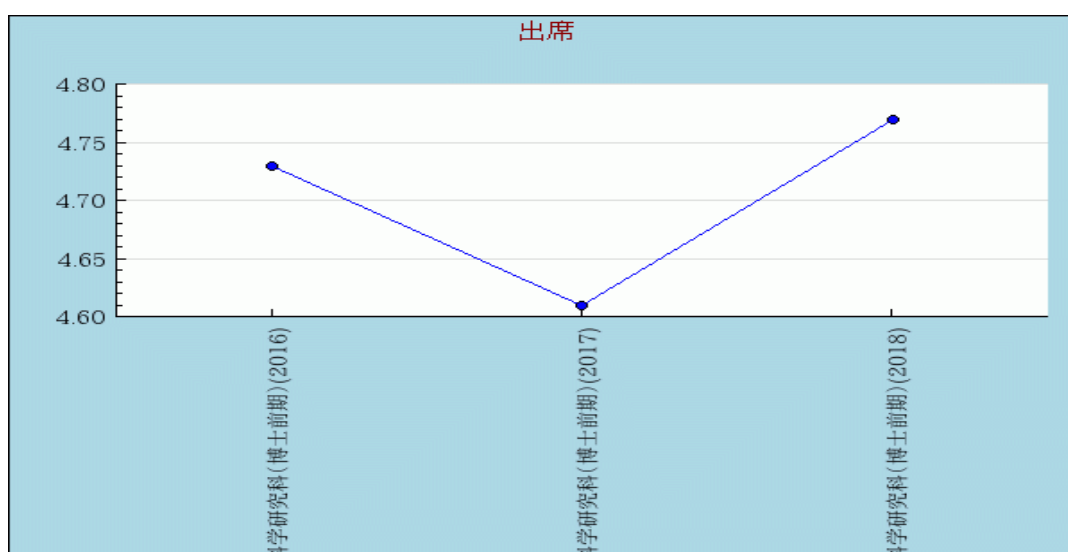
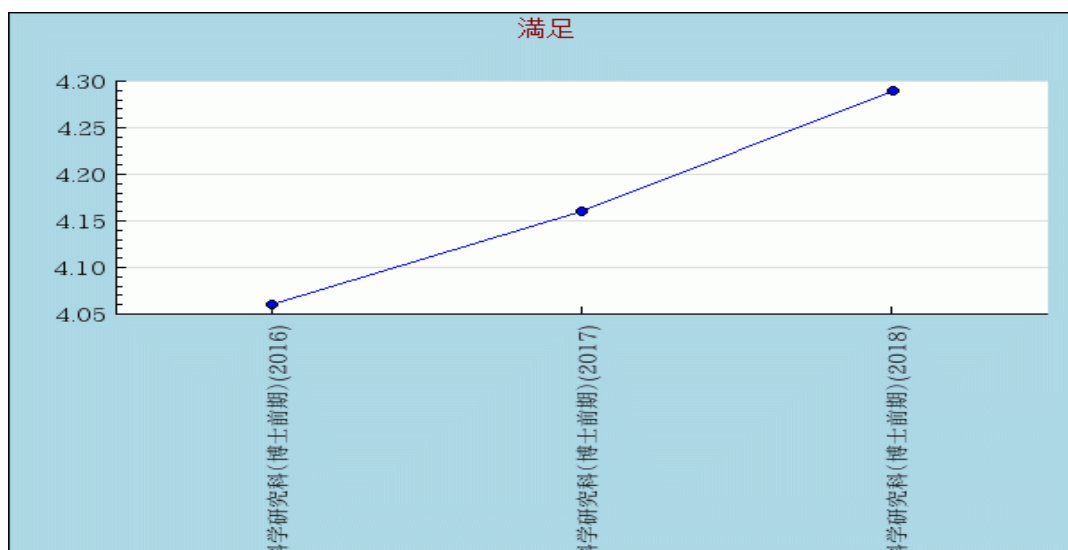
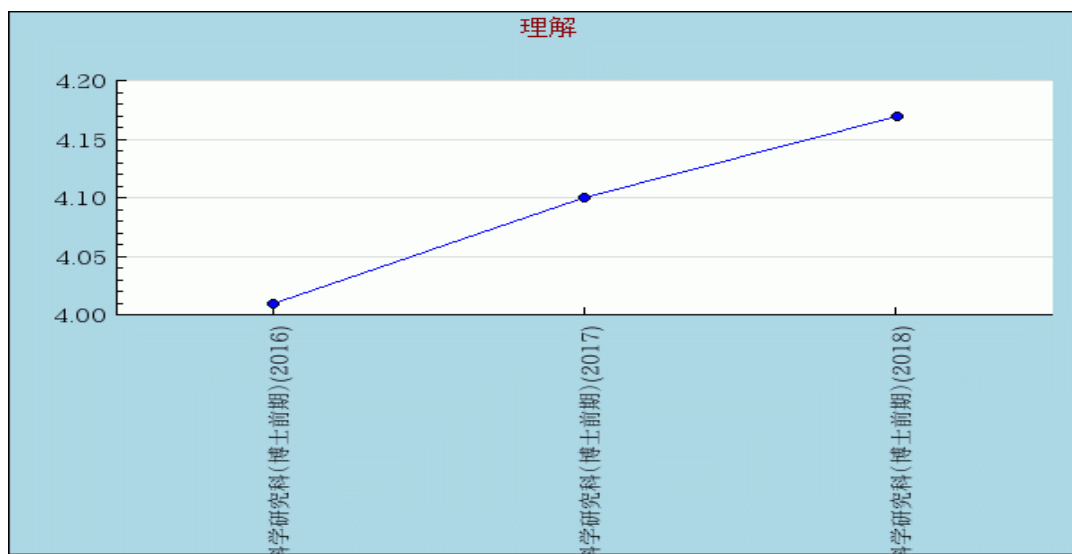
第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

1. 学生授業評価

授業外学習時間以外の4項目すべてにおいて、前年度を上回っていた。いずれの項目の値も比較的高いレベルを維持できているので今後もこの傾向を保持していきたい。

	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	語学(人文学部専門)	未指定	合計
大学院創成科学研究科(博士前期)(2016)	498		13						2896	3407
大学院創成科学研究科(博士前期)(2017)	379		55						3028	3462
大学院創成科学研究科(博士前期)(2018)	1588		60						1751	3399

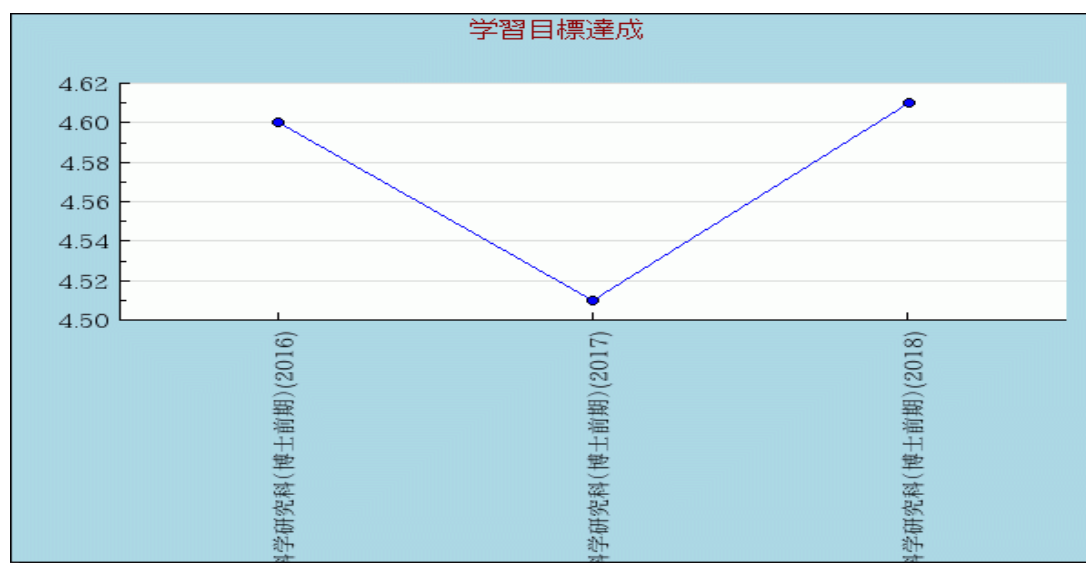


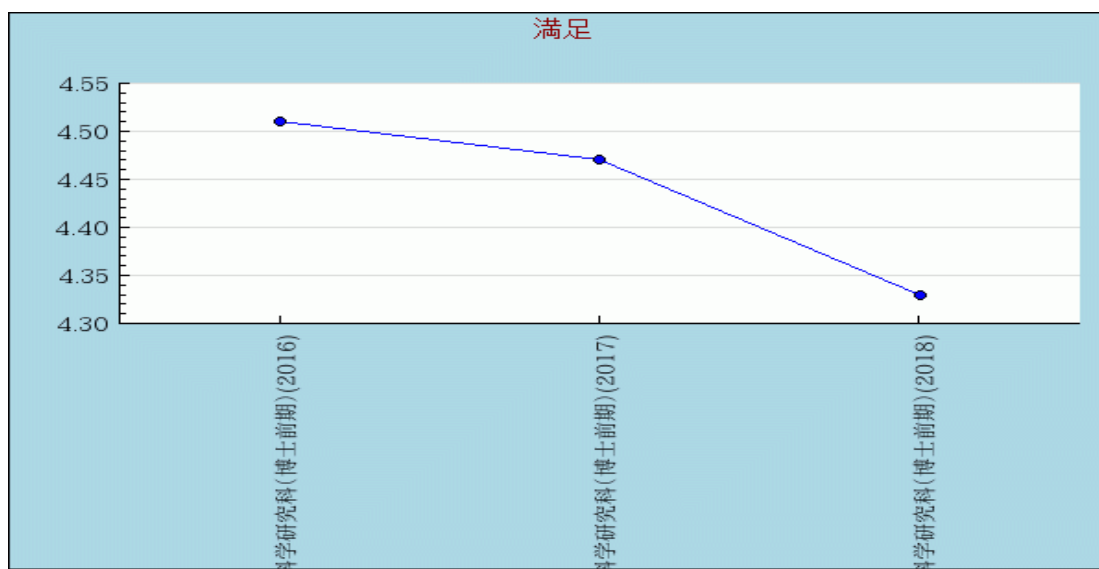
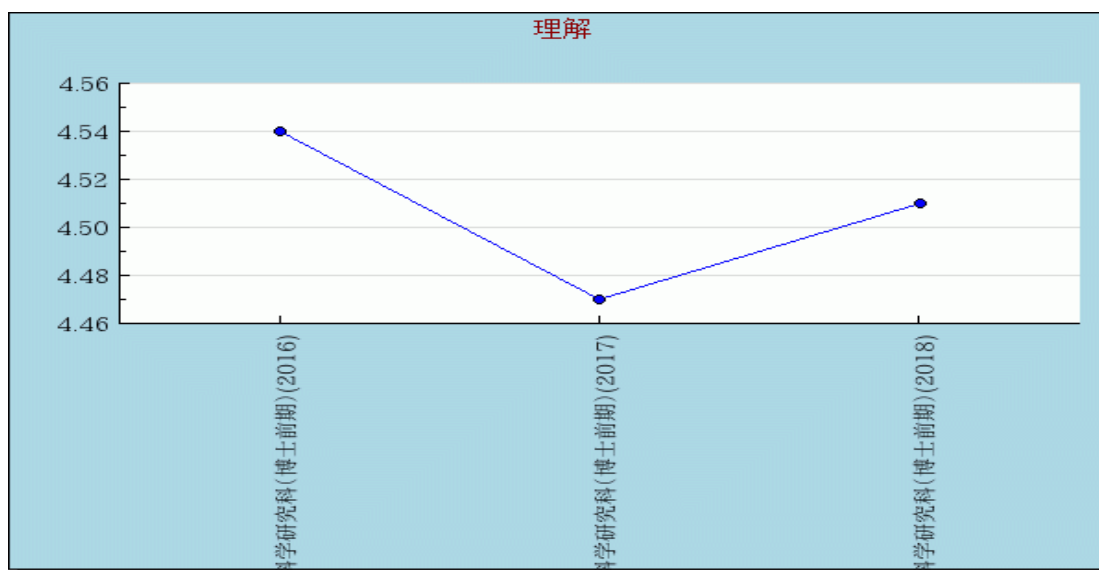


2. 教員授業評価

満足度以外が前年度より高い評価が得られた。教員自身の授業に対しての意識改革を行うことにより満足度を上昇させたい。

	講義	講読	演習	実験・実習	語学 (共通教育)	語学 (農学部専門)	その他	語学 (人文学部専門)	未指定	合計
大学院創成科学研究科 (博士前期) (2016)	26		29						50	105
大学院創成科学研究科 (博士前期) (2017)	12		2						43	57
大学院創成科学研究科 (博士前期) (2018)	28		3						18	49





第5節 FD実施経費報告書

本年度はFD実施経費の申請はなかった。

第6節 来年度の課題

研究科の教育は学部とは大きく異なっており、また研究科間においてもカリキュラムや教育方針が同一でない。このため、FD活動についても研究科独自の取り組みが今後必要になるように思われる。

第 18 章 東アジア研究科の F D 活動

第 1 節 授業公開

博士後期課程のみという性質上、東アジア研究科は基本的に講義形式での授業を重視していない。当研究科設置目的のとおり、「問題解決のための高度な専門知識を発揮しうる人材の養成、指導的高度専門職業人の養成」を目指す本研究科では、ディプロマ・ポリシーに示すとおり「独自に問題を立て、研究を遂行して成果を生み出すことができる自立的な研究能力」を養成することを主眼としている。このため、学識を授けるという意味合いの強い講義形式での授業よりも、各院生に対する個別研究指導が主な形式となっている。

とはいえ、授業公開に類する内容として、以下の取り組みを行っている。

(1) 集団指導の場としての「基盤演習」「プロジェクト演習」

上記の特性を持つ当研究科は、カリキュラム・ポリシーに従って、1 年次に「基盤演習」を、2 年次に「プロジェクト演習」を課している。これらの演習授業はコース別に実施され、学生の研究報告に対して複数の教員がコメント・意見を述べる集団指導体制を取っている。

この集団指導体制は、お互いの指導を確認し合うピア・レビューの性格も持ち合わせており、間接的な授業公開となっている。事実、この形式の演習においてなされる各教員からのコメントが院生にとって有意義なことは言うまでもないが、加えてこのようなコメントは指導教員にとっても貴重な示唆を与えるものであり、自らの研究指導へのヒントや改善の契機となっている。こうした意味で、これら集団演習科目は、間接的なピア・レビューの効果を持ち、当研究科の研究指導能力にとって重要な位置を占めている。

(2) 個別研究指導の場としての「特別研究」

当研究科の主たる教育活動は、当該院生に対する個別の研究指導である。「特別研究」がこれに相当するが、基本的にこの内容は各院生の研究テーマや研究の到達状況次第であり、これを公開し、ピア・レビューの対象とすることは難しい。

しかしながら、これまで研究科の研究指導を担ってきた中心となるべき経験豊富な教員の退職が続く今後を見据えるならば、当研究科が引き続き博士課程の教育を維持・拡充させ、さらに研究教育能力を高めていくために、この「特別研究」に内在する研究指導のノウハウを研究科全体としてどのように蓄積し、次世代の教員（特に、現在の若手教員）に引き継いでいくかは、当研究科の抱える重要な課題である。

この課題に応えるために、当研究科においては、以下に述べるとおり、コース別の研究指導 FD を研究科主催の FD 研修会として、継続的に実施している。

第 2 節 学部・研究科主催 F D 研修会

前節(2)の観点から、平成 30 年度にも、下記の通りに研究指導 FD を実施した。これは、学位審査への最終的な関門である「準備論文報告会」開催後に、当該「報告会」で報告した学生の指導教

員を中心として、研究指導に関する問題点や工夫、配慮内容について報告し合い、情報交換することによって、個々の教員の研究指導能力を強化することはもちろん、全体としてノウハウを継承していくことを目的とするものである。

(1) 研究指導 FD の実施状況

平成 30 年度には、コース別に以下のように実施した。

実施日	コース名	「準備論文報告会」 報告学生数	「研究指導 FD」 参加教員数
H30.11.14	アジア教育開発コース	4	10
H30.11.16	アジア経済・経営・法律コース、アジア公共管理コース	3	6
H30.11.19	アジア比較文化コース	5	9

コースごとの参加教員数は上記のとおりであり、「アジア経済・経営・法律コース、アジア公共管理コース」における教員参加がやや少ない状況にある。個々の不参加理由は不明であるが、出席率の引き上げは今後の課題であろう。

(2) 研究指導 FD での意見交換の内容から

研究指導 FD における意見交換において様々な問題が提起されたが、今年度の内容を総合すれば、以下のような論点に分けられる。

1) 研究テーマ、分析概念、方法論等に関するもの

- 博士論文として適切なテーマと内容への絞り込み
- 研究目的の早期の明確化
- 先行研究の到達点と限界の明示を踏まえた論じるべきポイント（オリジナリティ）の提示（先行研究のおさらいにならないよう）
- 分析概念と方法論の適切な選択
- 盗用問題への意識向上（研究者行動規範の徹底）

2) 学生とのコミュニケーション上の問題に関するもの

- 社会人学生とのミーティングや指導時間の調整
- 専門的な議論以外の部分での日本語でのコミュニケーション・スキルの向上
- 英語のネイティブ・チェックに関する費用の問題
- 日本語のブラッシュアップと修正（日本語運用能力の問題、論文の日本語チェック）
- 学生とのコミュニケーションの難しさ（言語上の問題）、真意の伝わりにくさ

3) 指導時間や指導方法に関するもの

このポイントについては、特に博士課程の学生指導の経験に関わるものであり、経験豊富な教員の意見は、若手教員にとって大変に参考となる。当研究科としては、こうした指導上のポイントを蓄積し、継承していくべきであろう。

- 社会人に対する論文作成指導の困難さ（論理的文章作成に関する問題）
- 研究の方向性と本人の研究能力の特徴を早期に見つけることが学生の自発的な研究への取り組みに有用であること
- 指導の厳しさ（スパルタ方式）と院生の受け止め方のズレ
- 指導時間、研究に関する相談時間を確保する（特に、社会人院生）

第6節 来年度の課題

(1) シラバスの整備

シラバスについては、修学支援システムでの登録・公開を促進している。ただし、研究指導である「特別研究」については、上記システムでのフォーマットになじまない部分もあることから、システム上での登録・公開と合わせて、当研究科 HP において別様式での公開を進めており、おおむね公開されている。未登録・未公開のものについて、引き続きシラバス作成・公開の要請を行っていくこととする。

(2) 研究時間確保への支援

これは主に社会人学生の研究時間確保の問題である。通常勤務をこなした上での研究時間の確保が非常に困難であることは想像に難くない。これに対して、長期履修学生として4年ないし5年での修了を目指すことを認めているが、それでも研究時間不足により修学が難しくなる場合はあり、依然問題が解決されたわけではない。当研究科が留学生・社会人を念頭に設置されていることも考えれば、研究の進捗度合いの丁寧な確認と助言・相談など、この点に関する支援がどのように可能なのか、検討が必要であろう。

(3) 研究不正への対策

研究不正に対しては、再発防止に向けた様々な取り組みを講じてきているが、引き続き学生への研究者行動規範の遵守指導と不正防止措置を行う必要がある。現在、基盤演習とプロジェクト演習の冒頭において各演習担当者からの研究不正防止に関する講義を行っている。明確に研究不正であると判断することが可能な場合よりも、限りなく疑わしいという場合が多いことを考えれば、この疑わしさを払拭するべく、論文作法に則った記述を徹底することと、このチェックを行う体制を整えることが必要である。このチェックについては、現在は博士論文審査において外部審査委員にその役割を一部期待しているが、これに依存することはできない。根本的には各院生の不正防止への意識が重要なのであり、どのように実効的な体制を構築できるか、引き続き検討の余地がある。

(4) 研究指導 FD の実施方法について

当研究科の教員はほとんどが各学部・研究科との兼任であり、研究指導 FD の実施時間の調整が難しく、現在は各コースの準備論文報告会直後の時間帯に開催している。しかし、準備論文報告会の日程調整自体も困難であり、午後の遅い時間の開催になる場合には、研究指導 FD はさらに遅い 19 時以降の時間帯に実施されることも少なくない。ワーク・ライフ・バランスに関する本学の取り組みから考えても、こうした開催時間は望ましいものではない。参加教員を増やせるような実施時間の改善と合わせて、経験のある指導教員による FD 講演実施といった研究指導 FD の開催方法と内容を見直すことも考えられる。

第 19 章 大学院技術経営研究科の F D 活動

第 1 節 授業公開

技術経営研究科は社会人大学院生を対象とした大学院であるので、平日は勤務しながら大学院課程を修学できるように授業を週末の二日間に開講している。日本人社会人を対象とした日本語による大学院講義は、広島教室および福岡教室の 2 教室体制で授業を行っている。また、留学生を対象にした英語による講義は、常盤キャンパス（宇部教室）において平日のカリキュラムにより授業を実施している。これらの講義は、全教員が担当している。本研究科の授業の基本方針として、宇部教室（常盤地区）、福岡教室ならびに広島教室のすべての教室において、全カリキュラムを対面式授業で行うことを基本としている。

平成 30 年度に実施したピュアレビューの評価項目を付記する。

◆ 優れていると感じた点について

【説明】

- ・ 声をはっきりとして聞き取りやすいですか。
- ・ 丁寧に講義内容を説明していますか。
- ・ 学生の職務内容を念頭に置いた説明をしていますか。
- ・ 学生が各自の業種に応じて演習課題を展開できるように意図されていますか。
- ・ 専門分野が違う受講者にも理解し易いように説明が工夫されていますか。
- ・ パワーポイントの使い方は適切ですか（文字の大きさ、スライドの送り方など）。
- ・ 動画を使った説明など、学生の興味を引き出す工夫がされていますか。
- ・ 学生が授業内容を理解するペースを考慮して、説明のテンポを調整していますか。

【資料】

- ・ パワーポイント スライドのフォントサイズは適切ですか。
- ・ パワーポイント スライド 1 枚当たりの時間を十分に設定しますか。
- ・ 講義説明を書き込むのに必要な時間が十分確保されていますか。
- ・ 講義で専用ソフトウェアを利用する際には、操作マニュアルが用意されていますか。
- ・ ニュース・報道・Web 情報を引用している場合、引用元を明記していますか。

【教授法】

- ・ スクール形式による説明と、グループ学習や討議などの実践形式による学習がバランス良く取り入れていますか。
- ・ 事前課題を用意していますか。
- ・ 授業の進め方や教材について、創意工夫を取り入れていますか。
- ・ 学生のモチベーションを引き出すような工夫をしていますか。
- ・ 講義の進行に応じて、グループワークやグループ討議が適切に行われていますか。
- ・ 学生から発言を引き出すように授業をリードしていますか。
- ・ 特定の学生の発言回数が増えないように、注意していますか。

◆ 授業を参観し、参考になる感じた点について

【事例】

- ・ 授業の内容を補完するための学習

- eラーニングを利用して授業の一部を個人学習に割り当てる。
- 調査に時間を要する内容について、課題レポートとして割り当てる。
 - ・ 教材の作成方法
- パワーポイント教材に図表や写真などを配置し、テキストだけ教材と比較してビジュアル的にアピールする。
- 参考資料を活用する。
- ビデオ教材やドキュメンタリー映像などの動画を用いる。

第2節 学部・研究科主催FD研修会

平成30年度 教育改善FD研修会の実施（大学教育センターとの共同開催）

平成30年度の『教育改善FD研修会』テーマは「**教学IR**」です。

山口大学は、共通教育におけるカリキュラム改革、各学部・研究科では学科改編に伴うカリキュラム改革、入試改革等のさまざまな教育改革に取り組んできました。しかし、これまでこれらの改革の成果や課題は、客観的な可視化に至らず、各教職員の経験をもとにした感覚的な議論で済まず場合もありました。

今後は、この場合の対応としてテストやアンケート等、直接評価及び間接評価から得た客観的データに基づいて分析・判断する必要があります（**教学IR**）。今回の研修会では、アドミッション・センターの事例紹介として、その業務に関連深い「入試データを用いた検証・改善例」を取り上げ、併せて**教学IR**の推進方法についても意見交換を行うとともに**教学IR**全般への理解を深める。

日程： 平成30年12月11日（火）[常盤地区] 14:30～15:10
 場所： 大学院技術経営研究科棟 1階 教員会議室
 講師： 岡田 耕一（大学教育センター講師）
 林 寛子（アドミッションセンター准教授）
 研修対象者： 技術経営研究科 教職員

研修スケジュール

14:30～14:32（2分）	開催挨拶とスケジュール説明（FDコーディネータ）
14:32～14:37（5分）	教学IR について説明（大学教育センター教員）
14:37～14:57（20分）	事例紹介「入試データを用いた検証・改善例」 （アドミッション・センター 林 寛子 准教授）
14:57～15:00（3分）	「 IR ニーズを掘り起こす」・質疑応答・意見交換 （大学教育センター教員）

【★実施内容】

岡田 大学教育センター講師より、「**教学 IR とは**」と題し、**教学 IR** の目的や手法等について、島根大学の事例を交えながら概要説明があった。平成 28 年度に、大学教育センターの下に「教育開発部」「**教学 IR 部**」を新たに改編設置したことに伴い、**教学 IR** の環境整備や実質的運用が喫緊の課題となっている。「**教学 IR とは何か**」「**教学 IR を通して何ができるのか**」「**教学 IR を活用するとどのような効果があるのか**」といった点について、学部・研究科教員に分かりやすく説明し、理解を深める機会提供を行うのが今回の教育改善 FD 研修会の趣旨目的である。

具体的な事例として、林（寛子） アドミッション・センター准教授より「**入学者のデータを用いた検証・改善例**」が紹介され、特別選抜による入学者が大学教育に適応できたかという問いについて、①学業成績（GPA・TOEIC）、②在籍状況、③大学卒業後の状況、④大学教育における自己意識の分析を行い、平成 28 年度入試からの AO 入試改善に結び付けたことが説明された。さらには、平成 28 年度 AO 入試改善後の A 学部での AO 入試入学者 1 年次の TOEIC 成績の改善事例が紹介された。



その後、**教学 IR** に関する研究科のニーズを把握するため、意見交換を行った。研究科長はじめ、多くの教員から質問があり、関心の高さを窺えた。特に、各教育プログラムが設定している人材養成目標に対して、どれだけの学力が身に付いているかを追跡して、可視化・分析するような環境づくりの要望があった。



そのほかの質疑応答は以下のとおりである。

Q1 大学教育センター教学 IR 部では、データ整備がされていて、こちら側が要望するデータ分析がすぐにでも出来る状況なのか、それとも、両方で相談しながら分析作業を進める状況なのか。

A1 後者の状況であり、学部・研究科と相談しながら、作業を進めていきたい。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	9.1%
良かった	9	81.8%
どちらとも言えない	1	9.1%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	11	100.0%

Q2 技術経営研究科のように、学生数が少ない部局においては、データの散らばりが大きいと思われるが、分析方法として適切なものはあるか。

A2 経年変化のデータなどを提示しながら、その傾向を把握することが最適かと思われる。また、データを蓄積することを通して、総合的な分析を行うことも考えられる。

Q3 島根大学の事例のように、学士課程教育による教学 IR の実績はかなりあると思われるが、大学院教育における教学 IR の良い事例はないか。

A3 少し調べてみたい。

山口大学大学院技術経営研究科
平成30年度 FD 研修

日時

平成31年3月5日 午後1時30分～2時30分

場所

MOT 研究棟1階教員 教員会議室

タイトル

IoT時代におけるセキュリティマネジメント

講師

小沢 匠

アドビ システムズ 株式会社 日本オフィス

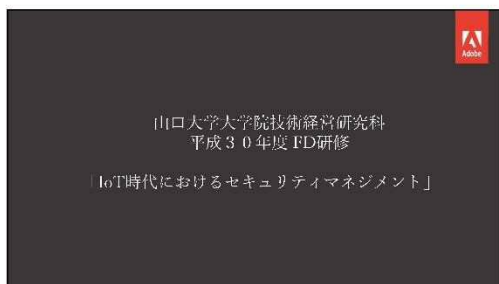
プロフェッショナルサービス事業本部

執行役員 事業本部長

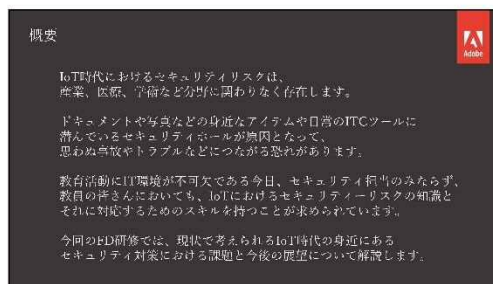
概要

IoT 時代におけるセキュリティリスクは、産業、医療、学術など分野に関わりなく存在します。ドキュメントや写真などの身近なアイテムや日常の ITC ツールに潜んでいるセキュリティホールが原因となって、思わぬ事故やトラブルなどにつながる恐れがあります。教育活動に ITC 環境が不可欠である今日、セキュリティ担当者のみならず、教員の皆さんにおいても、IoT におけるセキュリティリスクの知識とそれに対応するためのスキルを持つことが求められています。

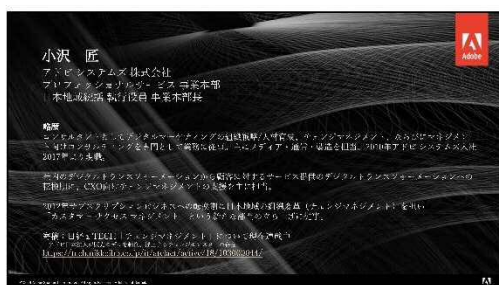
今回の FD 研修では、現状で考えられる IoT 時代のセキュリティ対策における課題と今後の展望について解説して頂きます。



1



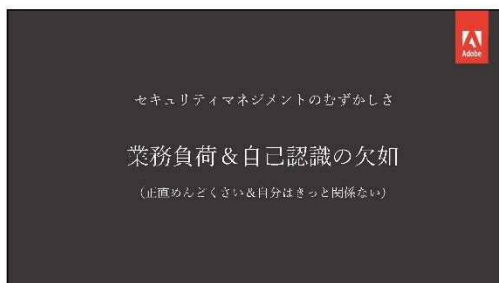
2



3



4



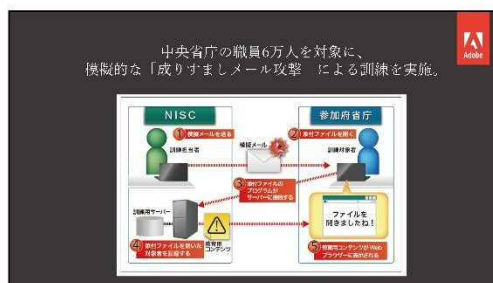
5



6



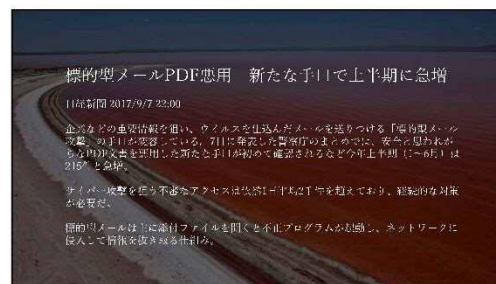
7



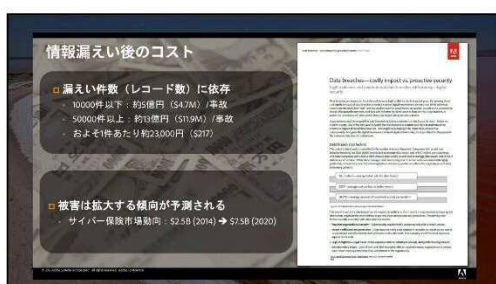
8



17



18



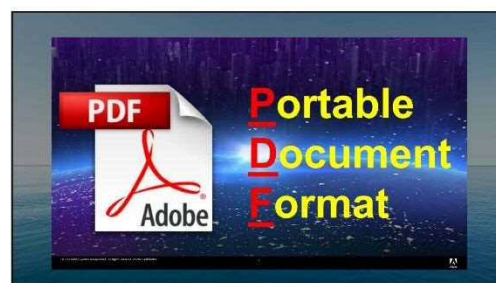
19



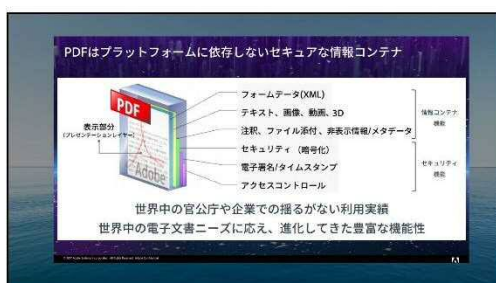
20



21



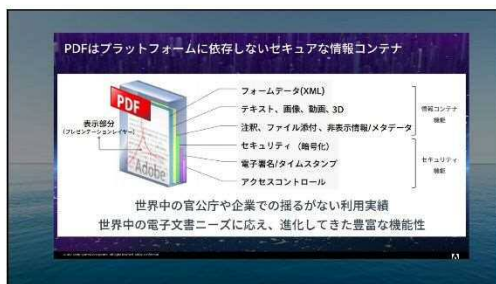
22



23



24



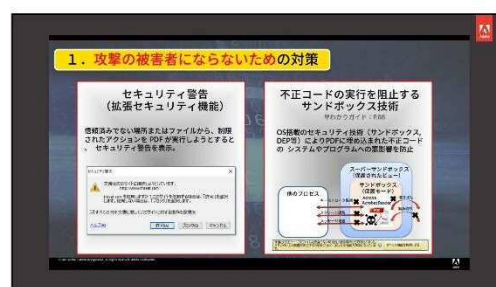
25



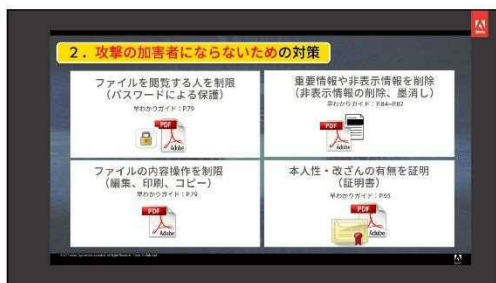
26



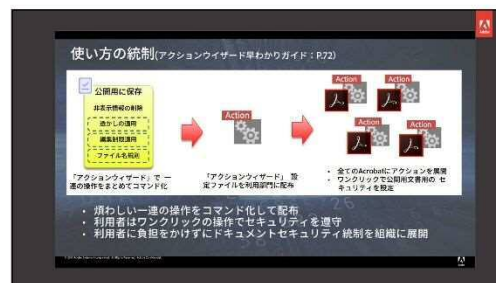
27



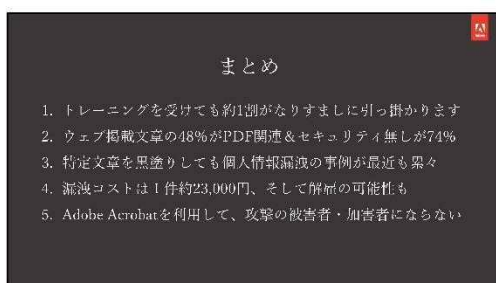
28



29



30



31



32

第3節 教育改善に関する活動

平成 32 年度のカリキュラム改正に向けて、教員懇談会を実施し、大学院技術研究科の教員による新しいカリキュラムの編成について議論した。

教員懇談会

令和元年 7 月 9 日（火） 午後 3 時

令和元年 9 月 10 日（火） 午後 3 時

令和元年 11 月 12 日（火） 午後 3 時

第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

授業評価アンケートは社会人学生に対して基本的にすべての科目において実施しているが、対象とする社会人学生の学習意欲は高く、「学習目標達成」、「理解」、「満足」のいずれの項目においても、高い評点となっている。

※今年度の状況および経年変化に関する分析

科目毎の授業アンケート結果を次に示す。

アンケートの設問内容は、表 1 に示すとおりである。

設問番号	設問内容
q01	教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？
q02	理論や考え方、専門用語などが、わかりやすく説明されたと思いますか？
q03	教材、板書、プロジェクターなどに授業の理解を促す工夫がなされていたと思いますか？
q04	練習問題、課題・宿題、参考文献の例示など授業外での学習を促す工夫がなされていたと思いますか？
q05	学生の疑問・質問への対応が十分であったと思いますか？
q06	担当教員の熱意を感じましたか？
q07	あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどのくらい行いましたか？総時間を平均して、授業 1 回あたりの時間に換算してお答えください。
q08	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？
q09	あなたは、授業の内容を理解できましたか？
q10	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？
q11	あなたは、この授業にどのくらい出席しましたか？（括弧の数字は 15 回授業の場合の出席回数参考値です）
q12	この授業は、大学院レベルの内容であったと思いますか？
q13	この授業は、社会的ニーズに対応していたと思いますか？

基盤科目 (必修) 8061000001 イノベーション・マネジメント

Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
4.90	4.89	4.70	4.80	4.95	4.90	4.05	4.40	4.45	4.80	5.00	4.75	4.85	4.73

基盤科目 (必修) 8061000002 オペレーションズ・マネジメント特論

Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
4.55	4.33	4.52	4.33	4.55	4.67	3.62	3.90	4.00	4.20	5.00	4.57	4.57	4.37

基盤科目 (必修) 8061000003 ビジネス法務

Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
4.60	4.70	4.50	4.65	4.75	4.50	2.95	4.15	4.10	4.50	4.95	4.67	4.80	4.45

基盤科目 (必修) 8061000004 会計・エコノミクス特論

Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
4.68	4.37	4.42	4.32	4.84	4.89	2.95	3.58	3.53	4.05	4.95	4.73	4.71	4.31

基盤科目 (必修) 8061000005 テクノロジー・マーケティング特論

Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
4.95	4.84	4.84	4.58	4.89	4.79	3.68	4.11	4.42	4.63	4.95	4.47	4.83	4.61

基盤科目 (必修) 8061000006 企業戦略特論

Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
4.45	4.15	3.10	3.55	4.20	3.80	3.90	3.45	3.60	3.45	4.89	4.15	3.65	3.87

応用科目 (選択必修) 8061000007 知財 MOT 特論

Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
4.73	4.64	4.64	4.64	4.55	4.64	4.27	4.64	4.27	4.64	5.00	5.00	4.73	4.65

応用科目 (選択必修) 8061000008 グリーン MOT 特論

Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
4.73	4.73	4.73	4.80	4.80	4.67	4.07	4.27	4.73	4.53	5.00	4.50	4.64	4.63

応用科目 (選択必修) 8061000009 ライフサイエンス MOT 特論

Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
4.86	4.36	4.86	4.64	4.93	4.86	4.00	4.07	4.29	4.54	5.00	4.67	4.69	4.60

応用科目 (選択必修) 8061000010 ものづくり MOT 特論

Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
4.64	4.45	4.00	4.55	4.55	4.73	4.00	4.18	4.36	4.64	5.00	4.75	4.80	4.51

展開科目 (選択必修) 8062000001 技術戦略特論

Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均

5.00	4.83	5.00	5.00	4.83	4.83	4.67	4.83	5.00	4.83	5.00	4.67	4.33	4.83
------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

展開科目 (選択必修) 8062000004 マーケティングリサーチ特論

Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
4.71	4.57	4.71	4.57	4.86	4.86	4.00	4.43	4.57	4.33	5.00	4.29	4.57	4.57

展開科目 (選択必修) 8062000006 ビジネスファイナンス特論

Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
4.40	4.60	4.60	4.60	4.80	4.60	4.20	4.40	4.60	4.40	4.80	4.75	4.80	4.58

展開科目 (選択必修) 8062000007 戦略思考特論

Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	4.83	4.67	4.83	5.00	4.83	5.00	4.83	4.83	4.91

展開科目 (選択必修) 8062000009 経営組織特論

Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
4.50	3.75	4.00	4.50	4.75	4.25	2.50	3.00	3.25	3.25	5.00	3.75	4.75	3.94

展開科目 (選択必修) 8062000011 知財戦略特論

Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	4.20	4.60	4.80	5.00	5.00	5.00	4.60	4.86

展開科目 (選択必修) 8062000010 リーダーシップ論

Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
4.72	4.47	4.22	4.34	4.66	4.59	3.78	4.16	4.31	4.35	4.97	4.67	4.60	4.45

基盤科目 (必修) 8062100002 オペレーションズ・マネジメント特論

Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
5.00	4.96	4.96	4.96	4.96	5.00	3.56	4.72	4.60	4.84	4.96	5.00	5.00	4.81

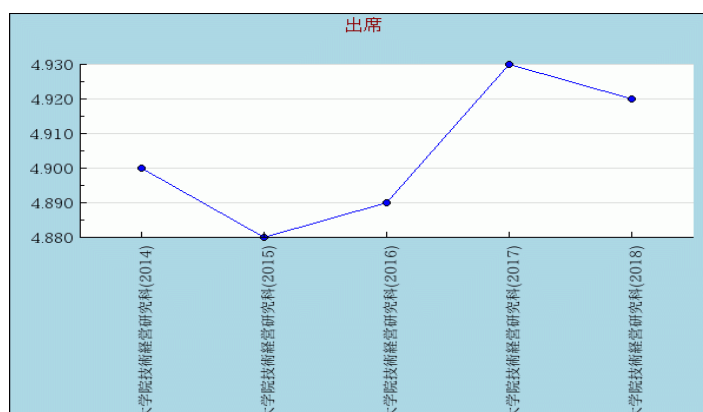
展開科目 (選択必修) 8062000003 R&D マネジメント特論

Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13	平均
4.73	4.83	4.73	4.83	4.93	4.90	3.62	4.50	4.47	4.73	4.93	4.97	4.97	4.70

学生_授業外学習時間等集計データ

<p>学生_授業外学習時間 経年変化</p>	<table border="1"> <caption>授業外学習時間</caption> <thead> <tr> <th>年度</th> <th>値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2014)</td> <td>4.10</td> </tr> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2015)</td> <td>3.98</td> </tr> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2016)</td> <td>3.82</td> </tr> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2017)</td> <td>3.85</td> </tr> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2018)</td> <td>3.70</td> </tr> </tbody> </table>	年度	値	大学院技術経営研究科(2014)	4.10	大学院技術経営研究科(2015)	3.98	大学院技術経営研究科(2016)	3.82	大学院技術経営研究科(2017)	3.85	大学院技術経営研究科(2018)	3.70
年度	値												
大学院技術経営研究科(2014)	4.10												
大学院技術経営研究科(2015)	3.98												
大学院技術経営研究科(2016)	3.82												
大学院技術経営研究科(2017)	3.85												
大学院技術経営研究科(2018)	3.70												
<p>学生_学習目標達成 経年変化</p>	<table border="1"> <caption>学習目標達成</caption> <thead> <tr> <th>年度</th> <th>値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2014)</td> <td>4.35</td> </tr> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2015)</td> <td>4.02</td> </tr> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2016)</td> <td>4.16</td> </tr> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2017)</td> <td>3.98</td> </tr> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2018)</td> <td>4.15</td> </tr> </tbody> </table>	年度	値	大学院技術経営研究科(2014)	4.35	大学院技術経営研究科(2015)	4.02	大学院技術経営研究科(2016)	4.16	大学院技術経営研究科(2017)	3.98	大学院技術経営研究科(2018)	4.15
年度	値												
大学院技術経営研究科(2014)	4.35												
大学院技術経営研究科(2015)	4.02												
大学院技術経営研究科(2016)	4.16												
大学院技術経営研究科(2017)	3.98												
大学院技術経営研究科(2018)	4.15												
<p>学生_理解 経年変化</p>	<table border="1"> <caption>理解</caption> <thead> <tr> <th>年度</th> <th>値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2014)</td> <td>4.31</td> </tr> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2015)</td> <td>4.06</td> </tr> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2016)</td> <td>4.28</td> </tr> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2017)</td> <td>4.09</td> </tr> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2018)</td> <td>4.25</td> </tr> </tbody> </table>	年度	値	大学院技術経営研究科(2014)	4.31	大学院技術経営研究科(2015)	4.06	大学院技術経営研究科(2016)	4.28	大学院技術経営研究科(2017)	4.09	大学院技術経営研究科(2018)	4.25
年度	値												
大学院技術経営研究科(2014)	4.31												
大学院技術経営研究科(2015)	4.06												
大学院技術経営研究科(2016)	4.28												
大学院技術経営研究科(2017)	4.09												
大学院技術経営研究科(2018)	4.25												
<p>学生_満足 経年変化</p>	<table border="1"> <caption>満足</caption> <thead> <tr> <th>年度</th> <th>値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2014)</td> <td>4.56</td> </tr> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2015)</td> <td>4.29</td> </tr> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2016)</td> <td>4.63</td> </tr> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2017)</td> <td>4.37</td> </tr> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2018)</td> <td>4.38</td> </tr> </tbody> </table>	年度	値	大学院技術経営研究科(2014)	4.56	大学院技術経営研究科(2015)	4.29	大学院技術経営研究科(2016)	4.63	大学院技術経営研究科(2017)	4.37	大学院技術経営研究科(2018)	4.38
年度	値												
大学院技術経営研究科(2014)	4.56												
大学院技術経営研究科(2015)	4.29												
大学院技術経営研究科(2016)	4.63												
大学院技術経営研究科(2017)	4.37												
大学院技術経営研究科(2018)	4.38												

学生_出席
経年変化



第5節 FD実施経費報告書

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果 (簡潔に)
技術経営研究科	2018年12月11日 教育改善FD研修会の実施 (大学教育センター)		0	技術経営研究科教員全員が出席し、FD研修を受講した。
	2019年3月5日 IoT時代におけるセキュリティ マネジメント		60	文書情報管理におけるセキュリティに関するFD研修を実施した。
計			60	

第6節 来年度の課題

当研究科は社会人学生を対象としていることから、入学時の面接試験で双方向型の授業が可能かどうかを個別に判定しており、一般の学部学生への対応とは異なる面が多く、同一の方針での扱いには困難な点がある。また、教育プログラムについては同一の内容を日本語と英語の両方で実施しているが、対象とする学生の違いが大きく、授業の実施方法や成績評価においても同じ基準での対応には困難な点がある。このことから、当研究科の実態に即した授業改善に資する研修会やコンサルテーションを企画・実施していく必要があると考える。

第 20 章 連合獣医学研究科の F D 活動

連合獣医学研究科のFD活動は、共同獣医学部のFD 活動に参加する形で活動を行った。
具体的活動内容に関しては、第11章共同獣医学部のF D活動 を参照されたい。

平成 30 年度 山口大学 教学委員会 名簿

部局名	職 名	氏 名	任 期	備 考
	副学長（教育学生担当）	福田 隆眞		大学教育機構長
大学教育機構	大学教育センター長	菊政 勲		
〃	学生支援センター長	横山 和平		
〃	保健管理センター所長	奥屋 茂		
〃	大学院教育センター長	上西 研		
人文学部	教授	De Boissieu Michel	30. 4. 1～32. 3. 31	
〃	教授	上田 由紀子	29. 4. 1～31. 3. 31	
教育学部	教授	高橋 俊章	30. 4. 1～32. 3. 31	
〃	教授	中田 充	29. 4. 1～31. 3. 31	
経済学部	教授	木部 和昭	30. 4. 1～32. 3. 31	
〃	教授	正宗 聡	30. 4. 1～31. 3. 31	
理学部	教授	宮澤 康行	30. 4. 1～32. 3. 31	
〃	教授	坂口 有人	29. 4. 1～31. 3. 31	
医学部	教授	野島 順三	30. 4. 1～32. 3. 31	
〃	教授	美津島 大	30. 4. 1～31. 3. 31	
工学部	教授	佐伯 隆	30. 4. 1～32. 3. 31	
〃	教授	中田 幸男	29. 4. 1～31. 3. 31	
農学部	教授	竹松 葉子	30. 4. 1～32. 3. 31	
〃	准教授	阿座上 弘行	29. 4. 1～31. 3. 31	
共同獣医学部	教授	西垣 一男	30. 4. 1～32. 3. 31	
〃	准教授	清水 隆	30. 4. 1～31. 3. 31	
国際総合科学部	教授	崎山 智司	30. 4. 1～32. 3. 31	
〃	教授	有元 光彦	29. 4. 1～31. 3. 31	
事務局	学生支援部長	出雲 武		
〃	学生支援部教育支援課長	福田 孝		
〃	学生支援部学生支援課長	梅木 哲也		

平成 30 年度 山口大学 学部・研究科 FD コーディネータ 名簿

部 局 等	職 名	氏 名	備 考
人文学部 人文科学研究科	准教授	石田 俊	
教育学部 教育学研究科	教 授	佐々木 司	
経済学部 経済学研究科	教 授	有村 貞則	
理学部 創成科学研究科(理学)	教 授	宮澤 康行	
医学部(医学科) 医学系研究科	教 授	藤宮 龍也	
医学部(保健学科) 医学系研究科	教 授	山本 健	
工学部 創成科学研究科(工学)	教 授	新苗 正和	
	教 授	中田 幸男	
農学部 創成科学研究科(農学)	教 授	竹松 葉子	
共同獣医学部	教 授	西垣 一男	
国際総合科学部	准教授	星野 晋	
東アジア研究科	准教授	山本 勝也	
技術経営研究科	准教授	大島 直樹	
連合獣医学研究科	教 授	高木 光博	

平成 30 年度 山口大学 大学教育センター 名簿

部 局 名	職 名	氏 名	備 考
大学教育センター	センター長	菊 政 勲	
//	主 事	池 園 宏	
	主 事	石 井 由 理	
//	主 事	上 野 秀 一	
//	教 授	小 川 勤	
//	准教授	木 下 真	
//	准教授	林 透	
//	講 師	岡 田 耕 一	
//	助 教	ADAMS KIRA LA MARRA	
//	助 教	BIZZELL SHANIQUA NYETTA	
//	助教(特命)	篠 田 雅 人	

平成 30 年度 山口大学 FD 報告書「山口大学の FD 活動」
令和 2 年 1 月発行

編集・発行 山口大学大学教育機構、山口大学教学委員会
山口市吉田 1677-1
TEL (083) 933-5150 (学生支援部教育支援課)